

みみずのたはこと

徳富健次郎



故人に

一

禮わの村住居むらすまいも、満六年になつた。暦こよみの齡としは四十五、鏡を見ると頭髮かみや満面の熊毛くまに白しろいのがふえたには今更いまさらの様に驚く。

元來田舎者のぼんやり者だが、近來もくべえますます奎兵衛太五作式になつたことを自覺する。先日上野を歩いて居たら、車夫くるまやが御案内しましょうか、と來た。銀座日本橋あたりで買物すると、田舎者扱いされて毎々腹を立てる。後あとでぺろり舌を出されるとは知りながら、上等のを否極いやしくじ上等のをと氣前みせがらすを見せて言い値ねでさつさと買つて來る様な子供らしいこともついしたくなる。然し店硝子だいきょうにうつる乃公ふうさの風采ふうさいを見てあれば、例令たとえ其れが背広せびろや紋付羽織袴ひげがおであろうとも、着きこなしの不意氣さ、薄うすぎたない髯ひげ顏がほの間拔とえけ加減にかへら、如何いかにに鼻眞眼ひいきめに見ても——いや此では田舎者扱いさるゝが当然だと、苦笑にがわらいして歸かへつて來る始末。此程村の巡査が遊びに來た。日清戦争の當時、出征軍人が羨うらやまましくて、十五歳を満二十歳と偽り軍夫になつて澎湖島ほうこうとうに渡つた経歴もある男で、今は村の巡査をして、和歌など詠み、新年勅題の詠進よしんなどして居る。其巡査の話に、正服帶剣せいふくたいけんで東京を歩いて居ると、あれは田舎のお廻りまわりだと辻待つじまちの車

夫がぬかす。如何して分かるかときいたら、眼で知れますと云つたと云つて、大笑した。成程眼で分かる——さもありそうなことだ。鶉の目、鷹の目、掏摸の眼、新聞記者の眼、其様な眼から見たら、鈍如した田舎者の眼は、嘸馬鹿らしく見えることであろう。實際馬鹿でなければ田舎住居は出来ぬ。人にすれずに慥巧になる道はないから。

東京に出ては儂も立派な田舎者だが、田舎ではこれでもまだ中々ハイカラだ。儂の生活状態も大分変つた。君が初めて来た頃の彼あばら家とは雲泥の相違だ。尤も何方が雲か泥かは、其れは見る人の心次第だが、兎に角著しく変つた。引越した年の秋、お龜末ながら浴室や女中部屋を建増した。其れから中一年置いて、明治四十二年の春、八畳六畳のはなれの書院を建てた。明治四十三年の夏には、八畳四畳板の間つきの客室兼物置を、ズツと裏の方に建てた。明治四十四年の春には、二十五坪の書院を西の方に建てた。而して十一間と二間半の一間幅の廊下を以て、母屋と旧書院と新書院の間を連ねた。何れも茅葺、古い所で九十何年新しいのでも三十年からになる古家を買つたのだが、外見は随分立派で、村の者は粕谷御殿なぞ笑つて居る。二三年ぶりに来て見た男が、悉皆別荘式になつたと云うた。御本邸無しの別荘だが、實際別荘式になつた。畑も増して、今は宅地耕地で二千余坪になつた。以前は一切無門閥、勝手に屋敷の中を通る小学校通いの子供の草履はたゞで驚いて

朝寝の眠をさましたもので、乞食物貰い話客千客万来であつたが、今は屋敷中ぐるりと竹の四ツ目籬や、櫻、萩ドウダンの生牆をめぐらし、外から手をさし入れて明けられる様な形ばかりのものだが、大小六つの門や枝折戸が出入口を固めて居る。己と籠を作つて籠の中の鳥になつて居るのが可笑しくもある。但花や果物を無暗に荒されたり、無遠慮なお客様に擾わさるゝよりまだ可と思うて居る。個人でも国民でも斯様な所から「隔て」と云うものが出来、進んでは喧嘩、訴訟、戦争などが生れるのであらう。

「後生願わん者は糶糶甕一つも持つまじきもの」とは實際だ。物の所有は隔ての原で、物の執着は争の根である。儂も何時しか必要と云う名の下に門やら牆やら作つて了うた。まさか忍び返えしのソギ竹を黒板塀の上に列べたり、煉瓦塀上に硝子の破片を剣の山と植えたりはせぬつもりだが、何、程度の問題だ、これで金でも出来たら案外其様な事もやるであらうよ。

二

畑の物は可なり出来る。昨年は陸穂の餅米が一俵程出来たので、自家で餅を春いた。今年は大麦三俵粳で六円なにがしに売った。田園生活をはじめてこゝに六年、

自家の作物が金になったのは、此れが皮切だ。去年は月に十日宛きま^{ずつ}った作男を入れたが、美的百姓と真物の百姓とは反^そりが合^あわぬ所から半歳足らずで解雇^{かいこ}してしま^い、時々近所の人を傭^よったり、毎日仕事に来る片眼のおかみを使^{つか}つて居る。自分も時々やる。少し労働をやめて居ると、手が直ぐ綺麗^{きれい}になり、稀に肥桶^かを担^{かつ}ぐと直ぐ肩が腫^はれる。元来物事に極不熱心な男だが、其れでも年の功だね、畑仕事も少しは上手になった。最早^も地味^{ちみ}に合^あわぬ球葱^{たまねぎ}を無理に作ろうともせぬ。最早^も胡麻^{ごま}を逆^{さか}につるして近所の笑草にもならぬ。甘藷^{かんしょ}苗の豎植^{たてうえ}もせぬ。心をとめるものは心をとめ、肥料のやり時、中耕^{かげん}の加減も、兎やら角やら先生なしにやつて行ける。毎年儂^{わじ}は蔬菜^{そさい}花卉^{かき}の種^{たね}を何円と云う程買^{なんえん}う。無論其れ程の地積^{ちせき}がある訳でも必要がある訳でも無いが、種苗店の目録を見て居るとつい買^かいたくなつて買^かうのだ。蒔^まいてしまうものも中々骨^{ほね}だから、育^{そだ}つたら事だが、幸か不幸か種^{たね}の大部分は地^はに入^{はい}つて消えて了^{しま}う。其度^{そのたびごと}毎に種苗店の不徳義、種子^{ねつあく}の劣悪^{のし}を罵^{のの}るが、春秋の季節になると、また目録をくつて注文をはじめる。馬鹿な事さ。然し儂等^{わが}は趣味空想に生きて、必しも結果^{けつ}には活^かきぬ。馬鹿な事をしなくなつたら、儂が最後だ。

時の経^たつは速いものだ。越^こした年の秋実を蒔いた茶^{ちや}が、去年あたりから摘^つめ、今年^{ことし}は新茶^{しんちや}が可なり出来た。砂利を敷いたり剪枝^{せんし}をしたり苦心の結果、水蜜桃も去年あたりから大分喰^くえる。苺^{いちじ}は毎年移してばかり居たが、今年^{ことし}は毎日喫飽^{くいあき}をした上に、

苺のシイロップが二合瓶ごうびん二十余出来た。生籬の萩が葉を見て花を見てあとは苺かられて萩籬の料になったり、林の散歩にぬいて来て捨植すてうえにして置いた芽生の山椒が一年中の薬味やくみになったり、構わずに置く孟宗竹の筍たけのこが汁の実になったり、杉籬の剪みはさすてが焚附たきつけになり、落葉の掃き寄せが腐つて肥料になるも、皆時の賜物たまものである。追々と植込んだ樹木が根づいて独立が出来る様になり、支えの丸太が取り去られる。移転の秋坊主になる程苺り込んで非常の労力を以て隣村から移植いじやくし、中一年を置いてまた庭の一隅いちぐうへ移し植えた二尺八寸廻りの全手葉椎マテバシイが、此頃では梢の枝葉も蕃茂はんもして、何時花が咲いたか、つい此程内うちの女兒が其下で大きな椎の実を一つ見つけた。と見て、妻が更に五六粒つぶ拾った。「椎が実なった！ 椎が実なった！」驩喜かんきの声が家に盈みちた。田舎住居は斯様な事が大たいした喜の原になる。一日一日の眼には見えぬが、黙もくつて働く自然の力をしみく感謝せずには居られぬ。儂なまこが植えた樹木は、大抵根たいていづいた。儂自身も少しは村に根を下おろしたかと思う。

三

少しはと儂は云うた。実は六年村に住んでもまだ村の者になり切れぬのである。固有の背水癖こせきで、最初戸籍こせきまでひいて村の者になったが、過る六年の成績を省かえりみると、

儂自身もあまり良い村民であつたと断言は出来ない。吉凶の場合、兵隊送迎は別として、村の集会などにも近来減多に出ぬ。村のポリチックスには無論超然主義を執る。燈台下暗くして、東京近くの此村では、青年会が今年はじめて出来、村の図書館は一昨年やつと出来た。儂は唯傍觀して居る。郡教育会、愛国婦人会、其他一切の公的性質を帯びた団体加入の勧誘は絶対的に拒絶する。村の小さな耶蘇教会にすらも殆ど往かぬ。昨年まで年に一回の月番役を勤めたが、月番の提灯を預つたきりで、一切の事務は相番の肩に投げかけるので、皆迷惑したと見えて、今年から月番を論旨免職になつた。儂自身の眼から見る儂は、無月給の別莊番、墓掃除せぬ墓守、買つて売る事をせぬ植木屋の亭主、位なもので、村の眼からは、儂は到底一個の遊び人である。遊人の村に対する奉公は、盆正月に近所の若い者や女子供の相手になつて遊ぶ位が落である。儂は最初の非望を懷いて居た。其は吾家の燈火が見る人の喜悅になれかしと謂うのであつた。多少氣張つても見たが、其内くたびれ、氣恥かしくなつて、儂は一切説法をよした。而して吾儘一ぱいの生活をして居る。儂は告白する、儂は村の人にはなり切れぬ。此は儂の性分である。東京に居ても、田舎に居ても、何処までも旅の人、宿れる人、見物人なのである。然しながら生年百に満たぬ人の生の六年は、決して短い月日では無い。儂は其六年を已に村に過して居る。儂が村の人になり切れぬのは事実である。然し儂が少しも村を愛しないと云うのは嘘

である。ちと長い旅行でもして帰つて来る姿を見かけた近所の子供に「何処へ往つたんだよう」と云われると、油然とした嬉しさが心の底からこみあげて来る。

東京が大分攻め寄せて来た。東京を西に距る唯三里、東京に依つて生活する村だ。二百万の人の海にさす潮ひく汐の余波が村に響いて来るのは自然である。東京で瓦斯を使う様になつて、薪の需用が減つた結果か、村の雑木山が大分拓かれて麦畑になつた。道側の並木の櫟櫟なぞ伐られ掘られて、短冊形の荒畑が続々出来る。武蔵野の特色なる雑木山を無惨々と拓かるゝのは、儂にとつては肉を削がるゝ思だが、生活がさすわざだ、詮方は無い。筍が儲かるので、麦畑を潰して孟宗藪にしたり、養蚕の割が好いと云つて桑畑が殖えたり、大麦小麦より直接東京向きの甘藍白菜や園芸物に力を入れる様になつたり、要するに曩時の純農村は追々都会附属の菜園になりつゝある。京王電鉄が出来るので其等を気構え地価も騰貴した。儂が最初買った地所は坪四十銭位であつたが、此頃は壹円以上二円も其上もする様になつた。地所買ひも追々入り込む。儂自身東京から溢れ者の先鋒でありながら、減多な東京者に入り込まれてはあまり嬉しい気もちもせぬ。洋服、白足袋の男なぞ工場の地所見に来たりするのを傍見する毎に、儂は眉を顰めて居る。要するに東京が日々攻め寄せる。以前聞かなかつた工場の汽笛なぞが、近來明け方の夢を驚かす様になつた。村人も寝ては居られぬ。十年前の此村を識つて居る人は、皆が稼ぎ様の猛烈になつ

たに驚いて居る。政党騒ぎと賭博は昔から三多摩の名物であつた。此頃では、選挙争に人死はなくなつた。儂が越して来た当座は、まだ田圃向うの雑木山に夜灯をとぼして賭博をやつたりして居た。村の旧家の某が賭博に負けて所有地一切勸業銀行の抵当に入れたの、小農の某々が宅地までなくしたの、と云う噂をよく聞いた。然し此の数年来賭博風は吹き過ぎて、遊人と云う者も東京に往つたり、比較的堅氣になつたりして、今は村民一同真面目に稼いで居る。其筋の手入れが届くせいもあるが、第一遊んで居られぬ程生活難が攻め寄せたのである。

四

儂の家族は、主人夫婦の外明治四十一年の秋以来兄の末女をもらつて居る。名を鶴と云う。鶴は千年、千歳村に鶴はふさわしい。三歳の年貰つて来た頃は、碌々口もきけぬ脾弱い児であつたが、此の頃は中々強健になつた。もらい立は、儂が結いつけ負ぶで三軒茶屋まで二里でくく楽に歩いたものだが、此の頃では身長三尺五寸、体量四貫余。友達が無いが淋しいとも云わず育つて居る。子供は全く田舎で育てることだ。紙鳶すら自由に飛ばされず、毬さえ思う様にはつけず、電車、自動車、馬車、人力車、自転車、荷車、馬と怪俄させ器械の引切りなしにやつて来る東京の町

内に育つ子供は、本当に惨なものだ。雨にぬれて跣足で跑けあるき、栗でも甘藷でも長蕪でも生でがり／＼食つて居る田舎の子供は、眼から鼻にぬける様な怜悧ではないかも知れぬが、子供らしい子供で、衛生法を蹂躪して居るか知らぬが、中々病気はしない。儂等親子三人の外に、女中が一人。阿爺が天理教に凝つて資産を無くし、母に死別れて八歳から農家の奉公に出て、今年二十歳だが碌にイロハも読めぬ女だ。東郷大将の名は知つて居るが、天皇陛下を知らぬ。明治天皇崩御の際、妻は天皇陛下の概念を其原始的頭脳に打込むべく大骨折つた。天皇陛下を知らぬ程だから、無論皇后陛下や皇太子殿下を知る筈が無い。明治天皇崩御の合点が行くと、曰くだ、ムスコさんでもありますかい、おかみさんが囁困るでしょうねエ。御維新後四十五年、帝都を離るゝ唯三里、加之二十歳の若い女に、まだ斯様な葛天氏無懷氏の民が居ると思えば、イワン王国の創立者も中々心強い訳だ。斯無懷氏の女の外に、テリアル種の小さな黒牝犬が一匹。名をピンと云う。鶴子より一月前にもらつて、最早五歳、顎のあたりの毛が白くなつて、大分お婆さんになつた。毎年二度三度四度宛子を生む。ピンの子孫が近村に蕃殖した。近頃畜犬税がやかましいので、子供を縁づけるに骨が折れる。徒歩でも車でも出さえすると屹度跟いて来るが、此頃では東京往復はお婆さん骨らしい。一度車夫が戻り車にのせてやったら、其後は車に跟いて来て疲れると直ぐ車上の儂等を横眼に見上げる。今一疋デカと云うポインタア種

の牡犬おいぬが居る。甲州街道の浮浪犬で、ポチと云ったそうだが、ズウ体がデカイから
 儂おこがデカと名づけた。デカダンいみみを意味したのでは無い。獐どうもう猛もうな相貌さうめいをした虎毛とらげの犬
 で、三四足位の聯合軍れんごうぐんは造作ぞうさくもなく噛かみ伏ふせる猛犬もうけんだったので、競争者を追払おしはらつて
 ずる／＼にピンの押入おしこ智ちとなった訳わけである。儂おこも久くしく考かんえた末、届とどと税を出し、
 天下てんか晴はれて彼を郎等ろうどうにした。郎等先生此頃では非常に柔和になつた。第一眼光が違
 う。尤もも悪い癖くせがあつて、今でも時々子供を追おかける。噛かみはせぬが、威嚇いかくする。
 彼が流浪時代るろうに子供に苛いじめられた復讐ふくしゅうしん心が消えぬのである。子供と云えば、日本の
 子供はなぜ犬猫を可愛かあいがらぬのであろう。直ぐ畜生ちきしやうと云つては打うつたり石を投げた
 りする。矢張大人の真似まねを子供はするのであろう。禽獸ちようせんじんたいわんじんを愛せぬ国民は、大国民の
 資格しかくが無い。犬猫をいじめる子供は、やがて朝鮮人台湾人ちようせんじんたいわんじんをいじめる大人である。
 ある犬通いんつうの話に、野犬やけんの牙かは飼犬かいいぬのそれより長くて鋭く、且そつぽう外方むへ向くものだそう
 だ。生物せいぶつには飢程うへ恐ろしいものは無い。食にはなれた野犬が猛犬になり狂犬になる
 のは唯一歩である。野武士のぶしのポチは郎等のデカとなつて、犬相いぬさうが大に良くなつた。
 其かわり以前の強味はなくなつた。富国強兵兎角たつがく両立し難いものとあつて、デカが
 柔和に即ち弱よわくなつたのも違ちがはぬ処ところであらう。以上二頭の犬の外、トラと云う雄猫おねこ
 が居る。犬好きの家は、猫まで犬化して、トラは畳たたみの上より土に寝ねるが好きで、儂等
 が出来るくと兎うさぎの如くピョン／＼はねて跟ついて来る。米の飯めしより麦の飯むぎ、魚さかなよりも

揚豆腐が好きで、主人を見真似たか梨や甜瓜まくわの喰い残りをはり／＼噛かつたり、焼いた玉蜀黍とうもろこしを片手で押えてわん／＼噛みつきあの鋭い牙で粒を喰いかいてはぼり／＼噛つたり、まさに田園でんえんの猫である。来客があつて、珍らしく東京から魚を買つたら、トラ先生さつぞく早速口中に骨を立て、両眼に涙、口もとからは涎よだれをたらし、人騒がせをしてよう／＼命だけは取りとめた。犬猫の外に鶏が十羽。蜜蜂は二度飼つて二度逃げられ、今は空箱だけ残つて居る。天井てんじやうの鼠、物置あおだいしやうの青大将、其他無断同居のものも多いが、此等は眷族けんぞくの外である。（著者追記。犬のデカは大正二年の二月自動車に轢かれて死に、猫のトラは正月行衛不明になり、ピンは五月肥溜に落ちて死んだ。）

猫の話で思い出したが、儂わしは明治四十二年の春、塩釜しおがまの宿で牡蠣かきを食つた時から菜食さいしょくを廃した。明治三十八年十二月から菜食をはじめて、明治三十九、四十、四十一、と満三年の精進しやうじん、云わば昔の我に對する三年の喪もをやつたようなものだ。以前はダシにも昆布こんぶを使った。今は魚鳥獸肉何でも食う。猪肉や鯛は尤も好物だ。然し葷酒くんしゆ（酒はおまけ）山門さんもんに入るを許したばかりで、平素の食料は野菜、干物、豆腐位、来客か外出の場合でなければ減多に肉食はせぬから、折角の選俗けんぞくも頗る甲斐かいがない訳である。甲州街道に肴屋さかなやはあるが、無論塩物干物ばかりで、都会とかいに溢るゝ鯉しこ、秋刀魚さんまの廻まわつて来る時節でもなければ、肴屋の触れ声を聞く事は、殆ど無い。ある時、東京式に若者が二人威勢いせいよく盤台かたを担いで来たので、珍らしい事だと出て見る

と、大きな盤台の中は鉛節なまりぶしが五六本に鮪まぐろの切身が少々、それから此はと驚かされたのは血だらけの鯨さめの頭だ。鯨の頭にはギョツとした。蒲鉾屋かまぼこやからでも買い出して来たのか。誰が買うのか。ダシにするのか。煮にて食うのか。儂は泣きたくなった。一生の思出に、一度は近郷近在きんきうきんざいの衆を呼んで、ピン／＼した鯛の刺身煮附に、雪ゆきの様な米の飯めしで腹が割ける程馳走をして見たいものだ。實際此処では魚と云えば已に馳走で、鮮否は大した問題では無い。近所の子供などが時々真赤な顔をして居る。酒を飲まされたのでは無い。ふるい鯖さばや鮪よに酔うたのである。此頃は、儂の健啖けんたんも大に減った。而して平素菜食の結果、稀まれに東京で西洋料理なぞ食つても、甘いには甘いが、思う半分も喰くえぬ。最早儂の腸胃も奎兵衛式くわべいしきになった。

五

書ほんが沢山ある家、学うちを読む家、植木が好きな家、もとは近在の人達が斯く儂の家の事を云うた。儂を最初村に手引した石山君は、村塾を起して儂に英語を教えさせ自身漢学を教え、斯くて千歳村ちとせむらを風靡する心算つもりであつたらしい。然し其は石山君の失望であつた。儂は何処までも自己本位の生活をした。ある学生は、あなたの故郷こきやうは此処ここでは無い、大きな樹木じゆもくを植えたり家を建てたりはよくない、と切に忠告した。儂

は顧みなかつた。古い家ながら小人数には広過ぎる家を建て、盛に果樹觀賞木を植え、一切永住方針を執つて吾生活の整頓に六年を費した。儂は儂の住居が水草を逐うて移る天幕であらねばならぬことを知らぬでは無かつた。また儂自身に漂泊の血をもつて居ることを否むことは出来なかつた。従来儂の住居が五六年を一期とする経歴を記憶せぬでは無かつた。だから儂は落ちついたかつた。執着がして見たかつた。自分の故郷を失つたからには、故郷を造つて見たかつた。而して六年間孜々として吾巢を構えた。其結果は如何である？ 儂が越して程なく要あつて来訪した東京の一紳士は、あまり見すばらしい家の容子に掩い難い侮蔑を見せたが、今年来て見た時は、眼色に争われぬ尊敬を現わした。其れに引易え、或信心家は最初片つ方しか無い車井の釣瓶なぞに随喜したが、此頃ではつい近所に来て泊つても寄つても往かなくなつた。即儂の田園生活は、或眼からは成功で、或眼からは墮落に終つたのである。

墮落か成功か、其様な屑々な評価は如何でも構わぬ。儂は告白する、儂は自然がヨリ好きだが、人間が嫌ではない。儂はヨリ多く田舎を好むが、都会を捨てることは出来ぬ。儂は一切が好きである。儂が住居は武蔵野の一隅にある。平生読んだり書いたりする廊下の窓からは甲斐東部の山脈が正面に見える。三年前建てた書院からは、東京の煙が望まれる。一方に山の雪を望み、一方に都の煙を眺むる儂の住居

は、即ち都の味と田舎の趣とを両手に握らんとする儂の立場と欲望を示して居るとも云える。斯慾望が何処まで衝突なく遂げ得らるゝかは、疑問である。此両趣味の結婚は何ものを生み出したか、若くは生み出すか、其れも疑問である。唯儂一個人としては、六年の田舎住居の後、いさゝか獲たものは、土に対する執着の意味をやゝ解しはじめた事である。儂は他郷から此村に入つて、唯六年を過ごしたに過ぎないが、それでも吾が樹木を植え、吾が種を蒔き、我が家を建て、吾が汗を滴らし、吾不浄を培い、而してたまゝ死んだ吾家の犬、猫、鶏、の幾頭幾羽を葬つた一町にも足らぬ土が、今は儂にとりて着物の如く、寧皮膚の如く、居れば安く、離るれば苦しく、之を失う場合を想像するに堪えぬ程愛着を生じて來た。己を以て人を推せば、先祖代々土の人たる農其人の土に対する感情も、其一端を覗うことが出来る。斯執着の意味を多少とも解し得る鍵を得たのは、田舎住居の御蔭である。

然しながら己が造つた型に囚われ易いのが人の弱点である。執着は常に力であるが、執着は終に死である。宇宙は生きて居る。人間は生きて居る。蛇が衣を脱ぐ如く、人は昨日の己が死骸を後ぎまに蹴て進まねばならぬ。個人も、国民も、永久に生くべく日々死して新に生れねばならぬ。儂は少くも永住の形式を取つて村の生活をはじめたが、果して此処に永住し得るや否、疑問である。新宿八王子間の電車は、儂の居村から調布まで已に土工を終えて鉄線を敷きはじめた。トンカンと云う鉄の響

が、近來警鐘の如く儂の耳に轟く。此は早晩儂を此巢から追い立てる退去令の先触さきふれではあるまいか。愈電車でも開通した暁、儂は果して此処に踏止ふみとまるか、寧東京に帰るか、或は更に文明を逃げて山に入るか。今日に於ては儂自ら解き得ぬ疑問である。

大正元年十二月二十九日

都ひなも鄙おしも押なべて白妙しろたえを被きる風雪の夕

武蔵野粕谷の里にて

徳富健次郎

都落ちの手帳から

千歳村

一

明治三十九年の十一月中旬、彼等夫妻は住家を探すべく東京から玉川の方へ出かけた。

彼は其年の春千八百何年前に死んだ耶蘇の旧跡と、まだ生きて居たトルストイの村居にぶらりと順礼に出かけて、其八月にぶらりと帰って来た。帰って何を為るのか分からぬが、兎に角田舎住居をしようと思つて帰つて来た。先輩の牧師に其事を話したら、玉川の附近に教会の伝道地がある、往つたら如何だと云う。伝道師は御免を蒙る、生活に行くのです、と云つたものゝ、玉川と云うに心動いて、兎に角見に行きましようと言えた。そうか、では何日に案内者をよこそう、と牧師は云うた。約束の日になった。案内者は影も見せぬ。無論牧師からはがき一枚も来ぬ。彼は舌鼓をうつて、案内者なしに妻と二人西を指して迦南の地を探がす可く出かけた。

牧師は玉川の近くで千歳村だと大東に教えてくれた。彼等も玉川の近辺で千歳村なら直ぐ分かるだろうと大東にきめ込んで、例の如くぶらりと出かけた。

二

「家を有つなら草葺くさぶきの家、而して一反でも可い、己が自由になる土を有ちたい」
彼は久しく、斯様な事を思うて居た。

東京は火災予防として絶対的草葺を禁じてしまった。草葺に住むと云うは、取りも直さず田舎に住む訳わけである。最近五年余彼が住んだ原宿の借家も、今住んで居る青山高樹町の借家も、東京では田舎近い家で、草花位つくる余地はあった。然し借家借地は気が置ける。彼も郷里の九州には父から譲られた少しばかりの田畑たはたを有つて居たが、其土は錢に化けて追々消えてしまい、日露戦争終る頃は、最早一撮ひとつまみの土も彼の手には残つて居なかつた。そこで草葺の家と一反の土とは、新に之を求めねばならぬのであつた。

彼が二歳から中二年を除いて十八の春まで育つた家は、即ち草葺の家であつた。明治の初年薩摩境に近い肥後の南端の漁村から熊本の外に越した時、父が求めた古家で、あとでは瓦葺かわらぶきの棟が建増されたが、母屋は久しく茅葺であつた。其茅葺

をつたう春雨の雫の様に、昔のなつかし味が彼の頭脳に滲みて居たのである。彼の家は加藤家の浪人の血をひいた軽い土の末で、代々田舎の惣庄屋をして居て、農には元来縁浅からぬ家である。彼も十四五の頃には、僕に連れられ小作米取立の検分に出かけ、小作の家で飯を強いられたり無理に濁酒の盃をさゝれたりして困った事もあった。彼の父は地方官吏をやめて後、県会議員や郷先生をする傍、殖産興業の率先をすると謂つて、女を製糸場の模範工女にしたり、自家でも養蚕製糸をやつたり、桑苗販売などをやつて、いつも損ばかりして居た。桑苗発送季の忙しくて人手が足りぬ時は、彼の兄などもマカウレーの英国史を抛り出して、柄の短い肥後鍬を不器用な手に握つたものだ。弟の彼も鎌を持たされたり、苗を運ばされたりしたが、吾儘で気薄な彼は直ぐ嫌になり、疳癰を起してやめてしまふが例であつた。

父は津田仙さんの農業三事や農業雑誌の読者で、出京の節は学農社からユーカリ、アカシヤ、カタルパ、神樹などの苗を仕入れて帰り、其他種々の水瓜、甘蔗など標本的に試作した。好事となると実行せずに居れぬ性分で、ある時菓樹は幹に疵つけ徒長を防ぐと結果に効があると云う事を何かの雑誌で読んで、屋敷中の梨の若木の膚を一本残らず小刀でメチャ／＼に縦疵をつけて歩いたこともあった。子の彼は父にも兄にも肖ぬなまけ者で、実学実業が大の嫌いで、父が丹精して置いた畑を荒らして廻り、甘蔗と間違えて西洋蓍黍を嚙んで吐き出したり、未熟の水瓜を窃と拳固

で打破つて川に投げ込んで素知らぬ顔して居たり、悪戯ばかりして居た。十六七の際には、学業不勉強の罰とあつて一切書籍を取上げられ、爾後養蚕専門たるべしとの宣告の下に、近所の養蚕家に入門せしめられた。其家には十四になる娘があつたので、当座は真面目に養蚕稽古もしたが、一年足らずで嫌になつてズル／＼にやめて了うた。但右の養蚕家入門中、桑を切るとて大きな桑切庖丁を左の掌の拇指の根にぎつくり切り込んだ其疵痕は、彼が養蚕家としての試みの記念として今も三日月形に残つて居る。

斯様な記憶から、趣味としての田園生活は、久しく彼を引きつけて居たのであつた。

三

青山高樹町の家をぶらりと出た彼等夫婦は、まだ工事中の玉川電鉄の線路を三軒茶屋まで歩いた。唯有る饅飩屋に腰かけて、昼飯がわりに饅飩を食つた。松陰神社で旧知の世田ヶ谷往還を世田ヶ谷宿のはずれまで歩き、交番に聞いて、地藏尊の道しるべから北へ里道に切れ込んだ。余程往つて最早千歳村である、まだかまだかとしば／＼会う人毎に聞いたが、中々村へは来なかつた。妻は靴に足をくわれて歩行

に難む。農家に入つて草履を求めたが、無いと云う。漸く小さな流れに出た。流れに沿うて、腰硝子の障子など立てた瀟洒とした草葺の小家がある。ドウダンが美しく紅葉して居る。此処は最早千歳村で、彼風流な草葺は村役場の書記をして居る人の家であつた。彼様な家を、と彼等は思つた。

会堂がありますか、耶穌教信者がありますか、とある家に寄つてきいたら、洗濯して居たかみさんが隣のかみさんと顔見合をして、「粕谷だね」と云つた。粕谷さんの宅は何方と云うたら、かみさんはふツと噴き出して、「粕谷た人の名でねエだよ、粕谷つて処だよ」と笑つて、粕谷の石山と云う人が耶穌教信者だと教えてくれた。

尋ねて到頭会堂に來た。其は玉川の近くでも何でもなく、見晴しも何も無い桑畑の中にある小さな板葺のそれでも田舎には珍らしい白壁の建物であつた。病人か狂人かと思われる様な蒼い顔をした眼のぎよろりとした五十余の婦が、案内を請う彼の声に出て來た。会堂を借りて住んで居る人なので、一切の世話をする石山氏の宅は直ぐ奥だと云う。彼等は導かれて石山氏の広庭に立つた。トタン葺の横長い家で、一方には瓦葺の土蔵など見えた。暫くすると、草鞋ばきの人が出て來た。私が石山八百蔵と名のる。年の頃五十余、頭の毛は大分禿げかゝり、狸々の様な顔をして居る。あとで知つたが、石山氏は村の博識口利で、今も村会議員をして居るが、政争の劇しい三多摩の地だけに、昔は自由黨員で壮士を連れて奔走し、白刃の間を

潜^{くづ}つて来た男であつた。推^{すい}参^{さん}の客は自ら名のり、牧師の紹介^{しょうかい}で会堂を見せてもらいに來たと云うた。石山氏は心を得ぬと云う顔をして、牧師から何の手紙も来ては居ぬ、福富儀一郎と云う人は新聞などで承知をして居る、また隣村の信者で角田勘五郎と云う者の姉が福富さんの家に奉公して居たこともあるが、尊名は初めてだと、飛^{かすり}白^{はく}の筒袖羽織、禿^{かぶ}びた薩摩^{さつま}下駄^{げだ}、鬚^{ひげ}髯^げもじやゝの彼が風采^{ふうさい}と、煤^{すす}竹^{たけ}色の被布^ふを着て痛^{いた}そうに靴^{くつ}を穿^はいて居る白粉氣も何もない女の容^{よう}子^すを、胡^う散^{さん}くさそうにじろじろ見て居た。然し田舎住居がしたいと云う彼の述^{じゆつ}懐^{かい}を聞いて、やゝ小首^{こかし}を傾^かげてのち、それは会堂も無牧で居るから、都合によつては来てお貰^{もら}い申して、月々何程かずつ世話を^{おもう}して上げぬことはない、と云う鷹揚^{おうよう}な態度を石山氏はとつた。兎に角会堂を見せてもらうた。天井^{てんじやう}の低^ひい鮓^す詰^{づめ}にしても百人がせいゝ位の見^みすばらしい会堂で、裏に小^こさな部^へ屋^やがあつた。もと耶蘇教の一時繁昌した時、村を西へ距^さる一里余、甲州街道の古い宿調布町に出來た会堂で、其後調布町の耶蘇教が衰え会堂が不用^{ふよう}になつたので、石山氏外数名の千歳村の信者がこゝにひいて來たが、近來久しく無牧で、今は小学教員母子が借りて住んで居ると云うことであつた。

会堂を見て、渋茶の馳走^{ちそう}になつて、家の息子に道を教わつて、甲州街道の方へ往^いつた。

晩秋^{ばんしゅう}の日は甲州^{こうしゅう}の山に傾^かき、膚寒^{むさみ}い武藏野^{むさしの}の夕風^{ゆふふう}がさゝ／＼尾花^{おはな}を揺^ゆする野路^{のろ}を、夫

婦は疲れ足曳きずつて甲州街道を指して歩いた。何処どこやらで夕鴉ゆうがらすが啞々と鳴き出した。我儕われらの行末は如何なるのであろう？ 何処に落つく我儕の運命であらう？ 斯く思いつゝ、二人は黙って歩いた。

甲州街道に出た。あると云う馬車も来なかつた。唯有とある店で、妻は草履ぞうりを買うて、靴をぬぎ、三里近い路をとぼく歩いて、漸く電燈の明るい新宿へ来た。

都落ち

一

二月ばかり経^たつた。

明治四十年の一月である。ある日田舎の人が二人青山高樹町の彼が僑居^{きようきよ}に音^かづれた。一人は石山氏、今一人は同教会執事角田新五郎氏であつた。彼は牧師に招聘^{しょうへい}されたのである。牧師は御免を蒙る、然し村住居はしたい。彼は斯く返事したのであつた。

彼は千歳村にあまり気がなかつた。近いと聞いた玉川^{たまがわ}は一里の余もあると云う。風景も平凡^{へいぼん}である。使つて居た女中^{じよちゆう}は、江州彦根在^{ごうしゆう}の者で、其郷里^{きやうり}地方には家屋敷を捨売りにして京、大阪や東京に出る者が多いので、謾^{うそ}の様に廉^{やす}い地面家作の売物^{うりもの}があると云う。江州——琵琶湖東^{びわことう}の地、山美しく水清く、松茸^{たくさん}が沢山に出て、京奈良に近い——大に心動いて、早速郷里に照会^{しょうかい}してもらつたが、一向に返事が来ぬ。今時分田舎から都へ出る人はあろうとも、都から田舎にわざ／＼引込む者があろうか、戯談^{じようだん}に違いない、とうちやつて置いたのだと云う事が後で知れた。江州の返

事が来ない内、千歳村の石山氏は無闇と乗地になつて、幸い三つばかり売地があると知らしてよこした。あまり進みもしなかつたが、兎に角往つて見た。

一は上祖師ヶ谷で青山街道に近く、一は品川へ行く灌漑用水の流れに傍うて居た。此等は彼が懷よりも些反別が広過ぎた。最後に見たのが粕谷の地所で、一反五畝余小高く、一寸見晴らしがよかつた。風に吹飛ばされぬようはりかねで白樫の木にしばりつけた土間共十五坪の汚ない草葺の家が附いて居る。家の前は右の檜の一行から直ぐ麦畑になつて、家の後は小杉林から三角形の櫟林になつて居る。地面は石山氏外一人の所有で、家は隣字の大工の有であつた。其大工の妾とやらが子供と棲んで居た。此れで我慢するかな、彼は斯く思いつゝ歸つた。

石山氏はますゝ乗地になつて頻に所決を促す。江州からはたよりが無い。財布は日にゝ軽くなる。彼は到頭粕谷の地所にきめて、手金を渡した。

手金を渡すと、今度は彼があせり出した。万障一排除して二月二十七日を都落の日と定め、其前日二十六日に、彼等夫婦は若い娘を二人連れ、草箒と雑巾とバケツを持って、東京から掃除に往つた。案外道が遠かつたので、娘等は大分弱つた。雲雀の歌が纔に一同の心を慰めた。

来て見ると、前日中に明け渡す約束なのに、先住の人々はまだ仕舞いかねて、最後の荷車に物を積んで居た。以前石山君の壮士をしたと云う家主の大工とも挨拶を

交換した。其妻と云う髪を乱した女は、都の女等を憎くさげに睨んで居た。彼等は先住の出で去るを待つて、畑の枯草の上に憩うた。小さな墓場一つ隔てた東隣の石山氏の親類だと云う家のおかみが、蕙を二枚貸してくれ、土瓶の茶や漬物の井を持て来てくれたので、彼等は蕙の上に座つて、持参の握飯を食うた。

十五六の唾に荷車を挽かして、出る人々はよう／＼出て往つた。待ちかねた彼等は立上つて掃除に向つた。引越しあとの空家は総じて立派なものでは無いが、彼等はわが有になつた家のあまりの不潔に胸をついた。腐れかけた麦藁屋根、ぼろ／＼崩れ落ちる荒壁、小供の尿の浸みた古畳が六枚、茶色に煤けた破れ唐紙が二枚、蠅の卵のへばりついた六畳一間の天井と、土間の崩れた一つ竈と、糞壺の糞と、おはぐろ色した溷の汚水と、其外あらゆる塵芥を残して、先住は出て往つた。掃除の手をつけようもない。女連は長い顔をして居る。彼は憤然として竹箒押取り、下駄ばきのまゝ床の上に飛び上り、ヤケに塵の雲を立てはじめた。女連も是非なく手拭かぶつて、襷をかけた。

二月の日は短い。掃除半途に日が入りかけた。あとは石山氏に頼んで、彼等は匆惶と帰途に就いた。今日も甲州街道に馬車が無く、重たい足を曳きずり／＼漸く新宿に辿り着いた時は、女連はへと／＼になつて居た。

明くれば明治四十年二月二十七日。ソヨとの風も無い二月には珍らしい美日であつた。

村から来てもらつた三台の荷馬車と、厚意で来てくれた耶蘇教信者仲間の石山氏、角田新五郎氏、白田氏、角田勘五郎氏の息子、以上四台の荷車に荷物をのせて、午食過ぎに送り出した。荷物の大部分は書物と植木であつた。彼は園芸が好きで、原宿五年の生活に、借家に住みながら鉢物も地植のものも可なり有つて居た。大部分は残して置いたが、其れでも原宿から高樹町へ持て来たものは少くはなかつた。其等は皆持て行くことにした。荷車の諸君が斯様なものを、と笑つた栗、株立の榛の木まで、駄々を捏ねて車に積んでもらうた。宰領には、原宿住居の間よく仕事に來た善良な小男の三吉と云うのを頼んだ。

加勢に來た青年と、昨日粕谷に掃除に往つた娘とは、おの／＼告別して出て往つた。暫く逗留して居た先の女中も、大きな風呂敷包を負つて出て往つた。隣に住む家主は、病院で重態であつた。其細君は自宅から病院へ往つたり來たりして居た。甚だ心ないわざながら、彼等は細君に別を告げねばならなかつた。別を告げて、門を出て見ると、門には早や貸家札が張られてあつた。

彼等夫妻は、当分加勢に来てくれると云う女中を連れ、手々に手廻りのものや、ランプを持つて、新宿まで電車、それから初めて調布行きてまわの馬車に乗つて、甲州街道を一時間余ガタくり、馭者ぎやしゃに教えてもらつて、上高井戸かみたかいどの山谷さんやで下りた。

粕谷田圃くさやたんぼに出る頃、大きな夕日ゆうひが富士の方に入りかゝつて、武蔵野一円こんじき金色の光明を浴びた。都落ちの一行三人は、長い影を曳ひいて新しい住家すみかの方へ田圃を歩いた。遙向うの青山街道に車の軋くるまの響きしがするのを見れば、先発の荷馬車が今まさに来つゝあるのであつた。人と荷物は両花道りやうはなみちから草葺の孤屋ひとりやに乗り込んだ。

昨日きのう掃除しかけて歸つた家には、石山氏に頼んで置いた縁無しへりの新畳が、六畳二室に敷かれて、流石に人間の住居らしくなつて居た。昨日頼んで置いたので、先家主の大工だいくが、六畳裏の蛇でもものたくりそんな屋根裏やねうらを隠す可く粗末な天井を張つて居た。

日の暮れてくるまに手車の諸君も着いた。道具どうぐの大部分は土間に、残りは外に積つんで、荷車荷馬車の諸君は茶一杯飲んで歸つて行つた。兎も角もランプをつけて、東京から櫃おほらごと持参じさんの冷飯ゆづげで夕食を済まし、彼等夫妻は西の六畳に、女中と三吉は頭合せに次の六畳に寝た。

明治の初年、薩摩近い故郷こきやうから熊本に引出で、一時寄寓ききやうして居た親戚の家から父が買った大きな草葺のあばら家に移つた時、八歳の兄は「破れ家でも吾家わがいえが好い」

と喜んで踊ったそうである。

生れて四十年、一反^{たん}五畝^せの土と十五坪の草葺のあばら家^やの主^{ぬし}になり得た彼は、正に帝王^{ていおう}の氣もちで、楽々^{らくらく}と足踏み伸ばして寝たのであった。

村入

みみずのたはこと

引越の翌日は、昨日の温和に引易えて、早速田園生活の決心を試すかの様な烈しいからッ風であつた。三吉は植木うえきを植えて了うて、「到底一年とは辛抱しんぼうなさるまい」と女中さきに囁ささやいて歸つて往つた。昨日荷車を挽ひいた諸君が、今日も来て井戸を浚さらえてくれた。家主の彼は、半紙二帖、貰物もらいものの干物少々持つて、近所四五軒に挨拶まわに廻つた。其翌日は、石山氏の息子の案内で、一昨、昨兩日骨折つてくれた諸君の家を歴訪して、心ばかりの礼を述べた。臼田君の家は下祖師ヶ谷で、小学校に遠からず、兩角田君は大分離れて上祖師ヶ谷に二軒隣り合ひ、石山氏の家と彼自身うちの家は粕谷にあつた。何れも千歳村の内ながら、水の流るゝ田圃たんぼに下りたり、富士大山から甲武連山こうぶれんざんを色々に見る原に上つたり、霜解しもとけの里道を往つては江戸みちと彫つた古い路しるべの石の立つ街道を横ぎり、檜櫓かしげやきの村から麦畑、寺の門から村役場前と、廻れば一里もあるかと思われた。千歳村は以上三の字あざの外、船橋ふなばし、廻沢めぐりさわ、八幡山はちまんやま、鳥山、給田の五字を有ち、最後の二つは甲州街道に傍そい、余は何れも街道の南北一里余の間にあり、粕谷が丁度中央で、一番戸数の多いが鳥山二百余戸、一番少ないのが八幡山十九軒、次は粕谷の二十六軒、余は大抵五六十戸だと、最早もそろゝ小

学の高等科になる石山氏の息子むすこが教えてくれた。

期日は三月一日、一月おくれで年中行事をする此村では二月一日、稲荷講いなりこうの当日である。礼廻りから帰った彼は、村の仲間入すべく紋付羽織あらたに更めて、午後石山氏に跟ついて当日の会場たる下田氏の家に往った。

其家は彼の家から石山氏の宅に往く途中で、小高い堤どてを流るゝ品川堀しながわぼりと云う玉川浄水の小さな分派わかれに沿うて居た。村会議員も勤むる家で、会場は蚕室うちの階下であつた。千歳村でも戸毎かいこに蚕は飼いながら、蚕室を有つ家は指を屈する程しか無い。板の間に薄べり敷しいて、大きな櫨ねっこの根株の火鉢が出て居る。十五六人も寄つて居た。石山氏が、

「これは今度東京きから来されて仲間に入れておもらい申してアと申されます何某なにがしさんで」

と紹介しょうかいする。其尾について、彼は両手りょうてをついて鄭重ていじゆうにお辞儀じぎをする。皆が一人ひとりと来ては挨拶する。石山氏の注意で、樽代たるだい壹円仲間入のシルシまでに包んだので、皆がかわるゝみやげの礼れいを云う。粕谷は二十六軒しかないから、東京から来て仲間に入はいってくれるのは喜ばしいと云う意を繰り返し諸君が述べる。会衆中で唯一人ただチョンまげ鬚まげに結った腫はれぼったいまぶた瞼まぶたをした大きな爺じいさんが「これははア御先生様ごせんせいさま」と挨拶した。

やがてニコ／＼笑つて居る恵比須顔の六十許の爺さんが来た。石山氏は彼を爺さんに紹介して、組頭の浜田さんであると彼に告げた。彼は又もや両手をついて、何も分からぬ者ですからよろしく、と挨拶する。

二十五六人も寄つた。これで人数は揃つたのである。煙草の煙。話声。彼真新しい樗の根株の火鉢を頻に撫でて色々に評価する手合もある。米の値段の話から、六十近い矮い真黒な剽軽な爺さんが、若かつた頃米が廉かつたことを話して、
「俺と卿は六合の米よ、早くイツシヨ（一緒、一升）になれば好い」
なんか歌つたもんだ、と中音に節をつけて歌い且話して居る。

腰の腫物で座蒲団も無い板敷の長座は苦痛の石山氏の注意で、雑談会はやおら相談会に移つた。慰兵会の出金問題、此は隣字から徴兵に出る時、此字から寸志を出す可きや否の問題である。馬鹿々々しいから出すまいと云う者もあつたが、然し出して置かねば、此方から徴兵に出る時も貰う訳に行かぬから、結局出すと云う事に決する。

其れから衛生委員の選挙、消防長の選挙がある。テーブルが持ち出される。茶盆で集めた投票を、咽仏の大きいジャ／＼声の仁左衛門さんと、むツつり顔の敬吉さんと立って投票の結果を披露する。彼が組頭の爺さんが、忤は足がわるいから消防長はつとまらぬと辞退するのを、皆が寄つてたかつて無理やりに納得さす。

此れで事務はあらかた終った。これからは肝心の飲食となるのだが、新村入の彼は引越早々まだ荷も解かぬ始末なので、一座に挨拶し、勝手に働いて居る若い人達に遠ながら目礼して引揚げた。

*

日ならずして彼は原籍地肥後国葦北郡水俣から戸籍を東京府北多摩郡千歳村字粕谷に移した。子供の頃、自分は士族だと威張つて居た。戸籍を見れば、平民とある。彼は一時同姓の家に兵隊養子に往つて居たので、何時の間にか平民となつて居た。それを知らなかったのである。吾れから捨てぬ先きに、向うからさつさと片づけてもらうのは、魯智深の髻ではないが、些惜しい気もちがせぬでもなかった。兎に角彼は最早浪人では無い。無宿者でも無い。天下晴れて東京府北多摩郡千歳村字粕谷の忠良なる平民何某となつたのである。

水汲み

玉川に遠いのが第一の失望で、井の水の悪いのが差当つての苦痛であつた。

井は勝手口から唯六歩、ぼろ／＼に腐つた麦藁屋根が通路と井を覆うて居る。上窄

りになつた桶の井筒、鉄の車は少し欠けてよく綱がはずれ、釣瓶は一方しか無いので、釣瓶繩の一端を屋根の柱に結わえてある。汲み上げた水が恐ろしく泥臭いのも尤、錨を下ろして見たら、濁水の折からでもあろうが、水深が一尺とはなかつた。

移転の翌日、信者仲間の人達が来て井浚えをやってくれた。鍋蓋、古手拭、茶碗

のかけ、色々の物が揚がつて来て、底は清潔になり、水量も多少は増したが、依然たる赤土水の濁り水で、如何に無頓着の彼でもが／＼飲む氣になれなかつた。近隣の水を当座は貰つて使つたが、何れも似寄つた赤土水である。墓向うの家の水を貰いに往つた女中が、井を覗いたら芥だらけ虫だらけでございます、と顔を蹙めて歸つて来た。其向う隣の家に往つたら、其処の息子が、此家の水はそれは好い水で、演習行軍に来る兵隊なぞもほめて飲む、と得意になつて吹聴したが、其れは赤子の時から飲み馴れたせいで、大した水でもなかつた。

使ひ水は兎に角、飲料水だけは他に求めねばならぬ。

家から五丁程西に当つて、品川堀と云う小さな流水がある。玉川上水の分派で、品川方面の灌漑専用の水だが、附近の村人は朝々顔も洗えば、襦袢の洗濯もする、肥桶も洗う。何アに玉川の水だ、朝早くさえ汲めば汚ない事があるものかと、男役に彼は水汲む役を引受けた。起きぬけに、手桶と大きなバケツとを両手に提げて、霜を踏んで流れに行く。顔を洗う。腰膚ぬいで冷水摩擦をやる。日露戦争の余炎がまださめぬ頃で、面籠手かついで朝稽古から帰つて来る村の若者が「冷たいでしょう」と挨拶することもあった。摩擦を終つて、膚を入れ、手桶とバケツとをずんぶり流れに浸して満々と水を汲み上げると、ぐいと両手に提げて、最初一丁が程は一氣に小走りに急いで行く。耐えかねて下ろす。腰而下の着物はずぶ濡れになつて、水は七分に減つて居る。其れから半丁に一憩、また半丁に一憩、家を目がけて幾休みして、やつと勝手に持ち込む頃は、水は六分にも五分にも減つて居る。両腕はまさに脱ける様だ。斯くして持ち込まれた水は、細君女中によつて金漿玉露と惜みく使われる。

余り腕が痛いので、東京に出たついでに、渋谷の道玄坂で天秤棒を買つて来た。丁度股引尻からげ天秤棒を肩にした姿を山路愛山君に見られ、理想を実行すると笑止な顔で笑われた。買つて戻つた天秤棒で、早速翌朝から手桶とバケツとを振り分けに担うて、汐汲みならぬ髯男の水汲と出かけた。両手に提げるより幾何か優だが、

使い馴れぬ肩と腰が思う様に言う事を聴いてくれぬ。天秤棒に肩を入れ、曳やつと立てば、腰がフラ／＼する。膝はぎくりと折れそうに、体は顛倒りそうになる。嘔と足を踏みしめると、天秤棒が遠慮会釈もなく肩を圧しつけ、五尺何寸其まゝ大地に釘づけの姿だ。思い切つて蹠跟とよろけ出す。十五六歩よろけると、息が詰まる様で、たまりかねて荷を下ろす。尻餅春く様に、捨てて下ろす。下ろすのではない、荷が下りるのである。撞と云うはずみに大切の水がぱつとこぼれる。下ろすのも厄介だが、また担ぎ上げるのが骨だ。路の二丁も担いで来ると、雪を欺く霜の朝でも、汗が満身に流れる。鼻息は暴風の如く、心臓は早鐘をたゞく様に、脊髄から後頭部にかけて強直症にかゝつた様に一種異様の熱氣がさす。眼が真暗になる。頭がぐら／＼する。勝手もとに荷を下ろした後は、失神した様に暫くは物も言われぬ。早速右の肩が瘤の様に腫れ上がる。明くる日は左の肩を使う。左は勝手が悪いが、痛い右よりまだ優と、左を使う。直ぐ左の肩が腫れる。両肩の腫瘤で人間の駱駝が出来る。両方の肩に腫れられては、明日は何で担ごうやら。夢の中にも肩が痛い。また水汲みかと思うと、夜の明くるのが恨めしい。妻が見かねて小さな肩蒲団を作ってくれた。天秤棒の下にはさんで出かける。少しは楽だが、矢張苦しい。田園生活もこれではやりきれぬ。全体誰に頼まれた訳でもなく、誰誉めてくれる訳でもなく、何を苦しんで斯様事をするのか、と内々愚痴をこぼしつゝ、必要に迫られては洩面

作つて朝々通う。度重たびかさなれば、次第しだいに馴なれて、肩の痛みも痛いながらに固まり、肩腰ちからに多少力でが出来、調子ていしがとれてあまり水をこぼさぬ様になる。今日きょうは八分だ、今日は九分だ、と成績せいせきの進むが一の楽たのしみになる。

然しいつまで川水を汲んでばかりも居られぬので、一月ばかりして大仕掛おおじかけに井浚いどさらえをすることにした。赤土あかつちからヘナ、ヘナから砂利じやりと、一丈余じやうよも掘つて、無色透明無臭せいいていにして無味の水が出た。奇麗きれいに浚さらつてしまつて、井筒せいつうにもたれ、井底せいてい深く二つ三つの湧せみき口くちから潺せんせん々と清水しみずの湧く音を聴いた時、最早もとう水汲みの難行なんぎようくぎよう苦行あども後になつたことを、嬉うれしくもまた残惜ざんしきしくも思つた。

憶出のかずく

一

跟いて来た女中は、半月手伝つて東京へ歸つた。あとは水入らずの二人きりで、田園生活が真剣にはじまつた。

意気地の無い亭主に連添つれそうお蔭で、彼の妻は女中無しの貧乏世帯は可なり持馴れた。自然が好きで彼女には、田園生活必しも苦痛ばかりではなかつた。唯潔癖な彼女は周囲の不潔ひとかたに一方ならず悩まされた。一番近い隣となりが墓地に雑木林ぞうきばやし、生きた人間の隣は近い所で小一丁も離れて居る。引越早々所要あつて尋ねて来た老年の叔母おばは「若い女なぞ、一人で留守るすは出来ない所ですねえ」と云つた。それでも彼の妻は唯一人留守せねばならぬ場合もあつた。墓地の向う隣に、今は潰れたが、其頃博徒の巢すがあつて、破落戸なちずもの漢が多く出入した。一夜家をあけてあくる夕歸つた彼は、雨戸の外に「今晚は」と、ざれた男の声を聞いた。「今晚は」と彼が答えた。雨戸の外の男は昨日主が留守であつたことを知つて居たが、先刻さつき歸つたことを知らなかつたのである。大にドキマギした容子ようすであつたが、調子を更えて「宮前のお広さん処へは如何

参るのです?」と胡魔化した。宮前のお広さん処は、始終諸君が入り浸る其賭博の巢なのである。主の彼は可笑しさを堪え、素知らぬ振して、宮前のお広さん処へは、其処の墓地に傍うて、ずツと往つて、と馬鹿町嚙に教えてやった。「へえ、ありがとうございます」と云つて、舌でも出したらしい気はいであつた。門戸あけつぱなしで、人近く自然に近く生活すると、色々の薄気味わるい経験もした。ある時彼が縁に背向けて読書して居ると、後に撞と物が落ちた。彼はふりかえつて大きな青大将を見た。葺きつぱなしの屋根裏の竹に絡んで衣を脱ぐ拍子に滑り落ちたのである。今一尺縁へ出て居たら、正しく彼が頭上に蛇が降るところであつた。

人烟稀薄な武蔵野は、桜が咲いてもまだ中々寒かつた。中塗もせぬ荒壁は恣に崩れ落ち、床の下は吹き通し、唐紙障子も足らぬがちの家の内は、火鉢の火位で寒さは防げなかつた。農家の冬は大きな炉が命である。農家の屋内生活に属する一切の趣味は炉辺に群がると云つても好い。炉の焚火、自在の鍋は、彼が田園生活の重なる誘因であつた。然し彼が吾有にした十五坪の此草舎には、小さな炉は一坪足らぬ板の間に切つてあつたが、周囲が狭くて三人とは座れなかつた。加之其処は破れ壁から北風が吹き通し、屋根が低い割に炉が高く、熾な焚火は火事を覚悟しなければならなかつた。彼は一月ばかりして面白くない此型ばかりの炉を見捨てた。先家主の大工や他の人に頼み、代々木新町の古道具屋で建具の古物を追々に二枚三枚

と買つてもらい、肥車こえぐるまの上荷にして持て来てもらうて、無理やりにはめた。次の六
 畳の天井は、煤埃すすほこりにまみれた古葭簀ふるよしすで、腐れ屋根から雨が漏もると、黄ろい雫しずくがぼて
 〳〵畳に落ちた。屋根屋に頼んで一度ならず繕うても、盥たらいやバケツ、古新聞、あら
 ん限りの雨うけを畳の上に並べねばならぬ時があつた。驚いたのは風である。三本
 の大きなはりかねで家を櫓かじの木にしぼりつけてあるので、風当りがひどかうとは
 覺悟して居たが、實際吹かれて見て驚いた。西南は右の櫓以外一本の木もない吹き
 はらしなので、南風西風は用捨ようしやもなくウナリをうってぶつかる。はりかねに縛しばられ
 ながら、小さな家はおびえる様に身震いする。富士川の瀬を越す舟底の様に床ゆかが跳
 る。それに櫓の直ぐ下まで一面の麦畑いちめんむぎばたけである。武蔵野固有の文言通り吹けば飛ぶ軽
 い土が、それ吹くと云えば直ぐ茶褐色の雲を立てゝ舞い込む。彼は前年蘇土運河スエズの
 船中で、船房の中まで舞い込む砂あらしに駭いたことがある。武蔵野の土あらしも、
 やわか劣おとる可おとき。遠方から見れば火事の煙。寄つて来る日は、眼鼻口はもとより、
 押入おしいれ、箆筒たんすの抽斗ひきだしの中まで会釈えしやくもなく舞い込み、歩けば畳に白く足跡がつく。取り
 も直さず畑が家内やうちに引越すのである。

都をば塵の都いとと厭いとひしに

田舎も土の田舎なりけり

あまり吹かれていさゝかヤケになつた彼が名歌である。風が吹く、土が飛ぶ、霜

が冴える、水が荒い。四拍子揃つて、妻の手足は直ぐ靴、霜やけ、あかぎれに飾られる。オリーヴ油やリスリンを塗った位では、血が止まらぬ。主人の足裏も鯨の願の様に幾重も襷をなして口をあいた。あまり手荒い攻撃に、虎伏す野辺までもと跟いて来た糟糠の御台所も、ぼろ／＼涙をこぼす日があつた。以前の比較的ノンキな東京生活を知つて居る娘などが逗留に来て見ては、零落と思つたのである、台所の隅で茶碗を洗いかけてしく／＼泣いたものだ。

二

主人は新鋭の氣に満ちて、零落どころか大得意であつた。何よりも先ず宮益の興農園から柄の長い作切鋏、手斧鋏、ホー、ハアト形のワーレンホー、レーキ、シャヴル、草苺鎌、柴苺鎌など百姓の武器と、園芸書類の六韜三略と、種子と苗とを仕入れた。一反五畝の内、宅地、杉林、櫟林を除いて正味一反余の耕地には、大麦小麦が一ぱいで、空地と云つては畑の中程に瘠せこけた桑樹と枯れ茅枯れ草の生えたわずか一畝に足らぬ位のものであつた。彼は仕事の手はじめに早速其草を除き、重い作切鋏よりも軽いハイカラなワーレンホーで無造作に畝を作つて、原肥無し季節御構いなしの人蔘二十日大根など蒔くのを、近所の若い者は東京流の百姓は彼様するの

かと眼を睜みはなつて眺ながめて居た。作つてある麦は、墓の向うの所謂賭博いわゆるとばくの宿の麦であつた。彼は其一部を買つて、邪魔じやまになる部分はドシ／＼青麦をぬいてしまい、果物好きだけに何よりも先ず水蜜桃を植えた。通りかゝりの百姓衆ひやくしやうしゆうに、棕櫚繩しゆうなわを蠅頭はえがしらに結ぶ事を教わつて、畑中に透籬すいがきを結び、風よけの生籬いけがきにす可く之に傍そばうて杉苗を植えた。無論必要もあつたが、一は面白味から彼はあらゆる雑役ぞうえきをした。あらゆる不便と労力とを歓迎した。家から十丁程はなれた塚戸つかとの米屋が新村入を聞きつけて、半紙一帖持つて御用聞きに來た時、彼はやつと逃げ出した東京が早や先き廻りして居たかとはかりウンザリして甚不興はなはだふきようげ氣な顔をした。

手脚を少し動かすと一廉勉強いっかどした様で、汚ないものでも扱うと一廉謙遜けんそんになつた様で、無造作に應對をすると一廉人を愛するかの様で、酒こそ飲まね新生活いっばいしげんの一盃機嫌で彼はさまざまの可笑味を真顔でやつてのけた。東京に居た頃から、園芸好きで、糞尿を扱う事は珍らしくもなかったが、村入しては好んで肥桶かづを担いだ。最初はよくカラカフス無しの洋服を着て、小豆革あずきかわの帯をしめた。斯革の帯は、先年神田の十文字商会で六連発の短銃を買つた時手に入れた弾帯で、短銃其ものは明治三十八年の十二月日露戦役果て、満洲軍總司令部凱旋の祝砲を聞きつゝ、今後は断じて護身の武器を帯びずと心に誓つて、庭石にあてゝ鉄槌てつちでさん／＼に打破うちこわしてしまつたが、帯だけは罪が無いとあつて今に残つて居るのであつた。洋服にも履歴がある。そも

此洋服は、明治三十六年日蔭町で七円で買った白っぽい綿セルの背広で、北海道にも此れで行き、富士で死にかけた時も此れで上り、パレスチナから露西亞へも此れで往つて、トルストイの家でも持参の袷と此洋服を更代に着たものだ。西伯利亞鉄道の汽車の中で、此一張羅の洋服を脱いだり着たりするたびに、流石無頓着な同室の露西亞の大尉も技師も、眼を円く鼻の下を長くして見て居た歴史つきの代物である。此洋服を着て甲州街道で新に買った肥桶を青竹で担いで帰つて来ると、八幡様に寄合をして居た村の衆がドツと笑つた。引越後間もなく雪の日に老年の叔母が東京から尋ねて来た。其帰りにあまり路が悪いので、矢張此洋服で甲州街道まで車の後押しをして行くと、小供が見つけてわい／＼囃し立てた。よく笑わるゝ洋服である。此洋服で、鐙広の麦藁帽をかぶつて、塚戸に酔を買いに往つたら、小学校中の子供が門口に押し合うて不思議な現象を眺めて居た。彼の好物の中に、雪花菜汁がある。此洋服着て、味噌漉持つて、村の豆腐屋に五厘のおからを買いに往つた時は、流石剛の者も髻と眼鏡と洋服に對していさゝかきまりが悪かつた。引越し当座は、村の者も東京人珍らしいので、妻なぞ出かけると、女子供が、

「おつかあ、粕谷の仙ちゃんのお妾の居た家に越して来た東京のおかみさんが通るから、出て来て見なアよう」

と、すばらしい長文句で喚き立てゝ大騒ぎしたものだ。

東京客が沢山来た。新聞雑誌の記者がよく田園生活の種取りに来た。遠足半分の学生も来た。演説依頼の紳士も来た。労働最中に洋服でも着た立派な東京紳士が来ると、彼は頗得意であつた。村人の居合わす処で其紳士が丁寧あいさつに挨拶あいさつでもすると、彼はます／＼得意であつた。彼は好んで斯様な都の客にブツキラ棒の剣突けんつを喰くわした。芝居しばい気も銜げん気も彼には沢山にあつた。華美はでの中に華美を得せ為ぬ彼は渋い中に華美をやつた。彼は自己の為に田園生活をやって居るのか、抑もまた人の為に田園生活の芝居をやつて居るのか、分からぬ日があつた。小さな草屋のぬれ縁えんに立つて、田圃たんぼを見渡す時、彼は本郷座の舞台から棧敷や土間を見渡す様な気がして、ふツと嘖ふき出す事さえもあつた。彼は一時片時も吾を忘れ得なかつた。趣味から道楽から百姓をする彼は、自己の天職が見ることに感ずる事と而して其れを報告するにあることを須臾しゆゆも忘れ得なかつた。彼の家から西へ四里、府中町へ買つた地所と家作の登記とうきに往つた帰途、同伴の石山氏いしやんが彼を誘さそうて調布町のもと耶蘇教信者の家に寄つた。爺さんが出て来て種々雑談の末、石山氏いしやんが彼を紹介しょうかいして今度村の者になつたと云うたら、爺さん熟々つくつく彼の顔を見て、田舎住居も好いが、キア如何どうして暮したもんかな、役場の書記と云つたつて滅多めったに欠員けついいんがあるじやなし、要するに村の信者の厄介者だと云う様な事を云つた。そこで彼はぐつと癪しやくに障り、斯こう見えても憚りながら文字の社会では些ちとは名を知られた男だ、其様な喰詰くいめ者と同じには見て貰うまい、と腹

の中では大に啖呵おおい たんかを切ったが、虫を殺して彼は俯うつむいて居た。家が日あたりが好いで、先の大工の妾時代から遊び場所にして居た習慣から、休日には若い者や女子供が珍らしがつてよく遊びに来た。妻が女兒の一人に其家そのうちをきいたら、小さな彼女は胸を突出し傲然ごうぜんとして「大尽だいじんさんの家だよ」と答えた。要するに彼等は辛うじて大工の妾のふる巢にもぐり込んだ東京の喰いつめ者と多くの人に思われて居た。實際彼等は如何どんな様に威張いばつても、東京の喰詰者であつた。但字ただを書く事は重宝がられて、彼も妻もよく手紙の代筆をして、沢庵たくわんの二三本、小松菜の一二把わ礼にもらつては、真実感謝して受けたものだ。彼はしばし英語の教師たる可く要求された。妻は裁縫さいほうの師匠をやれと勧められた。自身上州じしんじょうしゅうの糸屋から此村の農家に嫁とついで来た媼おばあさんは、己が経験から一方ならず新参のデモ百姓に同情し、種子をくれたり、野菜をくれたり、桑があるから養蚕ようさんをしろの、何の角のと親切に世話をやいた。

三

東京へはよく出た。最初一年が間は、甲州街道こうしゅうかいどうに人力車があることすら知らなかつた。調布新宿間の馬車に乗るすら稀まれであつた。彼等が千歳村ちとせむらに越して間もなく、玉川電鉄は渋谷しぶやから玉川まで開通したが、彼等は其れすら利用することが稀であつ

た。田舎者は田舎者らしく徒歩主義を執らねばならぬと考えた。彼も妻も低い下駄わらじ、ある時は高足駄たかあしだをはいて三里の路を往復した。しば／＼眺かけて握飯食い／＼出かけ、ブラ提灯たよを便りに夜晩く帰ったりした。丸の内三菱が原で、大きな煉瓦の建物を前に、草原くさはらに足投げ出して、悠々と握飯食った時、彼は實際好い気もちであつた。彼は好んで田舎を東京にひけらかした。何時いつも着のみの着のまゝで東京に出た。一貫目余の筈たけのこを二本担になつて往ったり、よく野茨の花や、白いエゴの花、野菊や花薄はなすすきを道々折つては、親類へのみやげにした。親類の女子供も、稀に遊びに来ては甘藷いもを洗つたり、外竈そとづかいを焚いたいて見たり、実地の飯事を面白がつたが、然し東京の玄関げんかんから下駄ばきで尻からげ、やつとこさに荷物脊負せおうて立出る田舎の叔父の姿を見送つては、都の子女みよこしじよとして至つて平民的な彼等も流石はすに羞かしそうな笑止しょうしな顔をした。彼は田舎を都にひけらかすと共に、東京を田舎にひけらかす前に先ず田舎を田舎にひけらかした。彼は一切の角つのを隠して、周囲に同化す可つとく努めた。彼はあらゆる村の集会しゅうかいに出た。諸君が廉酒やすざけを飲む時、彼は肴さかなの沢庵をつまんだ。葬式に出ては、「諸行無常」の旗持をした。月番つきばんになつては、慰兵会費を一錢ずつ集めて廻つて、自身役場に持参じさんした。村の耶穌教会にも日曜毎に参詣して、彼が村入して程なく招まねかれて来た耳の遠い牧師の説教を聴いた。荷車を借りて甲州街道に竹買けんつくいに行き、椎草こしら△口を拵こしらえると云つては屋根屋の手伝をしたりした。都の客に剣突喫けんつくわすことは

ある共、田舎の客に相手にならぬことはなかった。誰にでもヒョコ／＼頭を下げ、いざとなれば尻しり軽がるに走り廻った。牛にひかれた妻も、外竈そとへつの前に炭俵を敷いて座りながら、かき集めた落葉で麦をたき／＼読書をしたりして「大分話せる」と良人にほめられた。

玉川に遠いのが毎いづも繰り返えされる失望であつたが、井水が清すんだのでいさゝか慰めた。農家は毎夜風呂を立てる。彼等も成る可く立てた。最初寒い内は土間に立てた。水をかい込むのが面倒で、一週間も沸わかしては入り沸かしては入りした。五日目位からは銭湯の仕舞湯以上に臭くなり、風呂の底がぬる／＼になつた。それでも入らぬよりましと笑つて、我慢がまんして入つた。夏になつてから外で立てた。井も近くなつたので、水は日毎に新にした。青天井あおてんじようの下の風呂は全く爽せいせい々として好い。「行水ぎようすいの捨て処なし虫の声」虫の音おに囲まれて、月を見ながら悠々と風呂に浸る時、彼等は田園生活を祝した。時々雨が降り出すと、傘をさして入つたり、海水帽をかぶつて入つたりした。夏休なつやすみに逗留とゆうりゅうに来て居る娘なども、キャツ／＼笑い興きようじて傘風呂に入つた。

彼等が東京から越して来た時、妻はまだ六七寸、雲雀の歌も洩りがちで、赤裸な雑木林の梢こずえから真白な富士を見て居た武蔵野は、裸から若葉、若葉から青葉、青葉から五彩美しい秋の錦となり、移り変る自然の面影は、其日々と其月ととの趣を、初めて落着いて田舎に住む彼等の眼の前に巻物の如くのべて見せた。彼等は周圍の自然と人々と次第に親しみつゝ、一方には近づく冬を氣構えて、取りあえず能うだけの防寒設備をはじめた。東と北に一間の下屋げやをかけて、物置、女中部屋、薪小屋、食堂用の板敷とし、外に小さな浴室よくしつを建て、井筒も栗の木の四角な井桁いげたに更かえることにした。畑も一反四畝程買いたした。觀賞樹木も家不相応に植え込んだ。夏から秋の暮にかけて、間歇的だが、小婢こおんなも来た。十月の末、八十六の父と七十九の母とが不肖児の田舎住居を見に来た時、其前日夫妻で唾の少年を相手に立てた皮つきのまゝの栗の木の門柱は、心ばかりの歡迎門として父母を迎えた。而して夕、キは出来て居なかつたが、丁度彼の誕生日の十月二十五日に浴室の使用初つかいぞめをして、「日々新」と父が其板壁そのいたかべに書いてくれた。

斯くて千歳村の一年は、馬車馬の走る様ように、さつさと過ぎた。今更の様だが、愉快は努力に、生命は希望にある。幸福は心の貧しきにある。感謝は物の乏しきにある。例令此創業たとえこのそうぎようの一年が、稚氣乃至多少の銜氣げんきを帯びた浅瀬の波の深い意味もない空躁ぎの一年であつたとするも、彼はなお彼を此生活に導いた大能の手を感謝せず

には居られぬ。

彼は生年四十にして初めて大地に脚を立てゝ人間の生活をなし始めたのである。

草葉のささやき

二百円

檜かしの実が一つぽりと落ちた。其幽かすかな響こが消えぬうちに、突つと入いつて縁先えりさきに立つた者がある。小鼻こばなに疵痕きずあとの白く光あつた三十未満みまんの男。駒下駄こまげたに縞物しまものづくめの小商人こあきんどと云う服装なり。眉まゆから眼めにかけて、夕立ゆうだちの空そらの様な真闇まつくらい顔かほをして居る。

「私わたしは是非一つ聞いていたゞきたい事があるンで」

と座ざに着きくなり息いきをはずませて云いつた。

「私わたしは妻かみに不幸ふこうな者ものでして……斯こ申もう上げると最早も御分ごぶんかりになりましようが」

最初は途切とぎれゝに、あとは次第しだいに調子てうしづいて、盈みちた心を傾かたくる様に彼は熱心ねっしんに話はなした。

彼は埼玉さいたまの者、養子養子であつた。繭商法まゆあひに失敗しぱいして、養家の身代みしろを殆ほとんど耗すつてしまひ、其恢復しかうふくの爲ため朝鮮から安東県あんとうけんに渡わつて、材木ざいぼくをやつた。こゝで妻子しよしを呼び迎むかへて、暫暮しばらくらして居たが、思おもわしい事もないので、大連だいにんに移うつつた。日露戦争にろせんそうの翌年あつねの秋である。大連だいにんに来て好このい仕事しごともなく、満人まんじん臭くさい裏町うらまちにころがつて居る内に、子供

を亡くしてしまった。

「可愛いやつでした。五歳でした、女児おんなのこでしたがね、其れはよく私になずいて居ゐました。国に居た頃でも、私が外から帰つて来る、母や妻かみは無愛想あなでも、女児やうが阿爺とうさん、阿爺と歓迎して、帽子ぼうしをしまつたり、其れはよくするのです。私も全く女児を亡くしてがっかりしてしまいました。病氣は急性肺炎でしたがね、医者に駈けつけ頼むと、来ると云いながら到頭来ません。其内息を引きとつてしまつたんです。医者は耶蘇教信者だそうですが、私が貧乏者なんだから、それで其様な事ことをしたものでしょう。尤も医者もあとで吾子を亡くして、自分が曾かつて斯々の事をした、それで斯様な罰を受けたと懺悔ざんげしたそうですね」

彼は暫く眼をつぶつて居た。

「それから？」

「それから何時まで遊んでも居られませんか、夫婦である会社——左様、大連で一と云つて二と下らぬ大きな会社と云えば大概御存じでしょう、其会社のまあ大將ですね、其大將の家うちに奉公に住み込みました。何しろ大連で一と云つて二と下らぬ会社なものですから、生活ぜいたくなンかそりや贅沢なモンです。召使も私共夫婦の外に五六人も居ました。奥さんは好い方で、私共によく眼をかけてくれました。其内奥さんは何か用事で一寸内地へ歸られました。奥さんが内地へ歸られてから、二週間程

経つと、如何も妻の容子が變つて来ました。——妻ですか、何、美人なモンですか、些ちつとも好くはないのです」と彼は吐き出す様に云つた。

「妻の容子がドウも變になりました。私も氣をつけて見て居ると、腑ふに落ちぬ事がいくらもあるのです。主人が馬車で歸つて来ます。二階で呼鈴が鳴ると、妻が白いエプロンをかけて、麦酒びいるを盆にのせて持て行くのです。私は階段下に居ます。妻が傍眼わきめに一寸私を見て、ずうと二階に上つて行く。一時間も二時間も下りて来ぬことがあります。私は耳をすまして二階の物音を聞こうとしたり、窃そつと主人の書齋の扉どあの外に拔足ぬきあししてじいツと聴いたり、鍵の穴からも覗のぞいて見ました。が、厚い厚い扉です。中は寂然ひっそりして何を為して居るか分かりません。私は実に——」

彼は泣き声になつた。一つに寄よつた真黒い彼の眉はビリ／＼動いた。唇くちびるは顫ふるえた。「妻の眼色めいろを読もうとしても、主人の貌色かおいろに氣をつけても、唯ただ疑念ぎねんばかりで証拠を押えることが出来ません。斯こん様な処に奉公するじやないと幾度思つたか知れません。また其様妻そらうに云つたことも一度や二度じゃありません。けれども妻は其度に腹を立てます。斯様にお世話になりながら奥様のお留守にお暇をいたゞくなんかわたしには出来ない、其様に出たければあなた一人で勝手に何処へでもお出いでなさい、何処どこぞへ仕事を探がしに御出おいでなさい、と突慥つげんどん貪に云うんです。最早もうちう私も堪忍出来なくなりました」

「そこである日妻を無理に大連の郊外に連れ出しました。誰も居ない川原です。種々と妻を詰問しましたが、如何しても実を吐きません。其れから懷中して居た短刀をぬいて、白状するなら宥す、嘘を吐くなら命を貰うからそう思え、とかゝりますと、妻は血相を変えて、全く主人に無理されて一度済まぬ事をした、と云います。嘘を吐け、一度二度じゃあるまい、と畳みかけて責めつけると、到頭悉皆白状してしまいました」

彼はホウツと長い息をついた。

「それから私は主人に詰問の手紙を書きました。すると翌日主人が私を書斎に呼びまして『ドウも実に済まぬ事をした。主人の俺が斯う手についてあやまるから、何卒内済にしてくれ。其かわり君の将来は必俺が面倒を見る。屹度成功さす。これで一先ず内地に帰ってくれ』と云つて、二百円、左様、手の切れる様な十円札でした、二百円呉れました」

「君は其二百円を貰つたんだね、何故其短刀で其男を刺殺さなかつた？」
彼は俯いた。

「それから？」

「それから一旦内地に帰つて、また大連に行きました。最早主人は私達に取合いません。面会もしてくれません」

「而して今は？」そろう

「今は東京の場末に、小さな小間物屋を出して居ます」ばすえ

「細君は？」さいくん

「妻は一緒に居るのです」

話は暫く絶えた。

「一緒に居ますが、面白くなくて、胸がむしゃくしゃして仕様がなものです」むね
から、それで今日は——」こんにち

＊

忽然と風の吹く様に來た男は、それつきり影も見せぬ。こつぜん

百草園

田の畔くろに緒あかい百合ゆりめいた萱草かんそうの花が咲く頃の事。ある日太田君がぶらりと東京から遊びに来た。暫く話して、百草園もくさえんにでも往つて見ようか、と主人は云い出した。百草園は府中から遠くないと聞いて居る。府中まではざつと四里、これは熟路じゆくろである。時計を見れば十一時、ちと晩おそいかも知れぬが、然し夏の日永の折だ、行こう行こうと云つて、早昼飯を食つて出かけた。

大麦小麦はとくに刈かられて、畑も田も森も林も何処を見ても緑みどりならぬ処もない。其緑ひとすじの中を一条白く西へ西へ山へ山へと這はつて行く甲州街道を、二人は話しながらさつさと歩いた。太田君は紺紵こんがすりの単衣、足駄あだばきで古い洋傘こうもりを手挟たばさんで居る。主人の彼は例の力カフス無しの古洋服の一張羅いっちようらに小豆革の帯して手拭を腰にぶらさげ、麦藁の海水帽をかぶり、素足すあしに蓑なえくたれた茶の運動靴をはいて居る。二人はさつさと歩いた。太田君は以前社会主義者として、主義宣伝しゆぎせんてんの為、平民社の出版物を積んだ小車をひいて日本全国を漫遊しただけあつて、中々健脚である。主人は歩くことは好きだが、足は云う甲斐もなく弱い。一日に十里も歩けば、二日目は骨である。二人は大膽おおまたに歩いた。蒸暑むしあつい日で、二人はしばし額の汗を拭ぬぐうた。

府中に来た。千年の銀杏、櫻、杉など鬱々蒼々と茂った大國魂神社の横手から南に入つて、青田の中の石ころ路を半里あまり行つて、玉川の磧に出た。此辺を分倍河原と云つて、新田義貞大に鎌倉北条勢を破つた古戦場である。玉川の渡を渡つて、また十丁ばかり、長堤を築いた様に川と共に南東走する低い連山の中の唯有る小山を攀じて百草園に來た。もと松蓮寺の寺跡で、今は横浜の某氏が別墅になつて居る。境内に草葺の茶屋があつて、料理宿泊も出来る。茶屋からまた一段堆丘を上つて、大樹に日をよけた恰好の觀望台がある。二人は其処の素床に薄縁を敷いてもらつて、汗を拭き、茶をのみ、菓子を食べながら眼を騁せた。

東京近在で展望無双と云わるゝも譌ではなかつた。生憎野末の空少し薄曇りして、筑波も野州上州の山も近い秩父の山も東京の影も今日は見えぬが、つい足下を北西から南東へ青白く流るゝ玉川の流域から「夕立の空より広き」と云う武蔵野の平原をかけて自然を表わす濃淡の緑色と、磧と人の手のあとの道路や家屋を示す些の灰色とをもて描かれた大きな鳥瞰画は、手に取る様に二人が眼下に展げられた。「好い喃」二人はかわるゝ景を讚めた。

やゝ眺めて居る内に、緑の武蔵野がすうと翳つた。時計をもたぬ二人は最早暮るゝのかと思つた。蒸暑かつた日は何時しか忘れ、水気を含んだ風が冷々と顔を撫でて來た。唯見ると、玉川の上流、青梅あたりの空に洋墨色の雲がむらゝと立つて

居る。

「夕立が来るかも知れん」

「然、降るかも知れんですな」

二人は茶菓の代を置いて、山を下りた。太田君はこれから日野の停車場に出て、汽車で帰京すると云う。日野までは一里強である。山の下で二人は手を分った。

「それじゃ」

「じゃ又」

人家の珊瑚木の生籬を廻って太田君の後姿は消えた。残る一人は淋しい心になつて、西北の空を横眼に見上げつゝ渡の方へ歩いて行つた。川上の空に湧いて見えた黒雲は、玉川の水を趁うて南東に流れて来た。彼の一足毎に空はヨリ黯くなつた。彼は足を早めた。然し彼の足より雲の脚は尚早かつた。一の宮の渡を渡つて分倍河原に来た頃は、空は真黒になつて、北の方で殷々雷が攻太鼓をうち出した。農家はせつせとほし麦を取り入れて居る。府中の方から来る肥料車も、あと押しをつけて、曳々声して家の方へ急いで居る。

「太田君は何の辺まで往つたろう？」

彼は一瞬時斯く思つた。而して今にも泣き出しそうな四圍の中を、黙つて急いだ。府中へ来ると、煤色に暮れた。時間よりも寧空の黯い為に町は最早火を点して居

る。早や一粒二粒夕立の先駆が落ちて来た。此処で夕立をやり過すかな、彼は一寸斯く思うたが、こゝに何時霽れるとも知らぬ雨宿りをすべく彼の心はとく四里を隔つる家に急いで居た。彼は一の店に寄つて糸経を買うて被つた。腰に下げた手拭をとつて、海水帽の上から確と頬被をした。而して最早大分硬ばつて来た脛を踏張つて、急速に歩み出した。

府中の町を出はなれたかと思うと、追かけて来た黒雲が彼の頭上で破裂した。突然に天の水槽の底がぬけたかとはかり、雨とは云わず瀑布落しに撞々と落ちて来た。紫色の光がぱつと射す。直ぐ頭上で、火薬庫が爆発した様に劇しい雷が鳴つた。彼はぐつと息が詰つた。本能的に彼は奔り出したが、所詮此雷雨の重囲を脱けることは出来ぬと観念して、歩調をゆるめた。此あたりは、宿と村との中間で、雷雨を避くべき一軒の人家もない。人通りも絶え果てた。彼は唯一人であつた。雨は少しおだれるかと思うと、また思ひ出した様にざあざあドウドウと漲り落ちた。彼の頬被りした海水帽から四方に小さな瀑が落ちた。糸経を被つた甲斐もなく総身濡れ浸りポケットにも靴にも一ぱい水が溜つた。彼は水中を泳ぐ様に歩いた。紫色や桃色の電がぱつくと一しきり闇に降る細引の様な太い雨を見せて光つた。ごろ／＼／＼雷がやゝ遠のいたかと思うと、意地悪く舞い戻つて、夥しい爆竹を一度に点火した様に、ぱち／＼／＼彼の頭上に碎けた。長大な革の鞭を彼を目かけて打下ろす音が

とも受取られた。其度そのたびに彼は思わず立竦たちすくんだ。如何どうしても落ちずには済すまぬ雷らいの鳴り様である。何時落ちるかも知れぬと最初思つた彼は、屹度きつと落ちると覚期かくごせねばならなかつた。屹度彼の頭上に落ちると覚期せねばならなかつた。此街道このかいどうの此部分で、今動いて居る生類しやうるいは彼一人である。雷が生いき者に落ちるならば即ち彼の上に落ちなければならぬ。雷にうたれて死ぬ運命しの人間が、地の此部分にあるなら、其は取りも直なおさず彼でなくてはならぬ。彼は是非なく死を覚期した。彼は生命が惜しくなつた。今此処から三里隔へだてゝ居る家の妻の顔が歴々と彼の眼に見えた。彼は電光の如く自己じこの生涯を省みた。其れは美うつくしくない半生であつた。妻に対する負債ふさいの数々も、緋もじの文字をもて書いた様に頭れた。彼は此まゝ雷にうたれて死んだあとに残る者の運命を考えた。「一人はとられ一人は残さるべし」と云う聖書の恐ろしい宣告が彼の頭あたまに閃ひらめいた。彼は反抗した。然し其反抗の無益なるを知つた。雷はますゝ劇はげしく鳴つた。最早もうち今度は落ちた、と彼は毎々たびたび観念した。而して彼の心は却て落ついた。彼の心は一種自己に對し、妻に對し、一切の生類しやうるいに對する憐愍あわれに満された。彼の眼鏡は雨の故ならずして曇くもつた。斯くして夕暮の街道二里を、彼は雷と共に歩いた。

調布の町に入る頃は、雷は彼の頭上を過ぎて、東京の方に鳴つた。雨も小降こふりになり、やがて止んだ。暮れたと思つた日は、生白なましろい夕明ゆうあかりになつた。調布の町では、道の真中に五六人立つて何かガヤ／＼云いながら地を見て居る。雷が落ちたあとで

あろう、煙の様なものがまだ地から立つて居る。戸口に立ったかみさんが、向うのかみさん呼びかけ、

「洗濯物取りに^で出りやあの雷だね、わたしや薪小屋^{まきこや}に逃げ込んだきり、出ようくと思つたけど、如何しても出られなかつたよ」

と云つて居る。

雷雨が過ぎて、最早大丈夫^{だいじょうぶ}と思うと、彼は急に劇しい疲労を覚えた。濡れた洋服の冷たさと重たさが身にこたえる。足が痛む。腹はすく。彼は重たいく足を曳きずつて、一足ずつ歩いた。滝坂近くなる頃は、永いく夏の日もとつぷり暮れて了うた。雨は止んだが、東北の空ではまだ時々ぱつくと稲妻が火花を散らして居る。家へ六七丁の辺^{へん}まで辿^{たど}り着くと、白いものが立つて居る。それは妻^{つま}であつた。家をあげ、犬を連れて、迎に出て居るのであつた。あまり晩い^{おそ}ので屹度先刻の雷におうたれなすつたと思ひました、と云う。

*

翌々日の新聞は、彼が其日行つた玉川^{たまがわ}の少し下流で、雷が小舟に落ち、舳^{へさき}に居た男はうたれて即死、而して舳^{とも}に居た男は無事だった、と云う事を報じた。

「二人はとられ、一人は残さるべし」の句がまた彼の頭に浮んだ。

月見草

村の人になつた年、玉川の磧かわらからぬいて来た一本の月見草が、今はぬいて捨てて程に殖ふえた。此頃は十数株、少くも七八十輪宵毎よくじとに咲いて、黄昏たそがれの庭に月が落ちたかと疑われる。

月見草は人好きのする花では無い。殊に日間ひるまは昨夜の花が赭あかく凋萎しおたれて、如何にも思切りわるくだらりと幹みきに付いた態げまは、見られたものではない。然し墨染すみぞめの夕に咲いて、尼あまの様に冷たく澄んだ色の黄、其香そのかも幽に冷たくて、夏の夕にふさわしい。花卉はなびらの一つずつほぐれてぱつと開く音も聴くに面白い。独物思ひとりものうそゞろあるきの黄昏に、唯一つ黙つて咲いて居る此花と、はからず眼を見合まひあわす時、誰か心跳こころおどらずに居られようぞ。月見草も亦心浅からぬ花である。

八九歳の弱い男の子が、ある城下の郊外うちの家から、川添いの砂道を小一里もある小学校に通う。途中、一方が古来こらいの死刑場、一方が墓地の其中間ちゆうかんを通らねばならぬ処があつた。死刑場には、不用になつた黒く塗つた絞台や、今も乞食こいしが住む非人小屋があつて、夕方は覺束ない火が小屋にともれ、一方の古墳新墳累々と立並ぶ墓場の砂地には、初夏の頃から沢山月見草が咲いた。日間ひるま通る時、彼は毎に赭つねくうな垂

れた昨宵^{ゆうべ}の花の死骸を見た。学校の帰りが晚くなると、彼は薄暗い墓場の石塔や土饅頭の蔭から黄色い眼をあいて彼を覗^{のぞ}く花を見た。斯^かくて月見草は、彼にとつて早く死の花であつた。

其墓場の一端には、彼が甥^{おい}の墓もあつた。甥と云つても一つ違い、五つ六つの叔父^{おじ}甥は常に共に遊んだ。ある時叔父は筆の軸^{じく}を甥に与えて、犬の如く唧^{くわ}えて振れと命じた。従順な子は二度三度云わるゝまゝに振つた。叔父はまた振れと迫つた。甥はもういやだと頭を掉^ふつた。憎さげに甥を睨^{にら}んだ叔父は、其筆の軸で甥の頬^ほをぐつと突いた。甥は声を立てゝ泣いた。其甥は腹膜炎にかゝつて、明^あくる年の正月元日病院で死んだ。屠蘇^{とそ}を祝うて居る席に死のたよりが届^{とど}いた。叔父の彼は異な気もちになつた。彼ははじめてかすかな Remorse を感じた。

墓地は一方大川に面^{めん}し、一方は其大川の分流に接して居た。甥は其分流近く葬^{ほうむ}られた。甥が死んで二三年、小学校に通う様になつた叔父は、ある夏の日ざかりに、二三の友達と其小川に泳いだ。自分の甥の墓があると誇^がり貌に告げて、彼は友達を引張つて、甥の墓に詣^まつた。而して其小さな墓石の前に、真裸の友達とかわるゝく^{ひざまず}跪^{しお}いて、凋^{しお}れた月見草の花を折つて、墓前の砂に插^さした。

彼は今月見草の花に幼き昔を夢の様に見て居る。

腫物

一

人声が賑やかなので、往つて見ると、久さんの家は何時の間にか解き崩されて、煤けた梁や虫喰つた柱、黒光りする大黒柱、屋根裏の煤竹、それ〴〵類を分つて積まれてある。近所近在の人々が大勢寄つてたかつて居る。件の古家を買つた人が、崩す其まゝ古材木を競売するので、其れを買いがてら見がてら寄り集うて居るのである。一方では、まだ崩し残りの壁など崩して居る。時々壁土が撞と落ちて、ぱつと汚ない煙をあげる。汚ないながらも可なり大きかった家が取り崩され、庭木や境の檜木は売られて切られたり掘られたりして、其処らじゆう明るくガランとして居る。家族はと見れば、三坪程の木小屋に古畳を敷いて、眼の少し下つて肥え脂ぎつたおかみは、例の如くだらしく胸を開けはだけ、おはぐろの剥げた歯を桃色の齧まで見せて、買主に出すとしてせつせと茶を沸かして居る。頬冠りした主人の久さんは、例の厚い下唇を突出したまゝ、吾不関焉と云う顔をして、コト〴〵藁を打つて居る。婆さんや唾の巳代吉は本家へ帰つたとか。末の子の久三は学校へでも往つたのであ

ろ、姿は見えぬ。

一切の人と物との上に泣く様な糠雨ぬかあめが落ちて居る。

あゝ此家このうちも到頭潰れるのだ。

二

今は二十何年の昔、村の口きゝ石山某に、女一人子一人あった。弟は一人前なかつたので婿養子をしたが、婿むこと舅の折合が悪い為に、老夫婦は息子としよりを連れて新家に出た。今解いまとき崩されて片々ばらばらに売られつゝある家が即ち其れなのである。己が娘に己が貰った婿ながら、気が合わぬとなれば仇敵より憎く、老夫婦は家財道具万端好いものは皆引たくる様にして持つて出た。よく実る柿の木まで掘つて持つて往つた。

痴おろかな息子も年頃になつたので、調布在から出もどりの女を嫁にもろうてやつた。名をお広ひろと云つて某の宮様にお乳をあげたこともある女であつた。婿入むこいりの時、肝腎かんじんの婿さんが厚い下唇を突出したまま戸口もとにポカンと立つて居るので、皆ドツと笑い出した。久太郎が彼の名であつた。

久さんに一人の義弟があつた。久さんが生れて間もなく、村の櫟林くぬぎばやしに棄児すてこがあつた。農村には人手が宝たからである。石山の爺さんが右の棄児を引受けて育てた。棄児は

大きくなつて、名を稲次郎いなじろうと云つた。彼の養父、久さんの実父は、一人前に足りぬ可愛の息子むすこが行く／＼の力にもなれと、稲次郎の為に新家の近くに小さな家を建て彼にも妻をもたした。

ある年の正月、石山の爺さんは年始に行くの家うちを出たきり行方不明になつた。探がし探がした結果、彼は吉祥寺、境間の鉄道線路の土をとつた穴の中に真裸になつて死んで居た。彼は酒が好きだつた。年始の酒に酔つて穴の中に倒れ凍死こえじんだのを物取りが来て剥はいだか、それとも追剥おいはぎが殺して着物を剥はいだか、死骸しがいは何も告げなかつた。彼は新家の直ぐ西隣にある墓地に葬られた。

主翁おやしが死んで、石山の新家は媳よめの天下てんかになつた。誰も久さんの家うちとは云わず、宮前のお広さんの家と云つた。宮前は八幡前を謂うたのである。外交も内政も彼女の手と口とでやってのけた。彼女は相応そうおうに久さんを可愛かあいがつて面倒を見てやつたが、無論亭主とは思わなかつた。一人前に足らぬ久さんを亭主にもつたおかみは、義弟ぎてい稲次郎の子を二人まで生うんだ。其子は兄が唾で弟が盲であつた。罪の結果は恐ろしいものです、と久さんの義兄はある人に語つた。其内、稲次郎は此辺で所謂即座師そくざし、繭買まかいをして失敗し、田舎の失敗者が皆する様に東京に流れて往つて、王子で首を縊くつて死んだ。其妻は子供を連れて再縁し、其住んだ家は隣字の大工が妾の住家となつた。私も棺桶をかつぎに往きましたでサ、王子まで、と久さん自身稲次郎の事を問

うたある人に語った。

三

背後は雑木林、前は田圃^{たんぼ}、西隣は墓地、東隣は若い頃彼自身遊んだ好人^{たつじい}の辰爺^{あつらえむ}さんの家、それから少し離れて居るので、云わば一つ家の石山の新家は内証^{ないしょうじ}事には詭向^{あつらえむ}きの場所だった。石山の爺さんが死に、稻次郎も死んだあと、久さんのおかみは更に女一人子一人生んだ。啞と旨は稻次郎の胤^{たね}と分つたが、彼二人は久さんなのである、とある人が云うたら、否、否、あれは何某^{なにがし}の子でさ、とある村人は久さんで無い外の男の名を云つて苦笑^{にがわらい}した。Husband-in-Lawの子で無い子は、次第^ふに殖えた。殖えるものは、父を異にした子ばかりであつた。新家に出た時石山の老夫婦が持て出た田畑財産は、段々に減つて往つた。本家から持ち出したものは、少しずつ本家へ還^{かえ}つて往つた。新家は博徒破落戸^{ならずもの}の遊び所になつた。博徒の親分は、人目を忍ぶに倔強^わな此家を己^{ふだん}が不断^{ふだん}の住家にした。眼のぎろりとした、胡麻塩髯^{ごましおひげ}の短い、二度も監獄の飯を食つた、丈の高い六十爺^{じじい}の彼は、村内に己が家はありながら婿夫婦^{むこふうふ}を其家に住まして、自身は久さんの家を隠れ家にした。昼^{ひる}は炉辺^{ろべた}の主の座にすわり、夜は久さんのおかみと奥の間に枕^{なら}を並べた。久さんのおかみは亭主の久さんに沢庵^{たくわん}で

早飯食わして、僕ぼくかなんぞの様に仕事に追い立て、あとでゆるく鰹節かつぶしかいて甘い汁じゅうをこさえて、九時頃に起き出て来る親分に吸わせた。親分はまだ其上に養生うまの為と云つて牛乳など飲んだ。

「俺おらア嬢かかとられちやつた」と久さんは人にこぼしながら、無抵抗主義を執つて僕の如く追い使われた。戸籍面の彼の子供は皆彼を馬鹿にした。久さんのおかみは「良人やどが正直しょうじきだから、良人が正直だから」と流石に馬鹿と云いかねて正直と云つた。東隣のおとなしい媼おばあさんも「久さん、お広さんは今何してるだンベ？」などからかった。久さんは怪訝けげんな眼を上げて、「え？」と頓狂とんきやうな声を出す。「何さ、今しがたお広さんがね、甜瓜まくわを食つてたて事よ、ふゝゝゝ」と媼さんは笑つた。久さんの家には、久さんの老母があつた。然し婆おばあさんは媳らんせきの乱行家の乱脈らんみやくに対して手も口も出すことが出来なかつた。若い時大勢の奉公人を使つておかみさんと立てられた彼女は、八十近くなつて眼液めしるたらして竈へつがいの下を焚たいたり、海老えびの様な腰をしてホウ／＼云いながら庭を掃はいたり、杖にすがつて媳よめの命のまに／＼使つかいあるきをしたり、其それでも其無能そのむのうの子を見すて、本家に帰ることを得え為なかつた。それに婆おばあさんは亡くなつた爺さん同様酒を好んだ。本家の婿は耶穌教信者で、一切酒を入れなかつた。久さんのおかみは時々姑に酒を飲ました。白髪頭しらがたまの婆さんは、顔を真赤にして居ることがあつた。彼女は時々吾儘を云う四十男の久さんを、七つ八つの坊ちゃんかなんどの様に叱つ

た。尻切草履突かけて竹杖にすがって行く婆さんの背から、鍬をかついだ四十男の久さんが、婆さんの白髪を引張ったりイタズラをして甘えた。酒でも飲んだ時は、媳に負け通しの婆さんも昔の権式を出して、人が久さんを雇いに往ったりするのが氣にくわぬとなると、「お広、断わるがい」と啖呵を切った。

四

死んだ棄児の稲次郎が古巢に、大工の妾と入れ代りに東京から書を読む夫婦の者が越して来た。地面は久さんの義兄のであったが、久さんの家で小作をやって居た。東京から買主が越して来ぬ内に、久さんのおかみは大急ぎで裏の杉林の下枝を落したり、櫟林の落葉を掃いて持つて行ったりした。買主が入り込んでのちも、其栗の木は自分が植えたの、其葦や野菜菊は内で作ったの、其炉縁は自分ののだの、と物毎に争うた。稲次郎の記憶が残って居る此屋敷を人手に渡すを彼女は惜んだのであった。地面は買主のでも、作つてある麦はまだおかみの麦であつた。地面の主は、麦の一部を買い取るべく余儀なくされた。おかみは義兄と其値を争うた。買主は戲談に「無代でもいいゝさ」と云うた。おかみはムキになつて「あなたも耶蘇教信者じゃありませんか。信者が其様な事を云うてようござんすか」とやり込めた。彼女に恐

ろしいものは無かった。ある時義兄が其素行について少し云々したら、泥足でぬれ縁に腰かけて居た彼女は屹と向き直り、あべこべに義兄に喰つてかゝり、老人と正直者を任せて置きながら、病人があつても本家として見もかえらぬの、慾張つてばかり居るのと、いきり立つた。彼女は人毎に本家の悪口を云つて同情を獲ようとした。「本家の兄が、本家の兄が」が彼女の口癖であつた。彼女は本家の兄を其魔力の下に致し得ぬを残念に思つた。相手かまわず問はず語りの勢込んでまくしかけ、「如何に兄が本が読めるからつて、村会議員だからつて、信者だつて、理に二つは無いからね、わたしは云つてやりましたのサ」と口癖の様に云つた。人が話をすれば、「呟、呟、ふん、ふん」と鼻を鳴らして聞いた。彼女の義兄も村に人望ある方ではなかつたが、彼女も村では正札附の莫連者で、堅い婦人達は相手にしなかつた。村に武太さんと云う終始ニヤ／＼笑つて居る男がある。かみさんは藪輓で、気が少し變である。パイ／＼声で言う事が、余程馴れた者でなければ聞きとれぬ。彼女は誰に向うても亡くした幼女の事ばかり云う。「子供ははア背に負つとる事です。背からおろしといたばかりで、女もなくなつただア」と云いかけて、斜視の眼から涙をこぼして、さめ／＼泣き入るが癖である。また誰に向つても、「萩原の武太郎は、五宿へ往つて女郎買ばかりするやくざ者で」と其亭主の事を訴える。武太さんは村で折紙つきのヤクザ者である。武太さんに同情する者は、久さんのおかみばかりであ

る。「彼様な女房持つてゐるんだもの」と、武太さんを人が悪く言う毎に武太さんを弁護する。然し武太さんの同情者が乏しい様に、久さんのおかみもあり同情者を有たなかった。唯村の天理教信者のおかず嬭さんばかりは、久さんのおかみを済度す可く彼女に近しくした。

稲次郎のふる巢に入り込んだ新村入は、隣だけに此莫連女の世話になることが多かった。彼女も、久さんも、唾の子も、最初はよく小使銭取りに農事の手伝に來た。此方からも麦扱きを借りたり、餛飩粉を挽いてもらったり、豌豆や里芋を売つてもらったりした。おかみも小金を借りに來たり張板を借りに來たりした。其子供もよく遊びに來た。蔭でおかみも機嫌次第でさまゝ悪口を云うたが、顔を合わすと如才なく親切な口をきいた。彼女の家に集う博徒の若者が、夏の夜歸りによく新村入の畑に踏み込んで水瓜を分割つて食つたりした。新村入は用があつて久さんの家に往く毎に胸を悪くして歸つた。障子は破れたきり張ろうとはせず、畳は腸が出たまゝ、壁は崩れたまゝ、煤と埃とあらゆる不潔に盈された家の内は、言語道斷の汚なさであつた。おかみはよく此中で蚕に桑をくれたり、大肌ぬぎになつて蕎麦粉を挽いたり、破れ障子の内でギツチョンと響をさせて木綿機を織つたり、大きな眼鏡をかけ縁先で檻樓を繕つたりして居た。

新村入が村に入ると直ぐ眼についた家が二つあった。一は久さんの家で、今一つは品川堀の側にある店であつた。其店には賭博をうつと云う恐い眼をした大酒呑の五十余のおかみさんと、白粉を塗つた若い女が居て、若い者がよく酒を飲んで居た。其後大酒呑のおかみさんは頓死して店は潰れ、目ざす家は久さんの家だけになった。己が住む家の歴史を知るにつけ、新村入は彼の前に問題として置かれた久さんの家を如何にす可きかと思ひ煩うた。色々の「我」が寄つて形成して居る彼家は、云わば大きな腫物である。彼は眼の前に臭い膿のだら／＼流れ出る大きな腫物を見た。然し彼は刀を下す力が無い。彼は久しく機会を待った。

ある夏の夕、彼は南向きの縁に座つて居た。彼の眼の前には蝙蝠色の夕闇が広がつて居た。其闇を見るときもなく見て居ると、闇の中から湧いた様に黒い影がすうと寄つて来た。ランプの光の射す処まで来ると、其れは久さんのおかみであつた。彼は畳の上に退り、おかみは縁に腰かけた。

「旦那様、新聞に出て居りましてすか」

と息をはずませて彼女は云つた。それは新宿で、床屋の亭主が、弟と密通した妻と弟とを剃刀で殺害した事を、彼女は何処からか聞いたのである。「余りだと思いま

す」と彼女は剃刀の刃を己が肉にうけたかの様に切ない声で云った。

聞く彼の胸はドキリとした。今だ、とある声が囁いた。彼はおかみに向うて、巳代公は如何して唾になつたか、と訊いた。おかみは、巳代が三歳までよく口をきいて居たら、ある日「おつかあ、お湯が飲みてえ」と云うたを最後の一言にして、医者にかけても薬を飲ましてでも甲斐が無く唾になつて了うた、と言つた。何の故か知つて居るか、と畳みかけて訊くと、其頃飼つた牛を不親切からつい殺してしまいました、其牛の祟りだと人が申すので、色々信心もして見ましたが、甲斐がありませんでした、と云う。巳代公ばかりじゃ無い、亥之公が盲になつたのは如何したものだ、と彼は肉迫した。而して彼はさし俯くおかみに向うて、此家の最初の主の稲次郎と密通以来今日に到るまで彼女の不屈の数々を烈しく責めた。彼女は終まで俯いて居た。それから二三日経つと、彼は屋敷下を通る頼冠の丈高い姿を認めた。其れが博徒の親分であることを知つた彼は、声をかけて無理に縁側に引張つた。満地の日光を檜の影が黒く染めぬいて、あたりには人の影もなかった。彼は親分に向つて、彼の体力、智慧、才覚、根氣、度胸、其様なものを従来私慾の為にのみ使う不埒を責め最早六十にもなつて余生幾何もない其身、改心して死花を咲かせろと勧めた。親分は其稼業の苦しい事を話し、ぎろりとした眼から涙の様なものを落して居た。

然しながら彼癌腫かのがんしゅの様な家の運命は、往く所まで往かねばならなかった。

己が生んだ子は己が処置しなければならぬので、おかみは盲の亥之吉を東京に連れて往つて按摩あんまの弟子にした。家に居る頃から、盲目ながら他の子供と足場の悪い田舎道を下駄おおいばきでかけ廻まわつた勝氣の亥之吉は、按摩の弟子になつてめき／＼上達し、追々一人前の稼おおいぎをする様になつた。おかみは行々彼をかり子にする心算であつた。それから自身によく肖にた太ふでぶて々しい容子をした小娘のお銀を、おかみは実家近くの機屋はたやに年季奉公に入れた。

二人の兄の唾みよきちの巳代吉は最早若者の数に入つた。彼は其父方の血を示しめして、口こそ利けね伶俐な器用な華美はでな職人風のイナセな若者であつた。彼は吾家に入り浸る博徒にらの親分を睨にらんだ。両手を組んでぴたりと云わして、親分とおつかあが斯様こんなだと眼色を変えて人に訴えた。親分とおかみは巳代吉を邪魔にし出した。ある時巳代公は親分の財布を盗んで銀時計を買つた。母を窃ぬすむ者の財布を盗むは何でもないと思つたのであろう。親分は是れ幸と巡查を頼んで巳代公を告訴し、巳代公を監獄に入れようとした。巳代公を入れるより彼二人を入れろ、と村の者は罵つた。巳代吉は本家から願ねがい下いさげて、監獄に入れる親分とおかみの計画は徒勞になつた。然し親分は中々

其居馴れた久さんの家の炉の座を動かうとしなかった。親分と唾の巳代吉の間はいよく、^{にらみあい}睨合の姿となつた。或日巳代吉は手頃の棒を押取つて親分に打つてかゝつた。親分も^{めんぼう}麵棒をもつて渡り合つた。然し血氣の怒に任する巳代吉の勢鋭く、親分は右の手首を^{うちお}打折られ、加之棒に出て居た釘で右手の肉をかき裂かれ、大分の痛手を負うた。隣家の婆さんが駈けつけて巳代吉を宥めなかつたら、親分は手疵に止まらなかつたかも知れぬ。繃帯して右手を頸から釣つて、左の手で不精鎌を持つて麦畑の草など親分が掻いて居るのを見たのは二月も後の事だつた。喧嘩の仲入に駈けつけた隣の婆さんは、側杖喰つて右の手を痛めた。久さんのおかみは、詫び心に婆さん宅の竈の下など焚きながら、喧嘩の折節近くに居合わせながら看過した隣村の甲乙を思うさま罵つて居た。

七

田畑は勿論宅地もとくに^{もちろんたくち}抵当に入り、一家中日傭に出たり、おかみ自身手織の木綿物を負つて売りあるいたこともあつたが、要するに石山新家の没落は眼の前に見えて来た。「お広さん、大層精が^{たいそうせい}出ますね」久さんが挽く肥車の後押して行くおかみを目かけて人が声をかけると、「天狗様の様に働くのさ」とおかみが答えたりし

たのは、昔の事になった。おかみは一切稼ぎを廃した。而して時々丸鬚に結つて小ざつぱりとした服装なをして親分と東京に往つた。家には肴屋が出入したり、乞食物貰いが来れば気前きまえを見せて素手では帰さなかつた。彼女は癌腫がんしゅの様な石山新家を内から吹き飛ばすべき使命を帯びて居るかの様に不敵ふてきであつた。

*

到頭腫物が潰れる時が来た。

おかみは独で肝煎きんせんつて、家を近在きんざいの人に、立木たちきを隣字の大工に売り、抵当に入れた宅地とちを取戻して隣の辰爺ともしやさんに売り、大酒呑のおかみのあとに品川堀の店を出して居る天理教信者の彼おかず媼さん処へ引揚げた後、一人残つた腫れぼったい臉まぶたをした末の息子を近村の人に頼み、唯一つ残つた木小屋を売り飛ばし、而して最早師匠の手を離れて独立して居る按摩あんまの亥之吉いのきちと間借りして住む可く東京へ往つて了うた。

酒好きの老母と唾の巳代吉は、家が売れる頃は最早本家へ歸つて居た。

媼かかに置去られ、家になくなられ、地面に逃げられ、置いてきぼりを喰くつて一人木小屋に踏み留まつた久さんも、是非なく其姉と義兄の世話になるべく、頼冠ほおかむりの頭をうな垂れて草履ぞうりぼとく懐手ふとこして本家に歸つた。

屋敷のあとには鋤^すきかえされて、今は陸^{おかほ}稻^ぼが緑^{あお}々^{あお}と茂^もつて居^ゐる。

わかれの杉

彼の家から裏の方へ百歩往けば、鎮守八幡である。型の通りの草葺の小宮で、田圃を見下ろして東向きに立つて居る。

月の朔には、太鼓が鳴つて人を寄せ、神官が来て祝詞を上げ、氏子の神々達が拝殿に寄つて、メチールアルコールの沢山入った神酒を聞召し、酔つて紅くなり給う。春の霽祭、秋の風祭は毎年の例である。彼が村の人になつて六年間に、此八幡で秋祭りに夜芝居が一度、昼神楽が一度あつた。入營除隊の送迎は勿論、何角の寄合事があれば、天候季節の許す限りは此処の拝殿でしたものだ。乞食が寝泊りして火の用心が悪い処から、つい昨年になつて拝殿に格子戸を立て、締りをつけた。内務省のお世話が届き過ぎて、神社合併が兎の、風致林が角のと、面倒な事だ。先頃も雑木を売払つて、あとには杉か檜苗を植えることに決し、雑木を切つたあとを望の者に開墾させ、一時豌豆や里芋を作らして置いたら、神社の林地なら早々木を植えろ、畑にすれば税を取るぞ、税を出さずに畑を作ると法律があると、其筋から脅されたので、村は遽で、総出で其部分に檜苗を植えた。

柏谷八幡はさして古くもないので、大木と云う程の大木は無い。御神木と云うの

は梢の枯れた杉の木で、此は社の背で高処だけに諸方から目標になる。鳥がよく其枯れた木末にとまる。

宮から阪の石壇を下りて石鳥居を出た処に、また一本百年あまりの杉がある。此杉の下から横長い田圃がよく見晴される。田圃を北から南へ田川が二つ流れて居る。一筋の里道が、八幡横から此大杉の下を通つて、直ぐ北へ折れ、小さな方の田川に沿うて、五六十歩往つて小さな石橋を渡り、東に折れて百歩余往つてまた大きな方の田川に架した欄干無しの石橋を渡り、やがて二つに分岐して、直な方は人家の木立の間を村に隠れ、一は人家の檜林に傍うて北に折れ、林にそい、桑畑にそい、二丁ばかり往つて、雑木山の端からまた東に折れ、北に折れて、六七丁往つて終に甲州街道に出る。此雑木山の曲り角に、一本の檜があつて、八幡杉の下からよく見える。村居六年の間、彼は色々の場合に此杉の下に立つて色々の人を送つた。彼田圃を渡り、彼雑木山の一本檜から横に折れて影の消ゆるまで目送した人も少くはなかつた。中には生別即死別となつた人も一二に止まらない。生きては居ても、再び逢うや否疑問の人も少くない。此杉は彼にとりて見送の杉、さては別れの杉である。就中彼はある風雪の日こゝで生別の死別をした若者を忘るゝことが出来ぬ。

其は小説寄生木の原著者篠原良平の小笠原善平である。明治四十一年の三月十日は、奉天決勝の三週年。彼小笠原善平が恩人乃木將軍の部下として奉天戦に負傷し

たのは、三年前の前々日であつた。三月十日は朝からちら／＼雪が降つて、寒い寂しい日であつた。突然彼小笠原は来訪した。一年前、此家の主人は彼小笠原に剣を抛つ可く熱心勧告したが、一年後の今日、彼は陸軍部内の依怙情実^{えいじ}に愛想^{あいそう}をつかし疳癪^{かんしゃく}を起して休職願を出し、北海道から出て来たので、今後は外国語学校にでも入つて露語^{ろご}をやるうと云つて居た。陸軍を去る為に恩人の不興^{ふきよう}を買い、恋人との間も絶望の姿となつて居ると云うことであつた。雪は終日降り、夜すがら降つた。主は平和問題、信仰問題等につき、彼小笠原と反覆討論した。而して共に六畳^{むくろ}に枕を並べて寝たのは、夜の十一時過ぎであつた。

明くる日、午前十時頃彼は辞し去つた。まだ綿^{よう}の様な雪がぼつたり／＼降つて居る。此辺では珍らしい雪で、一尺の上積^{うえつち}つた。彼小笠原は外套の頭巾^{ずきん}をすっぽりかぶつて、薩摩下駄をぼつくり／＼雪に踏み込みながら家を出て往つた。主は高足駄を穿^はき、番傘^{ばんがさ}をさして、八幡下別れの杉まで送つて往つた。

「じゃア、しつかりやり玉え」

「色々お世話でした」

傘を傾けて杉の下に立つて見て居ると、また一しきり烈^{はげ}しく北から吹きつくる吹雪の中を、黒い外套姿が少し前俛^{まへむ}みになつて、一足ぬきに歩いて行く。第一の石橋を渡る。やゝあつて第二の石橋を渡る。檜林について曲る。段々小さくなつて遠見の

姿は、谷一ぱいの吹雪に消えたり見えたりして居たが、一本檜の処まで来ると、見
かえりもせず東へ折れて、お到頭見えなくなつてしまつた。

はんとし半歳の後、彼は郷里の南部で死んだ。

漢人の詩に、

ほしていづじやうとうのもん歩出 城東門、

はるかへのぞむしうなんのみち遙望 江南路、

ぜんじつふうはつのうち前日風雪中、

こじんこれよりさる故人從此去、

別れの杉の下に立つて田圃を見渡す毎に、吹雪の中の黒い外套姿が今も彼の眼さ
きにちらつく。

彼の前生は多分犬であつた。人間の皮をかぶつた今生にも、彼は犬程可愛いものを知らぬ。子供の頃は犬とばかり遊んで、着物は泥まみれになり、裾は喰いさかれ、其様なに着物を汚すならわたしは知らぬと母に叱られても、また走り出ては犬と狂うた。犬の為には好きな甘い物も分けてやり、小犬の鳴き声を聞けばねむたい眼を摩つて夜半にも起きて見た。明治十年の西郷戦争に、彼の郷里の熊本は兵戈の中心となつたので、家を挙げて田舎に避難したが、オブチと云う飼犬のみは如何しても家を守つて去らないので、近所の百姓に頼んで時々食物を与えてもらうことにして本意ない別を告げた。三月程して熊本城の包囲が解け、薩軍は山深く退いたので、欣々と歸つて見ると、オブチは彼の家に陣どつた薩摩健男に喰われてしまつて、頭だけ出入の百姓によつて埋葬されて居た。彼の絶望と落胆は際限が無かつた。久しぶりに家に還つて、何の愉快もなく、飯も喰わずに唯哭いた。南洲の死も八千の子弟の運命も彼には何の交渉もなく、西南役は何よりも彼の大切なオブチをとり去つ

たものとして彼に記憶されるのであった。

村入して間もなく、ある夜先家主の^{せんやぬし}大工がポインテア種の小犬を一足抱いて来た。二子の^{わかし}渡の近所から貰って来たと云う。鼻尖から右の眼にかけ茶褐色の^{ふち}斑がある外は真白で、四肢は将来の発育を思わせて伸びくと、^{きまえ}気前鷹揚に、坊ちやんと云った様な小犬である。既に近所からもらった黒い小犬もあるので、二の足踏んだが、折角貰って来てくれたのを還えすも惜しいので、^{いばり}到頭貰うことにした。今まで^{たみ}畳の上に居たそう。早速^{さつそく}畳に放尿して、其晩は大きな塊の糞を板の間にした。

新来の白に見かえられて、間もなく黒は死に、白の独天下となった。畳から地へ下ろされ、^{むぎめし}麦飯味噌汁で大きくなり、美しい、而して弱い、而して情愛の深い犬になった。雄^{おす}であつたが、雌^{めす}の様な雄であつた。

主夫妻が東京に出ると屹度^{いつ}跟いて来る。甲州街道を新宿へ行く間には、大きな犬、強い犬、暴^{あつ}い犬、意地悪い犬が沢山居る。而してそれを^け嚇しかけて、弱いもの窘^{いじ}めを楽む子供もあれば、馬鹿な成人^{おとな}もある。弱い白は屹度^か咬まれる。其れがいやさに隠れて出る様^{よう}にしても、何処からか嗅ぎ出して屹度^{いつ}跟いて来る。而して咬まれる。悲鳴をあげる。二三足の聯合軍に囲まれてべそを^むかいて歯を剥き出す。己れより小さな犬にすら尾を^た低れて恐れ入る。果ては犬の影され見れば、己^{われ}どころんで、最初から負けてかゝる。それでも強者の歯をのがれぬ場合がある。最早^も懲りたろう

と思つて居ると、今度出る時は、又候またぞう跟ついていて来る。而して往復途中の出来事はよくく頭に残ると見えて、帰つたあとで櫟かしの木の下にぐったり寝ながら、夢中で走るかのように四肢ししを動かしたり、夢中で牙をむき出しふアツと云つたりする。

弱くても雄は雄である。交尾期になると、二日も三日も影を見せぬことがあつた。てつきり殺されたのであろうと思つて居ると、村内唯一の牝犬めいぬの許もとに通うて、他の強い大勢の競争者に噛まれ、床の下に三日潜もぐり込んで居たのであつた。武智十次郎ならねども、美しい白が血だらけになつて、蹠よう蹠ようと歸つて来る姿を見ると、生殖の苦を負おう動物の運命を憐まずには居られなかつた。一日其牝犬がひよつくり遊びに來た。美しいポインタア種の黒犬で、家の人が見廻みまわりして來いと云えば、直ぐ立つて家の周囲まわりを巡視し、夜中警報でもある時は吾体を雨戸にぶちつけて家の人に知らす程怜悯の犬であつた。其犬がぶらりと遊びに來た。而して主人しゅじんに愛想をするかの様にずうと白の傍に寄つた。あまりに近く寄られては白は眼を円くし、据頸すえんで、甚はなはだ固くなつて居た。牝犬はやがて往きかけた。白は纏綿てんめんとして後になり先きになり、果ては主人の足下に駆けて來て、一方の眼に牝犬を見、一方の眼に主人を見上げ、引きとめて呉れ、媒妁なかだちして下さいと云い貌がにクンクン鳴いたが、主人はもとより如何ともすることが出来なかつた。

其秋白の主人あるしは、死んだ黒のかわりに彼牝犬かのの子の一疋をもらつて來て矢張やはり其れを

黒と名づけた。白は甚はなはだ不平であつた。黒を向うに置いて、走りかゝつて撞つと体当たいあたりをくれて衝倒つきたおしたりした。小さな黒は勝気な犬で、縁代りようゆうの下なぞ白の自由に動うごけぬ処ところにもぐり込んで、其処そこから白に敵対して吠えた。然し両雄並び立たず、黒は足が悪くなり、久しからずして死んだ。而して再び白の独天下になつた。可愛かあいがられて、大食して、弱虫の白はますます弱く、鈍どんの性質はいよく鈍になつた。よく寝惚ねぼけて主人しゅじんに吠えた。主人と知ると、恐れ入つて、膝行頓首しつこうどんしゅ、亀かめの様に平太張りつゝ、すり寄つて詫わびた。わるい事をして追かけられて逃げ廻るが、果ては平身低頭へいしんていとうして恐るゝすり寄つて来る。頭を撫でると、其手を軽く啣くわえて、衷心を傾けると云つた様にはアツと長いゝ溜息ためいきをついた。

二

死んだ黒の兄あにが矢張黒と云つた。遊びに来ると、白が烈しろうしく妬ねたんだ。主人等が黒に愛想あいさうをすると、白は思わせぶりに終日影しゅうじつを見せぬことがあつた。

甲州街道こうしゅうかいどうに獅子毛天狗顔ししもうてんぐがほをした意地悪い犬が居た。坊ちゃんはぢの白を一方ひとかたならず妬み憎んで、顔さえ合あわすと直ぐ咬かんだ。ある時、裏の方で烈はげしい犬の噛み合う声がするので、出でて見ると、黒と白とが彼天狗犬てんぐいぬを散々さんざん咬んで居た。元来平和な白は、

卿^{おまえ}が意地悪だからと云わんばかり恨めしげな情なげな泣き声をあげて、黒と共に天狗犬に向うて居る。聯合軍に噛まれて天狗犬は尾を捲き、獅子毛を逆立て、甲州街道の方に敗走するのを、白の主人は心地よげに見送^{みおく}つた。

其後白と黒との間に如何^{どん}な默契が出来たのか、白はあまり黒の来遊^{らいゆう}を拒まなくなつた。白を貰^{もら}つて来てくれた大工が、牛乳^{ぎゅうにゅう}車の空箱を白の寢床に買^かうて来てくれた。其白の寢床に黒が寝そべつて、尻尾ばた／＼箱の側をうつて納^{おさ}まつて居ることもあつた。界限^{かいがい}に野犬^{やけん}が居て、あるいは一疋、ある時は二疋、稲妻強盗^{いなすまじやうどう}の如く横行し、夜中鶏を喰^くつたり、豚を殺したりする。ある夜、白が今死にそんな悲鳴をあげた。雨戸^{あまど}引きあけると、何ものか影の如く走^はせ去^さつた。白は後援を得てやつと威厳^{いげん}を恢復し、二足三足あと追^おかけて叱^{しか}る様に吠えた。野犬が肥え太つた白を豚と思つて喰いに來たのである。其様な事が二三度もつゞいた。其れで自衛の必要上白は黒と同盟を結んだものと見える。一夜庭先^{いちやにわさき}で大騒ぎが起つた。飛び起きて見ると、聯合軍は野犬二疋の来襲に遇うて、形勢頗る危殆^{きたい}であつた。

白と黒は大の仲好^{なかよし}になつて、始終共に遊んだ。ある日近所の与右衛門^{よえもん}さんが、一盃^{だんぱん}機嫌で談判に來た。内の白と彼黒とがトチ狂うて、与右衛門の妹婿武太郎^{はたけ}が畑の大豆を散々踏み荒したと云うのである。如何して呉^くれるかと云う。仕方が無いから損害を二円払うた。其後黒の姿はこつきり見えなくなつた。通りかゝりの武太^{ぶた}さん

に問うたら、与右衛門さんの懸合で、黒の持主の源さん家では余儀なく作男に黒を殺させ、作男が殺して煮て食うたと答えた。うまかったそうです、と武太さんは紅い齷を出してニタ／＼笑った。

ある日見知らぬかみさんが来て、此方の犬に食われましたと云つて、汚ない風呂敷から血だらけの軍鶏の頭と足を二本出して見せた。内の犬は弱虫で、軍鶏など捕る器量はないが、と云いつゝ、確に此方の犬と認めたのかときいたら、かみさんは白い犬だった、聞けば粕谷に悪イ犬が居るちゆう事だから、其れで来たと言ふのだ。折よく白が来た。かみさんは、これですか、と少し案外の顔をした。然し新参者の弱身で、感情を傷わぬ為兎に角軍鶏の代金何十銭の冤罪費を払った。彼は斯様な出金を東京税と名づけた。彼等はしば／＼東京税を払うた。

白の頭上には何時となく呪咀の雲がかゝつた。黒が死んで、意志の弱い白はまた例の性悪の天狗犬と交る様になった。天狗犬に噓されて、色々の悪戯も覺えた。多くの犬と共に、近在の豚小屋を襲うと云う評判も伝えられた。遅鈍な白は、豚小屋襲撃引揚げの際逃げおくれで、其着物の著しい為に認められたのかも知れなかった。其内村の収入役の家で、係蹄にかけて豚とりに来た犬を捕つたら、其れは黒い犬だったそうで、さし当り白の冤は霽れた様なものゝ、要するに白の上に凶き運命の臨んで居ることは、彼の主人の心に暗い翳を作った。

到頭白の運命の決する日が来た。隣家りんかの主人が来て、数日来猫が居なくなつた、不思議に思うて居ると、今しがた桑畑の中から腐りかけた死骸を発見した。貴家おうちの白と天狗犬とで咬み殺したものである、死骸を見せてよく白を教誡していただき度いと云う意を述べた。同時に白が度々隣家の鶏卵を盗み食うた罪状も明らかになつた。最早詮方は無い。此まゝにして置けば、隣家は宥ゆるしてくれもしようが、必かならず何処かで殺さるゝに違ひない。折も好し、甲州こうしゅうの赤沢君が来たので、甲州に連れて往つてもらうことにした。白の主人は夏の朝早く起きて、赤沢君を送りかたぐ、白を荻窪おぎくぼの停車場まで牽ひいて往つた。千歳村ちとせむらに越した年の春もろうて来て、この八月まで、約一年半白は主人夫妻と共に居たのであつた。主婦は八幡下まで送りに来て、涙を流して白に別れた。田圃はるかを通つて、雑木山ぞうきやまに入る岐れ道まで来た時、主人は白を抱き上げて八幡下に立つて遙に目送して居る主婦に最後の告別をさせた。白は屠所の羊の歩みで、牽かれてようやく跟ついて来た。停車場前の茶屋で、駄菓子だがしを買うてやったが、白は食くおうともしなかつた。貨物車の犬箱の中に入れられて、飯いがわりの駄菓子を入れてやったのを見むきもせず、ベソをかきながら白は甲州へ往つてもうた。

最初の甲州だよりは、白が赤沢君に牽かれて無事に其家に着いた事を報じた。第二信は、ある日白が縄をぬけて、赤沢君の家から約四里甲府の停車場まで帰路を探がしたと云う事を報じた。然し甲府からは汽車である。甲府から東へは帰り様がなかった。

赤沢君が白を連れて撮った写真を送ってくれた。眼尻が少し下つて、口をあんといいたところは、鼻眞目にも怜悯な犬ではなかった。然し赤沢君の村は、他に犬も居なかったので、皆に可愛がられて居ると云うことであつた。

*

白が甲州に養われて丁度一年目の夏、旧主人夫妻は赤沢君を訪ねた。其家に着いて挨拶して居ると庭に白の影が見えた。喫驚する程大きくなり、豚の様にまるくと太つて居る。「白」と声をかくるより早く、土足で座敷に飛び上り、膝行匍匐して、忽ち例の放尿をやつて、旧主人に恥をかゝした。其日は始終跟いてあるき、翌朝山の上の小舎にまだ寝て居ると、白は戸の開くや否飛び込んで来て、蚊帳越しにずうと頭をさし寄せた。帰りに、予め白を繋いであつた。別に菓子などやつても、喰

おうともしなかつた。而して旧主人夫妻が帰つた後、彼等が馬車に乗つた桃林橋の
 辺まで、白は彼等の足跡を嗅いで廻つて、大騒ぎしたと云うことであつた。

翌年の春、夫妻は二たび赤沢君を訪うた。白は喜のあまり浮かれて隣家の鶏を追
 廻し、到頭一羽を絶息させ、而して旧主人にまた損害を払わせた。

其後白に関する甲州だよりは此様な事を報じた。笛吹川未曾有の出水で桃林橋が
 落ちた。防水護岸の為一村の男総出で堤防に群がって居ると、川向うの堤に白いも
 のゝ影が見えた。其は隣郡に遊びに往つて居た白であつた。白だ、白だ、白も斯水
 では、と若者等は云い合はした様に如何するぞと見て居ると、白は向うの堤を川上
 へ凡二丁ばかり上ると、身を跳らしてざんぶとばかり濁流、箭の如き笛吹川に飛び
 込んだ。あれよくと罵り騒ぐ内に、愚なる白、弱い白は、斜に洪水の川を遊び越
 し、陸に飛び上つて、ぶるゝツと水ぶるいした。若者共は一斉に喝采の声をあげ
 た。弱い彼にも獵犬即ち武士の血が流れて居たのである。

白に関する最近の消息は斯うであつた。昨春當時の皇太子殿下今日の今上陛下が
 甲州御出の時、演習御覽の為赤沢君の村に御入の事があつた。其時吠えたりして貴
 顕に失礼があつてはならぬと云う其の筋の遠慮から、白は一日拘束された。主人が
 拘束されなかつたのはまだしもであつた。

白きゆうしゆの旧主の隣家では、其家の猫の死の為に白が遠ざけられたことを気の毒に思い、其息子が甘藷売りに往つた帰りに神田の青物問屋からテリアしゆ種の鼠程ねずみほどな可愛い牝犬めいぬをもらつて来てくれた。ピンと名をつけて、五年ごねん来飼うて居る。其子孫も大分かいわい界限に蕃殖した。一昨年おしりむこから押入婿おしりむこのデカと云う大きなポインタア種の犬も居る。昨秋からは追うても捨すてゝも戻つて来る、いまだ名無しの風来ふうらいの牝犬も居る。然し愚な鈍な弱い白が、主人夫妻にはいつまでも忘れぬのである。

白は大正七年一月十四日の夜半病死し、赤沢君の山の上の小家の梅の木蔭に葬られました。甲州に往つて十年です。村の人々が赤沢君に白のクヤミを言うたそうです。「白は人となり候」と赤沢君のたよりにありました。「白」は幸福な犬です。

大正十二年二月九日追記

ほおずき

一

其頃は女中も居ず、門にしまりもなかった。一家総出の時は、大戸を鎖して、ぬれ縁の柱に郵便箱をぶら下げ、

〇〇行

夕方（若くは明午〇）帰る

御用の御方は北隣△△氏へ御申残しあれ

小包も同断

月日 氏名

みみずのたはこと

斯く張札はりふだして置いた。稀には飼犬を縁先えんさききの櫓つなの木に繋いで置くこともあつたが、多くは郵便箱に留守をさした。帰つて見ると、郵便箱には郵便物の外、色々な名刺や鉛筆書きが入れてあつたり、主人しゅじんが穿はきふるした薩摩下駄を物数寄ものずきにまだ真新まあたしいのに穿はきかえて行く人なぞもあつた。ノートを引きちぎつて、斯様なものを書いたのもあつた。

君を尋ねて草鞋で来れば

君は在さず唯犬ばかり

縁に腰かけ大きなあくび

中で時計が五時をうつ

明治四十一年の新嘗祭の日であつた。東京から親類の子供が遊びに来たので、例の通り戸をしめ、郵便箱をぶら下げ、玉川に遊びに往つた。子供等は玉川から電車で帰り、主人夫妻は連れて往つた隣家の女兒と共に、つい其前々月もらつて来た三歳の女兒をのせた小兒車を押して、星光を踏みつゝ野路を二里くたびれ果てゝ帰宅した。

隣家の女兒と門口で別れて、まだ大戸も開けぬ内、二三人の足音と車の響が門口に止まつた。車夫が提灯の光に、丈高い男がぬつと入つて来た。つゞいて女が入つて来た。

「僕が滝沢です、手紙を上げて置きましたが……」

其様な手紙は未だ見なかつたのである。来意を聞けば、信州の者で、一晚御厄介になりたいたと云うのだ。主人は疲れて大にいやであつたが、遠方から来たものを、と勉強して兎に角戸をあけて内に請じた。吉祥寺から来たと云う車夫は、柳行李を

置いて帰った。

二

ランプの明りで見れば、男は五分刈頭の二十五六、意地張らしい顔をして居る。女は少しふけて、おとなしい顔をして、丸髷に結つて居る。主人が渋い顔をして居るの
で、丸髷の婦人は急いで風呂敷包の土産物を取り出し主人夫妻の前にならべた。葡萄
液一瓶、「醃酵しない真の葡萄汁です」と男が註を入れた。杏の缶詰が二個。「此は
お嬢様に」と婦人が取出したのは、十七八ずつも実つた丹波酸漿が二本。いずれも
紅いカラのまゝ虫一つ喰つて居ない。「まあ見事な」と主婦が歎美の声を放つ。「私
の乳母が丹精して大事に育てたのです」と婦人が誇り貌に口を添えた。二つ
三つ語を交わす内に、男は信州、女は甲州の人で、共に耶穌信者、外川先生の門弟、
此度結婚して新生涯の門出に、此家の主人夫妻の生活ぶりを見に寄つたと云うこと
が分かつた。畑の仕事でも明日は少し御手伝しようと思ふと男が云えば、台所の御手
伝でもしようと思ふと女が云うた。

兎に角飯を食うた。飯を食うとやがて男が「腹が痛い」と云い出した。「そう、余
程痛みますか」と女が憂わしそうにきく。「今日汽車の中で柿を食うた。あれが不好

かった」と男が云う。此大きな無遠慮な吾儘坊ちゃんのお客様の為に、主婦は懷炉かいろうを入れてやった。大分落ついたと云う。晩おそくなつて風呂が沸いたわ。まあお客様からしようと請じたら、「私も一緒に御免蒙りましょう」と婦人が云つて、夫婦一緒にさつさと入つて了つた。寝ると云つても六畳二室の家、唐紙一重に主人組しゅじんぐみは此方こち、客は彼方あちと頭突きあたまづつ合わせである。無い蒲団ついでを都合して二つ敷いてやったら、御免を蒙つてお先に寝る時、二人は床を一つにして寝てしまった。

三

明くる日、男は、「私共は二食で、朝飯あさめしを十時にやります。あなた方はお構かまいなく」と何方どちが主やら客やら分わからぬ事を云う。其れでは十時に朝飯として、其れ迄ちと散歩でもして来ようと云つて、主人は男を連れて出た。

畠仕事はたけしごとをして居る百姓の働き振を見ては、まるで遊んでる様ですな、と云う。彼は生活の鬨烈しい雪の山国やまぐにに生れ、彼自身も烈しい戦の人であつた。彼は小学教員であつた。耶蘇を信ずる為に、父から勘当かんとう同様の身となつた。学校でも迫害を受けた。ある時、高等小学の修身科で彼は熱心に忍耐を説いて居たら、生徒の一人がつかく立つて来て、教師用の指杖さしづえを取ると、突然いきなり劇しく先生たる彼の背せなかを殴なぐつた。

彼は徐に顧みて何を為ると問うた。其生徒は杖を捨て、涙を流し、御免下さい、先生があまり熱心に忍耐を御説きなさるから、先生は實際どれ程忍耐が御出来になるか試したのです、と跪いて詫言ひた。彼は其生徒を賞めて、辞退するのを無理に筆を三本褒美にやつた。

斯様な話をして帰ると、朝飯の仕度が出来て居た。落花生が炙れて居る。「落花生は大好きですから、私が炙りましょう」と云うて女が炙つたのそうなる。主婦は朝飯の用意をしながら、細々と女の身上話を聞いた。

女は甲州の釜無川の西に当る、ある村の豪家の女であつた。家では銀行などもやつて居た。親類内に嫁に往つたが、弟が年若なので、父は彼女夫妻を呼んで家の後見をさせた。結婚はあまり彼女の心に染まぬものであつたが、彼女はよく夫婦に仕えて、夫婦仲も好く、他目には模範的夫婦と見られた。良人はやさしい人で、耶穌教信者で、外川先生の雑誌の読者であつた。彼女はその雑誌に時々所感を寄する信州の一男子の文章を読んで、其熱烈な意気は彼女の心を撼かした。其男子は良人の友達の一人で、稀に信州から良人を訪ねて来るものがあつた。何時となく彼女と彼の間は無線電信がかゝつた。手紙の往復がはじまつた。其内良人は病氣になつて死んだ。死ぬる前、妻に向つて、自分の死後は信州の友の妻になれ、と懇々遺言して死んだ。一年程過ぎた。彼女と彼の間は、熱烈な恋となつた。而して彼女の家では、父

死し、弟は年若^{としわか}ではあり、母が是非居てくれと引き止むるを聴かず、彼女は到頭家^{とうとううち}を脱け出して信州の彼が許^{もと}に奔^{はし}つたのである。

*

朝飯後、客の夫婦は川越の方へ行くと云うので、近所のおかみを頼み、荻窪まで路案内^{みちしるべ}かたゝ柳行李^おを負わせてやることにした。

彼は尻をからげて、莫大小^{もりやす}の股引白足袋^{ももひきしろたび}に高足駄をはき、彼女は洋傘^{こうもり}を杖^{つえ}についで海松色^{みるいろ}の絹天^{きぬてん}の肩掛^{かたかけ}をかけ、主婦に向うて、

「何卒^{どうぞ}覚えて居て下さい、覚えて居て下さい」

と幾回も繰り返して出て往った。主人夫妻は門口に立つて、影の消ゆるまで見送った。

四

一年程過ぎた。

此世から消え失せたかの様に、二人の消息^{しやうそく}はたと絶えた。

「如何したろう。はがき位はよこしそんなものだな」

主人夫妻は憶い出す毎に斯く云い合つた。

丁度満一年の新嘗祭も過ぎた十二月一日の午後、珍しく滝沢の名を帯びたはがきが主人の手に落ちた。其は彼の妻の死を報ずるはがきであつた。消息こそせね、夫婦は一日も粕谷の一日一夜を忘れなかつた、と書いてある。

吁彼女は死んだのか。友の妻になれと遺言して死んだ先夫の一言を言葉通り実行して恋に於ての勝利者たる彼等夫妻の前途は、決して百花園中のそゞろあるきではあるまい、とは期して居たが、彼女は早くも死んだの乎。

聞きたいのは、沈黙の其一年の消息である。知りたいのは、其死の状である。

*

あくる年の正月、主人夫妻は彼女の友達の一入なる甲州の某氏から彼女に関する消息の一端を知ることを得た。

彼等夫妻は千曲川の瀨に家をもち、養鶏などやって居た。而して去年の秋の暮、胃病とやらで服薬して居たが、ある日医師が誤つた投薬の為に、彼女は非常の苦痛をして死んだ。彼女の事を知る信者仲間には、天罰だと云う者もある、と某氏は附加

えた。

*

某氏はまた斯様な話をした。亡くなった彼女は、思い切った女であつた。人の為
に金でも出す時は己が着類を質入れしたり売り払つたりしても出す女であつた。彼
女の前夫は親類仲で、慶応義塾出の男であつた。最初は貨殖を努めたが、耶穌を信
じて外川先生の門人となるに及んで、聖書の教を文句通り実行して、決して貸した
金の催促をしなかつた。其れをつけ込んで、近郷近在の破落戸等が借金に押しかけ、
数千円は斯くして還らぬ金となつた。彼の家には精神病の血があつた。彼も到頭遺
伝病に犯された。其為彼の妻は彼と別居した。彼は其妻を恋いて、妻の実家の向う
隣の耶穌教信者の家に時々来ては、妻を呼び出してもろうて逢うた。彼の臨終の場
にも、妻は居なかつた。此時彼女の魂はとく信州にあつたのである。彼女の前夫が
死んで、彼女が信州に奔る時、彼女の懐には少からぬ金があつた。実家の母が瞋つ
たので、彼女は甲府まで帰つて来て、其金を還した。然し其前彼女は実家に居る時
から追々に金を信州へ送り、千曲川の辺の家も其れで建てたと云うことであつた。

*

彼夜彼女が持て来てくれたほおずきは、あまり見事みごとなので、子供にもやらず、小箆こだんす笥ひきだしに大切にしまつて置いていたら、鼠ねずみが何時の間にか其小箆その笥うしろを背から嚙破うしやつて喰つたと見え、年の暮としに抽斗くわれをあけて見たら、中実なかみ無しのカラばかりであつた。
ねんねんほおずき
年々酸漿すいじやうが紅くなる頃になると、主婦はしみぐ彼女を憶い出すと云うて居る。

碧色の花

色彩の中で何色なにいろを好むか、と人に問われ、色彩について極めて多情かねれな彼は答に迷うた。

吾墓の色にす可ねすき鼠色みずみいろ、外套に欲しい冬の杉の色、十四五の少年を思わす落葉松の若緑わかみどり、春雨を十分に吸うた紫むらさきがかった土の黒、乙女の頬ほおに匂う桜色おほ、枇杷バナナの暖かい黄、檸檬月見草れもんつきみそうの冷たい黄、銀色の翅つばさを閃かして飛魚の飛ぶ熱帯ねったいの海のサツファイヤ、ある時は其面に紅葉を泛うかべ或時は底深く日影金糸を垂たるゝ山川の明るい淵ふちの練ねった様な緑玉、盛り上り揺り下ぐる岩蔭の波の下に咲く海アネモネの褪紅たいこう、緋天鵲絨ひびろうどを欺く緋薔薇ひばら緋芥子ひげしの緋紅、北風吹きまくる霜枯の野の狐色きつねいろ、春の伶人れいじんの鶯が着る鶯茶、平和な家庭の鳥に属する鳩羽鼠はとほねずみ、高山の夕にも亦やんごとない僧そうの衣にもある水晶やうじゆにも宿る紫、波の花にも初秋の空の雲にも山の雪野の霜にも大理石かばにも樺はたの膚はだにも極北の熊の衣にもなるさまぐの白しろ、数え立つれば際限きりは無い。色と云う色、皆好きみなすきである。

然しながら必其一えらを択まねばならぬとなれば、彼は種として碧色を、度どとして濃碧のうへきを、
を択ぼうと思う。碧色——三尺の春の野川のがわの面おもに宿るあるか無きかの浅碧あさみどりから、深

山の谿に黙す日蔭の淵の紺碧に到るまで、あらゆる階級の碧色——其碧色の中でも殊に鮮やかに煮え返える様な濃碧は、彼を震いつかす程の力を有つて居る。

高山植物の花については、彼は呶々する資格が無い。園の花、野の花、普通の山の花の中で、碧色のものは可なりある。西洋草花には口ベリヤ、チヨノドクサの美しい碧色がある。春竜胆、勿忘草の瑠璃草も可憐な花である。紫陽花、ある種の溪蓀、花菖蒲にも、不純ながら碧色を見れば見られる。秋には竜胆がある。牧師の着物を被た或詩人は、嘗て彼の村に遊びに来て、路に竜胆の花を摘み、熟々見て、青空の一片が落つこちたのだなあ、と趣味ある言を吐いた。露の乾ぬ間の朝顔は、云う迄もなく碧色を要素とする。それから夏の草花には矢車草がある。舶来種のまだ我邦土には何処やら居馴染まぬ花だが、はらりとした形も、深い空色も、涼しげな夏の花である。これは園内に見るよりも Corn flower と名にもある通り外国の小麦畑の黄ばんだ小麦まじりに咲いたのが好い。七年前の六月三十日、朝早く露西亜の中部スチエキノ停車場から百姓の馬車に乗つてトルストイ翁のヤスナヤ、ポリヤナに赴く時、朝露にぬれそぼった小麦畑を通ると、刈入近い麦まじりに空色の此花が此処にも其処にも咲いて居る。睡眠不足の旅の疲れと、トルストイ翁に今会いに行く昂奮とで熱病患者の様であつた彼の眼にも、花の空色は不思議に深い安息を与えた。

夏には更に千鳥草の花がある。千鳥草、又の名は飛燕草。葉は人參の葉の其れに

似て、花は千鳥か燕か鳥の飛ぶ様な状さまをして居る。園養えんようのものには、白、桃色、また桃色に紫しほの縞しまのもあるが、野生の其それは濃碧色のうへきしよくに限られて居る様だ。濃碧うつろが褪うえば、董色すみれいろになり、紫になる。千鳥草と云えば、直ぐチタの高原が眼に浮ぶ。其れは明治三十九年露西亞の帰途かえりだつた。七月下旬、莫斯科もすくわを立つて、イルクツクで東清鉄道の客車に乗換え、莫斯科を立つて十日目とおかめにチタを過ぎた。故国を去つて唯四ヶ月、然しウラルを東に越すと急に汽車がまどろかしくなる。イルクツクで乗換のりかえた汽車の中に支那人のボオイが居たのが嬉しかった。イルクツクから一駅毎に支那人を多く見た。チタでは殊ことに支那人が多く、満洲まんしゅう近い氣もち十分であつた。バイカル湖から一路上つて来た汽車は、チタから少し下りになつた。下り坂の速力早く、好い氣もちになつて窓から覗のぞいて居ると、空にはあらぬ地の上の濃い碧色へきしよくがさつと眼に映うつつた。野生千鳥草の花である。彼は頭を突出して見まわした。鐵路の左右、人氣も無い荒寥こうりょうを極めた山坡に、見る眼も染むばかり濃碧の其花が、今を盛りに咲き誇つたり、やゝ老いて紫むらさきがかったり、まだ蕾つぼんだり、何万何千数え切れぬ其花が汽車を迎えては送り、送おくりては迎えた。窓に凭もたれた彼は、氣も遠くなる程其色に酔うたのであつた。

然しながら碧色の草花の中で、彼はつゆ草の其れに優ました美しい碧色を知らぬ。つゆ草、又の名はつき草、螢草ほたるぐさ、鴨跖草おうせきそうなど云つて、草姿そうしは見るに足らず、唯二弁よ

り成る花は、全き花と云うよりも、いたずら子に撈むられたあまりの花の断片か、小さな小さな碧色の蝶ちようの唯ただかりそめに草にとまったかとも思われる。寿命も短くて、本当に露の間である。然も金粉きんぷんを浮べた花蕊かすいの黄に映発えいはつして惜気もなく咲き出でた花の透すき徹ととおる様な鮮あざやかな純碧色は、何ものも比くらぶべきものがないかと思うまでに美しい。つゆ草を花と思うは誤あやまりである。花では無い、あれは色に出た露せの精である。姿脆もろく命短く色美しい其面影は、人の地に見る刹那せつなの天の消息でなければならぬ。里のはずれ、耳無地藏の足下などに、さまざまの他の無名草醜草ななしぐさしこげさまじり朝露を浴びて眼がさむる様ように咲いたつゆ草の花を見れば、竜胆りんどうを讃ほめた詩人の言を此にも仮かりて、青空の灑こ気滴きしたたり落ちて露となり露色に出てこゝに青空を地よみがえに甦よみがえらせるつゆ草よ、地に咲く天の花よと讃たたえずには居られぬ。「ガリラヤ人よ、何ぞ天を仰いで立つや。」吾等は兎角青空ばかり眺めて、足もとに咲くつゆ草をつい知らぬ間に蹂ふみにじる。

碧色の草花として、つゆ草は粹すいである。

おぼろ夜

早夕飯のあと、晩涼ばんりように草とりして居た彼は、日は暮れる、ブヨは出る、手足を洗うて上ろうかとぬれ縁に腰かけた。其時門口から白いものがすうと入って来た。彼はじいと近づくものを見て居たが、

「あゝM君くんですか」

と声をかけた。

其は浴衣の着流きながしで駒下駄はを穿いたM君であつた。M君は早稲田わせだ中学の教師で、かたわら雑誌に筆を執つて居る人である。彼が千歳村に引越したあくる月、M君は雑誌に書く料りように彼の新生活を見に来た。丁度ちやうど檜苗かしなえを植えて居たので、ろくろく火の氣の無い室に二時間も君を待たせた。君は慍いる容子もなく徐しずかに待つて居た。温厚な人である。其れから其年の夏、月の好い一夜いちや、浴衣の上に夏羽織など引かけて、ぶらりと尋ねて来た。M君は綱島梁川つなしまりやうせんくん君の言として、先ず神を見なければ一切の事悉く無意義だ、神を見ずして筆を執るなど無用である、との説に關し、自身の懊惱おのうを述べ、自分の様な鈍根の者は、一切を抛擲ほうてきして先ず神を見る可く全力を傾注する勇氣が無い、と嘆息して歸つた。

其後久しく消息を聞かなかつたが、今夜一年ぶりに突然君は来訪したのであった。君の所要は、先月茅ヶ崎で物故した一文士に関する彼の感想を聞くにあつた。彼は故人について取りとめもない話をした。故人と彼とは同じ新聞社の編輯局に可なり久しく居たのであつたが、故人は才華発越、筆をとれば斬新警拔、話をすれば談論火花を散らすに引易え、彼はわれながらもどかしくてたまらぬ程の迂愚、編輯局の片隅に猫の如く小さくなつて居たので、故人と心腹を披いて語る機会もなく、故人の方には多少の侮蔑あり、彼の方には多少の嫉妬羨望あり、身は近く心ははなれゝゝに住んだ。其後故人も彼も前後に新聞社を出て、おのゝ自家の路を歩み、顔を見ること稀に、消息を聞かぬ日多く打過ぎた。然し彼は一度故人と真剣の話をしたいと久しく思うて居た。日露戦争の終つた年の暮、彼は一の心的革命を閲して、まさに東京を去り山に入る決心をして居た時、ある夜彼は新橋停車場の雑沓の中に故人を見出した。何処ぞへ出かけるところと覺しく、茶色の中折をかぶり、細卷の傘を持ち、瀟洒した洋装をして居た。彼は驚いた様な顔をして居る故人を片隅に引のけて、二分間の立話をした。彼は従来の疎隔を謝し、自愛を勧め、握手して別れた。これが最始の接近で、また最後の面会であつた。

M君と彼の話は、故人の事から死生の問題に入つた。心靈の交感、精神療法と、話は色々に移つて往つた。

彼等は久しく芝生の縁代で話した。M君が辞し去ったのは、夜も深けて十二時近かつた。

彼はM君を八幡下まで送つて別れた。夏ながら春の様なおぼろ月、谷向うの村は朦朧とうち煙り、田圃の蛙の声も夢を誘う様なおぼろ夜である。

「それじゃ」

「失礼」

駒下駄の音も次第に幽になつて、浴衣姿の白いM君は吸わるゝ様に靄の中に消えた。

＊

其後ふつつりM君の消息を聞かなかつたが、翌年ある日の新聞に、M君が安心を求む可く妻子を捨てゝ京都山科の天華香洞に奔つた事を報じてあつた。間もなく君は東京に歸つて来たと見え、ある雑誌に君が出家の感想を見たが、やがて君が死去の報は伝えられた。

見神の一義に君は到頭精力を傾注せず居られなくなつたのである。而して生涯の大事、生存の目的を果したので、君は軽く肉の衣を脱いだのであろう。

ヤスナヤ、ポリヤナの未亡人へ

一

夫人。
おくさん。

私は夙に手紙を差上げねばならなかったのでした。実は幾回も幾回もペンを執つたのでした。ペンを執りは執りながら、如何しても書くことが出来なかったのです。今日、ビルコフさんの書いた故先生小伝の英訳を見て居ましたら、丁度先生の逝去六週間前に撮影されたと云う先生とあなたの写真が出て居ました。熟々見て居る内に、私の眼は霞んで来ました。嗚呼ものが言いたい！ 話がしたい！ 然し先生は最早霊です。私の拙い言葉を仮らずとも、先生と話すことが出来ます。書くならあなたに書かねばならぬ。そこで此手紙を書きます。私はうちつけに書きます。万事直截其ものでお出のあなたは、私が心底から申すことを容して下さるだろうと思います。

何から申しましようか。書く事があまり多い。最初先生の不可思議な遽かの家出
 を聞いた時、私は直ぐ先生の終が差迫つて来た事を知りました。それで先生の計に
 接した時も、少しも驚きませんでした。勿論先生を愛する者にとつては、先生の最期
 は苦しい最期でした。何故先生は愛妻愛子愛女の心尽しの介抱の中に、其一片と雖
 も先生を吾有と主張し要求し得ぬものはない切つても切れぬ周囲の中に、穩に死な
 れる事が何故出来なかつたでしようか？ 何故其生の晩景になつて、あわれなひとり
 者の死に様をする為に其温かな巢からさまよい出られねばならなかつたのでしやう
 か？ 世故を経尽し人事を知り尽した先生が、何故其老年に際し、否墓に片脚下し
 かけて、釈迦牟尼の其生の初に為られた処をされねばならなかつたか？ 世間は誰
 しも斯く驚き怪みました。不相変主我的だと非難した者も少なくありませんでした。
 一風變つた天才の氣まぐれと笑つたのは、まだよい方かも知れません。先生もつら
 かつたでしよう。然し夫人、悲痛の重荷は偏にあなたの肩上に落ちました。あなた
 の経歴された処は、思うも恐ろしい。長い長い生涯の間、先生と棲んで先生を愛さ
 れたあなたが、此世の旅の夕蔭に、見棄てゝしまわれた様な姿になられようとは！
 而してトルストイの邪魔物は此であると云つた様に白昼世界の眼の前に曝しものにな
 られようとは！ 夫人、誰かあなたに同情をさゝげずに居られましよう乎。如何

に頑固な先生の加担者でも、如何程苦り切ったあなたの敵対者でも、堪え難いあなたの苦痛と断腸の悲哀とは、其幾分を感じずに居られません。彼池の漚りの一刹那を思つては、戦慄せずには居られません。

三

然し夫人、世に先生を非難する者の多かつた様に、あなたを非難する者も少くありませんでした。白状します、私も其一人でした。トルストイと云う様な偉大な名は、世界の目標です。先生や先生の一家一門の所作は、万人の具に瞻る所、批評的であります。そこで先生の哀しい最期前後の出来事は、如何様な微細な事までも、世界中の新聞雑誌に掲載されて、色々の評判を惹起しました。私は漏らさず其記事を見ました。無論誤報曲説も多かつたでしょう。針小棒大の記事も沢山あつたに違いありません。然し打明けて云えば、其記事については、私は非常に心を痛むる事が多かつた。打明けて云えば、夫人、私はあなたに対して少からぬ不平があつたのです。勿論白が弥白くなれば、鼠色も純黒に勢なる様なもので、故先生があまりに物的自我を捨てようとせられた為、其反動の余勢であなたは實際以上に自己を主張されねばならぬ様なハメになられたこともありましょう。それでなくても、婦人は

自然に物質的になる可き約束の下にあるのです。先生が産を治むる事をやめられてから、一家の主人役に立たれたあなたが、児孫の為に利益を計り権利を主張し、切々と生活の資を積む可く努められたのも、致方はないと云った様な御気の毒なわけで、あなたの方から云えば先生にこそ不平あれ、先生から不足を云われる事はない筈です。と、誰も然申しましよう。然し夫人、生計を立つると云うも、程度の問題です。あなたが家の為を思わるゝあまり、ノーベル賞金を辞された先生に不満を懷かれたり、何万ルーブルの為に先生の声を蓄音器に入れさせようとしたり、其外種々仁人としても詩人としても心の富、靈の自由、人格の尊嚴を第一位に置く靈活不羈なる先生の心を傷むるのは知れ切った事まで先生に強られたのは、あまりと云えば無慘ではありますまいか。あなたはトルストイの名を其様に軽いやすっぽいものにしてお出なのでしやう乎。「吾未だ義人の裔の物乞いあるくを見し事なし」とソロキンは申しました。トルストイの妻は其夫をルーブルにして置かねばならぬ程貧しい者でしやう乎。トルストイの子女は、其父を食わねば生きられぬ程臍甲斐ないものでしやう乎。私にはあなたがハズミに乗って機械的に為られたと思う外、ドウもあなたのお心持が分かりません。全く正氣の沙汰とは思われかねるのです。莫斯科の小店なぞに切々と売溜の金勘定ばかりして居るかみさんのマシユリナ、カテーリナならいざ知らず、世界のトルストイの夫人の挙動としては、よく云えばあまり

に謙遜けんそんな、正しく云えばあまりに信仰しやうぎやうがない鄙い話さむしではありますまい乎。私は先生
 の心中こころが思われて、つらくてなりません。昔先生が命をかけて惚ほれられた美しい素
 直なソフィ嬢は、斯こん様な心の香かの褪うつつつた老伯爵夫人になつてしまわれたのでしょうか
 乎。それから先生逝去せいきよ後の御家の挙動ふるまいは如何です？ 私はしばしば叫びました、先
 生も先生だ、何故先生は彼様な烈しい最後さいごの手段を取らずに、犠牲となつて穩おだやかに家
 庭に死ぬることが出来なかつただろう乎、あまりに我強がづよい先生であると。然し此は
 先生がトルストイである事を忘れたからの叫びです。誰にでも其人相応そのおうの生き様ようが
 あり、また其人相応の死に様があります。トルストイの様な人でトルストイの様な
 境遇にある者は、彼様な断末魔だんまつまが当然で且自然であります。少しも無理は無い。余
 人にあつては兎も角も、先生にあつては彼様あでなくては生の結末がつかぬのです。
 一切の人慾じんよく、一切の理想が恐ろしい火の如く表に燃えて鬨たたこうた先生には、灰色はいいろにぼ
 かした生や死は問題の外なのです。あなたに對する真の愛から云うても、理想に對
 する操節そうせつから云つても、出奔しゅっぽんと浪死ろうしは必然の結果です。仮に先生が其趣味主張を一
 切胸に疊たたんで、所謂家庭の和樂わらくの犠牲となつて一個の好々翁こうこうおうとして穩にヤスナヤ、
 ポリヤナに瞑目めいもくされたとして、先生は果してトルストイたり得たでしょう乎。其死
 が夫人おうさん、あなたをはじめとして全世界に彼様な警策けいさくを与えることが出来たでしょう
 乎。彼最後彼臨終あるが為に、先生等身の著作、多年の言説に画竜の睛せを点じたの

ではありますまい乎。確に然です。トルストイは手輕に理想を實行してのける実行家では無い、然しトルストイは理想を賞翫して生涯を終る理想家で無い、トルストイは一切の執着しゆうちやくぼんのう、煩惱を輕々に滑り脱ける木石人で無い、然しトルストイは最後の息を以ても其理想を實現すべく奔騰する火の如き靈であると云う事が、墨黒の夜の空に火焰かえんの字をもて大書した様に読まるゝのです。獅子は久しく眼に見えぬ檻の中で獅子吼ししこうをしたり、毬まりを弄もてあそんだり、無聊に悶もだえたりして居ましたが、最後に身を跳おどらして一躍檻外いちやくぐらんがいに飛び出で、万里の野に奔はしつて自由の死を遂げました。慘いたましく然も偉大なる死！ 先生の死は、先生が最後の勝利でした。夫人、あなたは負けました。だからあなたの煩悶はんもんも、御家の沸騰ふつとうも起きたのです。但今は斯く思うものゝ、其当時私は思いました、先生は先生としても、何故あなたも令息令嬢達も黙かなつて哀しんで居られることが出来なかつたのでしよう乎。何故の彼諍論あのそうろん？ 何故の彼喧嘩？ 無論先生の出奔と死は、云わば爆裂弾を投げたもので、あとの騒さわぎが大きいのが自然であるし、また必要でもあるし、石が大きければ水煙も夥おびただしいと云つた様なもので、傍眼わきめには醜態しゆうたたい百出トルストイ家の乱脈らんみやくと見えても、あなたの卒直そつちよくいつて一剋な御性質から云つても、令息令嬢達の腹藏ふせんそうなき性質から云つても、世界の目の前にある家の立場たちばから云つても、云うべき事は云わねばならず、弁難論諍も致方はもとよりありますまい。苟且かりそめの平和より真面目の争はまだ優ましです。但私は先生の彼慘あのいたましい死を

余儀なくした其事情を思うに忍びず、また先生の墓上涙未だ乾かざるに家族の方々が斯く喧嘩さるゝを見るに忍びなかつたのであります。然し我々は人間です。人間として衝突は自然の約束であります。先生もよく／＼思い込まれるればこそ、彼死様をされた。而して偽ることを得為ぬトルストイ家の人々なればこそ、彼争もあつたのでしよう。加之、承われれば此頃では諸事円滑に運んで居るとやら、愚痴は最早言いますまい。唯先生を中心として起つた悲劇に因り御一同の大小浅深さま／＼に受けられた苦痛から好きものゝ生れ出でんことを信じ、且禱るのみであります。

四

勿論先生があなたを深く深く愛された事は、誰よりもあなたこそ御存じの筈。あなたを離れて出奔される時にも、先生はあなたを愛して居られた。否、深くあなたを愛さるればこそ先生は他人に出来ない事を苦痛を忍んで為られたのです。頗無理な言葉の様ですが、先生の家出の動機の重なる一が、あなたはじめ先生の愛さるゝ人達の濟度にあつた事は決して疑はありません。人は石を玉と握ることもあれば、玉を石と抛つ場合もあります。獅子は子を崖から落します。我々の捨てるものは、往々我々にとって一番捨て難い宝なのです。先生にとって人の象をとつた一番の宝は、

あなたでした。臨終の謔言にもあなたの名を呼ばれたのでも分かる。あなたは最後まで先生の恋人でした。あなたの為に先生は彼様な死をされた。あなたは衷心に確にソレを知ってお出です。夫人、あなたは其深い深い愛の下に頭を低れて下さることは出来ないのでしょうか。人の靈魂は不羈独立なもの、肉体一世の結合は彼若くば彼女の永久の存在を拘束することは出来ないのですから、先生の生前、先生は先生の道、あなたはあなたの路を別々に辿られたのも致方は無いもの、先生が肉の衣を脱がれた今日、私は金婚式でも金剛石婚式でもなく、第二の眞の結婚が御兩人の間に成就されん事を祈つて已まないのであります。悲哀を通して我々は浄められるのです。苦痛を経由して我々は智識に達するのです。敬愛する夫人よ、先生はあなたの良人御家族の父君で御出でしたが、また凡そ先生を信愛する者の総ての父でした。敬愛する夫人よ、あなたは今ヤスナヤ、ポリヤナ小王国の皇太后で御出ですが、同時にあなたを識る程の者の母君となられるのである事をお忘れなすつてはなりません。夫人、御安心なさい、あなたにお目にかゝった程の者は、誰かあなたの眞面目な而して勇敢な靈魂を尊敬せぬ者がありましよう乎。誰かあなたの故先生に対する愛の助勢によつて、人類に貢献された働を知らない者がありましよう乎。あなたがお出でなかつたら、先生が果して彼偉大なトルストイと熟された乎、否乎、分かります。先生が不朽である如く、あなたも不朽です。あなたは曾て自伝を書い

て居ると云うお話でした。あれは著々ちやぐちやぐ進行しつゝあることゝ思います。私は其面白
 かる可べき頁ページが覗のぞきたくてなりません。出版されたら、種々分明する事があると思
 います。我々一同に対してあなたは楯たての一面を示される義務があります。何卒どうぞ独得
 の真摯しんしと氣力とをもてあなたの御言おい分ぶんをお述べ下さい。我々一同其一日も早く出
 版されんことを待つて居る者であります。

五

きよう
 今日きようは七月の三日です。七年前の丁度ちやうど今日は、ヤスナヤ、ポリヤナで御厚遇ごこうぐを享
 けて居ました。其折お目にかゝった方々や色々の出来事を、私は如何様いかににはつきり
 と記憶して居るでしょう。正に今日でした、私は彼あのはなれからペンとインキを持ち
 出して、彼楓かえでの下かえでの食卓に居られる皆さんの署名を記念の為に求めました。其手帳
 は今私の手近にあります。私は開あけて見ました。皆みなある在焉れされき。先生のも、あなたののも、其
 他皆さんの手によつて署せられた皆さんの名が歴々として其処にあります。インキ
 もまだ乾かないかと思われるばかりです。然るに、想おもえば先生の椅子いすは最早もう永久に
 空しいのです。此頃かえでは楓の下かえでの彼食卓も嘸淋さへやみしいことでしょう。私はマウド氏の先
 生の伝を見て、オボレンスキー公爵夫人マリーさんも、私がお目にかゝつて間もな

く死去された事を知りました。私はマリーさんが大好きでした。最早あの方もホンの記憶になつてしまわれたのです。先頃莫斯克から歸つて來られた小西君に面会しました。小西君は彼哀しい出来事の少し前に先生に会われ、それから葬儀にも出られたそうです。然しあなたや御家族の事については、あまり知つて居られないのでした。多分伯アンドリウ君は御同居だろうと思います。ドウかよろしく、私は時々アンドリウ君の事を思うて居るとお伝え下さい。レオ君の御一家は聖彼得堡にお住いですか。ヤスナヤ、ポリヤナの園でトチ／＼歩みをして居られたお孫達も、最早大きなむすこさん達になられたでしょう。伯令嬢アレキサンドラは如何して居られますか。私は折々あのロンカの川辺で迷子になつて、令嬢を煩わして探しに來ていたゞいた事を憶い出します。ミハイル君は如何です。私は唯一度、それもホンの一寸会つたゞけですが、大層好きな方と思ひました。ジュリヤ嬢はとくにヤスナヤ、ポリヤナを去られたとか。マコギイツキー君は今何処に居られるでしょう？ スポーチン君は矢張りデユマの議員でお出ですか。オボレンスキー公爵と、鼻眼鏡をかけて居られる其母堂とは、御息災ですか。イリヤはまだ勤めて居ますか。曾て其人を私も手伝つて牧草を掻いた料理番の老細君は達者にして居ますか。

嗚呼彼の楓の下まつしろの雪白おほの布を覆うた食卓、其処に朝々サモルが來り喫む人のを待つて吟じ、其下の砂は白くて踏むに軟やわらかなあの食卓！ 先生は読み、あなたは縫うて居ら

れた彼露台バルコニー ゆうべの夕！

家の息達と令嬢とマンドリンを弾ひいて歌われた彼エランダの一

夜！ 彼ロシカの水浴！

彼涼すずしい、

而そうして木の葉の網目あみめを洩もる日光が金の斑点はんでんを

地に落すあの白樺しろがほの林の逍遙しょうよう！

先生も其処に眠ねつて居られる。記憶から記憶と群

がり来きつて果はしが無い。嗟ああ今一度なつかしいヤスナヤ、

ポリヤナに往いつて見みたい！

敬愛する夫人よ。私は長い手紙を書いてしまいました。最早こゝでペンを擱さしおかね

ばなりません。願ねがわくば神あなたの寂寥せきりようを慰なぐさめて力を与え玉たまわんことを。願ねがわくば

あなたの晩年ばんねんが、彼露西亞ろしあの美うつくしい夏の夕ゆふの様に穩ゆに美うつくしくあらんことを。終おわりに

臨のぞみ、私の妻もあなたの負おわれ負おわるゝ数々かずかずの重荷ゆうべに對し、真実御同情申まことごどうじょうまう上げる旨さしお、

呉々くれぐれも申しました。

一九一二年 七月三日

ヤスナヤ、ポリヤナと其記念を永久に愛する

安さん

乞食こじきも色々のが来る。春秋の彼岸しゅんじゆつ、三五月の節句せつく、盆ぼんなどには、服装なりも小ざつぱりした女等が子供おぶを負つて、幾組も隊をなして陽氣にやつて来る。何処どこから来るのかと聞いたたら、新宿しんじゆくからと云うた。浅草紙あさくさ、やす石鹼いしけんやす玩具おもちゃなど持て来るほんの申訳もうしわけばかりの商人実際のお貰もちいも少からず来る。喰くいつめた渡り職人、仕事にはなれた土方、都合次第で乞食こじきになったり窃盗せつとうになったり強盗きやうとうになったり追剥おいはぎになったりする手合も折々来る。曾てある秋の朝、つい門前もんぜんの雑木林ぞうきはやしの中でがさ／＼音がするので、ふつと見ると、昨夜此処に寝たと見えて、一人の古い印半纏しるしはんてんを着た四十ばかりの男が、眠ねむたい顔して起き上り、欠伸あくびをして往つて了うた。

一般的乞食の外に、特別名指しの金乞いも時々来る。やりたくても無い時があり、あつてもやりたくない時があり、二拍子揃ふたひょうしそろつて都合よくやる時もあり、ふかし甘藷いも二三本新聞紙に包つつんで御免を蒙る場合もある。然し斯様こんぜんな特別のは別にして、彼が村居六年の間に懇意こんいになった乞食が二人ある。仙さんせんと安さんやす。

仙さんは多少富裕な家の息子の果であろう。乞食になつても権高けんだかで、中々吾儘けんだかである。五分苳頭の面桶顔めんづつがお、柴栗を押つけた様な鼻と鼻にかゝる声が、昔の耽溺たんじきを語つ

て居る。仙さんは自愛家である。飲料には屹度湯をくれと云う。曾て昆布の出しがらをやったら、次ぎに來た時、あんな物をくれるから、醬油を損した上に下痢までした、と嘆つた。小婢一人留守して居る処に來ては、茶をくれ、飯をくれ、果てはお前の着て居る物を脱いでくれ、と強請つて、婢は一ちぐみになったことがある。主婦が仙さんの素生を尋ねかけたら、「乃公に喧嘩を売るのはか」と仙さんは血相を変えた。ある時やるものが無くて梅干をやったら、斯様なものと顔をしかめる。居合わした主人は、思わず勃然として、貰う者の分際で好悪を云う者があるか、と叱りつけたら、ブツ／＼云いながら受取つたが、門を出て五六歩行くと雑木林に投げ棄てゝ往つた。追かけて撲ちのめそうか、と思つたが、やつと堪えた。彼は此後仙さんを憎んだ。其後二度來たきり、此二三年は頓斗姿を見せぬ。

我強い仙さんに引易え、氣易の安さんは村でもうけがよい。安さんは五十位、色の浅黒い、眼のしよぼ／＼した、何処やらのつぺりした男である。安さんは馬鹿を作つて居る。夏着冬着ありたけの襦袢の十二一重をだらりと纏うて、破れしやつぽりのこともある。下駄を片足、藁草履を片足、よく跛曳いてある。曾て穿きふるしの茶の運動靴をやったら、早速穿いて往つたが、十日たゝぬ内に最早跣足で來た。江戸の者らしい。何時、如何な事情の下に乞食になつたか、余程話を引出そうとし

ても、中々其手に乗らぬ。唯床屋をして居たと云う。剃刀の磨ぐのでもありませんか、とある時云うた。主人の髻は六七年来放任主義であまりうるさくなると剪で切るばかりだし、主婦は嫁して来て十八年来一度も顔を剃ったことがないので、家は剃刀と云うものが無い。折角の安さんの親切も、無駄であつた。然し剃刀があつた処で、あの安さんの清潔な手では全く恐れ入る。

いつも門口に來ると、杖のさきでぱつ／＼と塵を掃く真似をする。其響を聞いたばかりで、安さんと分つた。「おゝそれながら……」と中音で拍子をとつて戸口に立つこともある。「春雨にイ……」と小声で歌うて來ることもある。ある時來たのを捉えて、箆で砂利を運ぶ手伝をさせ、五錢やつたら、其れから來る毎に「仕事はありませんか」と云う。時々は甘えて煙草をくれと云う。此家では喫まぬと云つても、忘れてはまた煙草をくれと云う。正直の仙さんは一剋で向張りが強く、智慧者の安さんは狡獪くて軟な皮をかぶつて居た。

夏は乞食の天国である。夏は我儕も家なンか厄介物を捨て、しもうて、野に寝、山に寝、日本国中世界中乞食して廻りたい氣も起る。夏は乞食の天国である。唯蚊だけが疵だが、至る処の堂宮は寢室、日蔭の草は茵、貯えれば腐るので家々の貰い物も自然に多い。ある時、安さんが田川の側に跪いて居るのを見た。

「何をして居るのかね、安さん？」

声をかけると、安さんは寢惚けた様な眼をあげて、

「エ、エ、洗濯をして」

と答えた。麦藁帽の洗濯をして居るのであった。処々の田川は彼の洗濯場で、また彼の浴槽であつた。

冬は惨だ。小屋かけ、木賃宿、其れ等に雨雪を凌ぐのは、乞食仲間でも威張つた手合で、其様な栄耀が出来ぬやからは、村の堂宮、畑の中の肥料小屋、止むなければ北をよけた崖の下、雑木林の落葉の中に、焚火を力にうとく一夜を明すのだ。そこでよく火事が起る。彼が隣の墓地にはもと一寸した閻魔堂があつたが、彼が引越して来る少し前に乞食の焚火から焼けて了うて、木の閻魔様は灰になり、石の奪衣婆ばかり焼け出されて、露天に片膝立てゝ恐い顔をして居る。鎮守八幡でも、乞食の火が陰呑と云うので、つい去年拝殿に嚴重な戸締りを設けて了うた。安さんの為に寢所が一つ無くなつたのである。それかあらぬか、近頃一向安さんの影を見かけなくなつた。

「安さんは如何したる？」

彼等はしばし斯く噂をした。

昨日婢が突然安さんの死を報じた。近所の女兒が斯く婢に云うたそうだ。

「安さんなア、安さんな内のお安さんが死んだ些前に、は、死んじまつたとよ」

近所のお安さんと云う娘が死んだのは、五月の初であつたから、乞食の安さんは桜の花の頃に死んだものと見える。

安さんは大抵^{たいてい}甲州街道南裏^{いなり}の稲荷^{いなり}の宮に住んで居たそうだ。埋葬^{まいざう}は高井戸でしたと云うが、如何^{どう}な臨終^{りんじゆう}であつたやら。

「あれで中々女が好きでね、女なんかゞ一人で物を持って往つてやるといけないつて、皆^{みんな}が云つてました」

と婢^{めかけ}が云うた。

安さんが死んだか。乞食の安さんが死んだか。

「死んで安心な様な、可哀^{かあい}想^{そう}な様な氣もちがしますよ」

主婦^{しゅふ}が云うた。

秋の野にさす雲の翳^{かげ}の様に、淡^{あわ}い哀^{かな}がすうと主人^{あるじ}の心を掠^{かす}めて過ぎた。

麦の穂稻穂

村の一年

一

都近このへんい此辺の村では、陽曆陰曆を折衷せつちゆうして一月おひ晩れで年中行事をやる。陽曆正月は村役場の正月、小学校の正月である。いさゝか神楽かぐらの心得ある若者連が、松の内の賑合にぎわいを見物かたゝゝ東京に獅子舞ししまいに出かけたり、甲州街道を紅白美々しく飾り立てた初荷の荷馬車が新宿さして軋きししたり、黒の帽子に紫の袈裟けさ、白足袋に高足駄の坊さんが、年玉を入れた萌黄もえぎの大風呂敷包を頸くびからつるして両手で抱かかえた草鞋わらじばかりの寺男を連れて檀家だんかの廻礼をしたりする外は、村は餅搗もちつくでもなく、門松一本立つるでなく、至極しじく平氣な一月である。唯農閑のうかんなので、青年の夜学がはじまる。井浚いんげんえ、木小屋の作事さくじ、屋根の葺き更え、農具の修繕しゅうぜんなども、此隙すきにする。日なたほこりくわで孫いじりにも飽いた爺の仕事は、唧ぎせるえ煙管の背手うしろでで、ヒョイひょいと野らの麦踏むぎふみ。若い者の仕事は東京行の下肥取りだ。寒中の下肥には、蛆うじが涌わかぬ。堆肥製造には

持て来いの季節、所謂寒練かんねりである。夜永の夜延べには、親子兄弟大きな炉側ろばたでコト／＼菓わらを擣うつては、俺おれア幾括いくぼだ卿おめえは何足かと競争しての縄綱なわない草履草鞋ぞうり作り。かみさんや娘は、油煙ゆえん立つランプの傍はたでぼろつき。兵隊に出て居る自家うちの兼公の噂も出よう。東京帰りに兄が見て来た都の嫁入車よめいぐるまの話もあろう。

都では晴はれの春着とうも夙に筆筒の中に入つて、歌留多会の手疵てきずも痕あとになり、お座敷ざしきつゞきのあとに大妓小妓のぐつたりとして欠伸あくびを噛かむ一月末が、村の師走しわすの煤掃すすはき、つゞいて餅搗もちつきだ。寒餅かんもちはわるくならぬ。水に浸ひたして置いて、年中の茶受ちやうけ、忙しい時の飯代り、多い家では二石も二石も搗く。縁者えんじや親類加勢し合つて、歌声賑うたごえやかに、東でもぼつたん、西でもどつたん、深夜の眠を驚かして、夜の十二時頃から夕方までも春く。陽暦で正月を済すましてとくに餅は食うてしもうた美的百姓びてきの家へ、にこ／＼顔の糸ちゃん春ちゃん朝飯前に牡丹餅ぼたんもちを持て来てくれる。辰爺じいさん家とこのは大きくて他家よその三倍もあるが、搗つきが細かで、上手に紅入の宝袋たからぶくろなぞ拵こぎえてよこす。下田の金さんとし処とこのは、餠あんは黒砂糖だが、手奇麗てきれいで、小奇麗な蓋物ふたものに入れてよこす。気取つたおかず婆さんからは、餠あんがお気に召すまいからと云つて、唯搗うき立てをちぎつたまゝで一重ひとじよこす。礼に往つて見ると、奥は正月前らしく奇麗に掃はかれて、土間どまにはちゃんと塩鮭しおさけの二枚もつるしてある。

二月は村の正月だ。松立てぬ家はあるとも、着物更えて長閑に遊ばぬ人は無い。甲州街道は木戸八錢、十錢の芝居が立つ。浪花節が入り込む。小学校で幻燈会がある。大きな天理教会、小さな耶蘇教会で、東京から人を呼んで説教会がある。府郡の技師が来て、農事講習会がある。節分は豆撒き。七日が七草。十一日が倉開き。十四日が左義長。古風にやる家も、手軽でやらぬ家もあるが、要するに年々昔は遠くなくなつて行く。名物は秩父風の乾風と霜解けだ。武蔵野は、雪は少ない。一尺の上も積るは稀で、五日と消えぬは珍らしい。ある年四月に入つて、二尺の余も積つたのは、季節からも、量からも、井伊掃部さん以来の雪だ、と村の爺さん達も驚いた。武蔵野は霜の野だ。十二月から三月一ぱいは、夥しい霜解けで、草鞋か足駄長靴でなくては歩かれぬ。霜枯れの武蔵野を乾風が颯々と吹きまくる。霜と風とで、人間の手足も、土の皮膚も、悉く輝赤ぎれになる。乾いた畑の土は直ぐ塵に化ける。風が吹くと、雲と舞い立つ。遠くから見れば正に火事の煙だ。火事もよくある。乾き切つた藁葺の家は、此上も無い火事の燃料、それに竈も風呂も藁屑をぼう／＼燃すのだからたまらぬ。火事の少ないのが寧ろ不思議である。村々字々に消防はあるが、無論間に合う事じゃない。夜遊び帰りの誰かが火を見つけて、「おゝい、火事だよウ」

と呼ぶ。「火事だつき、火事は何処だんべか、——火事だよ」と伝える。「火事だよ」「火事だアよう」彼方此方で消防の若者が聞きつけ、家に帰つて火事絆纏を着て、村の真中の火の番小屋の錠をあけて消防道具を持出し、わっしよいく駈けつける頃は、大概の火事は灰になつて居る。人家が独立して周囲に立木がある為に、人家櫛比の街道筋を除いては、村の火事は滅多に大火にはならぬ。然し火の粉一つ飛んだらば、必焼けるにきまつて居る。東京は火事があぶねえから、好い着物は預けとけや、と云つて、東京の息子の家の目ぼしい着物を悉皆預つて丸焼にした家もある。

梅は中々二月には咲かぬ。尤も南をうけた崖下の暖かい隈なぞには、ドウやらすると葦の一輪、紫に笑んで居ることもあるが、二月は中々寒い。下旬になると、雲雀が鳴きはじめる。チ、チ、チ、ドウやら雲雀が鳴いた様だと思つと、翌日は聞こえず、又の日いと明瞭に鳴き出す。あゝ雲雀が鳴いて居る。例令遠山は雪であろうとも、武蔵野の霜や氷は厚かろうとも、落葉木は皆裸で松の緑は黄ばみ杉の緑は鳶色に焦げて居ようとも、秩父風は寒かろうとも、雲雀が鳴いて居る。冴えかえる初春の空に白光りする羽たゞきして雲雀が鳴いて居る。春の驕喜は聞く人の心に湧いて来る。雲雀は麦の伶人である。雲雀の歌から武蔵野の春は立つのだ。

武蔵野に春は来た。暖い日は、甲州の山が雪ながらほのかに霞む。庭の梅の雪とこぼるゝ^{あたり}辺に耳珍しくも藪鶯の初音が響く。然しまだ冴え返える日が多い。三月もまだ中々寒い月である。初午には輪番に稲荷講の馳走。各自に米が五合に錢十五錢宛持寄つて、飲んだり食つたり驢を尽すのだ。まだくくと云うて居る内に、そろく畑の用が出て来る。落葉掻き寄せて、甘藷や南瓜胡瓜の温床の仕度もせねばならぬ。馬鈴薯も植えねばならぬ。

彼岸前の農家の一大事は、奉公男女の出代りである。田舎も年々人手が尠なく、良い奉公人は引張り合だ。近くに東京と云う大渦がある。何処へ往つても直ぐ錢になる種々の工場があるので、男も女も愚図々々云われると直ぐふいと出て往つて了う。寺本さんの作代は今年も勤続と云うが、盆暮の仕着せで九十円、彼様な好い作代なら廉いもんだ、と皆が羨む。亥太郎さんの末の子は今年十二で、下田さんの子守に月五十錢で雇われて行く。下唇の厚い久さんは、本家で仕事の暇を、大尽の伊三郎さん処で、月十日のきめで二十五円。石山さんが隣村の葬式に往つて居ると娘が駈けて来て、作代が逃げ出すと云うので、石山さんは遽で、葬式の間から尻引つかからげて作代引とめに走つて行く。勘さんの嗣子の作さんは草鞋ばきで女中を探してあ

るいて居る。些^{ちとよ}好^よさそうな養蚕^{かいこやと}傭^{よう}の女なぞは、去年の内に相談がきまつてしまふ。メレンスの半襟^{はんえり}一かけ、足袋の一足、窃^{そつ}と他の女中の袂^{たもと}にしをばせて、来年の餌^{えさ}にする家もある。其等の出代りも済んで、やれ一安心と息をつけば、最早彼岸だ。線香、花、水桶なぞ持った墓参^{はかまいり}が続々やつて来る。丸鬘^{まるまげ}や紋付は東京から墓参に來たのだ。寂しい墓場にも人声^{さび}がする。線香の煙が上る。沈丁花^{ちんちようけ}や赤椿^{あかつばき}が、竹筒^{たけづつ}に挿^さされる。新しい卒塔婆^{そとば}が立つ。緋^ひの袈裟^{けさ}かけた坊さんが畑の向うを通る。中日は村^{みちふしん}の路普請^{ろふしん}。遊び半分若者総出で、道側^{みちがはた}にさし出た木の枝を伐り払ったり、些^{ちと}ばかりの芝土を路の真中^{まんなか}に抛^{ほう}り出したり、路壞^{みちこわ}しか路普請^{ろふしん}か分からぬ。

四

四月になる。愈^{いよいよ}春だ。村の三月、三日には雛^{ひな}を飾る家もある。菱餅^{ひしもち}草餅^{くさもち}は、何家でも出来る。小学校の新学期。つい去年まで碌^{ろく}に口も利けなかつた近所の喜左坊^{きさぼう}が、兵隊帽子に新しいカバンをつるし、今日^{きょう}から小学第一年生だと小さな大手を振つて行く。五六年前には、式日^{しきじつ}以外女生^{はかま}の袴^{はかま}など滅多に見たこともなかつたが、此頃では日々の登校にも海老茶^{えびちや}が大分殖^ふえた。小学校に女教員が来て以来の現象である。桃^{もも}之^の天々^{ようよう}、其葉^{しん}蓁^{しん}々、桃の節句は昔から婚嫁^{こんか}の季節だ。村の嫁入婿取は多く此頃に

行われる。三日三晩村中呼んでの飲明のみあかしだの、「目出度めでた、めでたの若松様よ」の歌で十七荷かの嫁入荷物を練込ねりこむなどは、大々だいたいじん尽じんの家の事、大抵は万事手輕の田舎風、花嫁自身髪結の家から島田で帰つて着物を更え、車は贅沢ぜいたく、甲州街道まで歩いてガタ馬車で嫁入るなどはまだ好い方だ。足入れと云つてこつそり嫁を呼び、都合つこうの好い時あらためて腰入こし入れをする家もある。はずんだところで調布ちようふあたりから料理を呼んでの饗宴かうまいは、唯親類縁者まで、村方むらかた一同へは、婿は紋付で組内若くは親類の男に連れられ、軒別に手拭の一筋半紙の一帖も持つて挨拶に廻るか、嫁は真白に塗つて、搔卷かいまき程ほどの紋付の裾すそを赤い太い手で持つて、後見こうけんの婆さんばあかかみさんに連れられてお辞儀じぎをして廻れば、所謂顔見せの義理は済む。村は一月晩れでも、寺は案外陽曆で行くのがあつて、四月八日はお釈迦様の誕生会たんじようえ。寺々の鐘かねが子供を呼ぶと、爺とうか嬢かあか姉に連れられた子供が、小さな竹筒ちやくとうを提さげて、嬉々ききとして甘茶あまぢやを汲みに行く。

東京は桜の盛、車も通れぬ程の人出だつた、と麴町まで下肥しもこえひきに往つた音吉の話。村には桜は少いが、それでも桃が咲く、李すももが咲く。野はすみれ、たんぽぽ、春竜胆はるりんどう、草木瓜くさぼけ、薊あざみが咲き乱る。『木瓜薊みづから、旅して見たく野はなりぬ』忙せわしくなる前に、此花きせつの季節きせつを、御岳詣みだけまいり、三峰はななまいりかけて榛名詣はるなまいり、汽車と草鞋わらじで遊んで来る講中の者も少くない。子供連れて花見、潮干に出かける村のハイカラも稀にはある。浮かれて蝶ちようが舞いはじめる。意地悪いじわるの蛇も穴を出る。空では雲雀ひばりがますく勢よく鳴きつれる。

其れに喚び出される様に、麦がつい〜と伸びて穂に出る。子供がぴいーツと吹く麦笛に、武蔵野の日は永くなる。三寸になった玉川の鮎が、密漁者の手から窃と旦那の勝手に運ばれる。仁左衛門さん宅の大櫓が春の空を摩でて淡褐色に煙りそめる。雑木林の櫓が逸早く、櫓はやゝ晩れて、芽を吐きそめる。貯蔵の里芋も芽を吐くので、里芋を植えねばならぬ。月の終は、若葉の盛季だ。若々とした武蔵野に復活の生気が溢ち溢れる。色々の虫が生れる。田圃に蛙が泥声をあげる。水がぬるむ。そろ〜種籾も浸さねばならぬ。桑の葉がほぐれる。彼方も此方も養蚕前の大掃除、蚕具を乾したり、ばた〜苅をほいたり。月末には早い処では掃き立てる。蚕室をもつ家は少いが、何様な家でも少くも一二枚飼わぬ家はない。筍の出さかりで、孟宗藪を有つ家は、朝々早起きが楽だ。肥料もかゝるが、一反八十円から百円にもなるので、雑木山は追々孟宗藪に化けて行く。

五

五月だ。来月の忙さを見越して、村でも此月ばかりは陽暦で行く。大麦も小麦も見渡す限り穂になつて、緑の畑は夜の白々と明ける様に、総々とした白い穂波を漂わす。其が朝露を帯びる時、夕日に榮えて白金色に光る時、人は雲雀と歌声を競い

たくなる。五日は櫛餅かしもちの節句だ。目もさむる若葉の緑から、黒い赤い紙の鯉こいがぬう
 と出てほら／＼跳わたつて居る。五月五日は府中ふちゅう大國魂神社所謂六所様の御祭礼ごさいれい。新し
 い紺の腹掛、紺股引こんももひき、下ろし立てのはだし足袋たび、切り立ての手拭あじを願の下でチョッキ
 リ結びの若い衆が、爺おやじをせびつた小使の三円五円腹掛に捻ねじ込んで、四尺もある手製
 の杉ばちの撥かを担いで、勇いさんで府中に出かける。六所様には径六尺の上もある大太鼓が
 一個、中太鼓が幾個いくつがある。若い逞たくましい両腕が、撥と名づくる棍棒ちからまかで力任せに打つ
 音は、四里を隔て、寥々とろとろと遠雷の如く響くのである。府中の祭とし云えば、昔から
 阪東男の元氣任せに微塵みじんになる程御神輿の衝撞ぶつあい、太鼓の撥のたゝき合、十二時
 を合図あひずに燈明あかりと云う燈明を消して、真闇まつくらの中に人死が出来たり処女むすめが女おんなになったり、
 乱暴の限を尽したもののだが、警察の世話が届いて、此頃では滅多な事はなくなつた。
 落葉木らくようぼくは若葉から漸次青葉になり、杉松檜などの常緑木が古葉おとを落し落して最後
 の衣更ころもがえをする。田は紫雲英れんげそうの花ざかり。林には金蘭銀蘭の花が咲く。ぜんまいや、
 稀わらびに蕨わらびも立つが、滅多に見かえる者も無い。八十八夜だ。其れ茶も摘つまねばなら
 ぬ。茶は大抵葉たいていのまゝで売るので。隠元いんげん、玉蜀黍とうもろこし、大豆も蒔まかねばならぬ。降つて
 来そうだ。桑は伐きつたか。桑つきが悪いはお蚕様こさまが如何ぞしたのじやあるまいか。
 養蚕教師ようさんきょうしはまだ廻つて来ないか。種粳たねもみは如何した。田の荒あらおこしもせねばならぬ。
 苗代ひろか掻かきもせねばならぬ。最早わ早生の陸稻おかほも蒔かねばならぬ。何かと云う内、胡瓜きゅうり、

南瓜、甘藷や茄子も植えねばならぬ。稗や黍の秋作も蒔かねばならぬ。月の中旬には最早大麦が色づきはじめる。三寸の緑から鳴きはじめた麦の伶人の雲雀は、麦が熟れるぞ、起きろ、急げと朝未明から囀る。折も折とて徴兵の検査。五分苅頭で紋付羽織でも引かけた体は遅しく顔は子供とした若者が、此村からも彼村からも府中に集まる。川端の嘉ちゃん甲種合格だつてね、俺が家の忠はまだ抽籤は済まねえが、海軍に採られべつて事だ、俺も稼げる男の子はなし、忠をとられりや作代でも雇うべい、国家の為だ、仕方が無えな、と与右衛門さんが舌鼓うつ。下田の金さん宅では、去年は兄貴が抽籤で免れたが、今年は稲公が彼体格で、砲兵にとられることになった。当人は勇んで居るが、阿母が今から萎れて居る。

頓着なく日は立つて行く。わかれ霜を氣遣うたは昨日の様でも、最早春蟬が鳴き出して青葉の蔭がそろそろ恋しい日もある。詩人が歌う緑蔭幽草白花を点するの時節となつて、畑の境には雪の様に卵の花が咲きこぼれる。林端には白いエゴの花がこぼれる。田川の畔には、花菱が芳しく咲き乱れる。然し見かえる者はない。大切の大切のお蚕様が大きくなって居るのだ。然し月の中に一度電祭だけは屹度鎮守の宮です。甲武の山近い三多摩の地は、甲府の盆地から発生する低気圧が東京湾へぬける通路に當つて居るので、雹や雷雨は名物である。秋の風もだが、春暮初夏の雹が殊に恐ろしいものになつて居る。雹の通る路筋はほゞきまつて居る。大抵上流

地から多摩川に沿うて下り、此辺の村を掠めて、東南に過ぎて行く。既に五年前もおとな、こふしほど成人の拳大の恐ろしい雹を降らした。一昨年も唯十分か十五分の間に地が白くなる程降つて、場所によつては大麦小麦は種も残さず、桑、茶、其外青物一切全滅した処もある。可なりの生活をして居ながら、銭になると云えば、井浚えでも屋根葺の手伝でも何でもする隣字の九右衛門爺さんは、此雹に畑を見舞われ、失望し切つて蒲団をかぶつて寝てしもうた。ゾラの小説「土」に、ある慾深の若い百姓が雹に降られて天に向つて拳をふり上げ、「何ちゆう事をしくさるか」と怒鳴るところがあるが、無理はない。此辺では「雹乱」と云つて、雹は戦争よりも恐れられる。そこで雹祭をする。榛名様に願をかける。然し榛名様も、鎮守の八幡も、如何ともしかね玉う場合がある。出水の患が無い此村も、雹の賜物は折々受けねばならぬ。村の天に納める租税である。

六

六月になつた。麦秋である。「富士一つ埋み残して青葉かな」其青葉の青闇い間々を、熟れた麦が一面日の出の様に明るくする。陽暦六月は「農政五月急於弦」と云う農家の五月だ。農家の戦争で最劇戦は六月である。六月初旬は、小学校も臨

時農繁休のうはんきゅうをする。猫の手でも使いたい時だ。子供一人、ドウして中々馬鹿にはならぬ。初旬には最早もうちうかい蚕かいこが上るのだ。中旬には大麦、下旬には小麦を苜かるのだ。

最早梅雨つゆに入つて、じめくした日がつく。簑笠みのかさで田も植えねばならぬ。畑勝はたが

ちの村では、田植は一仕事、「植田うえたをしまうとさばくするね」と皆が云う。雨間あまま

を見ては、苜り残りの麦も苜らねばならぬ。苜りおくれると、畑の麦が立つたまゝ

に粒から芽をふく。油断を見すまして作物其方退けに増長して来た草もとらねばならぬ。甘藷さつまいもの蔓つるもかえさねばならぬ。陸稻おかほや黍きび、稗ひえ、大豆の中耕ちゅうこうもしなければならぬ。二番茶も摘つまねばならぬ。お屋敷に叱しかられるので、東京の下肥しもえひきにも行かねばならぬ。時も時とて飯料はんりょうの麦をきらしたので、水車に持て行つて一晚寝ひとほんねずの番をして搗ういて来ねばならぬ。最早甲州の繭買まかいが甲州街道に入り込んだ。今年は値ねが好

くて、川端かわはたの岩さん家では、四円十五銭に売つたと云う噂うわさが立つ。隣村の浜田さん

も繭買をはじめた。工女の四五人入れて足踏器械あしふみきかいで製糸をやる仙ちゃん、長さんも、

即座師そくざしの鑑札を受けて繭買をはじめた。自家うちのお春つ子お兼つ子に一貫目何銭いっかんめの搔か

き賃せをくれて、大急ぎで搔いた繭を車に積んで、重い車を引張つて此処其処相場そうばを

聞き合わせ、一銭でも高い買手をやつと見つけて、一切合切屑繭いっさいがつついぐすまゆまで売つてのけて、

手取てとりが四十九円と二十五銭。夜の目も寝ずに五十両たらずかと思つても、矢張やはりまと

まった金だ。持て帰つて、古筆筒ふるだんすの奥にしまつて茶一ぱい飲むと直ぐ畑に出なければ

ばならぬ。

空ではまだ雲雀が根気よく鳴いて居る。村の木立の中では、何時の間にか栗の花が咲いて居る。田圃の小川では、葭切が口やかましく終日騒いで居る。杜鵑が啼いて行く夜もある。梟が鳴く日もある。水鶏がコト／＼た／＼宵もある。螢が出る。蟬が鳴く。蛙が鳴く。蚊が出る。ブヨが出る。蠅が真黒にたかる。蚤が跋扈する。カナブン、瓜蠅、テントウム虫、野菜につく虫は限もない。皆生命だ。皆生きねばならぬのだ。到底取りきれぬ事ではないが、うつちやつて置けば野菜が全滅になる、取れるだけには取らねばならぬ。此方も生きねばならぬ人間である。手が足りぬ。手が足りぬ。自家の人数ではやりきれぬ。果ては甲州街道から地所にはなれた百姓を雇うて、一反何程の請負で、田も植えさす、麦も蒔らす。それでもまだやり切れぬ。墓地の骸骨でも引張り出して来て使いたい此頃には、死人か大病人の外は手をあけて居る者は無い。盲目の婆さんでも、手さぐりで茶位は沸かす。豌豆や隠元は畑に数珠生りでも、もいで煮て食う暇は無い。如才ない東京場末の煮豆屋が鈴を鳴らして来る。飯の代りに黍の餅で済ます日もある。近い所は、起きぬけに朝飯前の朝作り、遠い畑へはお春つ子が片手に大きな菜罐、片手に茶受の里芋か餅かを入れた風呂敷包を重そうに提げ、小さな体を歪めてお八つを持って行く。斯季節に農家を訪えば大抵は門をしめてある。猫一足居ぬ家もある。何を問うても、くる／＼とした眼

を睜^{みは}つて、「知ンねエヤ」と答うる五六歳の女の子が赤ン坊^{ぼう}と唯二人留守して居る家もある。斯^こ様な時によく子供の大怪^{おおけ}我^ががある。家の内は麦^{のけ}の芒^{のけ}だらけ、墓地は草だらけで、お寺や教会では坊さん教師が大欠^{おおあくび}伸^びして居る。後生^{ごせい}なんか願^{ねが}うて居る暇^{ひま}が無いのだ。

七

忙^{せわ}しい中に、月は遠慮^{えんりよ}なく七月に入る。六月は忙^{せわ}しかつたが、七月も忙^{せわ}しい。忙^{せわ}しい、忙^{せわ}しい。何度云うても忙^{せわ}しい。日は永くても、仕事は終^おえない。夜は短^{みじ}くてもおち／＼眠^ねることが出来ぬ。何処^{どこ}の娘も赤い眼をして居る。何処^{どこ}のかみさんも、半病人^{はんびょうにん}の蒼^{あお}い顔をして居る。短氣^{たんき}の石山^{いしやま}さんが、鈍^{どん}な久^{ひさ}さんを慳^{けん}貪^{どん}に叱^{しか}りつける。「車の心棒^{しんぼう}は鉄^{かね}だが、鉄^{かね}だアて使^{つか}や耗^へるからナ、俺^{おれ}ア段々^{かたかた}稼^{かせ}げなくなるのも無理はねえや」と、小男^{こおとこ}ながら小氣味^{こきみ}よく稼^{かせ}ぐ辰爺^{たつぢ}さんがこぼす。「違^{ちが}ねえ、俺^{おれ}ア辰^{ぢん}さんよか年の十も下だンベが、何糞^{なんくそ}ツ若^もけ者に負けるもんかつてやり出して、第一息^{いき}がつゝかんからナ」と岩^{がん}畳^{じよう}づくりの与右衛門^{よゑもん}さんが相槌^{あいづち}をうつ。然し耗^へつても錆^さびても、心棒^{しんぼう}は心棒^{しんぼう}だ。心棒^{しんぼう}が廻^{まわ}わらぬと家が廻^{まわ}わらぬ。折角^{せつかく}苳^かり入^いれた麦^{てん}も早^さく扱^あいて撲^ぶつて俵^はにしなければ蝶々^{ちようちよう}になる。今日も雨かと思うたりや、さあお天道^{てんどう}様が

出なさつたぞ、皆来うと呼ばつて、胡麻塩頭に向鉢巻、手垢に光るくるり棒押取つて禾場に出る。それつと子供が飛び出す。兄が出る。弟が出る。嫁が出る。娘が出る。腰痛でなければ婆さんもある。奇麗に掃いた禾場に一面の穂麦を敷いて、男は男、女は女と相並んでの差向い、片足踏出し、気合を入れて、一上一下とかわるく打下ろす。男は股引に腹かけ一つ、黒鉢巻の経木真田の帽子を阿弥陀にかぶつて、赤銅色の逞しい腕に撚をかけ、菅笠若くは手拭で姉様冠りの若い女は赤襷手甲がけ、腕で額の汗を拭きく、くるり棒の調子を合わして、ドウ、ドウ、バツタ、バツタ、時々群の一人が「ヨウ」と勇みを入れて、大地も挫げと打下ろす。「お前さんとならばヨウ、何処までもウ、親を離れて彼世までもウ」若い女の好い声が歌う。「コラコラ」皆が囁す。禾場の日はかんく照つて居る。くるり棒がぴかりと光る。若い男女の顔は、熟した桃の様に紅光つて居る。空には白光りする岩雲が堆く湧いて居る。

七月中旬、梅雨があけると、真剣に暑くなる。明るい麦が取り去られて、田も畑も緑に返える。然し其は春暮の嫩らかな緑では無い、日中は緑の焰を吐く緑である。朝夕は蜩の声で涼しいが、昼間は油蟬の音の煎りつく様に暑い。涼しい草屋でも、九十度以上ある日がある。家の内では大抵誰も裸体である。畑ではズボラの武太さんは、一寸で陸稲のサクを切つて居る。十五六日は、東京のお盆で、此処其処に藪入姿の小さな白足袋がある。甲州街道の馬車は、此等の小僧さんで満員である。

暴風にも静な中心がある。忙しい農家の夏の戦闘にも休戦の期がある。

七月末か、八月初か、麦も仕舞い、草も一先ず取りしもうた程よい頃を見はからつて、月番から総郷上り正月のふれを出す。総郷業を休み足を洗うて上るの意である。其期は三日。中日は村総出の草苅り路普請の日とする。右左から恣に公道を侵した雑草や雑木の枝を、一同磨ぎ耗らした鎌で遠慮会釈もなく切払う。人よく道を弘むを、文義通りやるのである。慾張と名のある不人望な人の畑や林は、此時こそ思い切り切りまくる。昔は兎に角、此の頃では世の中せち辛くなつて、物日にも稼ぐことが流行する。総郷上り正月にも、畑に田にぼつ／＼働く影を見うける。

八月は小学校も休業だ。八月七日は村の七夕、五色の短冊上げた笹を立つる家もある。やがて于蘭盆会。芋殻のかわりに麦からで手軽に迎火を焚いて、それでも盆だけに墓地も家内も可なり賑合い、緋の袈裟をかけた坊さんや、仕着せの浴衣単衣で藪入に行く奉公男女の影や、断続して来る物貰いや、盆らしい気もちを見せて通る。然し斯貧しい小さな野の村では、昔から盆踊りと云うものを知らぬ。一年中で一番好い水々しい大きな月が上つても、其れは断片的に若者の歌を囀るばかりであ

る。まるくとした月を象どる環を作つて、大勢の若い男女が、白い地を踏み、黒い影を落して、歌いつ踊りつ夜を深して、傾く月に一人減り二人寝に行き、到頭「五人に月落ちかゝる踊かな」の趣は、此辺の村では見ることが出来ぬ。

夏蚕を飼う家はないが、秋蚕を飼う家は沢山ある。秋蚕を飼えば、八月はまだ忙しい月だ。然し秋蚕のまだ忙しくならぬ隙を狙つて、富士詣、大山詣、江の島鎌倉の見物をして来る者も少くない。大山へは、夜立ちして十三里日着きする。五円持て夜徹し歩るき、眠たくなれば堂宮に寝て、唯一人富士に上つて来る元気な若者もある。夏の命は日と水だ。照らねばならず、降らねばならぬ。多摩川遠い此村里では、水害の患は無いかわり、旱魃の恐れがある。大抵は都合よく夕立が来てくれる。雨乞は六年間に唯一度あつた。降つて欲しい時に降れば、直ぐ「おしめり正月」である。伝染病が襲うて来るも此月だ。赤痢、窒扶斯で草葺の避病院が一ぱいになる年がある。真白い診察衣を着た医員が歩く。大至急清潔法施行の布令が来る。村の衛生係が草鞋ばきの巡査さんと溷、掃溜を見てあるく。其巡査さんの細君が赤痢になつたと云う評判が立つ。鉦や太鼓で念仏唱えてねりあるき、厄病禳いする村もある。

其様な騒ぎも何時しか下火になつて、暑いくと云う下から、ある日秋蟬がせわしく鳴きそめる。武蔵野の秋が立つ。早稲が穂を出す。尾花が出て覗く。甘藷を手

掘りすると、早生は赤児あかごの腕程になつて居る。大根、漬菜つけなを蒔かねばならぬ。蕎麦、秋馬鈴薯もそろ／＼蒔かねばならぬ。暫く緑一色であつた田は、白っぽい早稲の穂の色になり、畑では稗ひえが黒く、黍きびが黄に、粟あひろが褐色に熟れて来る。粟や黍は餅もちにしてもまだ食える。稗は乃木さんでなければ中々食えぬ。此辺では、米を非常、挽割ひきわりむぎ麦を常食にして、よく／＼の家でなければ純稗じゆんひえの飯は食わぬ。下肥しもじえひきの弁当に稗の飯でも持つて行けば、冷たい稗はザラ／＼して咽のどを通らぬ。湯でも水でもぶっかけてぎぶ／＼流し込むのである。若い者の楽たのしみの一は、食う事である。主人は麦を食つて、自分に稗を食わした、と忿いつて飛び出した作代さくだいもある。

九

九月は農家の厄月やぐつき、二百十日、二百二十日を眼の前に控えて、朔日ついたちには風祭なるとをする。麦桑むぎとうに雹ひょうを気づかつた農家は、稲に風を気づかわねばならぬ。九月は農家の鳴戸なるどの瀬戸だ。瀬戸を過ぐれば秋の彼岸ひがふ。蚊帳かやを仕舞う。おかみや娘よなべの夜延よなべ仕事しごとが忙しくなる。秋の田園詩人の百舌鳥もずが、高い栗の梢から声高々と鳴きちぎる。栗が笑えむ。豆の葉が黄ばむ。雁来紅けいとうが染そむを相図あひづに、夜は空高く雁かりの音おとがする。林の中、道草の中、家の中まで入り込んで、虫と云う虫が鳴き立てる。早稲が黄ろくなりそめる。

蕎麦の花は雪の様だ。彼岸花と云う曼珠沙華は、此辺に少ない。此あたりの彼岸花は、萩、女郎花、嫁菜の花、何よりも初秋の榮を見せるのが、紅く白く沢々と紺総を靡かす様な花薄である。子供が其れを剪つて来て、十五夜の名月様に上げる。萱は葺料にして長もちするので、小麦からの一束五厘に對し、萱は一錢も其上もする。そこで萱野を仕立て、置く家もある。然し東京がますます西へ寄つて来るので、萱野も雑木山も年々減つて行くばかりである。

九月は農家の祭月、大事な交際季節である。風の心配も兎やら恙うやら通り越して、先收穫の見込がつくと、何処の村でも祭をやる。木戸銭御無用、千客万来の芝居、お神樂、其れが出来なければ詮方無しのお神酒祭。今日は粕谷か、明日は廻沢鳥山は何日で、給田が何日、船橋では、上下祖師ヶ谷では、八幡山では、隣村の北沢では、と皆が指折数えて浮き立つ。彼方の村には太鼓が鳴る。此方の字では舞台がけ。一村八字、寄合うて大きくやればよさそうなもの、八つの字には八つの意志と感情と歴史があつて、二百戸以上の鳥山はもとより、二十七戸の粕谷でも、十九軒の八幡山でも、各自に自家の祭をせねば気が済まぬ。祭となれば、何様な家でも、強飯を蒸す、煮染をこさえる、鰻鮓をうつ、甘酒を作つて、他村の親類縁者を招く。東京に縁づいた娘も、子を抱き亭主や縁者を連れて来る。今日は此方のお神樂で、平生は真白な鳥の糞だらけの鎮守の宮も真黒になる程人が寄つて、安小間物屋、駄

菓子屋、鮎屋^{すしや}、おでん屋、水菓子屋などの店が立つ。神楽は村の能狂言^{のつきようげん}、神官が家元で、村の器用な若者等が神楽師^{かぐらし}をする。無口で大兵の鉄さんが気軽に太鼓をうったり、気軽の亀さんが髪髯蓬々^{かみひげぼうぼう}とした面をかぶって真面目に舞台に立ちほだかる。「あ、ありや亀さんだよ、まア」と可笑^{おか}しざかりのお島がくつ／＼笑う。今日自家の祭酒に酔うた仁左衛門さんが、明日は隣字の芝居で、透綾^{すきや}の羽織でも引被^{ひつか}け、寸志の紙包^{かみづつみ}を懷中して、芝居へ出かける。毎日近所で顔を合して居ながら、畑^{くろ}の畔^{はた}の立話にも、「今日は」「今日は」と抑天氣^{おそ}の挨拶^{あいさつ}からゆる／＼とはじめる田舎^{いなか}氣質^{かたぎ}で、仁左衛門さんと隣字の幹部の忠五郎さんとの間には、芝居^{しばい}の科白^{せりふ}の受取渡しよろしくと云う挨拶^{あいさつ}が鄭重^{ていちょう}に交換^{こうかん}される。輪番^{りんぱん}に主になったり、客になったり、呼びつ喚ばれつ、祭は村の親睦会だ。三多摩は昔から人の氣の荒い処で、政党騒ぎではよく血の雨を降らし、氣の立った日露戦争時代は、農家の子弟が面籠手^{こて}かついで調布まで一里半撃劍の朝稽古に通ったり柔道を習ったりしたものだ、六年前に一度粕谷八幡山対烏山の間に大喧嘩^{おおげんか}があつて、仕込杖^{しこみづえ}が光つたり怪我人が出来たり長い間揉めくつた以来、此と云う喧嘩の沙汰も聞かぬ。泰平有象村々酒^{たいへいしやうありせんそんのさけ}。祭が繁昌すれば、田舎は長閑^{のどか}である。

十月だ。稲の秋。地は再び黄金の穂波が明るく照り渡る。早稲から米になつて行く。性急に百舌鳥が鳴く。日が短くなる。赤蜻蛉が夕日の空に数限りもなく乱れる。柿が好い色に照つて来る。ある寒い朝、不図見ると富士の北の一角に白いものが見える。雨でも降つたあとの冷たい朝には、水霜がある。

十月は雨の月だ。雨がつゞいたあとでは、雑木林に茸が立つ。野ら仕事をせぬ腰の曲つた爺さんや、赤児を負つたお春つ子が、箆をかくて採りに来る。櫓茸、湿地茸、稀に紅茸、初茸は滅多になく、多いのが油坊主と云う茸だ。一雨一雨に気は冷えて行く。田も林も日にくく色づいて行く。甘藷が掘られて、続々都へ運ばれる。田舎は金が乏しい。村会議員の石山さんも、一銭違ふと謂うて甲州街道の馬車にも烏山から乗らずに山谷から乗る。だから、村の者が甘藷を出すにも、一貫目につき五厘も値がよければ、二里の幡ヶ谷に下ろすより四里の神田へ持つて行く。

茶の花が咲く。雑木林の櫓に絡む自然薯の蔓の葉が黄になり、藪からさし出る白膠木が眼ざむる様な赤になつて、お納戸色の小さなコップを幾箇も列ねて竜胆が咲く。櫓の木の下は、ドングリが箆で掃く程だ。最早豌豆や蚕豆も時かねばならぬ。蕎麦も霜前に苳らねばならぬ。また其れよりも農家の一大事、月の下旬から来月初旬にかけて、最早麦蒔きはじまる。後押しの人二人もついて、山の如く堆肥を積ん

だ車が頻しきりに通る。先ず小麦を蒔いて、後に大麦を蒔くのである。奇麗なだに平した畑は
ひとすじ
一条一条丁寧に尺竹をあて、縄しやくだけずりして、真直ぐに西から東へ畝うねを立て、堆肥を置
いて土をかけ、七蔵が種を振ふれば、赤兎を負った若いかみさんが竹杖たけづえついて、片足
かわりに南から北へと足で土をかけて、奇麗に踏んづけて行く。燠炭くんだん肥料の、条播すじまき
のと、農会の勧誘かんゆうで、一二年やって見ても、矢張仕来りの勝手がよい方でやって行
くが多い。

十一

霜らしい霜は、例年明治天皇の天長節てんちようせつ、十一月三日頃に来る。手を浄きよめに前夜雨
戸をあくれば、鍼はり先を吹つかくる様な水氣すいきが面を撲うつて、遽あわてもぐり込む蒲団の
中でも足の先が縮ちぢこまる程いやに冷たい、と思うと明くる朝は武蔵野一面の霜だ。
草屋根と云わず、禾場うちばと云わず、檐下のきしたから転び出た木白の上と云わず、出し忘れた
物干竿の上のつぎ股引もものきと云わず、田も畑も路も鳥からすの羽の上までも、真白だ。日が出
ると、晶々やわやわとした白金末まうになり、紫水晶末になるのである。山風をあらしと云えば
霜の威力を何に譬たとえよう？ 地の上の白火事しろかじとでも云おう。大抵のものは爛ただれてし
まう。桑と云う桑の葉は、ぐつたりとなつて、二日もすれば、齒がぬける様にひと

りでにぼろりと落ちる。生々として居た甘藷の蔓は、唯一夜に正しく湯煎られた様に凋れて、明くる日は最早真黒になり、触ればぼろ／＼の粉になる。シャンとして居た里芋の茎も、ぐっちゃりと腐った様になる。畑が斯うだから、園の内も青い物は全滅、色ある物は一夜に爛れて了うのである。霜にめげぬは、青々とした大根の葉と、霜で甘くなる漬菜の類と、それから緑の縞を土に織り出して最早ぼつ／＼生えて来た大麦小麦ばかりである。

霜は霽に伴う。霜の十一月は、日本晴の明るい明るい月である。富士は真白。武蔵野の空は高く、たゞげばカン／＼しそうな、碧瑠璃になる。朝日夕日が美しい。月や星が冴える。田は黄色から白茶になつて行く。此処其処の雑木林や村々の落葉木が、最後の榮を示して黄に褐に紅に照り渡る。緑の葉の中に、柚子が金の珠を掛ける。光明は空から降り、地からも湧いて来る。小学校の運動会で、父兄が招かれる。村の恵比寿講、白米五合銭十五銭の持寄りで、夜徹の食つたり飲んだり話したりがある。日もいよ／＼短くなる。甘藷や里芋も掘つて、土窖に藏わねばならぬ。中稲も苺らねばならぬ。其内に晩稲も苺らねばならぬ。でも、夏の戦鬪に比べては、何を云つても最早しめたものである。朝霜、夜嵐、昼は長閑な小春日がつゞく。「小春日や田舎に廻る肴売」。「鯉は？ 鯉？」「秋刀魚や秋刀魚！」のふれ声が村から村を廻つてある。牛豚肉は滅多に食わず、川魚は少し、稀に鰯に吸われた鶏でも食え

ば骨^{ほね}までたゝいて食い、土の物の外は大抵塩^{しお}鮭^{さけ}、めざし、棒鱈^{ぼうたろ}にのみ海の恩恵を知る
 農家も、斯^{こん}様な時には炙^{あぶ}れば青い焰^{ほのお}立つ脂^{あぶ}ぎつた生魚^{なまづき}を買^かつて舌鼓^{したつづみ}うつのである。
 月の末^{すえ}方には、除隊^{すえがた}の兵士が帰^{かへ}つて来る。近衛^{あざむがわ}か、第一師団^{あざむがわ}か、せめて横須賀^{よこすか}賀^が位^{ぐわい}な
 らまだしも、運悪^{うんあく}く北海道三^{あさひがわ}界旭川^{あさひがわ}へでもやられた者は、二年ぶり三年ぶりで帰^{かへ}つて来
 るのだ。親類^{しんるい}縁者^{えんじや}は遠出^{えんしゅ}の出迎^{でむかひ}、村では村内少年音楽隊^{むらうちうねんがくたい}を先に立て、迎何^{むかひ}々君^{きみ}之^の帰還^{きかんと}
 の旗押^{はし}立てゝ、村界^{むらかい}まで迎^{むかひ}いに出^でかける。二年三年の兵営生活^{へいえいせい}で大分^{おほぶん}世慣^{よな}れ人^{ひと}ずれ
 て来た丑^{うし}之助^{しすけ}君^{きみ}が、羽織袴^{はおりばく}、靴^{くつ}、中折帽^{なかつしやうぼう}、派手^{はで}をする向^{むか}きは新調^{しんてう}のカーキ^{カーキ}服^{ふく}にギユ
 ウ／＼云^いう磨^こき立^{たて}ての長靴^{ながくつ}、腰^{こし}の淋^{さび}しいのを氣^きにしな^{かえ}がら、胸^{むね}に真新^{まあた}しい在郷軍人^{ざいしやうぐんじん}
 徽章^{きしやう}をつるして、澄^{きよ}まし返^{かへ}つて歩^{ある}いて来る。面々^{めんめん}各自^{各自}の挨拶^{あいさつ}がある。鎮守^{ちんしゅ}の宮^{みや}にね
 り込^こんで、取^とりあえず神酒^{かみいづ}一^{いっ}献^{けん}、古顔^{こがん}の在郷軍人^{ざいしやうぐんじん}か、若者頭^{わかしゅ}の音頭^{おんど}で、大日本帝国^{だいにっぽんていこく}
 天皇陛下^{てんかうへいか}、大日本帝国陸海軍^{だいにっぽんていこくりくかいぐん}、何々丑^{なんなんうし}之助^{しすけ}君^{きみ}の万歳^{ばんざい}がある。丑^{うし}之助^{しすけ}君^{きみ}が何々有志諸^{しゆししよ}
 君^{きみ}の万歳^{ばんざい}を呼^よぶ。其^{その}れから丑^{うし}之助^{しすけ}君^{きみ}を宅^{たく}へ送^{おく}つて、いよく飲^の食^くだ。赤^{あか}の飯^{いひ}、刻^き鰯^{みづ}
 莧^{こん}里芋^{りいも}蓮根^{れんこん}の煮^に染^{しめ}、豆腐^{とうふ}に芋^{いも}の汁^{じゆ}、はずんだ家^かでは菰^{こも}冠^{かん}りを一^{いっ}樽^{どん}とつて、主^まも客^{きやく}も
 芽出^め度^{たい}と云^いつて飲^のみ、万歳^{ばんざい}と云^いつては食^くい、満腹^{まんぷく}満足^{まんじく}、真赤^{まっか}になつて祝^{いわ}うのだ。二
 三日^{さんじつ}すると帰^{かへ}り新参^{しんさん}の丑^{うし}之助^{しすけ}君^{きみ}が、帰^{かへ}つた時の服装^{ふくさう}で神妙^{しんみょう}に礼廻^{れいまい}りをする。軒別^{けんべつ}に
 手拭^{てふき}か半紙^{はんし}。入^い営^{えい}に餞別^{せんべつ}でも貰^{もら}つた家^かへは、隊名^{たいめい}姓名^{せいせい}を金文字^{きんもじ}で入^いれた盃^{さかづき}や塗盆^{ぬりぼん}を
 持^も参^{まゐ}る。兵士^{へいし}一人出^です家^かの物入^{ものいり}も大抵^{たいてい}では無^ない。

兵隊さんの出代り^{でがわ}で、除隊を迎えると、直ぐ入営送りだ。体格がよく、男の子が多くて、陸海軍拡張の今日と来て居るので、何れの字からも二人三人兵士を出さぬ年は無い。白羽^{しらば}の箭が立った若者には、勇んで出かける者もある。抽籤^{くじ}を遁^{のが}れた礼参りに、わざ／＼鴻^{こう}の巢^{すざい}在の何宮さんまで出かける若者もある。二十歳^{はたち}前後が一番百姓仕事に実^みが入る時ですから、とこぼす若い爺^{とう}さんもある。然し全国皆兵の今日だ。一人息子でも、可愛息子でも、云い聞かされた「国家の為」だ、出せとあつたら出さねばならぬ。出さぬと云つたら、お上に済まぬ。近所に済まぬ。そこで父の右腕^{みぎで}、母のおもい子の岩吉も、頭は五分刈、中折帽、紋付羽織、袴、靴^{りゆう}、凜^{りゆう}とした装^{なり}で、少しは怯^{おどろ}々した然^すし澄^すました顔をして、鎮守の宮^{みや}で神酒^{みき}を飲まされ、万歳の声と、祝入營の旗五六本と、村楽隊と、一字総出の戸主連に村はずれまで見送られ、知らぬ生活に入る可く往つてしまふ。二三日、七八日^{ななようか}過ぐると、軒別^{にゆうえいずみ}に入営済の御礼のはがきが来る。

十二

兵隊さんの出代りを村の一年最後の賑合にして、あとは寂^{さび}しい初冬の十二月に入る。

「稼取 平野潤」
かおさまつてへいやひろし
もしとり

晩稲も刈られて、田圃も一望ガランとして居る。畑の桑は一株ずつ
髻を結われる。一束ずつ奇麗に結わえた新葉は、風よけがわりにずらりと家の周囲
にかけられる。ざら／＼と稲を扱く音。カラ／＼と唐箕車を廻す響。大根引、漬菜
洗い、若い者は真赤な手をして居る。昼は北を囲うた南向きの小屋の蓆の上、夜は炉
の傍で、かみさんはせつせと股引、足袋を繕う。夜は晩くまで納屋に糶ずりの響が
する。突然にざあと時雨が来る。はら／＼と底をうって霰が来る。ちら／＼と風花
が降る。北から風が吹いて来て、落葉した村の木立を騒々しく鳴らす。乾いた落葉
が、遽で、カラカラと舞い奔る。箒を逆に立てた様な雑木山に、長い鋸を持った樵夫
が入って、唧え煙管で櫓や櫓を薪に伐る。海苔疎朶を積んだ車が村を出る。冬至ま
では、日がます／＼つまって行く。六時にまだ小暗く、五時には最早闇い。流しも
とに氷が張る。霜が日に／＼深くなる。

十五日が世田ヶ谷のボロ市。世田ヶ谷のボロ市は見ものである。松陰神社の入
口から世田ヶ谷の上宿下宿を打通して、約一里の間は、両側にずらり並んで、農家
日用の新しい品々は素より、東京中の煤掃きの塵箱を此処へ打ち明けた様なあらゆ
る檻樓やガラクタをずらりと並べて、売る者も売る、買う者も買う、と唯驚かる、
ばかりである。見世物が出る。手軽な飲食店が出る。咽を棹が通る様に、店の間を
押し合いへし合いしてぞろ／＼人間が通る。近郷近在の爺さん婆さん若い者女子供

が、股引草鞋で大風呂敷を持つたり、荷車を挽いたり、目籠を背負ったりして、早い者は夜半から出かける。新しい筵、笥掘器、天秤棒を買って帰る者、草履の材料やつぎ切れにする襦袢を買う者、古靴を値切る者、古帽子、古洋燈、講談物の古本を冷かす者、稻荷鮓を頬張る者、玉乗の見世物の前にほかんと立つ者、人さまぐ物はさまぐの限を尽す。世田ヶ谷のボロ市を觀て悟らねばならぬ、世に無用のものは無い、而して悲觀は單に高慢であることを。

ボロ市過ぎて、冬至もやがてあとになり、行く／＼年も暮になる。蛇は穴に入り人は家に籠つて、霜枯の武蔵野は、静かな昼にはさながら白日の夢に定に入る。寂しそうな鳥が、此櫓の村から田圃を啞々と鳴きながら彼櫓の村へと渡る。稀には何処から迷い込んだか洋服ゲートルの獵者が銃先に鳴や鵲のけた／＼ましく鳴いて飛び立つこともあるが、また直ぐともとの寂しさに返える。風の吹く夜は、海の様な響が武蔵野に起つて、人の心を遠く遠く誘うて行く。但東京の屋敷に頼まれて餅を搗く家や、小使取りに餅春きに東京に出る若者はあつても、村其ものには何処に師走の忙しさも無い。二十五日、二十八日、晦日、大晦日、都の年の瀬は日一日と断崖に近づいて行く。三里東の東京には、二百万の人の海、嘸さまぐの波も立とう。日頃眺むる東京の煙も、此四五日は大息吐息の息巻荒く颯る様に見える。然し此処は田舎である。都の師走は、田舎の霜月。冬枯の寂しい武蔵野は、復活の春を約し

て、麦が今二寸に伸びて居る。氣に入りの息子を月の初に兵隊にとられて、寂しい心の辰爺たつじいさんは、冬至が過ぎれば日が暈の目一つずつ永くなる、冬のあとには春が来る、と云う信仰の下に、時々竹篋たけべらで鍬の刃につく土を落しつゝ、悠々ゆうゆうと二寸になつた麦のサクを切つて居る。

媒妁

結婚の媒妁なかつちを頼まれた。式は宜い様にやってくれとの事である。新郎しんろうとは昨今の知合で、新婦は初めて名を聞いた。媒妁なかつちなんか経験もなし、断つたが、是非たのとの頼み、諾よしと面白半分引受けてしようた。

明治四十年の九月某日そのひ、媒妁夫妻は小婢こおんなと三人がかりで草屋の六畳二室を清め、赤、白、鼠、婢の有ものまで借りて、あらん限りの毛布を敷きつめた。家のまわりも一わたり掃はいた。隔からての唐紙を取払い、テーブルを一脚東向きに据すえ、露ながら折つて来た野の草花を花瓶かへい一ぱいに插さした。女郎花おみなえし、地榆われもこう、水引、螢草、うつぼ草、黄碧紫紅こうへきしこう入り乱れて、あばら家も為に風情ふぜいを添えた。媒妁夫妻は心嬉しく、主人は綿紹めんろの紋付羽織に木綿茶縞の袴、妻は紋服もんぷくは御所持なしで透綾すきやの縞の単衣にあらためて、徐しずかに新郎新婦の到着を待った。

正午過ぎ、村を騒がして八台の車が来た。新郎新婦及縁者の人々である。新婦は初めて見た。眼のきれの長い佳人かじんである。更衣室も無いので、仕切りの障子をしめ、二畳の板の間を半分占めた古長持の上に妻の鏡台きようだいを置いた。鏡台の背には、破簾やれみすを下すげて煤だらけの勝手を隔てた。二十分の後此楽屋がくやから現われ出た花嫁君を見ると、

秋草の裾模様すそもようをつけた淡紅色ときいろ縞ろの晴着で、今咲いた芙蓉ふようの花の様だ。花婿も黒縞紋付、仙台平の袴りゆう、凜りゆうとして座つて居る。

媒妁いちがは一咳がいしてやおら立上つた。

「勝田慶三郎」

「松居千代」

卒業免状でも渡す時の様に、声こゑ厳げんに新郎新婦を呼び出して、テーブルの前に立たせた。而して媒妁そうは自身愛読する創世そうせい記きイサク、リベカ結婚の条を朗々ろうろうと読み上げた。

「祈禱きとうを致します」

斯く云つて、媒妁がやゝ久しく精神を統一すべく黙つて居ると、

「祈禱を致すのでございますか」

と新郎がやゝ驚いた様に小声こゝろできく。媒妁は頓着とんじやくなく祝禱しゆくどをはじめた。

祈禱が終る。妻が介抱かいほうして、新郎新婦を握手させる。一旦新婦の手からぬいて置いた指環を新郎に渡し、あらためて新郎の手ずから新婦の指に嵌はめさす。二人ながら震えて居る。

屋敷に門無く、障子は穴だらけである。村あつてより見たこともない夥おびただしい車の入来じゆらいに眼を驚かした村の子供が、草履ぞうりばた／＼大勢縁先に入り込んで、ほかんとし

た口だの、青涕あおばなの出入する鼻だの、驚いた様な眼だのが、障子の穴から覗のぞいて居る。「何だ、ありや」。「あ、あ、あら、如何どうするだンベか」なンか云つて居る。

六畳の大広間には、新郎新婦相並んで正面赤毛布の上に座すわつて居る。結婚証書を三通新婦はなよめの兄者人に書いてもらつて、新郎新婦をはじめ其尊長達そんちやうたち、媒妁夫妻も署名した。これで結婚式は芽出度終つた。小婢こおんなが茶を運んで来た。菓子が無いので、有り合せの梨なしを剥むき、数が無いので小さく切つて、小楊枝こようじを添そえて出した。

四時過ぎお開きとなつた。

媒妁なかだちの役目相済んだつもりで納まつて居ると、神田かんだの料理屋で披露の宴をするとの事で、連れて来られた車にのせられ、十台の車は静かな村を犇ひしめかして勢よく新宿に向つた。新宿から電車でお茶の水に下り、某と云う料理店に案内された。

媒妁は滅多に公会祝儀の席などに出た事のない本当の野人やじんである。酒がはじまつた。手をついたり、お辞儀じぎをしたり、小むつかしい献酬けんしゅうの礼が盛に行われる。酒を呑まぬ媒妁は、ぽかんとして皆の酒を飲むのを眺めて居る。料理が出たが、菜食主義の彼は肉食をせぬ。腹は無闇むやみに減る。新郎の母者人が「ドウカお吸物すいものを」との挨拶あいさつが無い前に、勝手に吸物碗すいものわんの蓋をとつて、鱔きすのムスビは残して松茸まつたけとミツバばかり食つた。

九時過ぎやつとお開きになつた。媒妁夫婦は一同に礼して、寿じゆの字の風呂敷に包ん

だ引き物の鯉節籠かつぶしかごを二つ折詰おりづめを二つもらって、車で送られてお茶の水停車場に往つた。媒妁の家は菜食で、ダシにも昆布こんぶを使つて居るので、二つの鯉節包は二人の車夫にやつた。車夫は眼まなこを円くして居た。

新宿に下りると、雨が盛さかんに降つて居る。夜も最早もとう十時、甲州街道口に一台の車も居ない。媒妁夫婦は、潜りくぐの障子だけあかりのさした店に入つて、足駄あしだと傘とブラ提灯ちようちんと蠟燭とマツチと糸経いとだてを買つた。而しておのゝ糸経いとを被りかぶ、男が二人のぬいだ日和下駄ふろしきづつみを風呂敷包ふろしきづつみにして腰につけ、小婢こおんなにみやげの折詰二箇半巾ふたつはんかちに包んで片手にぶら下げて、尻高々いっちょうらとからげれば、妻は一張羅の夏帯なつたうを濡ぬらすまいとて風呂敷を腰に巻き、単衣の裾短に引き上げて、提灯ぶら提げ、人通りも絶え果てた甲州街道三里の泥水をピチャリ／＼足駄に云わして帰つた。

「如何どうだ、此態このやさまを勝田君に書いてもらつたら、一寸茶番ちやつとちやばんの道行が出来ようじやないか」

夫が笑えば、妻も噴ふき出し、

「本當にね」

と相槌あいづちをうつた。

新郎勝田君は、若手で錚々そうそうたる劇作家である。

螢

さつき
先刻から田圃に呼びかわす男の子の声がして居たと思うたら、闇の門口から小さな影が二つ三つ四つ縁先にあらわれた。小さな握拳の指の間から、ちら／＼碧い光を見せて居る。

皆近所の子で、先夜主人が「ミゼラブル」の話聞いて息をのんだ連中である。

「螢を捕ったね」

「え」

と一人が云ったが、

「あ、此れに這わせて見べいや」

と云つて、縁先に据えてある切株の上の小さな姫蘆の橢円形の水盤へ、窃と拳の中のものを移した。

すると、余の子供が吾も吾もと皆手を水盤の上に解いた。水を吹いた小さな姫蘆の葉の上、茎の間、蘆の根ざす小さな岩の上に、生きた、緑玉、碧玉、孔雀石の片がほろ／＼とこぼれて、其数約二十余、葉末の露にも深さ一分の水盤の水にも映つて、光つたり、消えたり、嬉しそうに明滅して、飛び立とうともしない。

「綺麗だ喃きれいなあ」

「綺麗だ喃きれいなあ」

皆嬉々ききとしてしたり貌がおにほめそやす。

「皆何してるだか」

云つて、また二人男ふたりの子が草履ぞうりの音をさせて入つて来た。

「あッ綺麗だな、俺おらがのも明けてやるべ」

と云つて、また二人して八九疋螢ひきの島へ螢はなを放つた。

主人あるじと妻とうりゆうと逗留とらうに来て居る都の娘と、ランプを隅へ押しやつて、螢と螢を眺むる子

供を眺める。田圃たんぼの方から涼しい風が吹いて来る。其風に瞬またたく小さな緑玉エメラルドの灯で、

もあるように、三十ばかりの螢ひきがかわるゝ明滅する。縁にかけたり蹲しゃがんだりして、

子供は黙つて見とれて居る。

斯涼いさえしい活画いきえを見て居る彼の眼前に、何時いつとはなしにランプの明るい客間パーラーがあら

われた。其処に一人の沈鬱ちんうつな顔をして丈高たけたかい西洋人が立つて居る。前には学生が十

五六人腰かけて居る。学生の中に十二位の男の子が居る。其は彼自身である。彼は

十二の子供で、京都同志社の生徒である。彼は同窓諸子と宣教師デビス先生に招か

れて、今茶菓と話の馳走になつて居るのである。米国南北戦争に北軍の大佐であつ

たとか云うデビス先生は、軍人だけに姿勢が殊に立派で、何処やら武骨ぶこつな点もあつ

て、真面目な時は頗る厳格沈鬱な、一寸畏ろしい様な人であつたが、子供の眼からも親切な、笑えば愛嬌の多い先生だつた。何かと云うと頭を掉るのが癖だつた。毎度先生に招かるゝ彼等学生は、今宵も蜜柑やケーキの馳走になつた。赤い碁盤縞のフロックを着た先生の末子が愛想に出て来たが、うっかり放屁したので、学生がドツと笑い出した。其子が泣き出した。デビス先生は左の手で泣く子の頭を撫で、右手の金網の炮烙でハゼ玉蜀黍をあぶりつゝ、プチゝ、プチゝ、其はぜる響を口真似して笑いながら頭を掉られた。其つゞきである。先生は南北戦争の逸事を話して、ある夜火光を見さえすれば敵が射撃するので、時計を見るにマツチを擦ることもならず、恰飛んで居た螢を捉えて時計にのせて時間を見た、と云う話をされた。

其れは彼が今此処に居る子供の一番小さな位の昔であつた。其後彼はデビス先生に近しくする機会を有たなかつた。先生の夫人は其頃から先生よりも余程ふけて居られた。後氣が変になり、帰国の船中太平洋の水屑になられたと聞いて居る。デビス先生は男らしく其苦痛に耐え、宣教師排斥が一の流行になつた時代に処して、恚らず乱れず始終一貫同志社にあつて日本人の為に尽し、「吾生涯即吾遺言也」との訣辞を残して、先年終に米国に逝かれた。

螢を見れば常に憶い出すデビス先生を、彼は今宵も憶い出した。

夕立雲

畑のものも、田のものも、林のものも、園のものも、虫も、牛馬も、犬猫も、人も、あらゆる生きものは皆雨を待ち焦れた。

「おしめりがなければ、街道は塵埃で歩けないようでごさいます」と甲州街道から毎日仕事に来るおかみが云った。

「これでおしめりさえあれば、本当に好いお盆ですがね」と内の婢もこぼして居た。両三日来非常に蒸す。東の方に雲が立つ日もあった。二声三声雷鳴を聞くこともあった。

「いまに夕立が来る」

斯く云って幾日か過ぎた。

今日早夕飯を食つて居ると、北から冷やりと風が来た。眼を上げると果然、北に一団紺靛色の雲が蹲踞んで居る。其紺靛の雲を背に、こんもりした隣家の杉櫨の木立、孟宗竹の藪などが生々しい緑を浮かして居る。

「夕立が来るぞ」

主人は大声に呼んで、手早く庭の乾し物、履物などを片づける。裏庭では、婢が

駈けて来て洗濯物を取り入れた。

やがて食卓から立つて妻児が下りて来た頃は、北天の一隅に埋伏し居た彼濃い紺靛色の雲が、倏忽の中にむら／＼と湧き起った。何の艶もない濁った煙色に化り、見る／＼天穹を這い上り、大軍の散開する様に、東に、西に、天心に、ず、ずうと広がって来た。

三人は芝生に立つて、驚嘆の眼を瞪って斯夥しい雨雲の活動を見た。

あな夥しの雲の勢や。默示録に「天は巻物を捲くが如く去り行く」と歌うたも無理はない。青空は今南の一軸に巻き盛められ、煤煙の色をした雲の大軍は、其青空をすら余さじものと南を指してヒタ押しに押寄せて居る。つい今しがたまで雨を恋しがって居た乾き切った真夏の喘ぎは何処へ往ったか。唯十分か十五分の中に、大地は恐ろしい雨雲の下に閉じこめられて、冷たい黯い冥府になった。

雲の運動は秒一秒劇しくなった。南を指して流るゝ雲、渦まく雲、真黒に屯つて動かぬ雲、雲の中から生るゝ雲、雲を摩つて移り行く雲、淡くなり、濃くなり、淡くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙突と云う煙突をこゝに集めて煤煙の限りなく涌く様に、眼を驚かす雲の大行軍、音響を聞かぬが不思議である。

彼等は驚異の眼を瞪って、此活動する雲の下に魅せられた様にゐんだ。冷たい風

がすうつすうつと顔に当る。後れ馳せに雷がそろ／＼鳴り出した。北の方で、条をなさぬ紅や紫の電光が時々ぱつぱつと天の半壁を輝して閃めく。近づく雷雨を感じつゝ、彼等は猶頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした満天の雲はます／＼南に流れる、水の様に、霧の様に、煙の様に。空は皆動いて居る。濶い空の何の一寸四方として動いて居ないのはない。皆恐ろしい勢を以て動いて居る。仰ぎ見る彼等は、流るゝ雲に引きずられてやゝもすれば駆け出しそうになる足を踏みしめ踏みしめ立つて居なければならなかつた。時々西の方で、或一処雲が薄れて、探照燈の光めいた生白い一道の明が斜に落ちて来て、深い深い井の底でも照す様に、彼等と其足下の芝生だけ明るくする。彼等ははつと驚惶の眼を見合はす。と思うと、怒れる神の額の如く最早真闇に真黒になつて居る。妻兒の顔は土色になつた。草木も人も息を屏めたかの様に、一切の物音は絶えた。何処から来たか、犬のデカが不安の眠つきをして見上げつゝ、大きな体を主人の脚にすりつける。

空は到頭雲をかぶつて了つた。著しく水気を含んだ北風が、ぱつ／＼と顔を撲つて来た。やがて粒だった雨になる。雷も頭上近くなつた。雲見の一群は、急いで家に入った。母屋の南面の雨戸だけ残して、悉く戸をしめた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降り出した。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄じく見せて、ピカリと雷が光る。

颯、颯と烈しく降り出した。

見る／＼庭は川になる。雨が飛石をうって匆ねかえる。目に入る限りの緑葉が、一葉々々に雨を浴びて、嬉しげにぞく／＼身を震わして居る。

「あゝ、好いおしめりだ」

斯く云った彼等は、更に

「まだ七時前だよ、まあ」

と婢の云う声に驚かされた。

夕立から本降りになつて、雨は夜すがら降つた。

（大正元年 八月十四日）

葬式

一

午前十時と云う触込みなので、十一時に寺本さんの家に往つて見ると、納屋と上塗せぬ土蔵の間の大きな柿の木の蔭に村の衆がまだ五六人、紙旗を青竹に結いつけて居る。

「ドウも御苦労さま、此方様でも御愁傷な」

と云う慣例の挨拶を交わして、其の群に入る。一本の旗には「諸行無常」、一本には「是生滅法」、一本には「皆滅々已」、今一本には何とか書いてある。其上にはいづれも梵字で何か書いてある。

「お寺は東覚院ですか」

「否、上祖師ヶ谷の安穩寺です」

其安穩寺の坊さんであろう、紫紺の法衣で母屋の棺の前に座つて居るのが、此方から見える。棺は緑色の簾をかけた立派な輿に納めて、母屋の座敷の正面に据えてある。洋服の若い男が坊さんと相対して座つて居る。医者であろう。左の腕に黒布

を卷いた白衣の看護婦の姿が見える。

「看護婦さんも、癒なほつて帰るじや帰り力があるが」と誰やらが嘆息する。

時分じぶんだから上れと云わるゝので、諸君の後について母屋の表縁側おもてえんがわから上つて、棺の置いてある十畳の次ぎの十畳に入る。頭の禿はげた石山氏が、黒絹の紋付、仙台平の袴で、若主人に代つて応対おうたいする。諸君と共に二列に差向つて、饌げんに就く。大きな黒塗の椀うづたかに堆く飯を盛つてある。汁椀しるわんは豆腐と茄子なすと油揚げあぶらあげのつゆで、向うに沢庵たくあんが二切つてある。眼の凹くぼい、鮫の齒の様な短い胡麻塩髯ごましおひげの七右衛門爺さんが、年増としまの婦人と共に甲斐々々しく立つて給仕きゅうじをする。一椀をやつと食い終えて、すべり出る。

二

柿の木蔭こかげは涼しい風が吹いて居る。青苔あおじけむ蒸した柿の幹から花をつけた雪の下が長くぶら下つて居る。若い作男が其処にあつた二台の荷車を引きのけ、大きな鍵かぎで土蔵の戸前を開けて、蓆むしろを七八枚出して敷いてくれた。其れに座すわつた者もある。足駄あしだばきのまゝしゃが蹲んで話して居る者もある。彼は納屋なやの檐下のきしたにころがつて居る大きな木白の塵を払つて腰かけた。追々人が殖ふえて、柿の下は十五六人になった。「何なんしろむつかしい事がありや一番に飛び込もうと云うんだからエライや」

「全くだね。寺本さんはソノ粕谷の人物ばかりじゃねえ、千歳村の人物だからね」と紺飛白こんがすりで何処どこやら品ひんの好い昨年おふくろ母をなくした仁左衛門さんが相槌あしづをうつ。「俺おらア全ぜんくがっかりしちまった。コウ兄おにか伯父おじ見たいで、何と云いや来ちや相談したもんだからな。今後これから何処へ往むかつて相談したらいゝんだか——勘おめさん、卿おめの所へでも往むかくだね」と縞しまの夏羽織なつばしを着ちた矮ちいい真黒な六十爺さんの顔を仁左衛門さんは見る。爺さんは黙もくつて左の掌てのひらにこつゝ煙管きせるをはたいて居る。

「寺本さんも、こちとら見たいに錢ぜにが無かつたから何だが、あれで金でも持つて居たらソラエライ事をやる人だったが」と隅の方から誰やら云うた。

「他ひとが死にや働はたらくなンか全ぜんくいやになつちまうね」まだ若い組の浜田の金さんが云う。

「いやになつたつて、死にやえゝが、生命いのちがありや困こつちまうからな」

故人の弟達や縁者いへりやの志こころだと云つて、代々木の酒屋の屋号やしうのついた一升徳利が四本持ち出された。茶碗と箸しほと、それから一寸五分角程に切きつた冷豆腐ひやどうふに醬油わしうをぶつかけた大皿と、輪あざづけぎりにした朝漬あさづけの胡瓜きゅうりの皿さが運きばれた。皆みな席むしろの上に車座くるまざになつた。茶碗になみゝと酒さけが注つがれた。彼も座まつて胡瓜の漬物をつまむ。羽織袴はoriはかまの幸吉さんが挨拶あいさつに來た。故人の弟である。故人は丈高い苦にがみ走はしつた霸氣はき満み々たる男であつたが、幸さんは人の好さちいさそうな矮ちいい男だ。一戸から一錢出した村香羹むらこうでんの礼を丁寧

述べて、盃を重ぬべく挨拶して立つ。

「幸さん一つ」と誰やらが茶碗をさす。

「酒どころかよ、兄貴が死んだんだ、本当に」と来た時から已に真赤な顔して居た辰爺さん——勘さんの弟——が怒鳴る。皆がドツと笑う。

「兄貴が死んだんだ、本当に、酒どころかよ」と辰爺さんは呟く様に繰りかえす。

皆好い顔になつて立上つた。村中で唯一人のチョン齧の持主、彼に對してはいつも御先生と挨拶する佐平爺さんは、荒蓆の上にくろり横になつて、肱枕をしたが、風がソヨ／＼吹くので直ぐ快い氣もちに眠つてしまつたと見え、其腫れぼったい瞼はヒタと押かぶさつて、浅葱縞の単衣の脇がすう／＼息つく毎に高くなり低くなりして居る。

三

母屋の方では、頻に人が出たり入ったりして居る。白襦袢、白の半股引、紺の腹掛、手拭を腰にさげた跣足の若い衆は、忙しそうに高張の白提灯の仕度をしたり、青竹のものを鉋で削いだりして居る。

二人挽の車が泥塗になつて、入つて来た。車から下りた銀杏返の若い女は、鼠色

のコオトをぬいで、草色の薄物うすもので縁に上り、出て来た年増としまの女と挨拶して居る。

「井は何処いどこですかね」

抓つかんだ手拭で額の汗を拭きく、真赤になつた白襦袢くむぎの車夫くるまやの一人が、柿の木の下むれの群むれに来て尋ねる。

「井かね、井は直ぐ其裏そのうらにあるだよ、それ其処をそう往つてもえゝ、彼方あつちへ廻つてもいかれるだ」辰爺あぢさんが願ねがひでしやくる。

美的百姓きゆうすは木白きやうはくに腰かけたまゝ、所在しよざいなさに手近にある大麦の穂を摘んでは、掌で粉こを摺すつて嚙かじつて居る。不図ふと気がつくと、納屋のきしたの檐下のきしたには、小麦も大麦も刈入れた束たばのまゝまだ扱こきもせずに入れてある。他所よそでは最早ぼううち棒打も済んだ家もある。此家の主人の病氣が、如何に此家の機関を停止して居たかが分わかる。美的百姓も、黯くろい気分になつた。此家の若主人に妻君かみさんがあつたか如何どうかか、と辰爺さんに尋ねて見た。

「まだ何もありませんや。ソラ、去年の暮けえに歸つて来たばかりだからね」

然そうだ。若主人は二年の兵役にとられて、去年の十二月初やと歸つて来たのであつた。一人息子だつたので、彼を兵役に出したあと、五十を越した主人は分外に働かねばならなかつた。彼の心臓病しんぞうびようは或は此無理の労働の結果であつたかも知れぬ。尤も随分酒は飲んで居た。故人は村の兵事係へいじがかりであつた。一人子でも、兵役に出すは国家に対する義務ですからと、毎つねに云うて居た。若主人の留守中、彼の手助けは若い作

男であつた。故人は其作代が甲斐々々しく骨身を惜まず働く事を人毎に^{ひたひた}譽めて居た。時が大分移つた。酔つた辰爺さんは煙管と^{たばこ}莢入を両手に提げながら、小さな体をやおら起して、相撲が四股を踏む様に前を明けはたげ、「のら番は何しとるだんべ。のら番を呼んで来う」と怒鳴つた。

「野良番を呼んで来う。のら番は何しとるだんべ。酔つぱらつて寝てしまつたんべ」と辰爺さんは重ねて怒鳴つた。

「何、銀平さんに文ちゃんだから、酔つぱらつてなんか居るもんか。最早^も来る時分^{ぶん}だ」仁左衛門さんが宥める。

「いや野ら番ばかりア酒が無えじややりきれねえナ。彼臭^{あのにお}いがな」と誰やらが云う。

「来た、来た、噂をすりや影だ、野ら番が来た」

墓掘番の四人が打連れて来た。

「御苦勞様でしたよ」皆が挨拶する。

「棺が重いぞ。四人じゃ全くやりきれねえや。八人昇^かきだもの」と云う声がする。

勘爺さんが頷いた。^{うなず}「然だく、手代^{てがわ}りでやるだな。野良番が四人に、此家の作代^{よつたり}

に、俺^{おら}が家の作代に、それから石山さんの作代に、それから、七ちゃんでも昇^かいて

もらうべい」

野良番四人の為に蓆の上に膳が運ばれた。赤児の風呂桶大の飯櫃^{おほち}が持て来られる。

食事半に、七右衛門爺さんが来て切口上で挨拶し、棺を舁いで御出の時禪にでもと云つて新しい手拭を四筋置いて往つた。粕谷で其子を中学二年までやつた家は此家ばかりと云う程万事派手であつた故人が名残は、斯様な事にまであらわれた。

四

「念仏でもやるべいか」

と辰爺さんが言い出した。「おい、幸さんとこの其兒、鉦を持て来いよ」

呼ばれた十二三の子が紐をつけた鉦と撞木を持て来た。辰爺さんはガンと一つ鳴らして見た。「こらいけねえな、斯様な響をすらア」ガン／＼と二つ三つ鳴らして見る。冴えない響がする。

「さあ、念仏は何にしべいか。南アまア陀ア仏にするか。ジンバラハラバイタアウンケンソバギヤアノベイロシャノにするか」

「ジンバラハラバイタアが後生になるちゆうじやねいか」仁左衛門さんが真面目に口を入れた。「辰さん、お前音頭をとるンだぜ」

「呟、乃公が音頭とるべい。音頭とるべいが、皆であとやらんといけねえぞ。音頭取りばかりにさしちやいけねえぞ——ソラ、ジンバラハラバイタア」ガンと鉦が

鳴る。

「ジンバラハラバイター——」仁左衛門さんが真面目について行く。多くは唯笑つて居る。

「いかんく、今時の若けい者ア念仏一つ知んねえからな。昔は男は男、女は女、月に三日宛寄つちや念仏の稽古したもんだ」辰爺さん躍起となつた。

「教えて置かねえからだよ」若い者の笑声が答える。

「炬火は如何だ。お、久さんが来た。久さんく、済まねえが炬火を拵えてくんな」

唇の厚い久さんは、やおら其方^{そち}を向いて「炬火かね、炬火は幾箇拵えるだね？」

「短くて好え^えからな、四つも拵えるだ。そ、其処の麦からが好いよ」

「伝^{うん}」と久さんは答えて、のそりく檐下^{のきした}から引き出して、二握三握一つにして、トんと地につき揃えて、無雑作に小麦から縛^{しば}つて、炬火をこさえた。

「まだかな」先刻から焦々^{いらい}して居る辰爺さんが大声に唸^{つぶ}やく。

「今本膳が出る処だからな」母屋の方を見ながら一人が辰さんを宥^{なだ}める。

「それはソウト、上祖師^{かみそし}ヶ谷の彦さんは分つたかな」

「分からねえとよ。中隊でも大騒ぎして、平服で出る、制服で出る、何でも空井戸^{からいど}を探してるちゆうこんだ」

「窘められたンですかね？」

「ナニ、中隊では評判がよかったンですよ。正直でね」

「正直者が一番危ねえだ。少し時間に後れたりすると、直ぐ無分別をやるからな」
「違えねえ」

皆一寸黙った。

辰爺さんは、美的百姓に大きな声で囁やいた。「岩もね、上等兵の候補者になりましたってね」

「然かね。岩さんは何処に往つても可愛がられる男だよ」

「毎月ね、」辰爺さんは声を落して囁いた。「毎月ね、三円宛やりますよ。それから兄の所から三円宛ね、くれますよ。ソレ小遣が足りねえと、上祖師ヶ谷の様にならアね」

「月に六円宛、其れは大変だね」

「岩もね、其当座は腹が減つて困つたてこぼして居ましたつけ。何しろ麦飯の七八杯もひっかけて居つたンだからね。酒保に飛んで行きくしたつて話してました。今じゃ大きに楽になつたつてますよ。最早あと一年半で帰つて来ますだよ」

農家から大切な働き男を取つて、其上間接に小使としての税金を金の乏しい農村から月々六円もとる兵役と云うものについて、美的百姓は大に考えざるを得なかつ

た。

五

母屋では、最早仕度が出来たと見え、棺が縁の方に昇き出された。柿の木の下では、寝た者も起き、総立になった。手々に白張提灯を持ったり、紙の幟を握ったり、炬火をとったりした。辰爺さんはやおら煙草入を腰に插して鉦と撞木をとった。

「旗が先に行くかね、提灯かね？」

「冥土の案内じゃ提灯が先だんべ」

「東京じゃ旗が先きに行くようだね、ねえ先生」

「東京は東京、粕谷は粕谷流で行こうじゃねえか」と誰やらの声。

「炬火が一番先だよ」

「応、然だ、炬火が一番先だ」

白無垢を着た女達が、縁から下りて草履をはいた。其草履は墓地でぬぎ棄てるので、帰途の履物がある。大きな目籠に駒下駄も空気草履も泥だらけの木履も一つにぶち込んで、久さんが背負つて居る。

「南無阿弥陀ア仏」

辰爺さんが音頭おんどをとりながら先に立つ。鉦がガアンと鳴る。講中こうちゆうが「南無阿弥陀ア仏」と和する。鉦、炬火、提灯、旗、それから兵隊帰りの喪主もしゆが羽織袴で位牌を捧げ、其後から棺を蔵おさめた輿こしは八人で舁かかれた。七さんは着流きながしに新しい駒下駄で肩を入れて居る。此辺には滅多に見た事も無い立派な輿だ。白無垢の婦人、白衣の看護婦、黒い洋服の若い医師、急拵きゅうしうえの紋を透綾すきやの羽織に張はつた親戚の男達、其等が棺の前後に附添うた。大勢の子供や、子守が跟ついて来る。婆さんかみさんが皆出て見る。

昨夜ゆうべの豪雨は幸にからり霽はれて、道も大抵乾いて居る。風が南からソヨ／＼吹いて、「諸行無常」「是生滅法」の紙幟はたがヒラ／＼靡なびく。「南無阿弥陀ア仏——南無阿弥陀ア仏」単調な村の哀かなしみの譜は、村の静寂の中に油の様に流れて、眠れよ休めよと云う様に棺を墓地へと導く。

葬列は滞とどなく、彼が家の隣の墓地に入った。此春墓地拡張の相談がきまつて、三畝せあま余りの小杉山を拓ひらいた。其杉を買った故人外二名の人々が、大きな分は伐きつて売り、小さなのは三人で持つて来て彼の家に植えてくれた。其れは唯三月前の四月の事であつた。其れから最早墓が二つも殖えた。二番目が寺本さんである。

墓地の櫛しきみの木に障さわるので、若い洋服の医師が手を添えて枝を擡もたげたりして、棺は掘られた墓の前に据えられた。輿を解くのが一仕事、東京から来た葬儀社の十七八

の若者は、真赤になってやつと興をはずした。白木綿しろもめんで巻かれた柩ひつぎは、荒縄あらなわで縛しばられて、多少の騒ぎと共に穴の中に下された。野良番は鋤くわをとった。どきりと赤土の塊くれが柩の上に落ちはじめた。

「皆入みないれてしまふとよ」囁ささやき合あうて、行列の先頭に來た紙幟しそは青竹からはずして、柩の上に投げ込まれた。

土がまたドサ／＼落ちる。

*

葬式の五日目に、話題に上った上祖師ヶ谷の行衛不明の兵士の消息を乳屋ちややが告げた。兵士の彦さんは縊死いっししたのであった。代々木の山の中に、最早腐くさりかけて、両眼は鳥からすにつゝかれ、空洞くうくになつて居たそうだ。原因は分らぬが、彦さんの実父は養子で、彦さんの母に追出され、今の爺おやじは後夫あといいりと云う事であつた。

田川

最初近いと聞いた多摩川が、家から一里の余もある。玉川上水すら半里からある。好い水の流れに遠いのが、幾度も繰り返えさるゝ失望であつた。つい其まゝに住むことになつたが、流水があつたらと思わぬことは無い。せめて掘抜井でも掘ろうかと思うが、経験ある人の言によると、此附近では曾て多額の費用をかけて掘つた人があつて、水は地面まで来るには来たが、如何しても噴き上らぬと云うのである。水の樂は、普通の井と、家内に居ては音は聞こえぬ附近の田川で満足しなければならぬ。

彼の家から五六丁はなれて品川堀がある。品川へ行く灌漑専用の堀川で、村の爲には洗滌の用にしかならぬ。一昨々年の夏の出水に、村内で三間ばかり堤防が崩れ、堤から西は一時首まで浸る程の湖水になり、村総出で防水工事をやつた。曾て村の小児が溺死したこともあつて、村の爲にはあまり有り難くもない水である。品川堀の外には、彼が家の下なる谷を西から東へ流るゝ小さな田川と、八幡田圃を北から南東に流るゝ大小二筋の田川がある。

彼の屋敷下の小さな谷を流るゝ小川は、何処から来るのか知らぬが、冬は大抵涸れ

て了う。其かわり夏の出水には堤を越して畑に溢れる。其様な時には、村の子供が大喜悦で、キャツ／＼騒いで泳いで居る。本當の畑水練である。農としては出水を憂うべきだが、遊び好きな事に於て村の悪太郎等に劣るまじい彼は、畑を流るゝ濁水の音颯々として松風の如く心耳一爽の快を先ず感じて、尻高々とからげ、下駄ばきでぎぶ／＼渡つて見たりして、其日限りに水が落ちて了うのを毎に残念に思うのである。兎に角此氣まぐれな小川でも、これあるが為に少しは田も出来る。堤の萱や葭は青々と茂つて、殊更丈も高い。これあるが為に、夏は螢の根拠地ともなる。朝から晩までべちやくちや囀る葭原雀の隠れ家にもなる。五月雨の夜にコト／＼叩く水鶏の宿にもなる。

八幡田圃を流るゝ田川の大きな方を、此辺では大川と云う。一間幅しかない大川で、玉川浄水を分つた灌漑用水である。此水あるが為に、千歳村から世田ヶ谷かけて、何百町の田が出来る。九十一歳になる彼の父は、若い頃は村吏県官として農政には深い趣味と経験を有つて居る。其子の家に滞留中此田川の畔を歩いて、熟々と水を眺め、喟然として「仁水だ喃」と嘆じた。趣味を先ず第一に見る其子の為にも不仁の水とは云われない。此水あるが為に田圃がある。春は紫雲英の花氈を敷く。淋しい村を賑わして蛙が鳴く。朝露白い青田の涼しさも、黄なる日の光を震わして蝗飛ぶ秋の田の豊けさに伴うさま／＼の趣も、此水の賜ものである。こゝにこの水流

るゝがために、水を好む野茨も心地よく其の涯に茂つて、麦が熟れる頃は枝も撓に
 芳しい白い花を被る。薄紫の嫁菜の花や、薄紅の犬蓼や、いろゝの秋の草花も美
 しい。鮒や鰯を子供が捕る。水底に影を曳いて、メダカが遊ぶ。ドボンと音して蛙
 が飛び込む。稀にはしなやかな小さな十六盤橋を見せて、二尺五寸の蛇が渡る。田
 に入るとて水を堰く頃は、高八寸のナイヤガラが出来て、蛙の声にまぎらわしい音
 を立てる。玉川に行くかわりに子供はこゝで浴びる。「蘆の芽や田に入る水も隅田
 川」然だ。彼の村を流るゝ田川も、やはり玉川、玉川の孫であつた。祖父様の玉川
 の水が出る頃は、この孫川の水も灰がゝつた乳色になるのである。乞食は時々こゝ
 に浴びる。去年の夏は照がつゞいたので、村居六年はじめて雨乞を見た。八幡に打
 寄つて村の男衆が、神酒をあげ、「六根清浄……………懺悔」と叫んだあと
 で若い者が禪一つになつて此二間幅の大川に飛び込み、肩から水を浴びて「六根清
 浄」……何とかして「さんげ」と口々に叫んだ。其声は舜旻天に号泣する声
 の如くいじらしく耳に響いた。霜の朝など八幡から眺めると、小川の上ばかり水蒸
 気がほうつと白く騰つて、水の行衛が田圃はるかに指さゝれる。
 笕の水音を枕に聞く山家の住居。山雨常に来るかと思ふ。溪声の裡。平時は汪々と
 して声なく音なく、一たび怒る時万雷の崩るゝ如き大河の畔。裏に甕を飼ひ門に舟
 を繋ぐ江湖の住居。色と動と音と千変万化の無尽蔵たる海洋の辺。野に鑿いた彼に

は、此等のものが時々幻まぼろしの如く立現たてあらわわれる。然しながら仮かりにサハラ、ゴビの一切水に縁遠い境に住まねばならぬとなつたら如何どうであろう。また竈かまどに蛭ひる這い蛇へび寢床ねどこに潜もぐる水国卑湿の地に住まねばならぬとなつたら如何であろう。中庸は平凡である。然し平凡には平凡の意味があり強味つよみがある。

田川の水よ。爾なんじに笕けんの水の幽韻ゆういんはない。雪氷を融とかした山川の清冽せいれつは無い。瀑布ばくふの咆哮ほうこうは無い。大河の溶々ようようは無い。大海の汪洋おうようは無い。爾は謙遜な農家の友である。高慢な心の角つのを折り、騒さわがしい気の遽あわたゞしさを抑おさえて、心静こころしずに爾の声低く語る教訓を聴かねばならぬ。

驟雨浴

両三日来、西の地平線上、甲相武信の境を造くる連山の空に当つて、しばしば屢々黒雲が立つた。とつよせ遠寄の太鼓の様に雷も時々鳴る。黒雲の幕の中で、ぱつくと火花を散す様に、電光も射す。夕立が来ると云いながら、一滴も落ちずして二三日過ぎた。

どようたろう土用太郎は涼しい彼の家でも九十一度と云う未曾有の暑氣であつた。土用二郎のきよう今日は、朝来少し曇つたが、風と云うものはたと絶え、気温は昨日程上つて居ないにも拘わらず、あぶらあせ脂汗が流れた。

昼飯を食つて汗になつたので、天日で湯と沸わいて居る庭の甕かめの水を浴び、籐とうの寝台に横になつて新聞を見て居る内に、快い心地になつて眠つて了うた。

一寝入して眼をさますと、室内が暗くなつて居る。時計を見ると、まだ二時廻つたばかりである。縁側に出て見た。南の方は明るく、午後二時の日がかん／＼照つて居るが、西の方が大分暗い。近村の二本松を前景ぜんけいにして、いつも近くは八王子在の高尾小仏、遠くて甲州東部の連峰が見ゆるあたりだけ、卵色の横幕を延いた様に妙に黄色になり、其上層は人を脅おどす様な真黯まつくらい色をして居る。西北の空が真暗になつて、甲州の空の根方みほうのみ妙みように黄朱おうしゆを抹なすつた様になる時は、屹度何か出て来る。已すでに

明治四十一年の春の暮、成人の握掌大の素晴らしい電が降った時も然だった。斯う思
いながら縁から見て居ると、頭上の日はカン／＼照りながら、西の方から涼しいと
云うより寧冷たい気が吻々と吹っかけて来る。彼の家から、東は東京、南は横浜、
夕立は滅多に其方からは来ぬ。夕立は矢張西若くは北の山から来る。山から都へ行
く途中、彼が住む野の村を過ぎるのである。

西は本気に曇った。雷様も真面目に鳴り出した。最早多摩川の向うは降って居る
のであろう。彼は太急ぎで下りて、庭に乾してあつた仕事着やはだし足袋を取り入
れた。帰って北の窓をあけると、面が冷やりとした。北の空は一面鼠色になつて居
る。日傭のおかみが太急ぎで乾し麦や麦からを取り入れて居る。

北の硝子窓をしめて、座敷の南縁に立つて居ると、ぽつりと一つ大きな白い粒が
落ちて、乾いて黄粉の様になつた土にころりところんだ。

「来たぞ、来たぞ」

四十五歳の髯男、小供か小犬の様に嬉しい予期気分になつて見て居ると、そろそ
ろ落ち出した。大粒小粒、小粒大粒、かわる／＼斜に落ちては、地上にもんどりうつ
て団子の様になる。二本松のあたり一抹の明色は薄墨色に掻き消されて、推し
寄せて来る白い驟雨の進行が眼に見えて近づいて来る。

彼は久しく羨んで居た。熱帯を過ぐる軍艦の甲板で、海軍の将卒が折々やると云

う驟雨浴「総員入浴用意！」の一令で、手早く制服をぬぎすて、石鹼とタオルを両手に抓んで、真黒の健児共がずらり甲板に列んだ処は、面白い見ものであるう。やがて雷鳴電光よろしくあつて、錨索大の雨の棒が瀑布落しに撞々と来る。さあ、今だ。総員驚の如くきやつ／＼笑い騒いで、大急ぎで石鹼を塗る、洗う。大洋の真中で大無銭湯が開かれるのだ。愚図々々すれば、石鹼を塗ったばかりの斑人形を残して、いたずらな驟雨はざあと駈けぬけて了う。四方水の上に居ながら、バケツ一ぱいの淡水にも中々ありつかれぬ海の子等に、蒸溜水の天水浴とは、何等贅沢の沙汰であろう。世界一の豪快は、甲板の驟雨浴であらねばならぬ。

不幸にして美的百姓氏は、海上ならぬ陸上に居る。熱帯ならぬ温帯に居る。壮快限り無い甲板の驟雨浴に真似られぬが、自己流の驟雨浴なら出来ぬことは無い。やつて見るかな、と思つて居ると、妻児が来た。彼は手早く浴衣をぬいで真裸になり、突と走り出て、芝生の真中に棒立ちに立った。

ポトリ肩をうつ。脳天まで冷やりとする。またぼとり。ぼと／＼ぼと／＼。其たびに肩や腹や背が冷やり／＼とする。好い気もちだ。然しまだ夕立の先手で、手痛くはやつて来ぬ。

「此れをかぶつていらつしやいな」
と云つて、妻は硝子の大きな盃を持て来た。硝子は電気を絶縁する、雷よけのまじな

いにかぶれと謂うのだ。諾と受取つて、いきなり頭にかぶった。黒眼鏡をかけた毛だらけの裸男が、硝子鉢を冠つて、直立不動の姿勢をとつたところは、新式の河童だ。不図思いついて、彼は頭上の硝子盃を上向けにし、両手で支えて立つた。一つ二つと三十ばかり数うると、取り下ろして、ぐつと一気に飲み乾した。やわらかな天水である。二たび三たび興に乗じて此大觴を重ねた。

「もう上つていらつしやいよ」

妻児が呼ぶ頃は、夕立の中軍まさに殺到して、四囲は真白い闇になった。電がピカリとする。雷が頭上で鳴る。ざあざあつと落ち来る太い雨に身の内撲たれぬ処もなく、ぐつと息が詰まる。驟雨浴もこれまでと、彼は滝の如く迸る樋口の水に足を洗わして、身震いして縁に飛び上った。

上ると土砂降りになった。庭の平たい甕の水を雨が乱れ撲つて、無数の魚児の唼囁する様に跳ね上つて居たが、其れさえ最早見えなくなつた。

「呀、縁が」

と妻が叫んだ。南西からざアつと吹かけて来て、縁は忽川になった。妻と婢は遽て、書院の雨戸をくる。主人は障子、廊下の硝子窓をしめてまわる。一切の物音は絶えて、唯ざあと降る音、ざあつと吹く響ばかりである。忽珂瓊と硝子戸が響いた。また一つ珂瓊と響いた。雹である。彼はまだ裸であつた。飛び下りて、雨の中から

七八つ白いのを拾った。あまり大きなのではない。小指の尖位さきなのである。透明、不透明、不透明の核かくをもった半透明のものもある。主人は二つ食った。妻は五六個食った。歯が痛い程冷たい。

座敷の縁は川になった。母屋おもやの畳は湿しとる程吹き込んだ。家内は奥の奥まで冷たい水気がほしいまゝにかけ廻まわる。

「あゝ、好いい夕立だ。降れ、降れ、降れ」

斯う呼わつて居る内、夜の明くる様に西の空が明るくなり出した。霽あがりざわ際の織ほそい雨が、白い絹糸ひちを閃ひらめかす。一足縁へ出て見ると、東南の空は今真闇である。最早夕立の先手が東京に攻め寄せた頃である。二百万の人の子の遽あわてふためく状さまが見える様だ。

何時いつの間にかばったり雨は止んで、金光こんこう厳いかめしく日が現われた。見る／＼地面しずくを流るゝ水が止まった。風がさあつと西から吹いて来る。庭の翠松がばら／＼と雫しずくを散らす。何処かでキリン／＼と蝸ひぐらしが心地よく鳴き出した。

時計を見ると、二時三十分。夕立は唯三十分つゞいたのであつた。

浴衣ゆかたを引かけ、低い薩摩下駄を突かけて畑に出た。さしもはしやいで居た畑の土がしつとりと湿うるおうて、玉蜀黍とうもろこしの下葉やコスモスの下葉や、芻はね上げた土まみれになつて、身重げに低れて居る。何処どこを見ても、うれしそうに緑がそよいで居る。東の方

では雷らいがまだ鳴なつて居る。

「虹にじ収おさ仍なほ白はく雨う、雲動くもどう忽いつ青山せいざん」

斯うく打吟うちぎんじつゝ西の方にしを見た。高尾、小仏や甲斐の諸山は、一風呂浴びて、濃淡の碧みどり鮮あざやかに、富士も一筋白ひとすじい豎縞たてしまの入あつた浅葱あさぎの浴衣を着て、すがすがしく笑えんで居る。

「キリン、キリンキリン！」

蝸ひぐらしがまた一声鳴いた。

隣家となりの主人しゅじんが女兒こどもを負おつて畑廻はたまわりをして居る。

「好いおしめりでございました」

と云う挨拶あいさつを透垣越すいがきこしに取りかわす。

二時間ばかりすると、明日あすは「おしめり正月」との言いつぎが来た。

詩篇しへんを出でして、大声に第六十五篇ろくごを朗詠ろうぎする。

『爾地なんちにのぞみて水そゞぎ、大に之をゆたかにし玉へり。神の川に水満ちたり。

爾なんちかくそなへをなして、穀物たなつものをかれらにあたへたまへり。爾畎なんちたみぞを大にうるほ

し、畎うねをたひらにし、白雨むらさめにてこれをやはらかにし、その萌もえ出づるを祝し、

また恩恵めぐみをもて年の冕弁かんべんとしたまへり。爾なんちの途あふらには膏あぶらしたゝれり。その恩滴したゝりは

野の牧場まきをうるほし、小山はみな飲よまつびにかこまる。牧場は皆羊みなひつじの群を衣き、もろ

く^{たなつもの}の谷は穀物におほはれたり。彼等は皆よろこびてよばはりまた謳ふ^{うた}』

(明治四十五年 七月廿一日)

村芝居

裏の八幡で村芝居がある。

おとつ

一昨日は、一字の男総出で、隣村の北沢から切組舞台を荷車で挽いて来た。昨日は終日舞台かけで、村で唯一人の大工は先月来仕かけて居る彼が家の仕事を休んで舞台や棧敷をかけた。今夜は愈芝居である。

十一月も深い夜の事だ。外套を着て、彼等夫妻は家を空虚にして出かけた。

平生から暗くて淋しい八幡界限が、今夜は光明世界人間の顔の海に化けて居る。

八幡横手の阪道から、宮裏の雑木林をかけて、安小間物屋、鮎屋、柿蜜柑屋、大福

駄菓子店、おでん店、ずらりと並んで、カンテラやランプの油煙を真黒に立て、

人声がやゝノノで居る。其中を縫うて、宮の横手に行くと、山茶花小さな金剛纂

など植え込んだ一寸した小庭が出来て居て、ランプを入れた燈籠が立ち、杉皮葺の

飯屋根の下に墨黒々と「彰忠」の二大字を書いた板額が掲つて居る。然る可き目的

がなければ村芝居の興行は許されぬと云う其筋の御意だそうで、此度の芝居も村の

諸君が智慧をしぼって、日露戦役記念の為此こじつけ、漸く役場や警察の許可を得

た。其れについて幸い木目見事の檯板があるので、戦役記念の題字を書いてくれと

先日村の甲乙たれかれが彼に持込んで来たが、書くが職業と云う条あまりの名筆故彼は辞退した。そこで何処どこかの坊さんに頼んだそうだが、坊さんは佳墨いいすみがなければ書けぬと云うたそうで、字を書かぬなら墨を貸してくれと村の人達が墨を借りに来た。幸い持合せの些泥臭ちぬいぐさいが見かけは立派な円筒形の大きな舶来唐墨はくらいとうぼくがあつたので、快く用立てた。今夜見れば墨痕ぼくこん美わしく「彰忠しょうちゆう」の二字に化なつて居る。

拝殿には、村の幹部が、其ある者は紋付羽織など引かけて、他村から来る者に挨拶したり、机に向つて奉納寄進のピラを書いたりして居る。「さあ此方こちらへ」と招かれる。ピラを書いてくれと云う。例の悪筆を申立て、逃げる。

拝殿から見下ろすと、驚く可し、東向きのだら／＼坂になつて居た八幡の境内けいだいが、何時の間にか歌舞伎座か音楽学校の演奏室の様な次第高の立派な観劇場になり済ました。坂の中段もとに平生ふだん並んで居る左右二頭の唐獅子からじしは何処かへか担かつぎ去られ、其あとには中々馬鹿にはならぬ舞台花道が出来て居る。棧敷さじきも左右にかいてある。拝殿下から舞台下までは、次第下りに一面庭むしろを敷きつめ、村はもとより他村の老若男女彼此四五百人も、ぎっしり詰まつて、煙草すを喫つたり、話したり、笑つたり、晴れと着飾つた銀杏返しの娘が、立つて見たり座すわつたり、棧敷からつるした何十と云うランプの光の下にがや／＼どよめいて居る。無論屋根が無いので、見物の頭の上にちようせんみすは、霜夜の星ほしがキラ／＼光つて居る。舞台横手のチョボの床ゆかには、見た様な朝鮮簾

が下つて居ると思つたは、其れは若い者等が彼の家から徴発して往つた簾であつた。花道には、一金何十錢也船橋何某様、一金何十錢也廻沢何某様と隙間もなくびらを貼つた。引切りなしに最寄の村々から紋付羽織位引かけた人達がやつて来る。拝殿の所へ来て、「今晚は御芽出度う、此はホンの何ですが」と紙包を出す。幹部が丁寧に答礼して、若い者を呼び、棧敷や土間に案内さす。ビラを書く紙がなくなつた、紙を持て来うと幹部が呼ぶ。素通し眼鏡をかけたイナセな村の阿哥が走る。「ありや好い男だな」と他村の者が評する。耳の届く限り洋々たる歓声が湧いて、理屈屋の石山さんも今日はビラを書き〱莞爾〱上機嫌で居る。

彼等の来様が些晩かつたので、三番叟は早や済んで居た。伊賀越の序幕は、何が何やら分からぬ間に過ぎた。彼等夫妻も拝殿から下りて、土間に割り込み、今幕があらいた沼津の場面を眺める。五十円で買われて来た市川某尾上某の一座が、団十菊五芝翫其方退けとばかり盛に活躍する。お米は近眼の彼には美しく見えた。お米の手に持つ菊の花、飾つた菊の植木鉢、それから借金取が取つて掃き出す手箒も、皆彼の家から若者等が徴発して往つたのである。分かるも、分からぬも、観客は口あんごりと心も空に見とれて居る。平作は好かつた。隣に座つて居る彼が組頭の恵比寿顔した爺さんが眼を濡まして見て居る。頭上の星も、霜夜も、座下の荒筵も忘れて、彼等もしばし忘我の境に入つた。やがてきり〱と舞台が廻る。床下で若者が五人

がゝりで廻すのである。村芝居に廻り舞台は中々贅沢ぜいたくなものだ。

次ぎは直ぐ仇討かたきうちの幕になった。狭い舞台にせゝこましく槍をしいたり眉尖刀なぎなたを

振ったり刀を振り廻したりする人形が入り乱れた。唐木政右衛門からき まさえもんが二刀を揮つて目

ざましく働く。「あの腰付こしつきを御覧なさい」と村での通人つうじん仁左衛門さんが嘆美する。「星

合団四郎ななか中々強いやつが向う方に居るのですからナ」と講談物仕入れこうだんものの智識をふり廻す。

夜は最早十二時。これから中幕の曾我対面がある。彼等は見残して、留守番も火の気も無い家に帰った。平作やお米おとが踊る彼等が夢の中にも、八幡の賑合にぎわいは夜すがら海の音の様に響いて居た。

(明治四十年 十一月)

夏の頃

一

夏は好い。夏が好い。夏ばかりでも困ろうが、四時春なんか云う天国は平に御免を蒙る。米国加州人士の中には、わざゝゝ夏を迎えに南方に出かける者もあるそう。不思議はない。

夏は放胆ほうたんの季節だ。小心しょうしん怯胆きやうたん屑々せつせつこたる小人の彼は、身をめぐる自然の豪快を仮かりつて、纔わずかに自家の気焰を吐くことが出来る。排外的に立籠めた戸障子を思いきり取り払う。小面倒な着物なんか脱いでもうて、毛深い体丸出しの赤裸々黒条々をきめ込む。大抵の客には裸体若くは半裸体で応接する。一夏過ぎると、背も腹も手足も、海辺に一月も過した様に真黒になる。臆病者も頗英雄になった気もちだ。夏の快味は裸の快味だ。裸の快味は懺悔ざんげの快味だ。さらけ出した体からだの土用干どようぼし、靈魂れいこんの煤掃すすはき、あとの清々すがすがしさは何とも云えぬ。起きぬけに木の下で冷たい水蜜桃すいかをもいでがぶりと喰いついたり、朝露に冷え切った水瓜すいかを畑で拳固げんこで破わって食うたり、自然の子が自然に還る快味は言葉に尽せぬ。

彼が家では、夏の夕飯ゆうめしをよく芝生でやる。椅子テーブルのこともあり、蓆むしろを敷いて低い食卓の事もある。金を爍とらかす日影椎の梢に残り、芝生はすでに蔭に入り、蝸ひくらしの声何処からともなく流れて来ると、成人おとなも子供も嬉々ききとして青芝の上の晚餐ばんさんの席に就くのである。犬や猫が、主人も大分開けて我党に近くなつた、頗話せると云つた様な顔をして、主人の顔と食卓の上を等分に見ながら、おとなしく傍に附いて居る。毎常いつもの夕飯がうまく喰われる、永くなる。梢に残つた夕日が消えて、樺色かほいろの雲が一つ波立たぬ海の様な空に浮いて居る。夏の夕明ゆうあかりは永い。まだ暮れぬ、まだ暮れぬ、と思う間に、其まゝすうと明るくなりまさる、眼をあげると、何時の間に頭の上にまん丸な月が出て居て、団欒だんらんの影黒く芝生に落ちて居る。

二

強烈な日光の直射程痛快なものはない。日蔭幽ひかげゆうに笑む白い花もあわれ、曇り日に見る花の和やわらかに落ちついた色も好いが、真夏の赫々かくかくたる烈日を存分受けて精一ぱい照りかえす花の色彩の美は何とも云えぬ。彼は色が大好きである。緋でも、紅でも、黄でも、紫でも、碧でも、凡そ色と云う色皆焰ほのおと燃え立つ夏の日の花園を、経木真田きようぎさなだの帽一つ、真裸でぶらつく彼は、色の宴うたげ、光の浴バスに恍惚とした酔人である。彼は一

滴の酒も飲まぬが、彼は色にはタワイもなく酔う。曾て戯れにある人のはがき帖に、

此身蝶にもあるまじけれど

わけもなくうれしかりけり日は午なる

真夏の園の花のいろく

三

変化の鮮やかは夏の特色である。彼の郷里熊本などは、昼間は百度近い暑さで、夜も油汗が流れてやまぬ程蒸暑い夜が少くない。蒲団なんか滅多に敷かず、簾一枚で、真裸に寝たものだ。此様でも困る。朝顔の花一ぱいにたまる露の朝涼、岐阜提灯の火も消えがちの風の晩冷、涼しさを声にした様な蛸に朝涼夕涼を宣らして、日間は草木も人もぐつたりと凋るゝ程の暑さ、昼夜の懸隔する程、夏は好いのである。

ヒマラヤを五も積み重ねた雲の峰が見る間に崩れ落ちたり、濃いインキの一点を天の一角にうった雲が十分間に全天空を鼠色に包んだり、電を閃かしたり、電を撒いたり、雷を鳴らしたり、夕立になったり、虹を見せたり。而して急に青空になったり、分秒を以てする天空の変化は、眼にもとまらぬ早わざである。夏の天に目ざましい変化があれば、夏の地にも鮮やかな変化がある。尺を得れば尺、寸を獲れば寸

と云う信玄流しんげんりゅうの月日を送る田園の人も、夏ばかりは謙信流けんしんりゅうの一気呵成いっきかせいを作物の上に
 味わうあじことが出来る。生憎草あいにくも夏は育つが、さりとて草ならぬものも目ざましく繁
 る。煙管きせるくわ啣くわえて、後手組うしろでんで、起きぬけに田の水を見る辰爺たつじいさんの眼に、露だらけ
 の早稲わせが一夜に一寸も伸びて見える。昨日花を見た茄子なすが、明日はもうもげる。瓜
 の蔓つるは朝々伸びて、とめてもとめても心をとめ切れぬ。二三日打つちやつて置くと、
 甘藷さつまいもの蔓は八重がらみになる。如何に一切を天道様に預けて、時計に用がない百姓
 でも、時には斯様こんなはきくした成績せいせきを見なければ、だらけてしまう。夏は自然の
 「ヤンキーズム」だ。而して此夏ここのが年が年中で、正月元日浴衣がけで新年御芽出度も
 困りものだが、此処ここらの夏はぐずぐずするとさつさと過ぎてしまふ位なので、却つ
 てよいのである。

四

夏の命いのちは水だが、川らしい川に遠く、海に尚遠い斯野このの村では、水の楽たのしみが思ふ様
 にとれぬ。

昨年さくねんの夏、彼は大きな甕かめを買った。径三尺、深さは唯一尺五寸の平たい甕であ
 る。これを庭の芝生の端はしに据えて、毎朝水晶の様な井の水を盈たして置く。大抵大

きなバケツ八はいで溢るゝ程になる。水気の少い野の住居は、一甕の水も琵琶洞庭である。太平洋大西洋である。書齋から見ると、甕の水に青空が落ちて、其処に水中の天がある。時々白雲が浮く。空を飛ぶ五位鷺の影も過ぎる。風が吹くと漣が立つ。風がなければ琅玕の如く凝つて居る。

日は段々高く上り、次第に熱して来る。一切の光熱線が悉く此徑三尺の液体天地に投射せらるゝかと思われる。冷たく井を出た水も、日の熱心にほだされて、段々冷たくなる。生温くなる。所謂日なた水になる。正午の頃は最早湯だ。非常に暑い日は、甕の水もうめ水が欲しい程に沸く。

午後二時三時の交は、涼しいと思う彼の家でも、九十度にも上る日がある。風がぱったり止まる日がある。昼寝にも飽きる。新聞を見るすらいやになる。此時だ、此時彼は例の通り素裸で薩摩下駄をはき、手拭を持つて、突と庭に出る。日ざかりの日は、得たりや応と真裸の彼を目かけて真向から白熱箭を射かける。彼は遽でず騒がず悠々と芝生を歩んで、甕の傍に立つ。先眼鏡をとつて、ドウダンの枝にのせる。次ぎに禪をとつて、春モミジの枝にかける。手拭を右の手に握り、甕から少しはなれた所に下駄を脱いで、下駄から直に大膀に片足を甕に踏み込む。呀、熱、と云いたい位。つゞいて一方の足も入れると、一気に撞と尻餅搗く様に坐わる。甕の縁を越して、水がざあつと溢れる。彼は悠然と甕の中に坐つて、手拭を濡らして、

頭から面、胸から手と、ゆる／＼洗う。水はます／＼溢れて流れる。乾いた庭に夕立のあとの如く水が流れる。油断をした蟻や螻が泡を喰つて逃げる。逃げおくれで流される。彼は好い気もちになつて、じいと眼をつぶる。眼を開いて徐に見廻わす。上には青天がある。下には大地がある。中には赤裸の彼がある。見物人は、太陽と雀と虫と樹と草と花と家ばかりである。時々は禪の洗濯もする。而してそれを楓の枝に曝らして置く。五分間で火熨斗をした様に奇麗に乾く。

十分十五分ばかりして、甕を出る。濡手拭を頭にのせたまゝ、四体は水の滴るゝまゝに下駄をはいて、今母の胎内を出た様に真裸で、天上天下唯我独尊と云う様な大踏歩して庭を歩いて帰る。帰つて縁に上つて、手拭で悉皆体を拭いて、尚暫くは縁に真裸で立つて居る。全く一皮脱いだ様で、己が体のあたりばかり涼しい気がそよぐ。縁から見ると、七分目に減つた甕の水がまだ揺々して居る。其れは夕蔭に、乾き渴いた鉢の草木にやるのである。稀には彼が出たあとで、妻児が入ることもある。青天白日、庭の真中で大びらに女が行水するも、田舎住居のお蔭である。

夏は好い。夏が好い。

低い丘の上から

一

彼は毎つねに武蔵野の住民と称して居る。然し実を云えば、彼が住むあたりは、武蔵野も場末ばすえで、景が小さく、豪宕げうとうな気象に乏しい。真の武蔵野を見るべく、彼の家から近くて一里強北に当って居る中央東線の鉄路を踏み切つて更に北せねばならぬ。武蔵野に住んで武蔵野の豪宕もうそう莽蒼の氣を領りようすることが出来ず、且居常流水の音を耳にすることが出来ぬのが、彼の毎々繰り返えす遺憾である。然し縁なればこそ来て六年も住んだ土地だ。平凡は平凡ながら、平凡の趣味も万更捨てたものでもない。

彼の住居は、東京の西三里、玉川の東一里、甲州街道から十丁程南に入つて、北多摩郡中では最も東京に近い千歳村字粕谷かすやの南耕地みなみごうちと云つて、昔は追剥おいはぎが出たの、大蛇おへびが出て婆ばばが腰をぬかしたのと伝説がある徳川の御林おはやしを、明治近くに拓ひらいたものである。林を拓いて出来た新開地だけに、いずれも古くて三十年二十年前株かぶを分けてもらつた新家の部落で、粕谷中でも一番新しく、且人家が殊ことに疎まばらな方面である。就中彼の家は此新部落の最南端に一つ飛び離れて、直ぐ東隣は墓地、生きた隣は背戸せどの

方へ唯一軒、加之しかも小一丁からある。田圃たんぼ向うの丘の上を通る青山街道から見下ろす位の低い丘だが、此方から云えば丘の南端に彼の家はあつて、東一帯は八幡の森、雑木林、墓地の木立に塞ふさがれて見えぬが、南と西とは展望に障るものなく、小さなパノラマの様な景色が四時朝夕眺められる。

二

三鷹村みたかむらの方から千歳村を経て世田ヶ谷の方に流るゝ大田圃の一の小さな枝が、入江いりえの如く彼が家の下を東から西へ入り込んで居る。其西の行きどまりは築き上げた品川堀つづみの堤やぶの藪やぶだたみになつて、其上から遠村近落の檜かしの森や松原を根占ねじめにして、高尾小仏から甲斐東部の連山が隠見出没して居る。冬は白く、春は夢の様に淡あわく、秋の夕ゆうべは紫に、夏の夕立後はまさまさと青く近寄つて来る山々である。近景の大きな二本松が此山の鏈くさりを突破とつばして居る。

此山の鏈を伝うて南東へ行けば、富士を冠かんした相州連山の御国山みくにやまから南端の鋭い頭をした大山まで唯一目に見られる筈だが、此辺で所謂富士南に豪農ほうふうりんの防風林の高い杉の森があつて、正に富士を隠して居る。少し杉を伐つたので、冬は白いものが人を焦しらす様にちら／＼透すいて見えるのが、却て懊惱おうれうの種になつた。あの杉の森が

なかつたら、と彼は幾度思つたかも知れぬ。然し此頃では唯其杉の伐られんことを是れ恐るゝ様になつた。下枝したえだを払つた百尺もある杉の八九十本、鬱然うつぜんとして風景を締めて居る。斯杉の森がなかつたら、富士は見えても、如何に浅薄の景色になつてしまつたであらう。春雨はるのこめの明けの朝、秋霧あきぎりの夕、此杉の森の梢しすえがミレージの様に靄もやから浮いて出たり、棚引く煙を紗の帯の如く纏まとうて見たり、しぶく小雨に見るゝ淡墨うすすみの画になつたり、梅雨ふくろうには梟しやの宿、晴れた夏には真先に蛸ひぐらしの家になつたり、雪霽ゆきばれには青空に劃然くつきりと聳そびゆる玉樹の高い梢に百点千点黒い鴉をとまらして見たり、秋の入日そらの空樺色くはいろに曬くする夕は、濃紺濃紫のうこんのうしの神秘な色を湛たたえて梢を距さる五尺の空に唯一つ明星を煌めかしたり、彼の杉の森は彼に尽きざる趣味を与えてくれる。

三

彼の家の下なる浅い横長の谷は、畑が重おもで、田は少しであるが、此入江から本田圃に出ると、長江の流るゝ様に田が田に連なつて居る。まだ北風の寒い頃、子を負つた跣足はだしの女の子が、小目籠めかいと庖刀めいとうを持って、芹せり、嫁菜よめな、薺なすな、野蒜のびる、蓬よもぎ、蒲公英たんぽぽなど摘みに来る。紫雲英れんげそうが咲く。蛙が鳴く。膝まで泥になつて、巳之吉亥之作が田螺拾たにしひろいに来る。簑笠みのかさの田植は骨でも、見るには画である。螢には赤い火が夏の夜にちら／＼

するのは、子供が鱒突とじようつきして居るのである。一条の小川が品川堀の下を横に潜くぐつて、彼の家の下の谷を其南側に添うて東へ大田圃の方へと流れて居る。最初は女竹めだけの藪の中を流れ、それから稀に藪を交えた萱かやの茂る土堤どての中を流れる。夏は青々として眼がさめる。葭切よじぎり、水鶏くいなの棲家になる。螢が此処からふらりと出て来て、田面に乱れ、墓地を飛んでは人魂を真似て、時々彼が家の蚊帳かやの天井まで舞い込む。夏は翡翠の屏風びやうぶに光琳の筆で描いた様に、青萱あわかやまじりに萱草かんぞうの赭あかい花が咲く。萱、葭の穂が薄紫に出ると、秋は此小川の堤つみに立つ。それから日に／＼秋風あきかぜを／＼に見せて、其薄紫の穂が白く、青々とした其葉が黄ばみ、更に白らむ頃は、漬菜つけなを洗う七ちゃんしたつづみが舌鼓したつづみうつ程、小川の水は浅くなる。行く／＼年とし関たけて武蔵野の冬深く、枯るものは枯れ、枯れたものは乾き、風なき日には光り、風ある日にはがさ／＼と人が来るかの様に響く。其内ある日近所の辰さん兼さんが簌々さくさくと音さして悉皆堤の上のを苅かつて、束たばにして、持つて往つて了う。あとは苅り残されの枯尾花かれおばなや枯葭かれよしの二三本、野茨のばちの紅い実まじりに淋さびしく残つて居る。覗のぞいて見ると、小川の水は何処へ潜くぐつたのか、窪くぼい水道だけ乾いたまゝに残される。

谷の向う正面は、雑木林、小杉林、畑などの入り乱れた北向きの傾斜である。此頃は其筋の取締も嚴重になつたが、彼が引越して来た当座は、まだ賭博が流行して、寒い夜向うの雑木林に不思議の火を見ることもあつた。其火を見ぬ様になつたはよいが、真正面に彼が七本松と名づけて愛で、居た赤松が、大分伐られたのは、惜しかった。此等の傾斜を南に上りつめた丘の頂は、隣字の廻沢である。雑木林に家がホノ見え、杉の森に寺が隠れ、此程並木の櫟を伐つたので、畑の一部も街道も見え、彼が粕谷に住んだ六年の間に、目通りに木羽葺が一軒、麦藁葺が一軒出来た。最初はけぼしい新屋根が氣障に見えたが、数年の風日は一を燻んだ紫に、一を淡褐色にして、あたりの景色としつくり調和して見せた。此丘を甲州街道の滝阪から分岐して青山へ行く青山街道が西から東へと這つて居る。青山に出るまでには大きな阪の二つもあるので、甲州街道の十分の一も往来は無いが、街道は街道である。肥車が通う。馬士が歌うて荷馬車を牽いて通る。自転車が鈴を鳴らして行く。稀に玉川行の自動車を通る。年に幾回か人力車を通る。道は面白い。座つて居て行路の人を眺むるのは、断片の芝居を見る様に面白い。時々緑の油筆や振りの紅を遠目に見せて嫁入りが通る。附近に寺があるので、時々は哀しい南無阿弥陀ア仏の音頭念仏に導かれて葬式が通る。

街道は此丘を東に下りて、田圃を横ぎり、また丘に上つて、東へ都へと這つて行

く。田圃をはさむ南北の丘が隣字の船橋で、幅四丁程の此田圃は長く世田ヶ谷の方へつゞいて居る。田圃の遙東に、いつも煙が幾筋か立つて居る。一番南が目黒の火柴製造所の煙で、次が渋谷の発電所、次ぎが大橋発電所の煙である。一度東京から逗留に來た幼ない姪が、二三日すると懷家病に罹つて、何時も庭の端に出ては右の煙を眺めて居た。五月雨で田圃が白くなり、雲霧で遠望が煙にぼかさるゝ頃は、田圃の北から南へ出る岬と、南から北へと差出る岬とが、宛ながら入江を囲む崎の如く末は海かと疑われる。廻沢と云い、船橋と云い、地形から考えても、昔は此田圃は海か湖かであつたろうと思われる。

谷から向うの丘にかけて、麦と稲とが彼の為に一年兩度緑になり黄になつてくれる。雑木林が、若葉と、青葉と、秋葉と、三度の榮を見せる。常見ではありとも見えぬ辺に、春來れば李や梅が白く、桃が紅く、夏來れば栗の花が黄白く、秋は其処此処に柿紅葉、白膠木紅葉、山紅葉が眼ざましく榮える。雪も好い。月も好い。真暗い五月闇に草舎の紅い火を見るも好い。雨も好い。春陰も好い。秋晴も好い。降る様な星の夜も好い。西の方甲州境の山から起つて、玉川を渡り、彼が住む村を過ぎて東

京の方へ去る夕立を目迎えて見送るに好い。向うの村の梢に先ず訪ずれて、丘の櫟林、谷の尾花が末、さては己が庭の松と、次第に吹いて来る秋風を指点するに好い。翳ったり、照ったり、躁いだり、黙ったり、雲と日と風の丘と谷とに戯るゝ鬼子つこを見るにも好い。白鯉の鱗を以て包んだり、蜘蛛の糸を以て織りなした縮羅の巾を引きはえたり、波なき海を縁どる夥しい砂浜を作ったり、地上の花を羞じ凋ます莊嚴偉麗の色彩を天空に輝かしたり、諒闇の黒布を瞬く間に全天に覆うたり、摩天の白銅塔を見る間に築き上げては奈翁の雄図よりも早く微塵に打崩したり、日々眼を新にする雲の幻術 天象の変化を、出て見るも好い。

四辺が寂しいので、色々な物音が耳に響く。鄙びて長閑な鶏の声。あらゆる鳥の音。子供の麦笛。うなりをうって吹く二百十日の風。音なくして声ある春の雨。音なく声なき雪の緘黙。単調な雷の様で聞く耳に嬉しい粃摺りの響。凱旋の爆竹を聞く様な麦うちの響。秋祭りの笛太鼓。月夜の若い者の歌。子供の喜ぶ飴屋の笛。降るかと思うと忽ち止む時雨のさゝやき。東京の午砲につゞいて横浜の午砲。湿った日の電車汽車の響。稀に聞く工場の汽笛。夜は北から響く烏山の水車。隣家で井汲む音。向うの街道を通る行軍兵士の靴音や砲車の響。小学校の唱歌。一丁はなれた隣家の柱時計が聞こゆる日もある。一番好いのは、春四月の末、隣の若葉した雑木林に朝日が射す時、ぼたり……ぼたりと若葉を迂る露の滴りを聴くのである。

夏秋の虫の音の外に、一番嬉しいのは寺の鐘。かね真言宗の安穩寺。あんのんじ其れはずつと西南へ寄つて、寺は見えぬが、鐘の音は聞こえる。とうがくいん東覚院、これも真言宗、つい向うの廻沢めぐりさわにあつて、寺は見えぬが、鐘の音は一番近い。尤も東にあるのが船橋の宝性寺、日蓮宗で、其草葺の屋根と大きな目じるしの椽とちの木は、小さく彼の縁から指さゝれる。

大木は地の榮さかえである。彼の周圍に千年の古木こぼくは無い。甲州の山鏈さんれんを突破する二本松と、豪農の杉の森の外、木らしい木は、北の方三丁ばかり畑へだを隔て、櫓けやきの杜の大櫓が亭々と天を摩そひして聳そびえて居る。其若葉は此あたりで春の目じるし、其蔭色とびいろは秋も深い目じるしである。北の方は、此櫓の中の櫓と下枝を払った数本のはらく松を点景にして、林から畑、畑から村と、遠く武蔵野につゞいて居る。

六

家の門口は東にある。出ると直ぐ雑木林。彼の有ものではないが、千金ただ幣ならず彼に愛される。彼が家の背うしろに、三角形をなす小さな櫓林くぬぎばやしと共に、春夏の際は若葉青葉の隧道とんねるを造る。青空から降る雨の様に落葉おちばする頃は、人の往来ゆききの足音が耳に立つ。蛇すの巢すでもあるが、春は香の好いツボスミレ、金蘭銀蘭、エゴ、ヨツド、メ、夏は白百

合、撫子花、日おうぎ、秋は萩、女郎花、地榆われもこう、竜胆りんどうなどが取々に咲く。ヨツド、メ
 の実も紅くれないの玉つづを綴る。檜茸ならたけ、湿地茸しめじだけも少しは立つ。秋はさながらの虫籠むしかごで、松虫鈴
 虫の好い音ねはないが、轡虫くつむしなどは喧しい程で、ともすれば家の中まで舞い込んでわ
 めき立てる。今は無くなつたが、先年まで其林の南、墓地の東隣に家があつて、十
 五六の唾の兄と十二三になる盲の弟が、兄が提灯ちようちんつけて見る眼を働かすれば、弟が
 聞く耳を立てゝ虫の音を指し、不具二人寄つて一人前の虫採むじとりをしたものだ。最早もとう其
 家はつぶれ、弟は東京で一人前の按摩あんまになり、兄は本家に引取られて居るが、虫は
 秋毎に依然として鳴いて居る。家がさながら虫の音おほに溺おほれる様な宵よいがある。

みみずのたはこと

大正十二年九月一日の大震に倒れただけで無事だった地蔵尊が、大正十三年一月十五日の中震に二たび倒れて無惨や頭が落ちました。私共の身代りになったようなものです。身代り地蔵と命名して、倒れたまま置くことにしました。

大正十三年 春彼岸の中日

ひとりごと

地蔵尊

地蔵様が欲しいと云つてたら、甲州街道の植木なぞ扱う男が、荷車にのせて来て、庭の三本松の蔭かげに南向きに据すえてくれた。八王子の在ざい、高尾山下浅川附近の古い由緒ある農家の墓地から買つて来た六地藏の一体だと云う。眼を半眼に開いて、合掌がっしょうしてござる。近頃出来の頭の小さい輕薄な地藏に比すれば、頭が余程大きく、曲眉まがひまゆり豊頬とよほゆつたりとした柔和にやうわの相好そうごう、少しも近代生活の齷齪あくせくしたさまがなく、大分ふるいものと見えて日苔ひじけが真白について居る。惜しいことには、鼻の一部と唇の一部にホンの少しばかり欠けかがあるが、情なさけの中に何処か可笑味おかしみを添えて、却て趣をなすと云わば云われる。台石の横側に、○永四歳（丁亥）十月二日と彫つてある。最初一瞥いちべつして寛永と見たが、見直すと寿永に見えた。寿永では古い、平家没落の頃だ。寿永だ、寿永だ、寿永にして掛け、と寿永で納まつて居ると、ある時好古癖こうこへきの甥が来て寿永じゃありません宝永ですと云うた。云われて見ると成程宝永だ。曆を繰ると、干支えとも合つて居る。そこで地藏様の年齢としも五百年あまり若くなつた。地藏様は若くなつ

て嬉ほしいとも云わず、古さが減へつていやとも云わず、ゆつたりした頬ほに愛嬌あいせうを湛たんえて、氣永きえいに合掌がしやうしてござる。宝永四年と云えば、富士が大暴おほなみれに暴はれて、宝永山が一夜に富士の横腹を蹴破おとつて跳はり出た年である。富士から八王子在の高尾までは、直径にして十里足らず。荒れ山が噴ふき飛とばす灰を定めて地蔵様は被かられたことであらう。如何いかでした、其時の御感想は？ 滅却心頭火亦涼と澄すましてお出でしたか？ 何と云うても返事もせず、雨が降つても、日が照りつけても、昼でも、夜でも、黙もくつて只合掌してござる。時々馬鹿にした小鳥が白い糞ふんをしかける。いたずらな蜘蛛くもめが糸いとで頸くびをしめる。時々家の主が汗臭い帽子を裏返しにかぶせて日に曝さららす。地蔵様は忍辱にんにくの笑貌えがを少しも崩くずさず、堅固に合掌してござる。地蔵様を持て来た時植木屋が石の香炉を持て来て前に据すえてくれた。朝々其れに清水を湛たんえて置く。近在を駆け廻まわつて帰かへつたデカやピンが喘あえぎ々々来ては、焦こがれた舌で大きな音をさせて其水を飲む。雀すずめや四十雀しじゅうすずめや頬白ほおしろが時々来ては、あたりを覗うかがつて香炉の水にぽちや／＼行水をやる。時々家の主も瓜の種ひたなぞ浸ひたして置く。散ちり松葉まつばが沈おみ、蟻あや蜚あ虫むしが溺死でしして居ることもある。尺に五寸の大海に鱗うろこ々の波が立ったり、青空や白雲が心のどか長閑のどかに浮ういて居る日もある。地蔵様は何時も笑顔で、何時も黙もくつて、何時も合掌してござる。

地蔵様の近くに、若い三本松と相對して、株かぶ立だちの若い山もみじがある。春夏は

緑、秋は黄と紅の蓋をさし翳す。家の主は此山もみじの蔭に椅子テーブルを置いて、時々読んだり書いたり、而して地蔵様を眺めたりする。彼の父方の叔母は、故郷の真宗の寺の住持の妻になつて、つい去年まで生きて居たが、彼は儒教実学の家に育つて、仏教には遠かつた。唯乳母が居て、地獄、極楽、剣の山、三途の川、賽の河原や地藏様の話を始終聞かしてくれた。四五歳の彼は身にしてみて其話を聞いた。而して子供心にやるせない悲哀を感じた。其様な話を聞いたあとで、つくづく眺めたうす闇い六畳の煤け障子にさして居る夕日の寂しいく光を今も時々憶い出す。

賽の河原は哀しい而して真実な俚伝である。此世は賽の河原である。大御親の膝下から此世にやられた一切衆生は、皆賽の河原の子供である。子供は皆小石を積んで日を過す。ピラミッドを積み、万里の長城を築くのがエライでも無い。村の卯之吉が小麦蒔くのがツマラヌでも無い。一切の仕事は皆努力である。一切の経営は皆遊びである。而して我儕が折角骨折つて小石を積み上げて居ると、無慈悲の鬼めが来ては唯一棒に打崩す。ナポレオンが雄図を築くと、フートルルーが打崩す。人間がタイタニックを造つて誇り貌に乗り出すと、氷山が来て微塵にする。勘作が小麦を蒔いて今年は豊年だと悦んで居ると、雹が降つて十分間に打散らす。蝶よ花よと育てた愛女が、墮落書生の餌になる。身代を注ぎ込んだ出来の好い息子が、大学卒業間際に肺病で死んで了う。蜀山を元がした阿房宮が楚人の一炬に灰になる。人柱

を入れた堤防が一夜に崩れる。右を見、左を見ても、賽の河原は小石の山を鬼に崩されて泣いて居る子供ばかりだ。泣いて居るばかりなら猶可い。試験に落第して、鉄道往生をする。財産を無くして、狂になる。世の中が思う様にならぬでヤケを起し、太く短く世を渡ろうとしてさまぐの不心得をする。鬼に窘められて鬼になり、他の小児の積む石を崩してあるくも少くない。賽の河原は乱脈である。慈悲柔和にこゝした地蔵様が出て来て慰めて下さらずば、賽の河原は、実に情無い住み憂い場所ではあるまいか。旅は道づれ世は情、我儕は情によつて生きることが出来る。地蔵様があつて、賽の河原は堪えられる。

庭に地蔵様を立たせて、おのれは日々鬼の生活をして居るでは、全く恥かしい事である。

水車問答

田川の流れをひいて、小さな水車が廻つて居る。水車のほとりに、櫓の木が一本立つて居る。

白日も夢見る村の一人の遊び人が、ある日櫓の木の下の草地に腰を下して、水車の軋々と廻るを見つゝ聞きつゝ、例の睡ともなく寤むるともなく、此様な問答を聞いた。

軋と一声長く曳張るかと思えば、水車が櫓の木を呼びかけたのであつた。

「おい櫓君、櫓君。君は年が年中其処につくねんと立つて居るが、全体何をするのだい？ 斯忙しい世の中にさ、本当に気が知れないぜ。吾輩を見玉え。吾輩は君、君も見て居ようが、そりやア忙しいんだぜ。吾輩は君、地球と同じに日夜動いて居るんだぜ。よしかね。吾輩は十五秒で一回転する。ソレ一時間に二百四十回転。一昼夜に五千七百六十回転、一年には勿驚約二百十万〇三千八百四十回転をやるんだ。なんと、眼が廻るだろう。君は吾輩が唯道楽に回転して居ると思うか。戯談じゃない、全く骨が折れるぜ。吾輩は決して無意味の活動をするんじゃない。吾輩は人間の為に穀も搗くのだ、粉も挽く。吾輩は昨年中に、エ、と、搗いた米がざつと五百

何十石、餅米が百何十石、大麦が二千何百石、小麦が何百石、粟が……稗が……黍
 が……挽いた蕎麦粉が……饅頭粉が……まだ大分あるが、まあざつと一年の仕事が
 斯様なもんだ。如何だね、自賛じやないが、働きも此位やればまず一人前はたつぷ
 りだね。それにお隣に澄まして御出の御前は如何だ。如何に無能か性分か知らぬが、
 君の不活動も驚くじやないか。朝から晩まで、年が年中其処にぬうと立ちぽかア
 んと立つて居て、而して一体お前は何をするんだい？ 吾輩は決してその自ら誇る
 じやないが、君の為に此顔を赧うせざるを得ないね。おい、如何だ。樫君。言分が
 あるなら、聞こうじやないか」
 云い終つて、口角沫を飛ばす様に、水車は水沫を飛ばして、響も高々と軋々と一
 廻り廻つた。

其処に沈黙の五六秒がつづいた。かさ／＼かさ／＼頭上に細い葉ずれの音がする
 かと思うと、其れは樫君が口を開いたのであつた。

「然つけ／＼云わるゝと、俺は穴へでも入りたいが、まあ聞いてくれ。そりや此処
 に斯うして毎日君の活動を見て居ると、羨ましくもなるし、黙つて立つて居る俺は
 実以て済まぬと恥かしくもなるが、此れが性分だ、造り主の仕置だから詮方は無い。
 それに君は俺が唯遊んで昼寝して暮らす様に云うたが、俺にも万更仕事が無いでも
 ない。聞いてくれ。俺の頭の上には青空がある。俺の頭は、日々夜々に此青空の方

へ伸びて行く。俺の足の下には大地だいちがある。俺の爪先は、日々夜々に地心へと向うて入って行く。俺の周囲ぐるりには空気と空間とがある。俺は此周囲に向うて日々夜々に広がって行く。俺の仕事は此だ。此が俺の仕事だ。成長が仕事なのだ。俺の葉蔭で夏の日に水車小屋の人達が涼すずんだり昼寝をしたり、俺の根が君を動かす水の流れの岸をば崩れぬ様に固めたり、俺のドングリを小供が嬉々と拾うたり、其様な事は偶然の機縁で、仕事と云う俺の仕事ではない。俺は今一人だが、俺の友達も其処そこ此処ここに居る。其一人は数年前に伐きられて、今は荷車にぐるまになつて甲州街道を東京の下肥のせて歩いて居る。他の友達は、下駄げたの齒はになつて、泥濘どろの路石ころ路を歩いて居る。他の一人は鉋かんの台になつて、大工の手脂てあぶらに光つて居る。他の友達は薪まきになつて、とうに灰になつた。ドブ板になつたのもある。また木目が馬鹿に奇麗だと云つて、茶室ちやしつの床柱ひしほしらになつたのもある。根こぎにされて、都の邸やしきの眼かくしにされたものもある。お百姓衆の鋤くわや鎌かまの柄えになつたり、空気タイヤの人力車の楫かじ棒ぼうになつたり、さまざまの目に遭うてさまざまの事をして居る。失礼ながら君の心棒も、俺の先代が身なる果だと君は知らないか。俺は自分の運命を知らぬ。何れ如何どうにかなることであろう。唯其時が来るまでは、俺は黙つて成長するばかりだ。君は折角眼ざましく活動し玉え。俺は黙つて成長する」

云い終つて、一寸唾つばを吐はいたと思つと、其はドングリが一つ鼻先はなさきに落ちたのであつ

た。夢見男は吾に復えつた。而して唯いつもの通り廻る水車と、小春日に影も動か
ず眠った様な櫓の木とを見た。

農

我父は農夫なり

約翰^{ヨハネ}伝第十五章一節

一

土の上に生れ、土の生^うむものを食うて生き、而して死んで土になる。我^{われ}儕^らは畢竟土の化物である。土の化物に一番適當した仕事は、土に働くことであらねばならぬ。あらゆる生活の方法の中、尤もよきものを択^{えら}み得た者は農である。

二

農は神の直参^{じきさん}である。自然^{ふとしろ}の懷^{こころ}に、自然の支配の下に、自然を賛^{たす}けて働く彼等は、人間化した自然である。神を地主とすれば、彼等は神の小作人である。主宰^{しゅさい}を神とすれば、彼等は神の直轄^{ちよくかつ}の下に住む天領^{てんりょう}の民である。綱島梁川君の所謂「神と共に働き、神と共に楽しむ」事を文義通り実行する職業があるならば、其れは農であらね

ばならぬ。

三

農は人生生活のアルファにしてオメガである。

ナイル、ユウフラテの畔に、木片で土を掘つて、野生の穀を蒔いて居た原始的農の代から、精巧な器械を用いて大仕掛にやる米国式大農の今日まで、世界は眼まぐるしい変遷を閲した。然しながら土は依然として土である。歴史は青人草の上を唯風の如く吹き過ぎた。農の命は土の命である。諸君は土を亡ぼすことは出来ない。幾多のナポレオン、維廉、シシルローツをして勝手に其帝国を経営せしめよ。幾多のロスチャイルド、モルガンをして勝手に其弗法を掻き集めしめよ。幾多のツエツペリン、ホルランドをして勝手に鳥の真似魚の真似をせしめよ。幾多のベルグソン、メチニコフ、ヘッケルをして盛んに論議せしめ、幾多のシヨウ、ハウプトマンをして随意に笑ったり泣いたりせしめ、幾多のガウガン、ロダンをして盛に塗り且刻ましめよ。大多數の農は依然として、日出而作、日入而息、掘井而飲、耕田而食うであらう。倫敦、巴里、伯林、紐育、東京は狐兔の窟となり、世は終に近づく時も、サハラよくやの沃野にふり上ぐる農の鋤は、夕日に晃めくであらう。

大なる哉土の徳や。如何なる不浄も容れざるなく、如何なる罪人も養わざるは無い。如何なる低能の人間も、爾の懷に生活を見出すことが出来る。如何なる数奇の將軍も、爾の懷に不平を葬ることが出来る。如何なる不遇の詩人も、爾の懷に憂を遣ることが出来る。あらゆる放浪を為尽して行き処なき蕩児も、爾の懷に歸つて安息を見出すことが出来る。

あわれなる工場の人よ。可哀想なる地底の坑夫よ。氣の毒なる店頭の人、デスクの人よ。笑止なる台閣の人よ。羨む可き爾農夫よ。爾の家は仮令家小屋に似たり共、爾の働く舞台は青天の下、大地の上である。爾の手足は松の膚の如く荒るゝ共、爾の筋骨は鋼鉄を欺く。烈日の下に滝なす汗を流す共、野の風はヨリ涼しく爾を吹く。爾は麦飯を食うも、夜毎に快眠を与えられる。急がず休まず一鍬一鍬土を耕し、遠てず悲らず一日一日其苗の長ずるを待つ。仮令思いがけない風、旱、水、雹、霜の天災を時に受けることがあつても、「エホバ与え、エホバ取り玉う」のである。土が残つて居る。来年がある。昨日富豪となり明日乞丐となる市井の投機児をして勝手に翻筋斗をきらしめよ。彼愚なる官人をして学者をして随意に威張らしめよ。爾の

頭は低くとも、爾の足は土について居る、爾の腰は丈夫である。

五

農程呑氣らしく、のろまに見える者は無い。彼の顔は沢山の空間と時間を有つて居る。彼の多くは帳簿を有たぬ。年末になつて、残つた足らぬと云うのである。彼の記憶は長く、与え主が忘れて了う頃になつてのこゝ礼に来る。利を分秒ふんびように争い、其日々に損得の勘定を為し、右の報を左に取る現金な都人から見れば、馬鹿らしくてたまらぬ。辰爺さんの曰く、「伶俐なやつは皆東京へ出ちやつて、馬鹿ばかり田舎に残つて居るでさア」と。遮莫農をオロ力と云うは、天網を疎そと謂い、月日をのろいと云い、大地を動かぬと謂う意味である。一秒時の十万分の一で一閃いつせんする電光を痛快と喜ぶは好い。然し開闢以来まだ光線の我儕われらに届かぬ星の存在を否むは僻事ひがことである。所謂「神の愚は人よりも敏し」と云う語あるを忘れてはならぬ。

六

農と女は共通性を有つて居る。彼美的百姓は曾て都の美しい娘達の学問する学校

で、「女は土である」と演説して、娘達の大抗議的笑を博した事がある。然し乾を父と称し、坤を母と称す、Mother Earth なぞ云つて、一切を包容し、忍受し、生育する土と女性の間には、深い意味の連絡がある。土と女の連絡は、土に働く土の精なる農と女の連絡である。

農の弱味は女の弱味である。女の強味は農の強味である。蹂躪される様で実は搭載し、常に負ける様で永久に勝つて行く大なる土の性を彼等は共に具えて居る。

七

農程臆病なものはない。農程無抵抗主義なものはない。権力の前には彼等は頭が上がない。「田家衣食無厚薄、不見県門身即楽」で、官衙に彼等はびく／＼ものである。然し彼等の権力を敬するは、敬して実は遠ざかるのである。税もこぼしながら出す。徴兵にも、泣きながら出す。御上の沙汰としなれば、大抵の事は泣きの涙でも黙つて通す。然し彼等が斯くするは、必しも御上に随喜の結果ではない。彼等が政府の命令に従うのは、彼等が強盗に金を出す様なものだ。此辺の豪農の家では、以前よく強盗に入られるので、二十円なり三十円なり強盗に奉納の小金を常に手近に出して置いたものだ。無益の争して怪我するよりも、と諍らめて然するのである。

農は従順である。土の従順なるが如く従順である。土は無感覺の如く見える。土の如く鈍如した農の顔を見れば、限りなく蹂躪してよいかの如く誰も思うであろう。然しながら其無感覺の如く見える土にも、恐ろしい地^じに^{すべ}りあり、恐ろしい地震^{じしん}があり、深い心の底には燃ゆる火もあり、沸く水もあり、清^{すず}しい命の水もあり、燃^もせば力の黒金剛石の石炭もあり、無価の宝石も潜^{ひそ}んで居ることを忘れてはならぬ。竹槍席旗は、昔から土に倅^{ひと}しい無抵抗主義の農が最後の手段であつた。露西亞の強味は、農の強味である。莫斯科まで攻め入られて、初めて彼等の勇氣は出て来る。農の怒は最後まで耐えられる。一たび発すれば、是れ地盤^{じばん}の震動である。何ものか震動する大地の上に立てようぞ？

八

農家に付きものは不潔である。だらしのないが、農家の病である。然し欠点は常に裏から見た長所である。土と水とが一切の汚物を受け容れなかつたら、世界の汚物は何処へ往くであろうか。土が潔癖になつたら、不潔は如何なることであろうか。土の土たるは、不潔を排斥して自己の潔を保つでなく、不潔を包容し浄化して生命^{おんしょう}の温床たるにある。「吾父は農夫也」と耶蘇の道破した如く、神は正しく一の大農夫

である。神は一切を好^よと見る。「吾の造りたるものを不潔とするなかれ」是れ大農夫たる神の言葉である。自然の眼に不潔なし。而して農は尤も正しい自然主義に立つものである。

九

土なるかな。農なるかな。地に人の子の住まん限り、農は人の子にとって最も自然且つ尊貴な生活の方法で、且其救であらねばならぬ。

蛇

一

虫類で、彼の嫌いなものは、蛇、蟪蛄、蠛蠓、蝻、蛄、尺蠖。

蠛蛄の赤腹を見ると、嘔吐が出る。蠛蛄はあの三角の小さな頭、淡緑色の大きな眼球に蚊の嘴程の鋭く鋭い而してじいと人を見詰むる瞳を点じた凄惨い眼、黒く鋭い口嘴、Vice の様な其両手、剖いて見れば黒い虫の様に蠢く腸を満たしたふくれ腹、身を逆さにして草木の葉がくれに待伏し、うっかり飛んで来る蟬の胸先に噛みついてばた／＼苦しがらせたり、小さな青蛙の咽に爪うちかけてひい／＼云わしたり、要するに彼はこれ虫界の Iago 悪魔の惨忍を体現した様なものである。引掟えてやろうとすれば、彼は小さな飛行機の如く、羽をひろげてばッぱた／＼と飛んで往つて了う。憎いやつである。それから、家を負う蝸牛の可愛気はなくて、ぐちやりと唯意気地なさを代表した様で、それで青菜甘藍を何時の間にか意地汚なく喰い尽す蛄蛄と、枯枝の真似して居て、うっかり触れば生きてますと云い貌にびちりと身を振り、あつと云つて匆ね飛ばせば、虫のくせに猪口才な、頭と尾とで寸法とつて信

玄流に進む尺蠖とは、氣もちの悪い一対である。此等は何れも嬉しくない連中だが、然しまだく蛇には敵わぬ。

二

蛇嫌いは、我等人間の多数に、祖先から血で伝わって居る。話で聞き、画で見、幼ない時から大蛇は彼の恐怖の一であつた。子供の中から彼はよく蛇の夢を見た。今も心身にいやな事があれば、直ぐ蛇を夢に見る。現に彼が蛇を見たのは五六歳の頃であつた。腫物の湯治に、郷里熊本から五里ばかり有明の海辺の小天の温泉に連れられて往つた時、宿が天井の無い家で、寝ながら上を見て居ると、真黒に煤けた屋根裏の竹を縫うて何やら動いて居た。所謂青大将であつたが、是れ目に見えていやなものとな蛇を思う最初であつた。

彼の兄は彼に劣らぬ蛇嫌いで、ある時家の下の小川で魚を抄うとて蛇を抄い上げ、きやつと叫んで箆を抛り出し、真蒼になつて逃げ帰つたことがある。七八歳の頃、兄弟連れ立つての学校帰りに、川泳ぎして居た悪太郎が其時は一丈もあろうと思うた程の大きな青大将の死んだのを路の中央に横たえて恐れて逡巡する彼を川の中から手を拍つて笑つた。兄が腹を立て、彼の手を引きずる様にして越えようとする。

大奮発して二足三足、蛇の間も手前まで来ると、死んで居る動かぬとは知つても、長々と引きずつた其体、白くかえした其段だら腹を見ると、彼の勇氣は頭の頂辺からすうとぬけてしもうて如何しても足が進まぬ。已むを得ず土堤の上を通らうとすれば、悪太郎が川から上つて来て、また蛇を土堤の上に引きずつて来る。結局如何して通つたか覚えぬが、生来斯様な苦しい思をさせられたことはなかつた。彼の従弟は少しも蛇を恐れず、杉籬に絡んで居るやつを尾をとつて引きずり出し、環を廻す様に大地に打つけて、楽々と殺すのが、彼には人間以上の勇氣神わざの様に凄じく思われた。十六歳の夏、兄と阿蘇の温泉に行く時、近道をして三里余も畑の畔の草徑を通つた。吾儘な兄は蛇払として彼に先導の役を命じた。其頃は蛇より兄が尚恐かつたので、恐ずく五六歩先に立つた。出るわく、二足行つてはかさく、五歩往つてはくわさく、烏蛇、山かゞし、地もぐり、あらゆる蛇が彼の足許から右左に逃げて行く。まるで蛇を踏分けて行くようなものだ。今にも踏んで巻きつかれるのだと観念し、絶望の勇氣を振うて死物狂に邁進したが、到頭直接接觸の経験だけは免れた。阿蘇の温泉に往つたら、彼等が京都の同志社で識つた其処の息子が、先日川端の湯樋を見に往つて虻に噛まれたと云つて、跛をひいて居た。彼の郷里では虻をヒラクチと云う。ある年の秋、西山に遊びに往つて、唯有る崖を攀じて居ると、「ヒラクチが居つたぞウ」と上から誰やら警戒を叫んだ。其時

の魂も消入る様な心細さを今も時々憶い出す。

三

村住居をする様になつて、隣は雑木林だし、墓地は近し、是非なく蛇とは近付になつた。蝮はまだ一度も見かけぬが、青大将、山かゞし、地もぐりの類は沢山居る。最初は生類御憐みで、虫も殺さぬことにして居たが、此頃では其時の気分次第、殺しもすれば見^{みの}追しもする。殺しても尽きはせぬが、打ちやって置くと殖^ふえて仕樣がないのである。書院の前に大きな百日紅^{さるすべり}がある。もと墓地にあつたもので、百年以上の老木だ。村の人々が五円で植木屋に売つたのを、すでに家の下まで引出した時、彼が無理に譲つてもらつたのである。中は悉^{すっかり}皆空洞になつて、枝の或ものは連理^{れんり}になつて居る。其れを植えた時、墓地の東隣に住んで居た啞の子が、其幹を指して、何かによろくと上つて行く状^{さま}をして見せたが、墓地にあつた時から此百日紅は蛇の棲^{すみ}家であつたのだ。彼の家に移つて後も、梅雨^{つゆ}前になると蛇が来て空洞^{うろ}の孔^{あな}から頭を出したり、幹^{みき}に絡^{から}んだり、枝の上にトグロをまいて日なたぼこりしたりする。三足も四足も出て居ることがある。百日紅の枝其ものが滑^{すべ}つこく蛇の膚^{はだ}に似通うて居るので、蛇も居心地がよいのであろう。其下を通ると、あまり好い氣もちはせぬ。時々

は百日紅から家の中へ来ることもある。ある時書院の雨戸をしめて居た妻がきやつと叫んだ。南の戸袋に蛇が居たのである。雀が巢くう頃で、雀の臭を追うて戸袋へ来て居たのであろう。其翌晩、妻が雨戸をしめに行くと、今度は北の戸袋に居た。妻がまたけたましく呼んだ。往つて繰り残しの雨戸で窃と当つて見ると、確に軟らかなものゝ手答がする。釣糸に響く魚の手答は好いが、蛇の手応えは下さらぬ。雨戸をしめれば蛇の逃所がなし、しめねばならず、ランプを呼ぶやら、青竹を吟味するやら、小半時かゝつて雨戸をしめ、隅に小さくなつて居るのを手早くたゞき殺した。其れが雌でもあつたか、翌日他の一疋がのろゝと其侶を探がしに來た。一つ撲つて、ふりかえる処をつゞけざまに五六つたゝいて打殺した。殺してしもうて、つまらぬ殺生をしたと思うた。

彼が家のはなれの物置兼客間の天井には、ぬけ殻から測つて六尺以上の青大將が居る。其家が隣村にあつた頃からの蛇で、家を引移すと何時の間にか大將も引越して、吾家貌に住んで居る。所謂ヌシだ。隣村の千里眼に見てもらつたら、旧家主の先代のおかみの後身だと云うた。夥しい糞尿をしたり、夜は天井をぞろゝ重い物曳きずる様な音をさせてあるく。梅雨の頃、ある日物置に居ると、パリ／＼と音がした。見ると、其処に卵の殻を沢山入れた目籠に、彼ぬしでは無いが可なり大きな他の青大將が来て、盛に卵の殻を食うて居るのである。見て居る内に、長持の背か

らまた一足のろく、這い出して来て、先のと絡み合いながら、これもパリ／＼卵の殻を喰いはじめた。青黒い滑々したあの長細い体が、生き繩の様に眼の前に伸びたり縮んだりするのは、見て居て気もちの好いものではない。不図見ると、呀此処にも、梁の上に頭は見えぬが、大きなものが胴から下波うって居る。人間が居ないので、蛇君等が処得貌に我家と住みなして居るのである。天井裏まで上ったら、右の三足に止まらなかつたであらう。彼は其日一日頭が痛かつた。

ある時栗買いに隣村の農家に往つた。上塗をせぬ土蔵の腰部に幾個の孔があつて、孔から一々縄が下つて居る。其縄の一つが動く様なので、眼をとめて見ると、其縄は蛇だつた。見て居る内にずうと引込んだが、またのろ／＼と頭を出して、丁度他の縄の下つて居ると同じ程にだらりと下がった。何をするのか、何の為に縄の真似をするのか。鏡花君の縄張に入る可き蛇の挙動と、彼は薄気味悪くなつた。

勇将の下に弱卒なし。彼が蛇を恐れる如く、彼が郎党の犬のデカも獐猛な武者振をしなから頗る蛇を恐れる。蛇を見ると無闇に吠えるが、中々傍へは寄らぬ。主人が勇氣を出して蛇を殺すと、デカは死骸の周囲をぐる／＼廻つて、一足寄つてはワンと吠え、二足寄つては遽て、飛びのいてワンと吠え、ワンと吠え、ワンと吠え、廻り廻つて、中々傍へは寄らぬ。ある時、麦畑に三尺ばかりの山かゞしが居た。山かゞしは、やゝ精悍なやつである。主人が声援したので、デカは思切つてワンと囀

みにかゝつたら、口か舌かを螫さされた見え、一声悲鳴いっせいひめいをあげて飛びのき、それから限なく口から白泡しらあわを吐いて、一時は如何どうなる事かと危ぶんだ。此様な記憶があるの
で、デカは蛇を恐るゝのであろう。多くの猫は蛇を捕る。彼が家のトラはよく寝鳥ねとり
を捕とつてはむしゃく喰うが、蛇をまだ一度もとらぬ。ある時、トラが何ものかと
相対あたいし貌がほに、芝生に座すわつて居るので、覗のぞいて見たら、トグロを巻いた地もぐりが頭を
ちゞめて寄らば撃うたんと眼を怒らして居る。トラが居すまいを直すたびに、蛇は其
頭をトラの方へ向け直す。トラは相関せざるものゝ様に、キッチンと前足まぞうを揃そろえて、何
か他の事を案じ顔である。彼が打殺す可さく竿おをとりに往つた間に、トラも蛇も物別ものわか
れになつて何処かへ往つてしまつた。

四

斯く蛇に近くなつても、まだ嫌惡の情は除とれぬ。百花の園にも、一疋の蛇が居れ
ば、最早もう園其ものが嫌になる。ある時、書齋の縁の柱の下に、一疋の蛇がよろゝ
頭もたを擡もたげて、上ろうか、と思う様子をして居た。遽あわで、蛇打捧を取りに往つた間に、
蛇が見えなくなつた。びくゝもので、戸袋の中や、室内のデスクの下、ソファの
下、はては額がくの裏まで探がした。居ない。居ないが、何処かに隠れて居る様で、安心

が出来ぬ。枕を高くして昼寝ひるねも出来ぬ。其日一日は終に不安の中に暮らした。蛇を見ると、彼が生活の愉快がすうと泡あわの様に消える。彼は何より菓物が好きで、南洋に住みたいが、唯蛇が多いので其気にもなれぬ。ボア、パイゾンの長大なものでも、食匙蛇はぶ、響尾蛇ラツツルスネーキ、蝮蛇まむしの毒あるでもなく、小さい、無害な、臆病な、人を見れば直ぐ逃げる、二つ三つ打てば直ぐ死ぬ、眼の敵かたきに殺さるゝ云わば気の毒な蛇までも、何故斯様なぜこんなに彼は恐れ嫌がるのであろう？ 田舎の人達は、子供に到るまで、あまり蛇を恐れぬ。卵でも呑みに来たり、余程わるさをしなければ滅多に殺さぬ。自然に生活する自然の人なる農の仕方は、おのずから深い智慧ちえに適う事が多い。

奥州の方では、昔蛇が居ない為に、夥しい鼠に山林の木芽このめを食われ、わざ／＼蛇を取寄せて山野に放ったこともあるそうだ。食うものが無くて、蛇を食う処さえる。好きとあつては、ポケットに入れてあるく人さえある。

悪戯いたづらに蛇を投げかけようとした者を已に打果うちはたすとて刀の柄に手をかけた程蛇嫌いの士が、後法師になつて、蛇の巢すと云わるゝ竹生島ちくふじまに庵いおりを結び、蛇の中で修行した話は、西鶴さいかくの物語で読んだ。東京の某耶蘇教会で賢婦人の名があつた某女史は、眼が悪い時落ちた襷たすきと間違えて何より嫌いな蛇にぎを握り、其れから信仰に進んだと伝えられる。糞尿ふんにようにも道あり、蛇も菩提ぼだいに導く善智識であらねばならぬ。

「世の中に這入はいりかねてや蛇の穴」とは古人の句。醜みにくい姿忌み嫌わるゝ悲しさに、大

びらに明るい世には出られず、常に人目を避けて陰地いんちにのたくり、弱きを窘いじめて冷たく、執念深く、笑うこともなく世を過す蛇を思えば、彼は蛇を嫌う権理がないばかりではなく、蛇は恐らく虫に化なつて居る彼自身ではあるまいか。己わが醜みにくさを見せらるゝ為に、彼は蛇を忌み嫌い而して恐るゝのであるまいか。

生命すがは共通である。生存は相殺そうさつである。自然は偏倚へんいを容ゆるさぬ。愛憎あいぞうは我等が宇宙に縋すがる二本の手である。好悪は人生を歩む左右の脚である。

好きなものが毒になり、嫌いなものが薬くすりになる。好きなものを食うて、嫌いなものに食われる。宇宙の生命いのちは斯くして有たもたるゝのである。

好きなものを好くは本能である。嫌いなものを好くに我儕われらの理想がある。

「天の父の全きが如く全くす可し」

本能から出発して、我等は個々理想に向わねばならぬ。

露の祈

今朝庭を歩いて居ると、眼が一隅に走る瞬間、はッとして彼は立とまった。枯菰の枝にものが光る。玉だ！ 誰が何時撒いたのか、此枝にも、彼枝にも、紅玉、黄玉、紫玉、緑玉、碧玉の数々、きらり、きらりと光つて居る。何と云う美しい玉であらう！ 嗟嘆してやゝしばし見とれた。近寄つて一の枝に触ると、ほろりと消えた。何だ、露か。そうだ、やはりいつもの露であつた。露、露、いつもの露を玉にした魔術師は何処に居る？ 彼はふりかえつて、東の空に杲々と輝く朝日を見た。

あゝ朝日！

爾の無限大を以てして一滴の露に宿るを厭わぬ爾朝日！

須臾の命を小枝に托するはかない水の一雫、其露を玉と光らす爾大日輪！

「爾の子、爾の栄を現わさん為に、爾の子の栄を顕わし玉え」

の祈は彼の口を衝いて出た。

天つ日の光に玉とかがやかば

などか惜まん露の此の身を

草とり

一

六、七、八、九の月は、農家は草と合戦である。自然主義の天は一切のものを生じ、一切の強いものを育てる。うちやうちやうち置けば、比較的脆弱な五穀蔬菜は、野草に杜がれてしまう。二宮尊徳の所謂「天道すべての物を生ず、裁制補導は人間の道」で、こゝに人間と草の戦闘が開かるのである。

老人、子供、大抵の病人はもとより、手のあるものは火斗でも使いたい程、畑の草田の草は猛烈に攻め寄する。飯焚く時間を惜んで餅を食い、茶もおちくは飲んで居られぬ程、自然は休戦の息つく間も与えて呉れぬ。

「草に攻められます」とよく農家の人達は云う。人間が草を退治せねばならぬ程、草が人間を攻めるのである。

唯二反そこの畑を有つ美的百姓でも、夏秋は烈しく草に攻められる。起きぬけに顔も洗わず露蹴散らして草をとる。日の傾いた夕蔭にとる。取りきれないで、日中にもとる。やうと奇麗になつたかと思うと、最早一方では生えて居る。草と虫さえ

無かつたら、田園の夏は本当に好いのだが、と愚痴をこぼさぬことは無い。全体草なにか余計なものが何になるのか。何故人間が除草器械にならねばならぬか。除草は愚だ、うちやうて草と作物の競争さして、全滅とも行くまいから残っただけを此方に貰えば済む。というても、實際眼前に草の跋扈を見れば、除らずには居られぬ。隣の畑が奇麗なのを見れば、此方の畑を草にして草の種を隣に飛ばしても済まぬ。近所の迷惑も思わねばならぬ。

そこでまた勇気を振起して草をとる。一本また一本。一本除れば一本減るのだ。草の種は限なくとも、とっただけは草が減るのだ。手には畑の草をとりつゝ、心に心田の草をとる。心が畑か、畑が心か、兎角に草が生え易い。油断をすれば畑は草だらけである。吾儕の心も草だらけである。四囲の社会も草だらけである。吾儕は世界の草の種を除り尽すことは出来ぬ。除り尽すことは、また我儕人間の幸福でないかも知れぬ。然しうちやうて置けば、我儕は草に埋もれて了う。そこで草を除る。己が為に草を除るのだ。生命の為に草をとるのだ。敵国外患なければ国常に亡ぶで、草がなければ農家は墮落して了う。

「爾我言に背いて禁菓を食いたれば、土は爾の為に咀嚼る。土は爾の為に荊棘と薊を生ずべし。爾は額に汗して苦しみて爾のパンを食わん」

斯く旧約聖書は草を人間の罰と見た。実は此の罰は人の子に対する深い親心の祝

福である。

二

美的百姓の彼は兎角見るに美しくする為に草をとる。除るとなれば氣にして一本残さずとる。農家は更に賢いのである。草を絶やすと地力を尽すと云う。草をとつて生のまゝ土に埋め、或は烈日に乾燥させ、焼いて灰にし、積んで腐らし、いづれにしても土の肥料にしてしまふ。馴付けた敵は、味方である。「年々や桜を肥す花の塵」美しい花が落ちて親木の肥料になるのみならず、邪魔の醜草がまた死んで土の肥料になる。清水却て魚棲まず、草一本もない土は見るに氣もちがよくと、或は生命なき瘠土になるかも知れぬ。本能は滅す可からず、不良青年は殺さずして導く可きであることを忘れてはならぬ。誰か其懷に多少の草の種を有つて居らぬ者があらうぞ？

畑の草にも色々ある。つまんでぬけばすぽつとぬけて、しかも一種の芳しい香を放つ草もある。此辺で鹹草と云う、丈矮く茎紅ぶとりして、頑固らしく蹣跚して居ても、根は案外浅くして、一挙手に亡ぼさるゝ草もある。葉も無く花も無く、地下一尺の闇を一丈も二丈も這いまわり、人知れず穀菜に仇なす無名草もある。厄介なの

は、地縛^{じしほ}り。単弁^{たんべん}の黄なる小菊の様に可憐な花をしながら、蔓延又蔓延、糸の様な蔓は引けば直ぐ切れて根を残し、一寸の根でも残れば十日とたゞずまた一面の草になる。土深く鍬を入れて掘り返えし、丁寧^{ていねい}に根を拾う外に滅^{ほろぼ}す道は無い。我儕^{われら}は世を渡りて往々此種の草に出会う。

草を苅るには、朝露^{あさつゆ}の晞^あかぬ間^ま。露にそばぬれた寝^ねぎめの草は、鎌の刃を迎えてさく／＼切れて行く。一挙に草を征伐するには、夏の土用^{どよう}の中、不精^{ぶしょう}鎌と俗に云う柄^えの長い大きなカマボコ形の鎌で、片端からがり／＼搔^かいて行く。梅雨^{つゆうち}中には、搔く片端からついてしまう。土用中なら、一時間で枯れて了う。

夏草は生長猛烈でも、気をつけるから案外制し易い。恐ろしいのは秋草である。行末短い秋草は、種がこぼれて、生えて、小さなまゝで花が咲いて、直ぐ実になる。其^{あわただ}遽^さしさ、草から見れば涙である。然し油断してうつかり種をこぼされたら、事である。一度落した草の種は中々急に除^とり切れぬ。田舎を歩いて、奇麗^{くわめ}に鍬^{くわ}目の入った作物のよく出来た畑の中に、草が茂って作物の幅^{はば}がきかぬ畑を見ることがある。昨年の秋、病災^{びやうさい}不幸^{ふこう}などでつい手が廻らずに秋草をとらなかつた家の畑である。草を除^とろうよ。草を除^とろうよ。

不浄

上

此辺の若者は皆東京行をする。此辺の「東京行」は、直ちに「不浄取り」を意味する。

東京を中心として、水路は別、陸路五里四方は東京の「掃除」を取る。荷車を引いて、日帰りが出来る距離である。荷馬車もあるが、九分九厘までは手車である。ずつと昔は、細長い肥桶こえんけで、馬に四桶附け、人も二桶担になつて持つて来たが、後、輪の大きい大八車で引く様になり、今は簡易な荷車になった。彼の村では方角上大抵四谷、赤坂が重おもで、稀には麴町まで出かけるのもある。弱い者でも桶の四つは引く。少し力がある若者は、六つ、甚しいのは七つも八つも挽く。一桶の重量十六貫とすれば、六桶も挽けば百貫からの重荷おもだ。あまり重荷を挽くので、若者の内には眼を悪くする者もある。

股引草鞋、夏は経木真田の軽い帽、冬は釜底かまぢの帽ぼうを阿弥陀あみだにかぶり、焦茶毛糸こげちやの襟卷、中には樺色あはの麤い毛糸の手袋をして、雨天には簑笠姿で、車の心棒に油を入

れた竹筒たけづつをぶらさげ、空の肥桶の上に、馬鈴薯じゃがいも、甘薯さつまいもの二籠三籠、焚付疎朶たきつけそだの五把六束、季節によつては菖蒲あやめや南天小菊の束なぞ上積にした車が、甲州街道を朝々幾百台となく東京へ向うて行く。午後になると帰つて来る。両腕に力を入れ、前俛まえかがみになつて、揉みあげに汗あせの珠たまをたらして、重そうに挽いて帰つて来る。上荷には、屋根の修繕に入用のはりがねの二巻三巻、棕櫚繩しゅろなわの十束二十束、風呂敷かけた遠路籠の中には、子供へみやげの煎餅の袋も入つて居よう。かみさんの頼んだメリンスの前掛も入つて居よう。或は娘の晴着の銘仙も入つて居よう。此辺の女は大抵留守ばかりして居て、唯三里の東京を一生見ずに死ぬ者もある。娘の婚礼着すら男親が買うことになつて居る。「阿爺おとつあん、儂おらア此縞このしまア嫌やアだ」と、毎々阿娘の苦情が出る。其等の車が陸続として帰つて来る。東京場末の飯屋めしやに寄る者もあるが、多くは車を街道に片寄せて置いて、木蔭こかげで麦や稗ひえの弁当をつかう。夏の日ざかりには、飯を食うたあとで、杉の木蔭くぐくうに駒々くまぐま焉と寝て居る。荷が重いか、路が悪い時は、弟や妹が中途まで出迎えて、後押して来る。里道にきれ込むと、砂利も入つて居らぬ路はひどくぬかるが、路が悪い悪いとこぼしつゝ、格別路をよくしようともせぬ。其様な暇も金も無いのである。

甲州街道の新宿出入口は、町幅が狭い上に、馬、車の往来が多いので、時々肥料車が怪我けがをする。帰りでも晚おそいと、気が気でなく、無事な顔見るまでは心配でなら

ぬと、村の婆さんが云うた。水の上を憂うる漁師の妻ばかりではない。平和な農村にも斯様な行路難がある。

東京界隈の農家が申合せて一切下肥を汲まぬとなったら、東京は如何様に困るだろう。彼が東京住居をして居た時、ある日隣家の御隠居婆さんが、「一ぱいになってこぼるゝ様になつてゐるものを、せつせと来てくれんじや困るじやないか」と疳癩声で百姓を叱る声を聞いた。其は権高な御後室様の怒声よりも、焦れた子供の頼無げな恨めしげな苦情声であつた。大君の御膝下、日本の中枢と威張る東京人も、子供の様に尿尿のあと始末をしてもらうので、田舎の保母の来ようが遅いと、斯様に困つてじれ給うのである。叱られた百姓は黙つて其糞尿を掃除して、それを肥料に穀物蔬菜を作つては、また東京に持つて往つて東京人を養う。不浄を以て浄を作り、廃物を以て生命を造る。「吾父は農夫なり」と神の愛子は云つたが、實際神は一大農夫で、百姓は其型を無意識にやつて居るのである。

衆議院議員の選挙権位は有つて居る家の息子や主人が掃除に行く。東京を笠に被て、二百万の御威光で叱りつくる長屋のかみさんなど、掃除人の家に往つたら、土蔵の二戸前もあつて、喫驚する様な立派な住居に魂消ることであらう。斯く云う彼も、東京住居中は、昼飯時に掃除に来たと云つては叱り、門前に肥桶を並べたと云つては怒鳴つたりしたものだ。園芸を好んだので、糞尿を格別忌むでも賤むでもなかつ

たが、不浄取りの人達を糞尿をとつてもらう以外没交渉の輩として居た。来て其人達の中に住めば、此処も嬉しい哀しい人生である。息子を兵役にとられ、五十越した与右衛門さんが、甲州街道を汗水滴らして肥車を挽くのを見ると、仮令其れが名高い吾儘者の与右衛門さんでも、心から氣の毒にならずには居られぬ。而して此頃では、むツといきれの立つ堆肥の小山や、肥溜一ぱいに堆く膨れ上る青黒い下肥を見ると、彼は其処に千町田の垂穂を眺むる心地して、快然と豊かな氣もちになるのである。

下

「新宿のねエよ、女郎屋でさア、女郎屋に掃除を取りに行く時ねエよ、鰻鮎粉なんか持つてつてやると、そりや喜ぶよ」

辰爺さんは斯う云うた。

同じ糞でも、病院の糞だの、女郎屋の糞だのと云うと、余計に汚ない様に思う。不潔を扱うと、不潔が次第に不潔でなくなる。葛西の肥料屋では、肥桶にぐつと腕を突込み、べたりと糞のつくとかぬで下肥の濃薄従つて良否を驗するそうだ。此辺でも、基肥を置く時は、下肥を堆肥に交ぜてぐちゃぐちゃしたやつを盛った肥桶

を頸くびからつるし、後ざまに畝うねを歩みつゝ、一足毎に片手に掴み出してはやり、掴み出してはやりする。或は更に稀薄きはくにしたのを、剥はけ腕わんで抄すくうてはざぶり／＼水田にくれる。時々眼鼻ふんじゅうに糞汁ふんじゅうがかかる。

「あつ、糞が眼めの中なけへ入はいつちやつた」と若いのが云う。

「其れが本当の眼糞めくそだ」爺おやじは平然たるものだ。

平然たる爺が、ある時三四歳の男の子を連れて遊びに來た。誰のかと云えば、お春のだと云う。お春さんは爺さんの娘分むすめぶんになつて居る若い女だ。

「お春が拾つて來たんでさ」と爺さんじいがにや／＼笑いながら曰うた。

「拾つて來た？ 何処どこで？」

野暮先生やぼ正に何処かで捨子を拾つて來たのだと思うた。爺は唯にや／＼笑つて居た。其は私生児それであつた。お春さんの私生児であつた。

お春さん自身が東京芸者の私生児であつた。里子からずる／＼に爺さんの娘分になり、近所に奉公に出て居る内に、丁度母の芸者が彼女を生んだ十六の年に、彼女も私生児を生んだ。歴史は繰り返えす。細胞の記憶しつようも執拗なものである。十六の母は其私生児を負おぶつて、平氣に人だかりの場所へ出た。無頓着な田舎でも、「ありや如何どうしたんだんべ？」と眼を円まるくして笑つた。然し女に廢物すたりは無い。お春さんは他の東京から貰もらわれて來た里子の果はての男と出来合うて、其私生児を残して嫁に往つた。

而して二人は今幸福に暮らして居る。

ある爺さんのおかみは、昔若かった時一度亭主を捨て、情夫と逃げた。然し歸つて来ると、爺さんは四の五の云わずに依然かみさんの座ざに坐すわらした。太公望たこうぼうの如く意地悪ではなかった。夫婦に娘が出来て、年頃になった。其娘が出入の若い大工と物置の中に潜ひそむ日があった。昔男と道行の経験があるおかみは頻しきりと之を氣にして、裏口から娘の名を呼びくした。爺さんの曰く、うちやつておけやい、若エ者だもの、些ちったア虫むしもつくべいや。此は此爺さんのズボラ哲学である。差別派からは感心は出来ぬが、中に大なる信仰と真理がある。

甲吉が嬢かかをもらう。其は隣村の女で、奉公して居る内主人の子を生んだのだと云う。乙太郎の女が嫁に行く。其は乙の妻が東京から腹の中に入れて来たおみやげの女だ。東京の糞尿と共に、此辺はよく東京のあらゆる下り物おを頂戴する。すべての意味に於ての不浄取りをするのだ。此辺の村でも、風儀は決して悪くない。甲州街道から十丁とは離れて居ぬが、街道筋の其れと比べては、村は堅いと云つてよい。男女の間も左程に紊みだれては居らぬ。然し他の不始末に対しては概して大目である。だから疵物きずものでもずん／＼片づいて行く。尤も疵物は大抵貧しい者にやられる。潔癖は贅沢だ。貧しい者は、其様な素生調すじょうしらべに頓着しては居られぬ。金の二三十両もつければ、懷胎かいたいの女でももらう。もと誰の畑であつても、自分のものになればさつさと

種を蒔く。先の蒔き残りのものがあっても、仔細なしに自分のにしてう。種を蒔くに必しも Virgin Soil を要しない。要するに東京の尻を田舎が拭う。田舎でも金もちが吾儘をして、貧しい者が後尻を拭うにきまって居る。何処までも不浄取りが貧しい農の運命である。

神は一大農夫である。彼は一切の汚穢を捨てず、之を摂取し、之を利用する。神程吝嗇爺は無い。而して神程太腹の爺も無い。彼に於ては、一切の不潔は、生命を造る原料である。所謂不垢不浄、「神の潔めたるものを爾浄からずとするなかれ」一切のものは土に入りて浄まる。自然は一大浄化場である。自ら神心に叶う農の不浄観について、我等は学ぶ所なくてはならぬ。

生命は共通である。潔癖は吾儘者の鄙吝な高慢である。

美的百姓

彼は美的百姓である。彼の百姓は趣味の百姓で、生活の百姓では無い。然し趣味に生活する者の趣味の為の仕事だから、生活の為と云うてもよい。

北米の大説教家ピーチアルは、曾て数塊の馬鈴薯を人に饗^{きやう}して曰くだ、此は吾輩の手作だ、而して一塊^{ドル}一弗はかゝつて居るのだ、折角食つてくれ玉えと。美的百姓は憚りながらピーチアル先生よりも上手だ。然し何事にも不熱心の彼には、到底那須野^{なすの}に稗^{ひえ}を作つた乃木さん程の上手な百姓は出来ぬ。川柳氏歌うて曰く、釣れますか、などと文王^{そほ}傍へ寄り、と。美的百姓先生の百姓も、太公望の釣位なものだ。太公望は文王を釣り出した。美的百姓は趣味を掘り出さんとして手に豆をこさえる。

百姓として彼は終に落第である。彼は三升の蕎麦^{そば}を蒔^まいて、二升の蕎麦を穫^えたことがある。彼が蒔く種子は、不思議に地に入つて雪の如く消えて了う。彼が作る菜^なは多く苦^{にが}い。彼が水瓜は九月彼岸前にならなければ食われない。彼が大根は二股三股はまだしも、正月の注連飾^{しめかざり}の様に螺旋状^{らせんじょう}にひねくれ絡^{から}み合うたのや、章魚^{たこ}の様な不思議なものを造る。彼の文章は格に入らぬが、彼の作る大根は往々芸術の三昧に入つて居る。

彼は仕事着にはだし足袋、戦争^{いくさ}にでも行く様な意気込みで、甲斐々々しく畑に出る。少し働いて、大に汗を流す。鋤柄^{くわづか}ついて畑の中に突立^{つた}った時は、天も見ろ、地も見ろ、人も見てくれ、吾れながら天晴見事の百姓振りだ。額の汗を拭きもあえずほうと一息^{ひといき}入れる。曇った空から冷やりと来て風が額を撫でる。此処^{ここ}が千両だ、と大きな眼を細くして彼は悦^{えつ}に入る。向うの畑で、本物の百姓が長柄の鋤で、後退^{あとしざ}りにサクを切るのを熟々^{つつく}眺めて、彼運動に現わるゝリズムが何とも云えぬ、と賞翫^{あみあそび}する。小雨ほとゝ雲雀^{ひばり}の歌まじり、眼もさむる緑の麦畑に紅帯^{あかおび}の娘が白手拭を冠つて静に働いて居るを見ては、歌か句にならぬものか、と色彩^{いろ}故に苦勞する。彼自身肥桶^{かづ}でも担いで居る時、正銘の百姓が通りかゝれば、彼は得意である。農家のおかみに「お上手ですなえ」とお世辞^{せじ}でも云われると、彼は頗る得意である。労働最中に美装^{びそう}した都人士女の訪問でも受けると、彼はますゝ得意である。

稀に來る都人士には、彼の甲斐々々しい百姓姿を見て、一廉^{いつかん}其道^{こうだ}の巧者^{こうしや}になつたと思う者もある。村の者は最早^{もとう}彼の正体^{しょうたい}を看破して居る。田圃向うのお琴婆さんの曰くだ、旦那は外にお職^{しやく}がありなすつて、お錢^{あし}は土用干なさる程ありなさるから、と。一度百円札の土用干でもしたいものと思うが、兎に角外にお職^{しやく}があんなさる事は、彼自身^{あたま}欺く事が出来ぬ。彼は一度だつて農事講習会に出たことは無い。美的百姓の家は、東京から唯三里。東の方を望むと、目黒の火薬製造所や渋谷登

電所の煙が見える。風向きでは午砲どんも聞こえる。東京の午砲を聞いたあとで、直ぐ横浜の午砲を聞く。闇い夜は、東京の空も横浜の空も、火光あかりが紅く空に反射して見える。東南は都会の風が吹く。北は武蔵野である。西は武相それから甲州の山が見える。西北は野の風、山の風が吹く。彼の書院は東京に向いて居る。彼の母屋おもやの座敷は横浜に向いて居る。彼の好んで読書し文章を書く廊下の硝子窓は、甲州の山に向うて居る。彼の気は彼の住居すまいの方向の如く、彼方あっちにも牽ひかれ、此方にも牽かれる。彼は昔耶蘇教伝道師見習の真似をした。英語読本の教師の真似もした。新聞雑誌記者の真似もした。漁師の真似もした。今は百姓の真似をして居る。

真似は到底本物で無い。彼は終に美的百姓である。

過去帳から

墓守

一

彼は粕谷かすやの墓守はかもりである。

彼が家の一番近い隣は墓場である。門から唯三十歩、南へ下ると最早墓地だ。誰が命じたのでもない、誰に頼まれたのでもないが、家の位置が彼を粕谷の墓守にした。

墓守と云つて、別に墓掃除するでもない。然し家が近くて便利なので、春秋の彼岸に墓参に来る者が、線香の火を借りに寄つたり、水を汲みに寄つたりする。彼の庭園には多少の草花を栽培さいばいして置く。花の盛季さかりは、大抵農繁の季節に相当するので、悠々ゆうゆうと花見の案内する気にもなれず、無論見に来る者も無い。然し村内に不幸があつた場合には、必庭園の花を折つて弔儀ちようぎに行く。少し念を入れる場合には、花環はなわなどを拵こしらへて行く。

墓守のついでに、墓場を奇麗にして、花でも植えて置こうかと思うが、それでは皆が墓参に自家の花を手折つて来ても引立たなくなる。平生草を茂らして、春秋の彼岸や盆に墓掃除に来るのも、農家らしくてよい。墓地があまりにキチンとして居るのも、好悪である。と思うので、一向構わずに置く。然し整理熱は田舎に及び、彼の村人も墓地を拡張整頓するそうで、此程周囲の雑木を切り倒し、共有の小杉林を拓いてしようた。いまに櫻の生牆を遶らし、桜でも植えて奇麗にすると云うて居る。惜しい事だ。

二

彼は墓地が好きである。東京に居た頃は、よく青山墓地へ本を読み夢を見に往つた。粕谷の墓地近くに卜居した時、墓が近くて御氣味が悪うございましょうと村人が挨拶したが、彼は滅多な活人の隣より墓地を隣に持つことが寧嬉しかった。誰も胸の中に可なり沢山の墓を有つて居る。眼にこそ見えね、我等は夥しい幽霊の中に住んで居る。否、我等自身が誰かの幽霊かも知れぬ。何も墓地を気味悪がるにも当らない。

墓地は約一反余、東西に長く、背は雑木林、南は細い里道から一段低い畑田圃。

入口は西にあつて、墓は※横線に長い縦線四本の記号、上巻241-12¹²形に並んで居る。古い処で寛文元禄位。銀閣寺義政時代の宝徳のが唯一つあるが、此は今一つはりがねで結わえた二つに破れた秩父青石の板碑と共に、他所よそから持つて来たのである。以前小さな閻魔堂えんまどうがあつたが、乞食の焚火から焼けてしまい、今は唯石刻の奪衣婆ばかり片膝立て、凄い顔をして居る。頰杖ほづえについて居る幾基の静思菩薩せいしぼさつ、一隅にずらりと並んだにこく顔の六地藏ろくじざうや、春秋の彼岸に紅いべゝを子を亡くした親が着せまつる子育地藏こむすで、其等それらが「長十山、三国の峰の松風吹きはらふ国土にまぢる松風の音」だの、上に梵字ぼんじを書いて「爰こゝ追福者ついくしや為蛇虫之靈へいどうのれい発菩提也はつせんがためなり」だのと書いた古い新しいさまぐの卒塔婆と共に、寂しい賑やかさを作つて居る。植えた木には、櫛しきみや寒中から咲く赤椿など。百年以上の百日紅があつたのは、村の飲代のみしろに植木屋に売られ、植木屋から粕谷の墓守に売られた。余は在来の雑木である。春はすみれ、蒲公英たんぽぽが何時の間にか黙つて咲いて居る。夏は白い山百合が香る。蛇が墓石の間を縫うてのたくる。秋には自然生の秋明菊しゆめいぎくが咲く。冬は南向きの日暖かに風も来ぬので、隣の墓守がよくやつて来ては、乾いた落葉を踏んで、其処に日なたばかりをしながら、取りとめもない空想ふけに耽る。

田舎でも人が死ぬ。彼が村の人になつてから六年間に、唯二十七戸の小村で、此墓場にばかり葬式の八つもした。多くは爺さん婆さんだが、中には二八の少女も、また傷いいた氣の子供もあつた。

ある爺さんは八十余で、死ぬる二日前まで野ら仕事をして、ぼっくり往生した。羨ましい死に様である。ある婆さんは、八十余で、もとは大分難義もしたもののだが辛抱しぬいて本家分家それはんじようく繁昌し、孫曾孫大勢持つて居た。ある時分家に遊びに来て帰途、墓守が縁側に腰かけて、納屋大小家幾棟か有つて居ることを誇つたりしたが、杖を忘れて歸つて了うた。其杖は今カタミになつて、墓守が家の浴室の心張棒になつて居る。ある爺さんは、困つた事には手が長くなる癖があつた。さまで貧でもないが、よく近所のものを盗んだ。野菜物を採る。甘藷を掘る。下肥を汲む。木の苗を盗む。近所の事ではあり、病氣と皆が承知して居るので、表沙汰にはならなかつたが、一同困り者にして居た。杉苗でもとられると、見附次第黙つて持戻つたもちもどりする者もあつた。此れから汁の実なぞがなくならずにようござんしよう、と葬式の時ある律義な若者が笑つた。さる爺さんは、齡は其様そんなでもなかつたが、若い時の苦勞で腰が悉皆かが俛んで居た。きかぬ氣の爺さんで、死ぬるまでおまえ儼に世話はかけぬと婆さんに云い云いしたが、果して何人の介抱かいほうも待たず立派に一人で往生した。其

以前、墓守が家の瓜畑うりばたけに誰やら入込んでこそくやつて居るので、誰かと思うたら、此爺さんが親切に瓜の心しんをとめてくれて居たのであつた。よく檜茸ならたけの初物だの何だの採とつては、味噌みそ澆こしに入れて持つて来てくれた。時には親切に困ることもあつた。ある時畑の畔くろの草を苅くつてやると云つて鎌かまを提さげて来た。其畑の畔には萱か薄やすが面白く穂ほに出て、捨て難い風致ふうちの径こみちなので其処だけわざ／＼草を苅くらずに置いたのであつた。其れを爺さんが苅くつてやると云う。頭を搔かいて断きわると、親切を無にするなと云わんばかり爺さんむつとして歸かへつて往いつたこともある。最早もつ檜茸ならたけが出て、味噌澆みそこしかゝえて、「今日は」と来る腰の曲まつた人は無い。

四

燠炭くんとん肥料ひりょうと云う事が一時はやつて、芥屑かみくずを燠燒くんしやうする為ために、大きな深い穴が此処其処に掘ほられた。其穴の傍で子を負おつた十歳の女兒むすめと六歳になる女兒が遊あそんで居たが、誤あやつて二人共穴に落ちた。出ることは出たが、六になる方は大火傷おおやけどをした。一家残むすめらず遠くの野らへ出たあとなので、泣なき声を聞ききつける者もなく、十歳になる女兒は叱しかられるが恐こわきに、火傷した女兒を窃そつと自家うちへ連れて往いつて、火傷部に檻ぼろ襖ろを被かせて、其まゝにして置いた。医者いしやが来た頃は、最早手後あとのれになつて居た。墓守が見舞

に往つて見ると、煎餅せんべいの袋なぞ枕頭に置いて、アアンと幽かな声かすでうめいて居た。二三日すると、其父なる人が眼に涙を浮めて、牛乳屋が来たら最早牛乳いちは不用と云うてくれと頼みに来た。亡くなったのである。此辺では、墓守の家か、博徒の親分か、重病人でなければ牛乳など飲む者は無い。火傷した女兒は、瀕死の怪我で貴い牛乳を飲まされたのである。父なる人は神酒みきに酔うて、赤い顔をして頭を掉ふる癖くせがある人である。妙に不幸な家で、先にも五六歳の女兒が行方不明で大騒おおさわぎをした後、品川堀から死骸になつて上つたことがある。火傷した女兒の低いうめき声と、其父の涙に霑うるんだ眼は、いつまでも耳に目にくつついて居る。

牛乳と云えば、墓守の家から其家へとしばらく廻つて居た配達が、最早其方へは往かなくなつた。牛乳をのんで居た娘は、五月の初に亡くなつたのである。墓守夫婦が村の人になつた時、彼女は十一であつた。体からだを二ツ折にしてガツクリお辞儀するしやくんだ顔の娘を、墓守夫婦は何時となく可愛がつた。九人の兄弟姉妹の真中まんなかで、あまり可愛がられる方ではなかつた。可愛がられる其妹は、姉の事を云つて、「おやさんな叱られるクセがある」と云つた。やゝ陰気な、然し情愛の深い娘だつた。墓守の家に東京から女の子が遊びに来ると、「久ひいちゃん」「お安さん」とよく一緒に遊んだものだ。彼女も連れて玉川に遊びに往つたら、玉川電車で帰る東京の娘を見送つて「別れるのはつらい」と黯然あんぜんとして云つた。彼女は妙に不幸な子であつ

た。ある時村の小学校の運動会で饌立競走^{げんたてきやうそう}で一着になり、名を呼ばれて褒美^{ほうび}を貰ったあとで、饌立の法が違つて居ると女教員から苦情が出て、あらためて呼び出され、褒美を取り戻された。姉が嫁したので、小学校も高等を終えずに下り、母の手助^{てだすけ}をした。間もなく彼女は肺が弱くなつた。成る可く家の厄介になるまいと、医者にも見せず、熟蚕^{しき}を拾つたり繭を搔いたり自身働いて溜めた巾着の錢で、売薬を買つたりして飲んだ。

去る三月の事、ある午後墓守一家が門前にぶらついて居ると、墓地の方から娘が来る。彼女であつた。「あゝお安さん」と声をかけつゝ、顔を見て喫驚^{びつくり}した。其処の墓地の石の下から出て来たかと思わるゝ様な凄^{すじ}い顔^{くら}をして居る。「あゝ気分が悪いのですね、早く帰つてお休み」と妻が云うた。気分が悪くて裁縫^{さいほう}の稽古から帰つて来たのであつた。彼女は其れつきり元氣には復さなかつた。彼女の家では牛乳をとつてのませた。彼女の兄は東京に下肥引きに往つた歸りに肴^{さかな}を買つて来ては食わした。然し彼女は日々衰えた。遠慮勝の彼女は親兄弟にも遠慮した。死ぬる二三日前、彼女はぶらりと起きて来て、産後の弱つた体で赤ん坊を見て居る母の背^{うしろ}に立ち、わたしが赤ん坊を見て居るから阿母^{おつかさん}は少しお休みと云うた。死ぬる前日は、父に負われて屋敷内を廻つてもらつて喜んだ。其翌日も父は負つて出た。父が唯一房咲いた藤の花を折つてやつたら、彼女は枕頭^{まくらもと}の土瓶に插して眺めて喜んだ。其夜彼

女は父を揺り起し、「わたしは快く^よなつたら如何でもして恩報^{おんぱう}じをするから、今夜は苦^く難^{げん}だから、済まないが阿爺^{あや}さん起きて居てお呉^{おつかさん}れ、阿母^{あは}は赤ん坊や何かでくたびれきつて居るから」と云うた。而して翌朝到頭息を引取った。彼女は十六であつた。彼女の家は、神道^{しんどう}禊教^{みそぎきょう}の信徒で、葬式も神道であつた。兄の二人、弟の一人と、姉婿が棺側に附いて、最早墓守夫妻が其亡くなつた姉をはじめて識^とつた頃の年頃^{としころ}になつた彼女の妹が、紫の袴をはいて位牌を持つた。六十前後の老衰した神官^{かみわで}が拍手を打つて、「下田安子の命^{みこと}が千代の住家と云々」と祭詞^{まつことば}を読んだ。快くなつたら姉の嫁した家へ遊びに行くと云つて、彼女は晴衣^{はるぎ}を拵^{こしら}へてもらつて喜んで居たが、到頭其れを着る機会もなかつた。棺の上には銘仙^{めいせん}の衾^{あふせ}が覆^{おほ}うてあつた。其棺の小さくを見た時、十六と云う彼女の本当にまだ小供であつたことを思ふた。赤土を盛つた墓の前には、彼女が常用の膳の上に飯を盛つた茶碗、清水を盈^みたした湯呑なぞならべてあつた。墓が近いので、彼女の家の者はよく墓参に來た。墓守の家の女兒も時々園の花を折つて往つて墓に插^さした。三年前砲兵にとられた彼女の二番目の兄は、此の春肩から腹にかけて砲車に轢^ひかれ、已に危い一命を纔^{わずか}にとりためて先日めでたく除隊^{じょたい}になつて歸つた。「お安さんは君の身代りに死んだのだ、懇^{ねんろ}に弔^{なぐさ}うて遣り玉え」墓守は斯く其の若者に云うた。

墓地が狭いので、新しい棺は大抵古い骨の上に葬る。先年村での旧家の老母を葬る日、墓守がぶらりと墓地に往つて見たら、墓掘り役の野ら番の一人が掘り出した古い髑髏されこうべを見せて、

「御覧なさい、頬の格好が斯う仁左衛門さんに肖てるじゃありませんか。先祖つてえものは、矢張り争われないもんですな」

と云うた。泥まみれの其の髑髏は、成程頬骨の張り方が、当主の仁左衛門さんそつくりであつた。土から生れて土に働く土の精、土の化物ばけものとも云うべき農家の人は、死んで土になる事を自然の約束として少しも怪むことを為しない。ある婆さんを葬る時、村での豪家と立てられる伊三郎さんが、野ら番の一人でさつさと赤土を掘りながら、ホトケの息子むすこの一人に向い、

「でも好い時だつたな、来月になると本当に忙しくてやりきれンからナ」と極めて平気で云うて居た。息子も平気で頷うなずいて居た。死人の手でも借りたい程忙しい六七月に葬式があると、事である。村の迷惑になるので、小供の葬式は、成るべくこつそりする。ある夜、墓守が外から帰つて来ると、墓地に一点の火光あかりが見える。やゝ紅い火である。立とまつてじいを見て居た彼は、突と墓地に入つた。其は提灯の火

であつた。黒い影が二つ立つて居る。近づいて、村の甲乙であることを知つた。側に墓穴が掘つてある。「誰か亡くなられたのですか」と墓守が問うた。「えゝ、小さいのが」と一人が答えた。彼等は夜陰やいんに墓を掘り終え、小さな棺が来るのを待つて居たのである。

六

古家を買つて建てた墓守が二つの書院は、宮の様だ、寺の様だ、と人が云う。外から眺めると、成程某院とか、某庵とか云いそうな風をして居る。墓地が近いので、ますゝ寺らしい。演習えんしゅうに來た兵士の一人が、青山街道から望み見て、「あゝお寺が出来たな」と云つた。居は氣を移すで、寺の様な家に住めば、粕谷の墓守時には有髪うはつの僧の氣もちがせぬでも無い。

然し此れが寺だとすれば、住持じゅうじは恐ろしく悟の開けぬ、煩惱満腹、貪瞋痴どんじんちの三惡を立派に具足した腥坊主なまぐさぼうずである。彼は好んで人を喰くう。生きた人を喰う上に、亜刺比亜夜話にある「ゴウル」の様に墓を掘つて死人しびとを喰う。彼は死人を喰うが大好きである。

無論生命は共通である。生存は喰い合いである。犠牲なしでは生きては行かれぬ。

犠牲には、毎につねに良いものなる。耶蘇は「吾は天より降れる活けるパンなり。吾肉は眞の喰物、吾血は眞の飲物」と云うたが、實際良いものゝ肉を喰い血を飲んで我等は育つのである。粕谷の墓守、睡眠山無為寺の住持も、想い来れば半生に数限りなき人を殺し、今も殺しつゝある。人を殺して、猶飽かず、其の死体まで掘り出して喰う彼は、畜生道に墮だしたのではあるまいか。墓守実は死人喰いの「ゴウル」なのではあるまいか。彼は曾て斯んな夢を見た。誰やら憤つて切腹した。彼ではなかつた様だ。無論去年の春の事だから、乃木さんでは無い。誰やら切腹すると、瞋しん恚の焰とでも云うのか、割さいた腹から一団のとろ／＼した紅い火の球が墨黒の空に長い／＼尾を曳いて飛んで、ある所に往つて鶏の嘴くちばしをした異形いぎようの人間に化なつた。而して彼は其処に催うされて居る宴会の席に加わつた。夢見る彼は、眼を挙げてずうと其席を見渡した。手足胴体は人間だが、顔は一個として人間の顔は無い。狼の頭、豹の頭、鯊さめの頭、蟒蛇うわばみの頭、蜥蜴とかげの頭、驚の頭、梟ふくろうの頭、鰐わにの頭、――恐ろしい物の集會である。彼は上座の方を見た。其処には五分苳頭の色蒼ざめた乞食坊主が Preside して居る。其乞食坊主が手を挙げて相図をすると、一同前なる高脚たかあしの盃を挙げた。而して恐ろしい声を一齐にわつと揚げた。彼は冷汗ひたに浸ひたつて寤さめた。惟うに彼は夢に畜生道に墮ちたのである。現うつの中で生きた人を喰つたり、死んだ死骸を喰つたりばかりして居る彼が夢としては、ふさわしいものであらう。

彼は粕谷の墓守である。彼の住居は外から見てのお寺である。如何様^どなお寺にも過去帳がある。彼は彼の罪亡^{むしや}ぼしに、其の過去帳から彼の餌^えになつた二三亡者^{もうじや}の名を写して見よう。

綱島梁川君

明治四十年九月某の日、柄杓ひしゃくが井に落ちた。女中が錨を下ろして探がしたが、上らぬ。妻が代つて小一時間も骨折つたが、水底深く沈んだ柄杓は中々上ろうともしない。最後に主人の彼が引受け、以前相模の海で鰯きすを釣つた手心で、錨索いかりなわをとつた。渾熱心に錨を上げたり下げたりしたが、時々はコトリと手筈はあつても、錨の四本の足の其何れにも柄杓はかゝらない。果ては肝癰かんしやくを起して、井の底を引掻き廻すと、折角の清水を濁らすばかりで、肝腎かんじんの柄杓は一向上らぬ。上らぬとなるとますます意地になつて、片手は錨、片手は井筒いづつの縁をつかみ、井の上に伸しかゝつて不可見水底の柄杓と闘たたかつて居ると、

「郵便が参りました」

と云つて、女中が一枚のはがきを持て来た。彼は舌打して錨を引上げ、其はがきを受取つた。裏をかえすと黒梓くろむく。誰かと思えば、綱島梁川君の計ふであつた。

彼は其はがきを持ったまゝ、井戸傍いどのを去つて母屋の縁に腰かけた。

ていめいしょう
程明道の句に「道通天地有形外」と云うのがある。梁川君の様な有象から無象に通う其「道」を不斷に歩いて居る人は、過去現在未来と三生を貫通して常住して居るので、死は単に此生態から彼生態に移つたと云うに過ぎぬ。斯く思うものゝ、死は矢張哀しい而して恐ろしい事実である。

彼は梁川君と此生に於て唯一回相見た。其は此春の四月十六日であつた。梁川君の名は久しく耳にして居た。其「見神の実験」及び病間録に収められた他の諸名篇を、彼は雑誌新人の紙上に愛読し、教えらるゝことが多かつた。木下尚江君がある日粕谷に遊びに來た時、梁川君の事を話し、「一度逢つて御覧なさい、あの病体に恐入つた元氣」と云うた。丁度四月十六日には、救世軍のブース大將歓迎会が東京座に開かるゝ筈で、彼も案内をうけて居たので、出京のついでに梁川君を訪うことにしたのであつた。

肺患者には無慘な埃まじりの風が散り残りの桜の花を意地わるく吹きちぎる日の午後、彼は大久保余丁町の綱島家の格子戸をくゞつた。梁川先生発熱の虞あり、來訪諸君は長談を用捨されたく云々、と主治医の書いた張札が格子戸に貼つてある。食事中との事で、しばらく薄暗い一室に待たされた。「自彊不息」と主人の囑によつて清人か鮮人かの書いた額が掛けて居た。やがて案内されて、硝子戸になつて居る

縁側伝いに奥まった一室に入った。古い段通を敷いた六畳程の部屋、下を硝子戸の本棚にして金字の書卷のギッシリ詰まった押入を背にして、蒲団の上に座つて居る浅黒い人が、丁寧に頭を下げて、吸い込む様なカスレ声で初対面の挨拶をした。処女の様なつゝましきがある。たゞ其の人を見る黒い眸子ひとみの澄んで凝然と動かぬ処に、意志の強い其性格が閃めく様に思われた。最初其カスレた声を聞き苦しく思い、斯人に談話を強うるの不躰ふしつけを氣にして居た彼は、何時の間にかつり込まれて、悠々と話込んだ。話半に家の人が来客を報ぜられた。綱島君は名刺を見て、「あゝ丁度よい処だった。御紹介しようと思つて居ました」と云う。やがて労働者の風をした人が一青年を連れて入つて来た。梁川君は、西田市太郎君と云うて紹介し、「実地の経験には、西田さんに学ぶ所が多い」と附け加えた。話は種々に涉つた。彼は聖書に讀れた耶穌基督について不満と思う所は、と梁川君に問うた。例せば実なき無花果を咀つた様な、と彼は言を添えた。梁川君は「僕も丁度今其事を思うて居たが、不満と云う訳ではないが、耶穌の一特色は其イラヒドイ所謂 *Vehement* な点にある」と答えた。話は菜食の事に移つて、彼は旅順閉塞に行く或船で、最後訣別の盃を挙ぐるに、生かして持つて来た鶏を料理しようとしたが、誰云い出すともなく、鶏は生かして置こうじゃアないかと、到頭其まゝにして置いた、と云う逸話を話した。梁川君は首を傾げて聴いて居たが、「面白いな」と独語した。一座の話は多端に涉つた

が、要するに随感随話で、まとまった事もなかった。唯愉快に話し込んで思わず時を移し、二時間あまりにして西田君列と前後に席を立つた。

其れから其足で三崎町の東京座に往つて、舞台裏で諸君のあとから彼もブース大將の手を握るの愉快を獲た。大將は肉体も見上ぐるばかりの清げな大男で、其手は昨年けねんの夏握ったトルストイの手の様に大きく温あたたかであつた。午後には梁川君と語り、夜はブース大將の手を握る。四月十六日は彼にとつて喜ばしい一日であつた。嬉しいあまりに、大將の演説終つて喜捨金集めの帽が廻つた時、彼は思わず乏しい財布さかさを倒さかにしてうた。

其後梁川君とははがきの往復をしたり、回光録を贈つてもらつたりしたきり、彼も田園の生活多忙になつて久しく打絶えて居た。そこで此計は突然であつた。精神的に不朽な人は、肉体も例令其れが病体であつても猶不死の様に思われてならなかつたのである。梁川君が死ぬ、其様そのような事はあまり彼の考には入つて居なかつた。一枚の黒梓くろむくのはがきは警策の如く彼が頭上に落ちた。「死ぬぞ」と其はがきは彼の耳もとに叫んだ。

梁川君の葬式は、秋雨の瀟々しんしんと降る日であつた。彼は高足駄をはいて、粕谷から本郷教会に往つた。教会は一ぱいであつた。やがて棺が舁き込まれた。草鞋ばきの西田君の姿も見えた。某嬢の独唱も、先輩及友人諸氏の履歷弔詞の朗読も、真摯なものであつた。牧師が説教した。「美人の裸体らたいは好い、然しこれに彩衣さいいを被きせると尚美しい。梁川は永遠の真理を趣味滴る如き文章に述べた」などの語があつた。梁川、梁川がやゝ耳障りみみざわであつた。

彼は棺の後に跟ついて雑司ヶ谷の墓地に往つた。葬式が終ると、何時の間にか車にのせられて綱島家に往つた。梁川君に親しい人が集つて居て、晚餐の饗かがあつた。西田君、小田君、中桐君、水谷君等面識の人もあり、識らない方も多かつた。

新宿で電車を下りた。夜が深けて居る。雨は止んだが、路は田圃たんぼの様だ。彼は提灯もつけず、更らに路を扒えらばず、ザブ／＼泥水を涉わたつて歸つた。新宿から一里半も来た頃、真闇な藪陰やぶかげで真黒な人影に行合うた。彼方はずうと寄つて来て、顔をすりつける様にして彼を覗のぞく。彼は肝を冷やした。

「君は誰だれだ？」

先方から声をかけた。彼は住所姓名を名乗つた。而して「貴君あなたは？」ときいた。「刑事です。大分晩く御歸りですな」

八幡近くまで歸つて来ると、提灯ともして二三人下りて来た。彼の影を見て、提灯

はとまったが、透かして見て「福富さんだよ」と驚いた様な声をして行き過ぎた。此は八幡山の人々であつた。先日八幡山及粕谷の若者と烏山の若者の間に喧嘩があつて、怪我人なぞ出来た。其のあとがいまだにこたこたして居るのだ。帰ると、一時過ぎて居た。

*

其後梁川君の遺文寸光録が出た。彼の名がちよい／＼出て居る。彼の事を好く云うてある。総じて人は自己の影を他人に見るものだ。梁川君が彼にうつした己が影に見惚れたのも無理はない。

梁川君が遺文の中、病中唯一度母君に対してやゝ苛厲かれいの言を漏らしたと云つて、痛恨して居る。若し其れをだに白壁の微瑕と見るなら、其白壁の醇美は如何であろう。彼の様な汚穢な心と獸的行の者は慙死さんししなければならぬ。

*

梁川君の訃ふに接した其日井底に落ちた柄杓は、其の年の暮井浚いんそらえの時上がつて来

た。

然し彼は彼の生前に於て宇宙の那邊なへんにか落したものである。彼は彼の生涯ささを献ささげて、天の上、地の下、火の中、水の中、糞土の中まで潜もぐつても探し出ださねばならぬ。梁川君は端的たんてきに其求むるものを探し当てゝ、堂々と凱旋し去つた。鈍根どんこんの彼はしばゝとち捉え得たと思うては失い、攫つかんだと思うては失い、今以て七転八倒の笑止な歴史を繰り返えして居る。但一切のもの実は大能掌裡とんぽがえりの筋斗翻とんぼがえりに過ぎぬので人々皆通天の路あることを信ずるの一念は、彼が迷宮の流浪さすらいに於ける一の慰めである。

梅一輪

一

「お馨けいさんの梅が咲きましたよ」

斯く妻が呼ぶ声に、彼は下駄を突っかけて、植木屋の庭の様に無暗むやみに樹木を植え込んだ園内を歩いて、若木わかきの梅の下に立った。成程咲いた、咲いた。青軸あおじくまた緑萼りよくと呼ぶるゝ種類の梅で、花はまだ三四輪、染めた様に緑な萼がくから白く膨らみ出た蕾つぼみの幾箇を添えて、春まだ浅い此の二月の寒を物ともせず、ぱちちりと咲いて居る。極きよくの雪の様にいさゝか青味を帯びた純白はなびらの葩ほうれつ、芳烈ほうれつな其香。今更の様だが、梅は凜々りりしい気もちの好い花だ。

白たてしまつぽい堅縞かたじまの銘仙の羽織、紫紺しこんのカシミヤの袴、足駄を穿はいた娘が曾て此梅の下に立って、一輪の花を摘んで黒い庇髪ひさしの鬢びんに插した。お馨さん——其娘の名——は其年の夏亜米利加に渡つて、翌年まだ此梅が咲かぬ内に米国で亡くなつた。

其れ以来、彼等は此梅を「お馨さんの梅」と呼ぶのである。

米国の画家チャルヂ・ヘンリー、バウトンの描いた「メエフラワアの帰り」と云う画がある。メエフラワアは、約三百年前、信仰、生活の自由を享^うけん為に、歐洲からはるく大西洋を越えて、亜米利加の新大陸に渡った清教徒の一群ピルグリム、ファザアスが乗った小さな帆前船^{ほまえせん}である。画は此船が任務を果してまた東へ歸り去る光景を描いた^{えが}。海原の果には、最早^も小さく小さくなった船が、陸から吹く追手風^{おいて}に帆を張^{ふな}つて船脚^{ふなわし}軽く東へ走^はつて居る。短い草が生えて、岩石の処々に起伏した浜にはピルグリムの男女の人々が、彼処に五六人、此処に二三人、往く船を遙に見送^{はな}つて居る。前景に立つ若い一対^{いっつい}の男女は、伝説のジョン、アルデンとメーリー、チルトンでもあろうか。二人共まだ二十代の立派な若い同士。男は白い幅濶^{はばひろ}の襟をつけた服を着て、ステッキをついた左の手に鐔^{つばひろ}広のピュリタン帽を持つ右の手を重ね、女は雪白^{せつぱく}のエプロンをかけて、半頭巾^{ボンネット}を冠^{かぶ}り、右の手は男の腕^{うで}に縋^{すが}り、半巾^{はんかち}を持った左の手をわが胸に当てゝ居る。二人の眼はじつと遠ざかり行くメエフラワア号の最後の影^{かげ}に注^{そそ}がれて居る。メエフラワアは故国との最後の連鎖^{れんさ}である。メエフラワアの去ると共に故国の縁^{えん}は切れるのである。なつかしい過去、旧世界、故国、歴史、一切の記念、其等との連鎖^{れんさ}は、彼船脚^{かのふなわし}の一步ゝゝに切れて行くのである。彼等の胸は

痛み、眼には涙が宿つて居るに違いない。然しながら彼等は若い。彼等は新しい大陸に足を立てゝ居る。彼等の過去は、彼船と共に夢と消ゆる共、彼等の現在は荒寥（こうりよう）であるとも、彼等は洋々（ようよう）たる未来を代表して居る。彼等は新世界のアダム、イヴである。

此の画を見る毎に、彼はお馨（けい）さんと其恋人葛城（かつらぎ）勝郎（かつお）を憶い出さぬことは無い。

三

葛城は九州の士の家の三男に生れた。海軍機関学校に居る頃から、彼は外川（しゆく）先生に私淑（しゆく）して基督（きりすと）を信じ、他の進級（しんきゅう）、出世（しゅっせ）、肉の快樂（けらく）にあこがるゝ同窓（どうそう）青年の中にありて、彼は祈祷（きとう）、断食（だんじき）、読書（よみかき）、瞑想（めいそう）する青年であつた。日露戦争に機関少尉として出陣した彼は、戦争が終ると共に海軍を見限つて、哲学文学を以て身を立つる可く決心した。寡婦（かふ）として彼を育て上げた彼の母、彼の姉、彼の二兄、家族の者は皆彼が海軍を見捨（す）つることに反対した。唯一人満腔（まんきやう）の同情を彼に寄せた人があつた。其れは其頃彼の母の家に寄寓（きぐう）して居る女学生であつた。女学生の名はお馨（けい）さんと云つた。

お馨（けい）さんは、上総（かずさ）の九十九里（きゅうじゅうり）の海の音が暴風（しげ）の日には遠雷（えんらい）の様に聞ゆる或村（あるむら）の小

山の懷ふところにある家の娘であつた。四人の兄、一人の姉、五人の妹を彼女は有もつて居た。郷里の小学を終えて、出京して三輪田女学校を卒おえ、更に英語を学ぶべく彼女はあゝる縁によつて葛城の母の家に寄寓きくうして青山女学院に通つて居た。彼女も又外川先生の門弟で、日曜毎に隅の方に黙つて聖書の講義を聴いて居た。富裕な家の女に生れて、彼女は社会主義に同情を有つて居た。葛城が軍艦から母の家に歸つて来る毎に、彼は彼女と談話だんわを交えた。信仰を同じくし、師を同じくし、同じ理想を趁おう二人は多くの点に於て一致を見出した。彼女は若い海軍士官が軍籍を脱することについて家族総反対の中に唯一人の賛成者であつた。斯くて二人は自然に相思そうしの中となつた。二人は時に青山から玉川まで歩いて行く／＼語り、玉川の磧かわらの人無き所に跪ひざまずいて、流水の音を聞きつゝ共に祈つた。身は雪の如く、心は火の如く、二人の恋は美しいものであつた。

四

本文の筆を執る彼は、明治三十九年の正月、逗子すしの父母の家で初めて葛城に會つた。恰も自家の生涯に一革命けいみを閲した時である。間もなく彼は上州の山に籠こもる。ついで露西亜に行く。外国から歸つた時は、葛城は已に海軍を退いて京都の大学に居

た。

明治四十年の初春、此文の筆者は東京から野に移り住んだ。八重桜も散り方になり、武蔵野の雑木林が薄緑うすみどりに煙る頃、葛城は渡米の暇乞いとまごいに来了。一夜泊つて明くる日、村はずれで別れたが、中数日を置いて更に葛城を見送る可く彼は横浜に往つた。港外のモンゴリヤ号は已に錨いかりを抜かんとして、見送りに来た葛城の姉もお馨けいさんもとくに去り、葛城独甲板の欄らんに倚よつて居た。時間が無いので匆々そそそこに別を告げた。此時初めて葛城はお馨さんの事を云うた。ゆく／＼世話になろうと思つて居ると云うた。而して今後度々上る様に云つて置いたから宜しく頼む、と云うた。斯くて葛城は亜米利加に渡つた。

其年夏休前にお馨さんは初めて粕谷に来了。美しいと云う顔立かおだちでは無いが、色白の、微塵みじん色気も鄙氣いやしげも無いすつきりした娘で、服装みなりも質素であつた。其頃は女子英学塾に寄宿して居たが、後には外川先生の家に移つた。粕谷に遊びに往つたと云うてやると、米国から大層喜んでよこす、と云つてよく遊びに来了。今日は学校から玉川遠足をしますから、私は此方こちらへ上りました、と云つて朝飯前に来了事もあつた。体質極めて強健で、病氣と云うものを知らぬと云つて居た。新宿から三里、大抵足駄をはいて歩いた。日がえりに往復することもあつた。彼女は女中も居ぬ家の不自由を知つて居るので、来る時に何時も襷たすきを袂たもとに入れて来了。而して台所の事、拭掃除ふきそうじ、

何くれとなく妻を手伝うた。家の事情、学校の不平、前途の喜憂、何も打明けて語り、慰められて帰った。妻は次第に彼女を妹の如く愛した。

ニユーイングランド

葛城は新英州の大学で神学を修めて居た。欧米大陸の波瀾万丈沸えかえる様な思潮に心魂を震蕩された葛城は、非常の動揺と而して苦悶を感じ、大服従のあと大自由に向つてあこがれた。彼が故国の情人に寄する手紙は、其心中の千波万波を漲らして、一回は一回より激烈なるものとなつた。彼はイブセンを読む可く彼女に書き送つた。彼女を頭が固いと罵つたりした。而して彼女をも同じ波瀾に捲き込むべく努めた。斯等の手紙が初心な彼女を震駭憂悶せしめた状は、傍眼にも氣の毒であつた。彼女は従順にイブセンを読んだ。ツルゲーネフも読んだ。然し彼女は葛城が墮落に向いつゝあるものと考えた。何ともして葛城を救わねばならぬと身を藻掻いた。彼女は立つても居ても居られなくなつた。而して自身亜米利加に渡つて葛城を救わねばならぬと覚期した。

かすや

粕谷の夫妻は彼女を慰めて、葛城が此等の動揺は当に來る可き醺醺で、少しも懸念す可きでないと論じた。然しお馨さんの渡米には、二念なく賛同した。彼葛城の爲にも、彼女自身の鍛鍊の爲にも、至極好い思立と見たのである。彼女は葛城の渡米當時已に自身も渡米す可く身を悶えたが、父の反対によつて是非なく思い止まつたのであつた。

米国からは、あまり乗気でもないが、来るなら紐育ブルックリンの看護婦学校に口があると知らして来た。彼女の師外川先生も、自身新英蘭で一時白痴院の看護手をしたことがあると云うて、彼女の渡米に賛同した。お馨さんは母の愛女であった。母は愛女の為に其望を遂げさすべく骨折る事を諾した。彼女の長兄は、其母を悦ばす可く陰に陽に骨折る事を妹に約した。残る所は彼女の父の承諾だけであった。彼女の父は田舎の平相国清盛として、其小帝国内に猛威を振うている。彼女と葛城の縁談も、中に立って色々骨折る人があつたが、彼女の父は断じて許さなかつた。葛城の人物よりも其無資産を慮つたのである。葛城の母、兄姉も皆お馨さんの渡米には不賛成であつた。葛城の勉強の邪魔になると謂うた。静かにこゝで勉強して葛城の帰朝を待てと勧めた。然しお馨さんは如何しても思い止まる事が出来なかつた。それに、日本に愚図々々して居れば、心に染まぬ結婚を父に強いられる恐れがあつた。

斯様な事情と彼女の切なる心情を見聞する粕谷の夫妻は、打捨てゝ置く訳に行かなかつた。葛城が家族の反対に関せず、何を措いても彼女の父の結婚及渡米の許諾を獲べく、単刀直入桶狭間の本陣に斬込まねばならぬと考えた。

おぼろづき
 朧月の夜、葛城家の使者と偽る彼は、房総線の一駅で下りて、車に乗ってお馨さんの家に往った。長い田舎町をぬけて、田圃沿いの街道を小一里も行つて、田中路を小山の中に入つて、其山ふところの行止りが其家であつた。大きな長屋門の傍の潜りを入つて、勝手口から名刺を出した。色の褪めた黒紋付の羽織を着た素足の大きな六十爺さんが出て来た。お馨さんの父者人であつた。

其夜は烈しい風雨であつた。十二畳の座敷に寝かされた彼は、夢を結び得なかつた。明くる早々起きて雨戸をあけて見た。庭には大きな泉水を掘り、向うの小山を其まゝ庭にして、蘇鉄を植えたり、石段を整えたり、石燈籠を据えたりしてある。下駄突かけて、裏の方に廻つて見ると、小山の裾を鬼の窟の如く削りぬいた物置がある。家は茅葺ながら岩畳な構えで、一切の模様が岩倉と云う其姓にふさわしい。まだ可なり吹き降りの中を、お馨さんによく似た十四五、十一二の少女が、片手に足駄を提げ、頭から肩掛をかぶり、跣足で小学校に出かけて行く。座敷に帰つて、昼の光であらためて主翁と対面した。住居にふさわしい岩畳なかつぷくである。左の目が眇かと思ふたら、其れは眼の皮がたるんでいたのであつた。其れが一見人を馬鹿にした様に見える。芳野金陵の門人で、漢学の素養がある。其父なる人は、灌漑用の渚水池を設けて、四辺に恩沢を施して居る。お馨さんの父者人は、十六にして

父に死なれ、一代にして巨万の富をなした。六十爺の今日も、名ある博士の弁護士などを顧問に、万事自身で切つて廻わして居る。此辺は数名の博士、数十名の学士を出して居る位で、此富豪翁も子女の教育には余程身を入れて居るのであった。

障子に日がさして来た。障子を明けると、青空に映る花ざかりの大きな白木蓮が、

夜来の風雨に落花狼藉、満庭雪を舖しいて居る。推参の客は主翁に対して久しぶりに嘘うそと云うものを吐ついた。彼は葛城家の使者だと云うた。お馨さんを将来葛城勝郎の妻に呉れと云うた。旅費学資は一切葛城家から出すによつて、お馨さんを米国へ遣つてくれと云うた。学校は師範学校見た様なもので、育児衛生を旨とすると云うた。主翁は逐一聞いた上で、煙管きせるをポンと灰吹はいふきにはたき、十二三の召使おのこの男児を呼んで御寮べしやう様に一寸御出と云え、と命じた。やがてお馨さんの母者人が出て来た。よくお馨さんに肖て居る。十一人の子供を育て、恐ろしい吾儘わがまま者の良人に仕えて、しっかり家を圧おさえて行く婦人の尋常の婦人であるまいと云う事は、葛城家の偽使者も久しく想う処であつた。主翁は今一応先刻の御話をと云うた。似え而非せし使者は、試験さるゝ学生の如く、真赤な嘘を真顔で繰り返えた。母者人は顔の筋一つ動かさず聴いて居た。主翁は兎も角せがれ忤がれや親戚の者共とも相談の上追つて御返事すると云うた。『六ヶ敷むつかしいな』彼は斯く思いつゝ、帰途に就いた。

然しながら天はお馨さんに味方するかと思われた。彼女の父は意外にも承諾を与

えた。旅券も手に入つた。而して葛城が米国へ向け乗船した二年と三月目の明治四十二年の七月六日、横浜出帆の信濃丸で米国に向うた。葛城の姉、お馨さんの長兄夫婦、末の兄、お馨さんによく肖た妹達は、棧橋さんばしでお馨さんを見送つた。粕谷の夫妻も見送り人の中にあつた。妹達は涙を流して居た。水草の裾模様すそもようをつけた空色そらいろろ緋のお馨さんは、同行の若い婦人と信濃丸の甲板から笑みて一同を見て居た。彼女は涙を墮し得なかつた。其心はとく米国に飛んで居るのであつた。船はやおら棧橋を離れた。空色衣そらいろぎぬの笑貌えがおの花嫁は、白い手巾はんかちを振りくゝ視界の外に消えた。

六

乗船いたしましたから五日目になりますが、幸に海は非常に静かで……友人と同室で御座いますから心配もなく、朝より夕まで笑いつゞけて居る次第にて、非常に幸福で愉快に暮して居ります。互に語り、読書し、議論し、歌を唱い、少しも淋しき事はなく暮して居ります。非常に元氣なる故、隣室よりうらやましがられて居る程で御座います。……然し葛城は下等で荷物同様な取扱いをされて非常に苦しんで参りましたのに、私は上等室にて御客様扱いを受けて安樂に暮らして居りますから済まぬような申訳なきような心地がいたして居ります。

七月十日

信濃丸にて

馨子

愛する御姉君に参らす

*

去廿一日午後無事シヤトルに上陸いたしましたから、御安心下さいませ、……
明日朝九時発の汽車でニューヨークに参ります。

七月廿四日夜

シヤトルにて

馨子

姉上様

*

昨日ニューヨークに着いたし、漸く目的の地に達し得候まゝ誠にうれしく存じ
居り候。……葛城よりもよろしく、非常によるこび居り候。

七月卅一日

ニューヨークにて

馨子

姉上様

*

身の平和、心の喜、筆にも言葉にも尽されず候。

勝郎

あまりのうれしさに、今の米国は天国に候。

八月三日

馨子

ニューヨークにて

*

前略、無事にニューヨークに着きました。ニューヨークの停車場から独りで学校へ行く積りで居りましたら、思いもかけず葛城が迎えに来て居りました。手紙では随分強い事を申してよこしましたが、来て見れば非常によるこんで、よ

く来たと申して居ります。

前月の十日に病院に参りまして、直ぐ其日から働きました。慣れぬ業わざと言葉が始めは聞き取れぬので実に困りましたが、だん／＼と慣れてよくなりました。実に病院の仕事はハードで御座います。

朝の七時から夜の七時までは腰も掛る事が出来ず、始終立つて居りますから、足が痛くて／＼実に初めは困りました。然し一日の内二時間は休めますから、一日の働時間は十時間で御座います。身体の工合のよき時はともかく、悪しき時は実にいやになります。慣れぬ仕事の上に一日立ちきりで御座いますから、身体の工合が妙になりまして、種々な変動を起しますが、慣れ／＼ばよろしくなるとの事で御座います。

私は今は外科室の患者が四十人ばかり居る室で働いて居ります。随分ひどい重傷けがの人も居ります。脊骨せぼねを挫くじいた人が三人程に、火傷やけどの人や、三階や二階から落ちた人や、盲腸炎もうちようえんの人や、なか／＼種々な種類の患者が居ります。

脊骨が折れても余病さえ起さねば大丈夫で御座います。一人は肺炎を起して死にましたが、後の二人は丈夫で居りますが、然し実に痛たそうで随分気の毒で御座います。初めは手術室から帰つて来た患者の側そばに居つて看護をいたします事が一番恐ろしく、殊に睡眠剤すいみんざいの臭においが鼻について自分が心地が悪くなりました

が、近頃は慣れて平氣になりました。それからどんないやな恐ろしい事でも、自分がせねばならぬと思ひますれば、何でも出来ます。未だ初めて御座いまして、ベッドを作る事や、病人の敷布しいつをかえる事や、器械きを煮て消毒する事や、床ずれの出来ぬように患者の脊せなかをアルコールで擦こする事や、氷嚢ゆたんぼやら湯嚢ゆたんぼやらをあてゝやったり、呑物のみものを作つて与えましたり、何やかやと、一日を忙せわしく、足は棒のようになりまして、七時に室に歸つて参りまして、疲れて起きて居る事が出来ません程で御座います。

朝は六時に起きまして、六時半に食堂に参りますが、初めは慣れぬし、三十分間に顔を洗い髪を結い制服を着、また床をなおす事が出来ませんでした、今では出来得るようになりました。慣れゝば十五分位でも出来得るようになるので御座います。見ないで後うしろのボタンを掛けるのがむずかしく、出来ないで始めはよりました、が、いつの間にか慣れて来ました。昼は忙せわしいのと、夜は疲れますので、ついゝゝ氣不調法きふちょうほうにもなりまして、皆様に御無沙汰を申上て居ります。然し夢はなつかしき千歳村の御宅の様子や、また私の母や妹の事など夢みます。いつも夢では日本に居ります。未だ此の地に参りましてから西洋の夢は見ません。年来聞き及びました理想を實際に行う事が出来まして、実に愉快ゆかいに思ひます。患者は米国人も居れば、独乙人どいつじん、伊太利人、ギリーク人、黒色人、

実にあらゆる人を交えて居ります。初めは何だか異人のような気がして妙でしたが、今は平気になりました、黒人でも誰でも自分の同胞の如く思われ、出来るだけ親切に世話してやりたいと務めて居ります。初めは患者の方でも妙に思うたらしゅう御座いましたが、近頃ではよくなずいて、随分よくおとなしくして居てくれますし、病人の方から親切に語をかけてくれますようになりました。校長もよろしい御方で、親切にして居て下さいます。私も日本に居りました時は、丈夫でいばりましたが、ニューヨークに参りましてから余り丈夫ではなく、風土やら食物やら万事が変った故で御座いましょう、昨日からも少し工合が悪しく寝て居りましたら、校長も度々見舞に来て呉れますし、なか／＼手厚き看護して呉れますから、感謝いたして居ります。今日は午後から病院の働きにしようと思いましたが、校長から許しが出ませんから、病院に参りませんで、床の上に座^{すわ}つて先日から書きかけました御手紙を書きつゞけました。

葛城は明年ユニオンを卒業いたしますから、出ましたら直ぐ独乙へ行つて二年程居つて、それから直ぐ日本へ帰りたいと申して居ります。私は身体^{からだ}のつゞく限りは病院に居りたいと思うて居ります。出来るなら卒業をしたいと思いが、卒業せぬでもかまいませんが、とにかく半年居つてもためになると思います。……葛城も本月の三日頃からとう／＼働きに参りました。随分やはり骨が

折れるそうで、気の毒に思いますが、少しは働いて見た方がよろしいと思います。……前には手紙を書いてから見るまでは一月もかゝりましたが、今は四時間程たてば手紙は参りますし一時間かゝればニューヨークにも行かれます、一週間に一度は多分逢えますから、幸福に思つて居ります。私は是非とも三四年は米国に居りたく思つて居ります、今の処では。

葛城は米国嫌いで、来年になったら直ぐ独乙へ行くと申して居ります。私も独乙行を勧めて居ります。是非行くようにと望んで居ります。

ニューヨークへ行きますには、地下の電車でも、亦エレベーターでもどちらでも取つて参れます。私は近頃はニューヨークに独りで参れるようになりまして。……御蔭様にて只今は満足して感謝して働いて居ります。少しも日本に未だ帰りたく思いません。永く米国に居りたく思います。米国に参りまして気が清々せいせいとなりました。葛城が居りますから、何かと心強う御座います。然し手足まといにならぬよう世話にならぬようには充分致して居ります。末筆ながら鶴子様にはどんなに御可愛らしくいらつしやいましょう。鶴子様位の御子様を見ます度に思い出されます。毎朝小児科の方に三つ四つの床を作りに参りますが、此の頃では子供も慣れて言葉をかけ、また私が帰ります時にはグーバイと皆口々に可愛い、声で叫さけんでくれますから、可愛くて堪たまらなくなります。可愛い、

子供も赤児あかんぼも沢山居ります。どうか御姉上様にも御丈夫でいらっして下さいませ。

九月八日

ブルックリン病院にて

馨子

御なつかしき

御姉上様

御まえに

身体の工合が悪いと申しましたが、大した事は御座いません。殊ことに病院で御座いますから、病気の心配は少しも御座いませんから、御安心下さいませ。

*

もはや秋となりました。故郷ふるさとを思い出す時は、第一に粕谷の御家をなずかしく思い出します。去る八日、校長より学生として他の見習いの生徒と共に受け入れられ、今はキャブモロも貰い受け、真の看護婦になりました。無事に二ヶ月の苦しい見習いの時代は終わりましたから、御安心下さいませ。

十月十二日

ブルツクリン病院にて

馨子

姉上様

*

御はがきと御写真、夢ではないかとあやしむ程うれしく御なずかしく拝見いたしました。……相かわらず働きが激しいので、私のような者には、身体がとて
も続かぬと思いましたが、然し倒れる迄は病院に居る積りで居ります。只信仰をもつて神の助けによって日々の務をいたして居ります。

十月廿四日

ブルツクリン病院にて

馨子

姉上様

*

十一月三日、今日は天長節で御座いますが、私に取っては何の変りもなく今日

も一日働きました。然しなずかしき故郷ふるさとの事が今日は一しお恋しくなずかしく
思われます。其後は如何御過し遊ばされますか。いつも御なずかしく、先日御
送り下さいました御写真を眺めては自分の弱さを励まして居ります。私は其後
変りもなく自分の天職と信じて従事いたして居りますから、御安心下さいませ。
先ず御なずかしきまゝに一寸御伺いたしました。

十一月三日

ブルックリンにて

馨子

姉上様

*

目出度きクリスマスを遙かに御祝い申上ます。

此のエハガキにある可愛い子供は誰で御座いましょうか。鶴つるちゃんでは御座い
ませんでしょうか。あまりよく似て居りますもの。とにかく此の児はクリスマ
スを是非千歳村のなずかしい御家で迎えたいと申します。大急ぎで今出立いた
させますから、よろしく御願ひ申します。

一千九百〇九年基督クリスマス降誕になりて

御姉上様に

七

明治四十三年二月三日、粕谷草堂の一家が午餐ごさんの卓について居ると、一通の電報が来た。お馨けいさんの兄者人あにじゃひとからである。眼を通した主人は思わず吁あと叫んだ。

馨急病にて死せりと

妻は声を立てゝ哭ないた。

主人あるじは直ちに葛城の母と長兄を訪ねた。彼は面目ない心地がした。若し死が人生の最大不幸なら、お馨さんの渡米を沮はばんだ彼人々は先見の明があつたのである。彼は其足で更にお馨さんの父母を訪うことにした。銀座で手土産てみやげの浅草海苔を買つたら、生憎あいにく「御結納おんゆいのう一式調進仕候」の札が眼につく。昨年の春頼まれもせぬ葛城家の使者としてお馨さんの実家に約婚の許諾を獲に往つた彼は、一年もたゝぬに此様こんな用事で二たび其家を訪おうとは思わなかつた。

終列車は千葉までしか行かなかつた。彼は千葉に泊つて、翌朝房総線の一番に乗つた。停車場に下りると、お馨さんの兄さんが待つて居た。兄さんは赤い紙に書いた葛城から来た電文を見せた。

馨子急病昨夜世を去る

とある。兄さんはまた、父は非常に興奮して、終夜酒を飲み明かし、母や私に出て行けと申しますと云つた。

岩倉家の玄関で車を下りると、お馨さんの阿爺が出て来た。座に請ぜられて、一つ二つ淀みがちな挨拶をすると、阿爺さんが突然わアツと声を立てゝ哭いた。少し話してまた声を放つて哭いた。やがて阿母が出て来た。沈着な阿母も、挨拶半に顔が劇しく痙攣して、涙と共に声を呑んだ。彼は人の子を殺した苛責を劇しく身に受け、唯黙つて辞儀ばかりした。

やがて酒が出た。彼は平生一滴も飲まぬが、今日はせめてもの事に阿爺阿母と盃の取りやりをしるしばかりした。岩倉家では丁度十四になる末から三番目の女を、阿母の実家にやる約束をして、其祝いをして居る所にお馨さんの訃報が届いたのだそうだ。丁度お馨さんが米国で亡くなつた其晩に、阿母さんが玄関の式台に靴の響を聞きつけ、はッとして出て見たら誰も居なかつたそうである。魂の彼女は其時早く太平洋を渡つて歸つて来たのであつた。

彼はお馨さんの兄さんと共に葛城家へ往つてあとの相談をすることにした。阿爺さんは是非新築中の別荘を見て呉れと云つて、草履ぞうりをつツかけて案内に立つた。酒ぶとりした六十翁みぞの、溝みぞを刎はね越え、阪かを駈かけ上る元氣は、心の苦から逃のがれようとする犠牲のものがきの様で、彼の心を傷いたませた。やがて別荘に來た。其は街道の近くにある田圃こきゅうの中の孤丘けずを削けずつて其上に建てられた別荘で、質素な然し堅牢けんろうなものであつた。西には富士も望まれた。南には九十九里の海——太平洋の一片あさぎが浅黄リボンの様に見える。お馨さんは去年此処の海を犬吠ヶ崎の方へ上つて米國に渡つたのである。「如何です、海が見えましよう。馨が見えるかも知れん」と主翁しゅおうが云う。広々とした座敷を指して、「葛城さんが歸つて來たら、此處ここで祝言しゅうげんさせようと思つて居ました」と主翁がまた云う。

彼は一々胸に釘うたるゝ思であつた。

八

お馨さん死去の電報に接して二週間目の二月十六日、午餐ごさんの席に郵便が來た。彼此よと撰り分けて居た妻は、「あらッ、お馨さんが」と情けない声を立てた。其はお馨さんが亡くなる二週間余り前のはがきであつた。

新年をことほぎ参らせ候。

御正月になりましたら、精い御手紙を認めた^{したた}いと思うて思うて居りましたが、御正月も元旦からいつもと同じに働いて休みなどは取れませんでしたから、つい御無沙汰いたしました。随分久しく御無沙汰申上しました。御許様御家内皆々様には御変りも御座い^{おんもとさま}ませんか。私はいつもながら達者で、毎日く働いて居ります。其後は何の変りもなく無事に病院で勤めて居ります。知らぬ内に種々の事を覚えて行きます。

御正月にはホームシックにかゝりまして実に淋しく、毎日千歳村のなつかしい御家族の御写真のみ眺めて居りました。私は只神の御助けと御導きにより只神の御保護を信じて其日を暮して居ります。いずれ後より精しく申上^{くわ}ます。御なずかしきまゝに一寸申上しました。

一月十三日

米国ブルックリンにて

岩倉馨子

姉上様

彼世あのよからのたよりが又一つ来た。其はお馨りんじゆうさんが臨終十一日前の手紙であつた。

クリスマスと新年の祝いも、いつしか過ぎ去りまして、はや今日は二十日はつか正月となりました。昨年さくねんの御正月には、御なずかしき御家に上りまして、御雑煮おぞうにの御祝いに預りました。今でも実に何ともかとも申されぬなずかしきその時の光景ありさまを追懐ついかいいたします。実に月日の過ぎ行くのは早いもので御座いまして、もはや当地に参りましてから年の半分は立ちました。此様こんなですから、また御目にかゝる事の出来得る日は近きにある事と思います。

次に私事は相かわらず此病院で働いて居ります。三ヶ月程前から忙せわしき婦人の病室の方へ参りましたもので、夜になつて室に帰りまして、筆を取る勇氣もなく過しましたが、二三日前から前に居おつた病室に帰りましたので、非常に楽らくになりました。

三ヶ月間は実に苦しい思いをいたしました。然し実によい経験を得ました。私は日本の看護婦のトレーニングにつきましては、どんなか少しも知りませんが、米国のトレーニング、スクールは、たしかに日本よりは勝まさつて居ると思います。随分軍隊と同じような組織で、きびしゅう御座います。実にある点は高尚で完

全ですが、またある点は劣^{おと}つて居る処もありますよう思われます。日本に居りました時とすっかり何から何まで変つて居りまして、働いた事とて別に朝から夕までつゞけた事ありませんで、生活が全く異つて居りますから、実に苦しく感じました。

近頃は朝から夕まで一度も腰もかけなくとも平気で働いて居ります。然し三ヶ月の間は、実に困りまして、幾度も止めようかと思いましたが、とうとうつゞけました。仕事が苦しいばかりでなく、上のヘッドの看護婦が余り人物の人でないもので、下の私共は実に辛^{つら}く思いました。実に忙^{せわ}しいと申しましたら、あのような思いは実にく初めてゞ御座います。若し日本に居つてならば、とても私には勤まりません。此処ではいや応なしですから、とにかく務めて居ります。私は卒業はするかしらないか、私はどうしてもやになれば明日にも止める積りで居ります、たゞ葛城が米国に居ります間は、厄介をかけるのが気の毒ですから、どうか続けたく思います。

友人の中にも、なか／＼よい家庭に育つて性質のよい人もありますが、また意地の悪い人もあります。やはり面も性質も日本人と同じで御座います。人類ですから、やはり皆人情は同じで御座います。

私は自分のベストを尽して居ります。親切と正直^{むね}とを旨として居ります。病人

もよくなつて呉れますし、自分の受持の病人には満足を与える事が出来まし
たから、此れは自分の第一の宝たからと思うてよろこんで居ります。家に帰る時は、
皆よろこんで感謝して帰りますから、是れが私の楽しみで御座いました。

婦人の病室に居りました時は、何から何まで一切世話をせねばなりませんし、
中には老人で不随の人もありますから、床ずれの出来ぬようにそれ〴〵手あて
もせねばなりませんし、何ともかとも申されぬ程忙わしゆう御座います。大抵
十二人位の人の世話を一人でいたしますし、また他の病室の病人の事も世話を
せねばなりませんから、実に苦しゆう御座います。

看護法の実例などは、校長が日々生徒を集めて教えて呉れます。また今は医師
が解剖かいぼうと生理など講じて居ります。昨年はバクテリアについて講義もきゝまし
た。また校長が自ら看護法など学術的に教えて居ります。講義なども、学術の
名は私は知りませんから、なか〴〵むずかしいですが、またこちらの人もあま
りよくは知りませんから、共に勉強して居ります。むずかしいですが、少しは
興味が御座います。看護婦は医学の事も知らねばなりませんから、余程勉強せ
ねばなりません。一日一日と少しずつ何かと覚えて参りますから、有り難く思
うて居ります。初めての米国にてのクリスマス、余り楽しくも御座いませんで
したが、然しクリスマスの際は、此処ここでもなか〴〵にぎやかで御座いました。

当日は四時間暇ひまが取れました。クリスマスディナーも御座いまして、なか／＼盛んで御座います。皆々上機嫌で、うれしそうで御座います。

学校でもクリスマスにはクリスマスダンスが御座いました。私は生れて初めて真の舞踏会と云うものを見ました。実に優美なもので御座います。夜の八時頃から翌朝の二時か三時まで踊おどつて居ります。元気のよいのには、おどろきました。私は夜会服のかわりに日本服を久々で着ました。皆々非常によろこんでくれました。

御正月には休みもなく、元日から常と同じに働きました。御正月には何となく故郷ふるさとがなずかしく、さびしくつて堪たりませんでした。毎日／＼忙ひまわしく働いて居りますから、常にはホームシックも起りませんが、半日暇ひまの時などは、実にさびしくて堪らぬ事があります。余り私は外出はいたしません。少なくとも一週間に一度は出て、外の変った空気をすわねばならぬと知りつゝも、疲れるのがいやなので、つい／＼出ません。当地の人は皆元気です。夜十二時に帰つても、翌日はやはり同じに務めます。学校では、一週に一度は十二時までの許しを貰えますし、三度は十一時までの許を貰えますし、常には十時までは何処に行つてもかまわぬようになって居ります。此処は感心で御座います。此の様に自由でも少しも乱れません。日本の女学校などには、見ようと思つても見られぬ処

で御座いましょう。

私は今は自分で働いて自分で生活して居りますから、日本に居った時よりも、苦しみながらも、或一種の愉快が御座います。

葛城はユニオンの方も卒業に近づきました。早いもので、三年も東の間に過ぎ去りました。いつも私共は御なずかしき御両人様おふたりさまの御噂のみいたして居ります。千歳村、実になずかしく思います。

大抵二週間に一度は、逢います。前から私はニューヨークには独りで参れますから、半日暇を取れる時は、二週に一度は参ります。

当地は実に寒さはきびしゅう御座いまして、雪は度々降りますが、家の中の寒防かんぼうはよく備わつて居りますから、家の中の温度は、春のような氣候で御座います。

私はシモヤケは毎年出来ましたが、今年は冷いつめた思いなどは少しもいたしませんから、手はきれいで、少しも出来ませんから御安心下さいませ。日本に居りました時は、シモヤケには困りました。外は随分寒く、身を切らるゝ様で御座います。雪が降りますと、なか／＼溶とけませんで、幾日も／＼つもつて居ります。今日も雪模様ですから、午後から降るかもわかりません。

書きたい事は山々御座いますが、また次の便りの時にいたします。

乱筆を御許し下さいませ。日本語を此の頃は話しませんし、只葛城と日本語で

話すものですから、乱暴な語ばかり習いまして、いつも余り無礼の語をつかつて驚く事が御座います。

どうぞ
何卒乱筆乱文御許し下さいませ。

先は御無沙汰御詫びかたぐ御機嫌御伺いまで。

一月廿日

岩倉けい

御なつかしき

御姉上様

御まえに

此れがお馨さんの粕谷に寄せた最後の心の波であつた。此手紙を書いて十一日目に、彼女は其最後の戦場なる米国ブルックリン病院看護婦学校の病室に二十四年の生涯を終えたのである。

お馨さんは死んだ。

新生涯の新夫婦、メエフラワアを目送するピュリタンの若い男女のいっつい一対の其一人は欠けた。残る一人は如何であらう？

一月卅一日午後七時半、最愛の我が馨子高貴なる人生の戦に戦い死す。忠信なりし彼の女は、死に至る迄忠信なりき。病は敗血症と腸炎の併発、事極めて意外、病勢は急転直下、僅かに二十時間にして彼女は去る。

盛大なりし葬式（ユニオン神学校に於ける）は、彼女と予とを永しえに結ばん為めの結婚の式なりき。多く言わず、唯察し玉え。

二月三日

勝郎

*

「日蓮は泣かねど、涙隙無し」と。涙隙無きに止まらず、声を挙げて泣ける事も幾たびぞ。怨み、嘆き、悲しみ、悔い、悩み、如何にして此幽闇の力破らんと、空しくあたり見廻わせるも幾度び。……幾度我れ死せば此の苦しみあらざりしものと思ひ候。

されど若し弟先んぜば、馨子の悲痛は弟にも勝りて激しかりしならんか。弟をして此の憂闇の力を破り得しむるものは、唯一つ馨子生きて之れが為に戦い、死に及んで止まざりし我等の理想也。彼女の短かき生涯は、その一切の瑕瑾と不

完全を以てして、遂に人生最高の理想を追い、之れが為めに戦い、戦い半ばならずして斃れし英雄の生涯也。遂に蜉蝣の如き人生は、生きて甲斐なけん。昔者プラトー、ソクラテスの口をして曰わしめて曰く、"It is not mere life, but a good life that we count on". 仮令馨子凱歌の中に光榮の桂冠戴くを得ざりにせよ、彼女の生はその畢生の高貴なる焰のあらん限を尽して戦い、戦の途上戦い死せる光榮ある戦死者の生也。此の事、弟をして敬虔馨子の死の前にぬかずき、無限のインスピレーションを茲に汲ましむ。

二月十八日

勝郎

九

五月の初、お馨さんが髪と骨になって日本に帰つて来た。お馨さんのカタミを連れ帰つたのは、日本に帰化した米国の女宣教師で、彼女は横須賀に永住して海軍々人の間に伝道し、葛城も久しく世話になつて「母」と呼んで居た人で、お馨さんの病死の時は折よく紐育に居合わせ、始終万事の世話をしたのであつ

た。

五月の四日、粕谷草堂の夫妻は鶴子を連れて、お馨さんの郷里に於ける葬式に列なるべく出かけた。両国の停車場で、彼等は古びた中折帽を阿弥陀にかぶつた、咽喉に汚れた絹ハンカチを巻いた、金齒の光つて眼の鋭い、癩癩持ちらしい顔をした外川先生と、強情でかぬ氣らしい、日本人の彼等よりも却てヨリ好き日本語をつかうF女史に会った。

いつもの停車場で下りて、一同は車をつらねて彼丘の上の別荘に往つて憩い、それから本宅に往つた。お馨さんの父者人、母者人と三度目の対面をした。十二畳二間を打ぬいて、正面の床に遺髪と骨を納めた箱を安置し、昨日から来て葛城の姉さんが亡き義妹の為に作つた花環をかざり、また藤なぞ生けてあつた。お馨さんは自身の写真と云う写真を残らず破り棄てたそうで、目に見るべき其姿は残つて居なかつた。然しお馨さんによく肖た妹達が五人まで居て、其幼な立から二十歳前後を眼の前に見る様であつた。外川先生が司会し、お馨さんの学友がオルガンを弾いて、一同讚美歌の「やゝにうつり行く夕日かげの、残るわがいのち、いまか消ゆらん。御使よ、つばさをのべ、とこしえのふるさとに、つれゆきてよ、……」と云うのを歌うた。

粕谷の彼は起つてお馨さんと彼等の干繫を簡単に述べ、父者人に対して卑怯

なる虚言の罪を謝し、終に臨み、お馨さんの早世そうせいはまことに残念だが、自身の妹か娘があるならば、十人は十人矢張お馨さんの様に戦場に送りたいと思うと言った。

次ぎにF女史が立つて、お馨さんの臨終前後の事を述べた。お馨さんは、ブルックリン病院の生徒となつて以来、忠実に職分を尽して、校長はじめ先輩、同僚、患者、すべての人の信愛を贏かち得た。発病以来苦痛も中々あつたであろうが、一言も不平憂悶ふへいゆうもんの語なく、何をしてもらつても「有難ありがとう〜」と心から感謝し、信仰と感謝を以て此世を去つた。真に見上げた臨終で、校長はじめ一人として其美しい勇ましい臨終に感激せぬ者は無かつた。F女史は斯く事細かに語り来つて「私も斯様に米国から御国おくにに伝道に参つて居りますが、馨子さんの働きを見れば、其働きの間は實に暫の間しばらくでございましたが、私は恥入る様に思ひます。馨子さんは實にやさしい方で、其上男も及ばぬ凜々りんりしい魂たましいを持つてお出でした。春の初に咲く梅の花の様な方でした」と云うた。

言下ごんかに、粕谷の彼は、彼の園内の梅の下に立ち白い花を折つて黒髪に挿さすお馨さんの姿をまざまざと眼の前に見た。本当に彼女は人になつた梅の花であつた。だから其花を折つて簪かんざしにしたのだ。彼女にして初めて梅の花を簪にするこゝとが出来る。彼は重ねて思ふた。米国からF女史が帰化きかして、日本に伝道に來

る。日本からお馨さんが米国に往つて米国の人達に敬愛されて死ぬる。斯うして日米の間は自然に繋がれる。お馨さんは常に日米感情の齟齬を憂えて居る女であつた。日米の親和を熱心に祈つて居た女であつた。其祈は聴かれて、彼女は米国に死んだ。米国の灰になり米国の土になつた彼女は、真に日本が米国に遣わした無位無官の本当の平和の使者の一人であつたと。蓋「宝の在る所心もまた在る」道理で、お馨さんを愛する程の人は、お馨さんの死んだ米国を懷わずには居られないのである。

最後に外川先生が師弟の關係を述べ、「彼女は強い女であつたが、体は強健だし、貧乏はしないし、思いやりと云うものが或は欠ける恐れがあつた。だから自分は米国渡航を賛成したのであつた。自分は考えた、彼女が二三年も米国に揉まれると、実にエライ女になつて来る。然るに今Fさんの言を聞けば、彼女は短かい期間であつたが立派に其人格を完成することが出来た。だから死んだのである」と云うた。

外川先生の祈祷で式は終えた。一同記念の撮影をして、それから遺髪と遺骨を岩倉家の菩提寺の妙楽寺に送つた。寺は小山の中腹にある。本堂の背後、一段高い墓地の大きな海棠の下に、

岩倉馨子之墓

と云う小さな墓標^{ぼひょう}が立てられた。

*

葛城は其後間もなく独逸に渡った。

千九百十年 六月十八日

ニューヨーク

本日午後三時当地出帆。

三年苦戦健闘のアメリカを去らんとして感慨強し。闘争は一個微弱なる一少年を化して、兎も角も男を作り候。

馨子を煙とせし北米の空、ふり仰いで涙煙の如く胸を襲^{おそ}う。

勝郎

十

生きて居る者は、苦まねばならぬ。死んだお馨さんは、霊になつて猶働きつゝあるのだ。

「お馨さんの梅」は、木の生くる限り春毎に咲くであろう。短く此生に生きたお馨さんは、永久に霊に生きて働くであろう。

関寛翁

一

明治四十一年四月二日の昼過ぎ、妙な爺さんじいが訪ねて来た。北海道の山に牛馬を飼って居る関と云う爺じいと名のる。鼠の眼の様に小さな可愛い眼をして、十四五の少年の様に紅味あかばしつた顔をして居る。長い灰色の髪を後に撫でつけ、顎あごに些ちとの疎髻そげんをヒラ／＼させ、木綿こふずくめの着物に、足駄あだばき。年を問えば七十九。強健な老人振りに、主人は先ず我がを折った。

兎も角も上に請しやうじ、問わるゝまゝにトルストイの消息など話す。爺さんは五十年來実行して居る冷水浴の話、元來医者で今もアイヌや移住民に施療して居る話、数年前物故した婆さんの話などして、自分は婆の手織物てオリモノほか着たことはない、此も婆の手織だと云つて、ごり／＼した無地の木綿羽織の袖を引張つて見せた。面白い爺さんだと思つた。

其後「命の洗濯」「旅行日記」「目ざまし草」など追々爺さんから自著の冊子を送つて来た。面白い爺さんの一癖も二癖もある正体が読めて来た。経歴の一端

も分かった。爺さん姓は関名は寛、天保元年上総国に生れた。貧苦の中から志を立て、佐倉佐藤泰然の門に入つて医学を修め、最初銚子に開業し、更に長崎に遊学し、後阿波蜂須賀侯に招かれて徳島藩の医となつた。維新の際は、上野の戦争から奥羽戦争まで、官軍の軍医、病院長として、熱心に働いた。順に行けば、軍医総監男爵は造作ぞうさもないことであつたろうが、持つて生れた骨が兎角邪魔をなして、上官と反りそが合わず、官に頼つて事を為すは駄目と見限りをつけて、阿波徳島に帰り、家禄を奉還して、開業医の生活を始めたのが、明治五年であつた。爾来こゝに、孜々ししとして仁術を続け、貧民の施療、小児の種痘など、其数も夥しいものになつた。家も相応に富んだ。五男二女、孫も出来、明治三十四年には翁媼おうおんども共に健やかに目出度金婚式を祝うた。剛氣の爺さんは、此まゝ楽隠居で朽果つるを嫌きらつた。札幌農学校に居た四男を主として、北海道の山奥開墾牧場経営を企て、老夫婦は養老費の全部及び老いの生命お二つを其牧場に投ず可く決心した。婆さんもエラ者である。老夫婦は住み馴れた徳島をあとにして、明治三十五年北海道に移住し、老夫婦自ら鋤をとり鎌をとつて働いた。二年を出でずして婆さんは亡くなる。牧場主任の四男は日露戦役に出征する。爺さん一人淋しく牛馬と留守の任に當つて居たが、其後四男も帰つて来たので、寒中は北海道から東京に出て来て、旧知を尋ね、新識を求め、朝に野に若手の者

と談話を交換し意見を闘わすを樂の一として居る。読書、旅行と共に、若い者相手の他流試合は、爺さんの道楽である。旅行をするには、風呂敷包一つ。人を訪うには、初対面の者にも紹介状なぞ持つては往かぬ。先日のお来訪も、型の如く突然たるものであつた。

爺さんが北海道に歸つてからよこした第一の手紙は、十三行の罫紙に蠅頭の細字で認めた長文の手紙で、農とも讀書子ともつかぬ中途半端な彼の生活を強く攻撃したものであつた。爺さんは年々雁の如く秋は東京に来て春は北に歸つた。上京毎にわざ／＼來訪して、追々懇意の間柄となつた。手ずから採つた干薇ほしわらび、萩のステッキ、鶉豆うずらまめなぞ、来る毎に持て來てくれた。或時彼は湘南の老父に此爺さんの噂うわさをしたら父は少し考えて、待てよ、其は昔関寛齋と云つた男じやないかしらん、長崎で脚疾の治療をしてもらつたことがある、中々きかぬ氣の男で、松本良順など手古摺てこずつて居た、と云つた。爺さんに聞いたたら、果して其は事實であつた。其後爺さんは湘南漫遊みぎりの砌老父が許もとに立寄つて、八十八の旧患者は八十一の旧医師と互に白鬚を撫して五十年前崎陽の昔を語ると云う一幕があつた。所謂縁は異なものである。

北海道も直ぐ開けて了う、無人境が無くならぬ内遊びに來い遊びに來いと、爺さん頻りに促うながす。彼も一度は爺さんの生活ぶりを見たいと思ひながら、何や

角と延ばして居る内に、到頭爺さんの住む山中まで汽車が開通して了った。そこで彼は妻、女を連れてあたふた武蔵野から北海道へと遊びに出かけた。

左に掲ぐるは、訪問記の数節である。

二

「北海道十勝の池田駅で乗換えた汽車は、秋雨寂しい利別川としばつがわの谷を北へ北へまた北へ北へと駛はしつて、夕の四時りくせん湊別駅に着いた。明治四十三年九月二十四日、網走線あはしりが湊別まで開通した開通式の翌々日である。

今にはじめぬ鉄道の幻術げんじゆつ、此正月まで草葺の小屋一軒しかなかったと聞く湊別に、最早人家が百戸近く、旅館の三軒料理屋が大小五軒も出来て居る。開通即下のごったかえす湊別館の片隅で、祝いわいの赤飯で夕飯を済まし、人夫の一人に当年五歳の女兒鶴、一人に荷物を負ってもらい、余等夫婦洋傘を翳さしてあとにつき、斗満とまむの関牧場さして出かける。

新開町しんかいまちの雑沓を後にして、道は直ぐ西に蒼い黄昏あおたそがれの煙に入けむりった。やがて橋を渡る。湊別橋である。開通を当に入り込んだ人間が多く仕事が無くて困ると云う人夫はなしの話を聞きながら、滑りがちな爪先上りの路を、懷中電燈の光に照らして

行く。雨は止んで、日はとつぷり暮れた。不図耳に入るものがある。颯々——
 颯々と云う音。はつとして余は耳を立てた。松風か。否、松風でない。峰の嵐
 でもない。水声である。余は耳を澄ました。何と云う爽やかな音か。此世の声で無
 い。確に別天地から通うて来る、聴くまゝに耳澄み心澄み魂も牽き入れらるゝ
 様ななつかしい音である。人夫にきくと、果して斗満川であつた。やがて道は
 山側をめぐつてだら／＼下りになった。水声の方からぱつと火光がさす。よく
 見れば右側山の手にかがある。道の左側にも家がある。人の話声がして止んだ。
 此だな、と思つて音なわすと、道側の矮い草葺の中から真黒な姿がぬつと出て
 「東京のお客さんじゃありませんか。御隠居が毎日御待兼ねです」と云つて、先
 に立つて案内する。水声に架す橋を渡つて、長方形の可なり大きな建物に來た。
 導かるゝまゝにドヤ／＼戸口から入ると、眩しい洋燈の光に初見の顔が三つ四
 つ。やがて奥から咳払いと共に爺さんが出て來た。
 「おゝ鶴坊來たかい。よく來た。よく來た」

*

九月二十五日。雨。

爺さんでは長過ぎる。不躰ぶしつでもある。あらためて翁と呼ぶ。翁が今住んで居る家は、明治三十九年に出来た官設の駅通で、四十坪程の質素な木造。立派ではないが建て離しの納屋はな、浴室、客室あなぐらもあり、裏に鶏を飼い、水も掘井戸ほりいど、山から引いたのと二通りもあつて、贅沢ぜいたくはないが不自由もない住居だ。翁は此処に三男余作君、牧場創業以来の老功片山八重蔵君夫婦、片山夫人の弟にして在郷軍人たる田辺新之助君、及び其病妹と共に住んで居る。此処は十勝で、つい川向うが釧路、創業当時の草舎も其の川向かわむかいにあつて、今四男又一君が住んで居る。駅通の前は直ぐ北見街道、其向うは草叢くさむらを拓ひらいて牛馬舎一棟、人の住む矮ひくい草舎くさやが一棟。道側に大きなヤチダモが一樹黄葉あきざめして秋雨を滴たらして居る。

駅通東南隅の八畳が翁の居間である。硝子窓がらすまどから形ばかり埒らちを結った自然のまゝの小庭こにわや甘藍畑を見越して、黄葉のウエンシリ山をつい鼻のさき見る。小机一つ火の気の少ない箱火鉢一つ。床には小杉榎こすぎおんせんの「淡きもの味はへよとの親こゝろ共にしのびて昔かたらふ」と書いた幅を掛けてある。翁は今日も余等が寝て居る内に、山から引いた氷の様な水を浴び、香を焼たいて神明に祈り、机の前に端座たんざして老子を読んだのである。老子は翁の心読書、其については創世記、詩篇、約百記ヨブきなども愛読書目の中にある。アブラハム、ヤコブゆうほくなど遊牧族の老酋長の物語は、十勝の山中に牛馬と住む己わが境涯に引くらべて、殊に興味

が深いのであろう。

落^{おち}つけよとの雨が終日降りくらす。翁の室と板廊下一つ隔てた街道側の八畳にくつろいで居ると、翁は菓子、野葡萄、玉蜀黍、何くれと持て来ては鶴子にも余等にも与え、小さな炉を中に、黒い毛繻子の前掛の膝をきちんと座つて、さまざまの話をする。昔からタゞの医者でなかった翁の所謂灌水は単に身体の冷水浴をのみ意味せぬ如く、治術も頗活機に富んだもので、薬でなくてはならぬときめこんだ衆生の為に、徳島に居た頃は不及^{ふぎゆういん}飲と云う水薬を調合し、今も待効丸と云う丸薬を与えるが、其れが不思議によく利^きくそうだ。然し翁の医術はゴマカシではない。此を見てくれとさし出す翁の右手をよく見れば、第三指の尖^{さき}が左の方に向つて鉤^{かぎなり}形に曲つて居る。打診^{だしん}に精神がこもる証拠だ。乃公^{わし}の打診は何処をたゞいても患者の心臓^{しんぞう}にピンと響く、と云うのが翁の自慢である。やがて翁は箱の様なものを抱^{かか}えて来た。関家の定紋九曜を剝^くりぬいた白木の龕^{がん}で、あなたが死ぬ時一処に牧場^{ぼくじょう}に埋めて牛馬の食う草木を肥やしてくれと遺言した老夫人の白骨は、此中に在るのだ。翁も夫人には一目置いて、婆は自分よりエラかったと口癖の様に云う。それから五郎君の噂^{うわさ}が出る。五郎君は翁の末子である。明治三十九年の末から四十年の始にかけ、余は黒潮^{くろしほ}と云う手紙代りの小さな雑誌を出したが、其内田舎住居をはじめたので、三号迄も行かぬ

二号雑誌に終った。あとを催促の手紙が来た中に、北海道足寄郵便局あしよろの関五郎と云う人もあつて、手紙に添えて黒豆など送つて来た。通り一遍の礼状を出したきり、関とも五郎とも忘れて居ると、翌年関又一と云う人から五郎君死去の報が来た。形式的に弔詞は出したが、何れの名も余には遠いものであつた。処があとで関翁の話聞けば、思いきや五郎君は翁の末子で、翁が武蔵野の茅舎ぼうしやを訪われたのも、実は五郎君の勸すすめであつた。要するに余等は五郎君の靈に引張られて今此処に来て翁と対座して居るのである。

翁は一冊の稿本を取り出して来て示される。題して関牧場創業記事と云う。披ひらいて見ると色々面白い事がある。牧場も創業以来已に十年、汽車も開通して、万事がこゝに第二期に入らんとして居る。既往を思えば翁も一夢の感があるう。翁はまた此様なものを作つたと云つて見せる。場内の農家わかに頒すりものつ刷物である。

日々の心得の事

- 一 一家なみか和合よくして先祖を祭り老人を敬としよりうべし
- 一 朝は早く起き家業に就き夜は早く寝ねにつくべし
- 一 諸上納しよじやうのうは早く納むべし
- 一 金銭取引の勘定は時々致かんじやうすべし
- 一 他人と寄合よあひの時或は時間ときの定ある時は必ず守るべし

- 一 何事にてても約束ある上は必ず実行すべし
- 一 偽言^{うそ}は一切いうべからず
- 一 火の要心を怠るべからず
- 一 掃除^{そうじ}に成丈注意すべし
- 一 流し元と掃溜^{はきだめ}とは気をつけて衛生に害なきよう且肥料^{こやし}にすべき事
- 一 家具の傷みと障子の切張とに心付くべし
- 一 喰物^{くいもの}はむだにならぬ様に心を用い別して味噌と漬物とは用いたる跡にも猶心を用うべし
- 一 他人より物をもらいたる時は返礼を忘るべからず
- 一 買物は前以て価^{ねだん}を聞き現金たるべし一厘にててもむだにならぬ様にすべし
- 一 総て身分より内輪に諸事に心懸くべし人を見さげぬ様に心懸くべし
- 一 常着^{つねぎ}は木綿筒袖たるべし
- 一 種物は成るべく精撰して取るべし
- 一 農具^{さひ}は錆ぬ様に心懸くべし
- 一 貯金は少しずつにても怠るべからず
- 一 一ヶ年の収入に応じて暮方を立つべし
- 一 一家の経済は家族一同に能く知らせ置くべし

一 他人の子をも我子にくらべて愛すべし

一 他人より諸品しなモノを借りたる時は早く返すことに心がくべし

一 場内の農家は互に諸事を最も親しくすべし

一 平生自己の行に心を尽すべし且世上に対すべし

明治四十三年

翁はもとく我利が利から広大の牧場地を願下げたと思わるゝを心しんから嫌つて、目下場内の農家がまだ三四戸に過ぎぬのをいたく慙じ、各十町を所有する中等自作農をせめて百戸は場内に入るべく切望して居る。

午後アイヌが来たと呼ばれるので、台所に出て見る。アツシを着た四十左右の眼の鋭い黒髯蓬々たる男が腰かけて居る。名はエンデコ、翁の施療せりようを受けに利別としべつから来た患者の一人だ。此馬鹿野郎、何故なぜもつと早く来ぬかと翁が叱る。アイヌはキマリ悪るそうに笑つて居る。着物をぬいで御客様に毛だらけの膚はだを見せろ、と翁が云う。体が臭いくさからとモジ／＼するのを無理やりに帯解かせる。上半身が露あらわれた。正に熊だ。腹毛胸毛はものかは、背の真中まで二寸ばかりの真黒な熊毛がもじや／＼渦うずまいて居る。余も人並はずれて毛深い方だが、此アイヌに比べては、中々足下にも寄れぬ。熟々つくづく感嘆して見惚みとれる。翁は丁寧に診察を終つて、白や紫沢山の薬瓶やくびんが並

んだ次の間に調剤ちようざいに入った。

河西支庁の測量技手が人夫を連れて宿泊に來たので、余等は翁の隣室の六畳に移る。不図硝子窓から見ると、庭の櫓の切株に綺麗きれいな縞栗鼠しまりすが來て悠々と遊んで居る。開けたと云つても、まだく山の中だ。

四時過ぎになると、翁の部屋で謡がはじまった。「今を初の旅衣——」ポンと鼓が鳴る。高砂だ。謡も鼓もあまり上手とも思われぬが、毎日午後の四時に粥かゆ二碗を食つて、然る後高砂一番を謡い、日が暮るゝと灌水かんすいして床に入るのが、翁の常例だそうな。

夕飯から余等も台所の板敷で食わしてもらう。食後台所の大きな暖炉を囲んで、余作君片山君夫婦と話す。余作君は父翁の業を嗣いで医者となり、日露戦後哈爾濱ハルビンで開業して居たが、此頃は牧場分担の為め呼ばれて父翁の許に歸つて居る。片山君は紀州の人、もと北海道鉄道に奉職し、後関家に入つて牧場の創業に当り、約十年斗満の山中に努力して、まだ東京の電車も知らぬと笑つて居る。夫妻に子供が無い。少し痘痕あばたある鳳眼にして長面の片山君は、銭函ぜにばちの海岸で崖崩れの為死んだ愛犬の皮を胴着にしたのを被て、手細工らしい小箱から煙草をつまみ出しては長い煙管でふかしつゝ、悠然とストーブの側に胡踞あぐらかき、関翁が婆ア婆アと呼ぶ頬ほおの殺そげたきかぬ氣らしい細君は、モンペ袴はかまをはいて甲斐々々しく流しもとに立働いて居ると、隅の

方にはよく兎を捕ると云う大きな猫の夫婦が箱の中に共寝して居る。話上手の片山君から創業時代の面白い話を沢山に聞く。達別古来鹿の集る所で、アイヌ等が鹿を捕るに、係蹄にかゝった瘡せたのは追放し、肥大なやつばかり撰取りにして居たそうだ。鮭、鱒、鯡などは持ちきれぬ程釣れて、草原にうつちやつて来ることもあり、銃を知らぬ山鳥はうてば落ちうてば落ちて、うまいものゝ例にもなる山鳥の塩焼にも鑿いて了まつた。たゞ小虫の多いは言語道断で、蛇などは人を避くることを知らず、追われても平氣にのたくって居たそう。寒い話では、鯨の刃先にはさまつた豆粒を噛みに来た鼠の舌が鯨に氷りついたまゝ死に、鼠を提げると重たい開墾鉤がぶらり下つてもはなれなかつた話。哀れな話では、十勝から生活のたつきを求めて北見に越ゆる子もちの女が、食物に困つて山道に捨子した話。寂しい話では、片山夫人が良人の留守中犬を相手に四十日も雪中斗満の一つ家に暮らし、四十日間に見た人間の顔としては唯アイヌが一人通りかゝりに寄つたと云う話。不便な話では、牧場は釧路十勝に跨るので、斗満から十勝の中川郡本別村の役場までの十余里はまだ可として、釧路の白糠村役場までは足寄を経て近道の山越えしても中途露宿して二十五里、はがき一枚の差紙が来てものこゝ出かけて行かねばならなかつた話。珍な話ではつい其処の斗満川原で、鶴鴒が鷹の子育てた話。話から話と聞いて居ると、片山君夫婦が妬ましくなつた。片山君も十年精勤の報酬の一部として、牧場内

の土地四十余町歩を分与され、これから関家を辞して自家生活の經理にかゝるのであるが、過去十年関家に尽した創業の労苦の中に得た程の樂は、中々再びし難いかも知れぬ。

九月廿六日。霽。^{はれ}

翁の縁戚の青年君塚貢君の案内で、親子三人^{りくんべつ}、湊別の方に行つて見る。斗満橋を渡ると、街道の北側に葭葺の草舎が一棟。明治三十五年創業の際建てた小屋だ、と貢君説明する。今は多少の修補をして、又一君と其縁戚の一少年とが住んで居る。直ぐ其側に二十坪程の木羽葺^{こつばぶき}の此山中にしては頗立派なまだ真新しい家が、戸をしめたまゝになつて居る。此は関翁の為に建てられた隱宅だが、隱居嫌の翁は其を見向きもせずして寧駅通に住み、台所の板敷にストーブを囲んで一同と黍飯^{きびめし}を食つて居るのである。道をはさんで、粗造な牛舎や馬舎が幾棟、其処らには割薪^{わりまき}が山のように積んである。此辺は蕨^{わらび}を下草にした櫓^{だう}の小山を北に負うて暖かな南向き、斗満の清流直ぐ傍^{そば}を流れ、創業者の住居に選びそうな場所である。山角^{やまはだか}をめぐつて少し往くと、山際に草葺のあばら舎^やがある。片山君等が最初に建てた小舎だが、便利のわるい為め見すて、川側^{かわはた}に移つたそうな。何時の間にか湊別橋に來た。先夜は可なりあるように思ったが、駅通^{えきどう}から十丁には過ぎぬ。聞けば、関牧場は西の方二オトマムの辺から起つて、斗満の谷を川と東へ下り、湊別川クンボツ川斗満川の相会する

りくべつだに

としべつがわ

達別谷を東のトマリとして南に折れ、三川合して名をあらためて利別川の谷を下つて上利別原野の一部に及び、云わば一大鎌状をなして、東西四里、南北一里余、三千余町歩、達別停車場及達別市街も其内にある。鉄道院では、池田駅高島駅等附近の農牧場所所有者の姓氏を駅の名に附する先例により、今の停車場も関と命名すべく内意を示したが、関翁が辞して達別駅となつたそう。市街は見ず、橋から引返す。帰路斗満橋上に立つて、やゝ久しく水の流を眺める。此あたり川幅六七間もあろうか。達別橋から瞰むる達別川の川床荒れて水の濁れるに引易え、斗満川の水の清さ。一個々玉を欺く礫の上を琴の相の手弾く様な音立てゝ、金糸と閃めく日影素して駛り行く水の清さは、まさしく溶けて流るゝ水晶である。「千代かけてそゝぎ清めん我心、斗満の水のあらん限りは」と翁の歌が出来たも尤である。貢君の話によれば、斗満川の水温は達別川の其れより三四度も低いそう。人跡到らぬキトウス山の陰から来るのだ。然もあろう。今こそ駅通には冬も氷らぬ清水が山から引かれてあるが、まだ其等の設備もなかつた頃、翁の灌水は夏はもとより冬も此斗満川でやったのだ。此斗満の清流が数尺の厚さに氷結した冬の暁、爛々たる曙の明星の光を踏んで、浴衣一枚草履ばきで此川辺に下り立ち、斧で氷を分割つて真裸に飛び込んだ老翁の姿を想い見ると、畏敬の情は自然に起る。

駅通に帰つて、道庁技師林常夫君に面会。駒場出の壮年の林学士。目下ニオトマ

ムに天幕^{てんまく}を張つて居る。明日関翁と天幕訪問の約束をする。

昨夕来泊した若年^{じゃくねん}の測量技手星正一君にも面会。星君が連れた若い人夫が、食饌のあと片付、掃除、何くれとまとめくしく立働くを、翁は喜ばしげに見やつて、声をかけ、感心だと賞^ほめる。

午後は親子三人、此度は街道を西南に坂を半上つて、牧場の埒^{らちない}内に入る。東向きの山腹、三囲四囲もある櫓^{みかかえよかかえ}の太木が、幾株も黄葉の枝を張つて、其根もとに清水が湧^わいたりして居る。馬牛の群の中を牛糞を避け、馬糞を跨^{また}ぎ、牛馬舎の前を通つて、斗満川に出た。少し川辺に立つて居ると、小虫が黒糠^{くろぬか}の様にたかる。関翁が牧場記事の一節も領^{うなず}かれる。左程大くはないと云つても長六尺はある露^{ふき}や、三尺も伸びた蓬^{よもぎ}、自然生の松葉独活^{アスバラガス}、馬の尾について殖^ふえると云う山牛蒡、反魂香と云う七つ葉なぞが茂^さつて居る川沿いの径^{こみち}を通つて、斗満橋の袂^{たもと}に出た。一坪程の小さな草舎^{くさや}がある。屋後^{うしろ}には熊の髑髏^{あたま}の白くなつたのや、まだ比較的生^{なま}しいのを突き刺^さした棹^{さお}、熊送りに用うるアイヌの幣束イナホなどが十数本、立つたり倒れたりして居る。此は関家で熊狩^{くまがり}に雇^{やと}つて置くアイヌのイコサツクルが小屋で、主は久しく留守なのである。覗^{のぞ}て見ると、小屋の中は薄暗く、着物の様なものが片隅に置いてある。昔は置きっぱなしで盗まるゝと云う様な事はなかったが、近來人が入り込むので、何時かも大切の鉄砲を盗まれたそうだ。(イコサツクルは何を悲観したのか、大正元年の夏

多くの熊を射た其鉄砲で自殺した。）

駅通にはいる時、大勢の足音がする。見れば、巨鋸おおのこや囊ふくろを背負い薬罐さを提げた男女が、幾組もく西へ通る。三井の伐木隊である。富源の開発も結構だが、櫓ならの木はオークの代用に輸出され、エゾ松ト、松は紙にされ、胡桃くるみは銃床に、ドロはマツチの軸木じくぎになり、樹木の豊富を誇る北海道の山も今に裸になりはせぬかと、余は一種猜忌さいきの眼を以て彼等を見送った。

夕方台所が賑やかなので、出て見る。真白に塗った法界屋ほうかいやの家族五六人、茶袋を手土産に、片山夫人と頻に挨拶に及んで居る。やがて月琴げっしんを弾いて盛に踊った。

夕食に鮪まぐろの刺身さしみがつく。十年ぶりに海魚うみぎかなの刺身を食う、と片山さんが嘆息する。汽車の御馳走だ。

要するに斗満も開けたのである。

九月二十七日。美晴。

今日は斗満の上流二オトママに林学士りんがくしの天幕てんとを訪う日である。朝の七時関翁、余等夫妻、草鞋わらじばきで出掛ける。鶴子は新之助君お新が負おつてくれる。貢君は余等の毛布や、関翁から天幕へみやげ物の南瓜とうなす、真桑瓜まぐわうり、玉蜀黍とうもろこし、甘藍きゃべつなどを駄馬だばに積み、其上に打乗うちまつて先発する。仔馬こまがヒヨコくついて行く。又一君も馬匹ばひつを見がてら阪の上まで送つて来た。

阪を上り果て、^{かど} 囲いのトゲ付鉄線を潜り、放牧場を西へ西へと歩む。赭い牛や黒馬が、親子友だち三々伍々、群れ離れ寝たり起きたり自在に遊んで居る。此処はアイヌ語でニケウルルバクシナイと云うそうだ。平坦な高原の意。やゝ黄ばんだ櫛^{かしわ}の大木が処々に立つ外は、打開いた一面の高原霜早くして草皆枯れ、彼方此方に矮^{ひく}い叢^{むら}をなす萩^{はぎ}はすがれて、馬の食い残した萩の実が触るとからゝ音を立てる。此萩の花ざかりに駒^{こま}の悠遊する画趣^{がしゆ}が想われ、こんな所に生活する彼等が羨ましくなつた。そこで余等も馬に劣らじと鼻孔を開いて初秋高原清爽の気を存分に吸いつゝ、或は関翁と打語らい、或は黙して四辺の景色を眺めつゝ行く。南の方は軍馬補充部の山又山狐色の波をうち、北は斗満の谷一帯木々の色すでに六分の秋を染めて居る。ふりかえつて東を見れば、達別谷を劃るエンベツの山々を踏まえて、釧路の雄阿寒^{めあかん}、雌阿寒^{めあかん}が、一は筍^{たけのこ}のよう、他は菅笠のような容^{なり}をして濃碧の色くつきりと秋空に聳えて居る。やゝ行つて、倒れた櫓の大木に腰うちかけ、一休してまた行く。高原漸く蹙^{せま}つて、北の片岨^{かたそば}には雑木にまじつて山桜の紅葉したのが見える。桜花見にはいつも此処へ来る、と関翁語る。

やがて放牧場の西端に來た。直ぐ眼下に白樺の簇立する谷がある。小さな人家一つ二つ。煙が立つて居る。それからずっと西の方は、斗満上流の奥深く針葉樹を語る^{インジゴイロ}印度藍色の山又山重なり重なつて、秋の朝日に堇色の微笑を浮べて居る。余等は

やゝ久しく恍惚として眺め入った。あゝ彼の奥にこそ玉の如き斗満の水源はあるのだ。「うき事に久しく耐ふる人あらば、共に眺めんキトウスの月」と関翁の歌うた其キトウスの山は、彼奥にあるのだ。而して関翁の夢魂常に遊ぶキトウス山の西、石狩岳十勝岳の東、北海道の真中に当る方数十里の大無人境は、其奥の奥にあるのだ。翁の迦南は其処にある。創業から創業に移る理想家の翁にとつて、汽車が開通した達別なんぞは最早久恋の地では無い。其身斗満の下流に住みながら、翁の雄心はとくの昔キトウスの山を西に越えて、開闢以来人間を知らぬ原始的大寂寞境の征服に駛せて居る。共に眺めんキトウスの月、翁は久しくキトウスの月を共に眺むる人を求めて居る。若い者さえ見ると、胸中の秘をほのめかす。此日放牧場の西端に立つて遙に斗満上流の山谷を望んだ時、余は翁が心絃の震えを切ないほど吾心に感じた。鉄線を潜つて放牧場を出て、谷に下りた。関牧場はこれから北へ寄るので、これから二オトマムまでは牧場外を通るのである。善良な顔をした四十余の男と、十四五の男児と各裸馬に乗つて来た。関翁が声をかける。路作りかたゝゝ達別まで買物に行くと云う。三年前入込んだ炭焼をする人そうな。やがて小さな流れに沿う熊笹葺きの家に来た。炭焼君の家である。白樺の皮を壁にした殖民地式の小屋だが、内は可なり濶くて、畳を敷き、奥に箆筒柳行李など列べてある。妻君も善い顔をして居る。囲炉裏側に腰かけて渋茶の馳走になつて居ると、天幕から迎いの人夫が来た。

茶を飲みながらふと見ると、壁の貼紙に、彼岸会説教、斗満寺と書いてある。斗満寺！此処に其様なお寺があるのか。えゝありますと云う。折りからさきに馬に乗つてた子の弟が二人、本を抱えて其お寺から歸つて来たので、早速案内を頼む。白樺の林の中を五六丁行くと、所謂お寺に來た。此はまた思い切つて小さな粗造な熊笹葺き、手際悪く張つた壁の白樺赤樺の皮は反つくりかえつて居る。関翁を先頭にどや／＼入ると、形ばかりの床に荒藁を敷いて、汚れた莫大のシャツ一つ着た二十四五の毬栗頭の坊さんが、ちよこなんと座つて居る。後に、細君であろ、十八九の引つめに結つて筒袖の娘々した婦人が居る。土間には、西洋種の瓢形南瓜や、馬鈴薯を堆く積んである。奥の壁つきには六字名号の幅をかけ、御燈明の光ちら／＼、真鍮の金具がほのかに光つて居る。妙に胸が迫つて來た。紙片と鉛筆を出して姓名を請うたら、斗満大谷派説教場創立係世並信常、と書いてくれた。朝露の間は子供に書を教え、それから日々夫婦で労働して居るそう。御骨も折れようが御辛抱なさい、急いで立派な寺など建てないで、と云つて別を告げる。戸外に紫の蝦夷菊が咲いて居た。あとで聞けば、坊さんは越後者なる炭焼小屋の主人が招いたので、去年も五十円から出したそう。檀家一軒のお寺もゆかしいものである。

樺林を拓いて、また一軒、熊笹と玉蜀黍の稈で葺いた小舎がある。あたりには樺を伐つたり焼いたりして、黍など作つてある。関翁が大声で、「婆サン如何したかい、

何故葉取りに来ない？」と怒鳴る。爺さんが出て来て挨拶する。婆さんは留守だった。十一二の男児が出て来る。翁は其肩をたゞき顔を覗き込むようにして「如何だ、関の爺を識つてるか。ウム、識つてるか」子供がにこく笑う。路は樺林をぬけて原に出る。霜枯れた草原に、野生松葉独活の実が紅玉を鑲めて居る。不図白木の鳥居が眼についた。見れば、子供が抱えて行つて了いそうな小さな荒削りの祠が枯草の中に立つて居る。誰が何時来て建てたのか。誰が何時来て拝むのか。西行ならばたしかに歌よむである。歌も句もなく原を過ぎて、崖の下、小さな流に沿うてまた一つ小屋がある。これが斗満最奥の人家で、駅通から此処まで二里。最後の人家を過ぎてしばらく行く程に、イタヤの老樹が一株、大分紅葉した枝を、振面白くさし伸べて居る小高い丘に來た。少し早いが此処で昼食とする。人夫が露の葉や蓬、熊笹引かゞつてイタヤの蔭に敷いてくれたので、関翁、余等夫妻、鶴子も新之助君の背から下りて、一同草の上に足投げ出し、梅干菜で握飯を食う。流れは見えぬが、斗満の川音は耳爽に、川向うに當る牧場内の雜木山は、午の日をうけて、黄に紅に緑に燃えて居る。やがてこゝを立つて小さな溪流を渡る時、一同石に跪いて清水をむすぶ。最早人氣は全く絶えて、近くなる時斗満の川音を聞くばかり。鷹の羽なぞ落ちて居る。径は稀に溪流を横ぎり、多く雜木林を穿ち、時にじめくした湿地を渉る。先日来の雨で、処々に水溜が出来て居るが、天幕の人達が熊笹を敷き、丸木を渡し

なぞして置いて呉れたので、大に助かる。関翁は始終一行の殿として、股衣草鞋尻引きからげて杖をお伴にてくくやつて来る。足場の悪い所なぞ、思わず見かえると、後見るなくと手をふって、一本橋にも人手を仮らず、堅固に歩いて来る。斯くて四里を歩んで、午後の一時溪声響く処に鼠色の天幕が見えた。林君以下きながしのくつろいだ姿で迎える。

斗満川辺の少しばかりの平地を拓いて、天幕が大小六つ張つてある。アイヌの小屋も一つある。林林学士を統領として、属員人夫アイヌ約二十人、此春以来此処を本陣として、北見界かけ官有針葉樹林の調査をやつて居るのである。別天地の小生涯、川辺に風呂、炊事場を設け、林の蔭に便所をしつらい、麻縄を張つて洗濯物を乾し、少しの空地には青菜まで出来て居る。

茶の後、直ぐ川を渡つて針葉樹林の生態を見に行く。濶五間程の急流に、槽の大木が倒れて自然に橋をなして居る。幹を踏み、梢を踏み、終に枝を踏む軽業、幸に関翁も妻も事なく渡つた。水際の雑木林に入ると、「あゝ誰れか盗伐をやつたな」と林学士が云う。胡桃が伐つてある。木の名など頻に聞きつゝ、針葉樹林に入る。此林特有の冷氣がすうと身を包む。蝦夷松や榎松、昔此辺の帝王であつたらうと思わるゝ大木倒れて朽ち、朽ちた其木の屍から実生の若木が蘆々と伸びて、若木其ものが径一尺に余るのがある。サルオガセがぶら下つたり、山葡萄が絡んだり、其自身

針葉樹林の小模型とも見らるゝ、緑、褐、紫、黄、さまざまの蘚苔をふわりと纏うて居るのもある。其間をトマムの剰水が盆景の千松島と云った様な緑苔の塊を洄つて、流るゝとはなく唯硝子を張った様に光つて居る。やがて麓に來た。見上ぐれば、蝦夷松楸松峯へ峰へと弥が上に立ち重なつて、日の目も漏れぬ。此辺はもう閑牧場の西端になつていて、林は直ちに針葉樹の大官林につゞいて居るそうだ。此永劫の薄明の一端に佇んで、果なくつゞく此深林の奥の奥を想う。林学士は斯く云うた、北見、釧路、十勝に跨る針葉樹の処女林には、アイヌを連れた技師技手すら、踏み迷うて途方に暮るゝことがある、其様な時には峰を攀じ、峰に秀ずる蝦夷松楸松の百尺もある梢に猿の如く攀じ上り、展望して方向をきめるのです、と。突然銃声が響いた。唯一発——あとはまた森となる。日光恋しくなつたので、ここから引返し、林の出口でサビタの杖など伐つてもらつて、天幕に帰る。

勝手元は御馳走の仕度だ。人夫が採つて來た茶盆大の舞茸は、小山の如く庭に積まれて居る。やがて銃を負うてアイヌが歸つて來た。腰には山鳥を五羽ぶら下げて居る。また一人川下の方から釣棹肩に歸つて來た。鯡釣りに往つたのだ。やがてまた一人銃を負うて歸つた。人夫が立迎えて、「何だ、唯一羽か」と云う。此も山鳥。さつき先刻聞いた銃声の果なのであらう。火を焚く、味噌を摺る、魚鳥を料理する、男世帯の目つらを抓む勝手元の忙しさを傍目に、閑翁はじめ余等一同、かわるゝ川畔に

往つて風呂の馳走になる。荒削りの板を切り組んだ風呂で、今日は特に女客の爲め、天幕のきれを屏風がわりに垂れてある。好い気もちになつて上ると、秋の日は暮れた。天幕にはつりランプがつく。外は樺の篝火が真昼の様に明るい。余等の天幕の前では、地上にかん／＼炭火を熾して、ブツ／＼切りにした山鳥や、尾頭つきの鮎を醬油に浸しジウ／＼炙つては持て来、煮たのも来る。舞茸の味噌汁が来る。焚き立ての熱飯に、此山水の珍味を添えて、関翁以下当年五歳の鶴子まで、健啖思わず数碗を重ねる。

日はもうとつぷり暮れて、斗満の川音が高くなつた。幕外は耳もきれそうな霜夜だが、帳内は火があるので汗ばむ程の温気。天幕の諸君は尚も馳走に薩摩琵琶を持出した。十勝の山奥に来て薩摩琵琶とは、思ひかけぬ豪興である。弾手は林学士が部下の塩田君、鹿児島島の壮士。何をと問われて、取りあえず「城山」を所望する。今日は九月二十七日、城山没落は三十三年前の再昨日であつた。塩田君はやおら琵琶を抱え、眼を半眼に開いて、咳一咳。外は天幕総出で立聞く気はい。「夫れ——達人は——」声はいさ／＼か震えて響きはじめた。余は瞑目して耳をすます。「大隅山の狩くらにイ——真如の月の——」弾手は蕭々と歌いすゝむ。「何を怒るや怒り猪の——俄に激する数千騎」突如として山崩れ落つ鴨越の逆落し、四絃を奔る撥音急雨の如く、呀と思う間もなく身は悲壮渦中に捲きこまれた。時は涼秋九月、処は北海

山中の無人境、篝火を焚く霜夜の天幕、幕の外には立聴くアイヌ、幕の内には隼人の薩摩壮士の神來の興まさに旺して、歌断ゆる時四絃続き、絃黙す時声謡い、果ては声音一斉に軒昂鳴咽して、加之始終斗満川の伴奏。手を膝に眼を閉じて聴く八十一の翁をはじめ、皆我を忘れて、「戎衣の袖をぬらし添うらん」と結びの一句低く咽んで、四絃一撥蕭然として曲終るまで、息もつかなかった。讃辞謝辞口を衝いて出る。天幕の外もさゞめいた。興未だ尽きぬので、今一つ「墨絵」の曲を所望する。終つて此興趣多い一日の記念に、手帳を出して関翁以下諸君の署名を求める。

それから話聞くべくアイヌを呼んでもらう。御召につれて髭顔二つランプの光に現われ、天幕の入口に蹲踞した。若い方は、先刻山鳥五羽うって来た白手留吉、漢字で立派に名がかけて、話も自由自在なハイカラである。一人は、胡麻塩髻胸に垂るゝ魁偉なアイヌ、名は小川ヤイコク、これはあまり口が利けぬ。アイヌの信仰、葬式の事、二三風習の質問などして、最後に、日本人に不満な点はと問うたら、ヤイコクは重い口から「日本人のゴロツクがイヤだ」と吐き出す様に云った。ゴロツクは脅迫の意味そうな。乳呑子連れた女が来て居ると云うので、二人と入れ代りに来てもらう。眼に凄味があるばかり、例の刺青もして居らず、毛繻子の襟がかゝつた滝縞の綿入なぞ着て居る。名もお花さんと云うそうだ。妻が少し語を交えて、何もないので紫メレンスの風呂敷をやった。

惜しい夜も更けた。手を净めに出て見ると、樺の焚火は燃え下つて、ほの白い煙を
 颺げ、真黒な立木の上には霜夜の星爛々と光つて居る。何処かの天幕でぱつと火光
 がさして、黒い人影が出て来たが、直ぐ入つて了つた。川音が颯々と嵐の様に響く。
 持て来た毛布までかさねて、関翁と余等三人、川音を聞きく趣深い天幕の夢を結
 んだ。

九月二十八日。微雨。

関翁は起きぬけに川に灌水に行かれた。

朝飯後、天幕の諸君に別れて帰路に就く。成程二オトマムは山静に水清く、関翁
 が斗満を去つて此処に住みたく思うて居らるゝも尤である。然し余等は無人境のホ
 ンの入口まで来たばかり、せめてキトウス山見ゆるあたりまで行かずに此まゝ歸つ
 て了うのは、甚遺憾多かつた。

帰路余は少し一行に後れて、林中にサビタのステツキを伐つた。足音がするので
 ふつと見ると、向うの徑をアイヌが三人歩いて来る。真先が彼留吉、中にお花さんが
 甲斐々々しく子を負つて、最後に彼ヤイコクがアツシを着、藤蔓で編んだ沓を穿き、
 マキリを佩いて、大股に歩いて来る。余は木蔭から瞬きもせず其行進を眺めた。秋
 寂びた深林の背景に、何と云う好調和であろう。彼等アイヌは亡び行く種族と看做
 されて居る。然し此森林に於て、彼等は正に主である。眼鏡やリボンの我等は畢竟

新参しんざんの侵入者しんにゆうしやに過ぎぬ。余は殊ことに彼ヤイコクが五束もある鬚髯蓬々しゅぜんぼうぼうとして胸むねに垂たれ、素盞雄尊すさのおのみことを見る様な六尺ゆたかな堂々雄偉どうどうゆういの骨格こつかくと悲壮沈鬱ひそうちんうつな其眼光まなざしを熟視じゅくしした時、優勝者りやくだつしやと名のある掠奪者りやくだつしやが大なる敗者はいてしやに対して感ずる一種の恐怖さるを感じざるを得なかつた。関翁かんおんが曾て云われた、山中で山葡萄やまぶどうなどちぎると猿さるに対して氣の毒に思う、と。本当だ。山葡萄をちぎつては猿に氣の毒、コクワを採とつては熊に氣の毒、深林を開いてはアイヌに氣の毒なのも、自然である。そこで余は思つた、熊一変いっぺんせばアイヌに到らん、アイヌ一変いっぺんせば日本人シヤモに到らん、日本人シヤモ一変いっぺんせば悪魔いっぺんに到らん。余はアイヌを好む。尤も熊を好む。

天幕てんまくを出る時ぽとぽと落ちて居た雨は止やみ、傘かさを翳さす程にもなかつた。炭焼君すみやきくんの家で昼の握飯にぎりめしを食つて、放牧場の端から二たび斗満上流じょうりゅうの山谷さんくを回顧さぐるし、ニケウルルバクシナイに來ると、妻は鶴子を抱だいて駄馬だばに乗つた。貢君みつぎくんが口綱くちづなをとつて行く。後から仔馬こうまがひよこく跟ついて行く。時々道草を食つて後おくれては、遽あわてゝ駈かけ出し追おつついて母馬ははの横腹よこはらに頭あたまをすりつける様にして行く。関翁と余と其あとから此さまを眺めつゝ行く。斯くて午後二時えきてい駅通えきどおに歸つた。

関翁は過日來足痛そくつうで頗すこ行歩いどうに悩なやんで居られると云うことをあとで聞いた。それに少しも其様な容子ようすも見せず、若い者並なみに四里の往復は全く恐れ入つた。此夕台所だいどで大きな甘藍きゃべつを秤はかりにかけける。二貫六百目。肥料もやらず、移植いしよくもせぬの

だから驚く。関翁が家の馳走で、甘藍の漬物に五升諸（馬鈴薯）の味噌汁は特色である。斗満で食った土のものゝ内、甘藍、枝豆、玉蜀黍、馬鈴薯、南瓜、蕎麦、大根、黍の餅、何れも中々味が好い。唯真桑瓜は甘味が足らぬ。

九月二十九日。晴。

今日は余等三人余作君及貢君の案内で、放牧場の農家を見に出かける。阪を上つて放牧場の埒外を南へ下り、ニタトロマップの細流を渡り、斗満殖民地入口と筆太に書いた棒杭を右に見て、上利別原野に來た。野中、丘の根に、ぽつり／＼小屋が見える。先ず鉄道線路を踏切つて、伏古古潭の教授所を見る。代用小学校である。型の如き草葺の小屋、子供は最早歸つて、田村恰人と云う五十余の先生が一人居た。それから歩を返えして、利別川辺に模範農夫の宮崎君を訪う。矢張草葺だが、さすがに家内何処となく潤うて、屋根裏には一ぱい玉蜀黍をつり、土間には寒中蔬菜を囲う窖を設け、農具漁具雪中用具それ／＼掛け列べて、横手の馬小屋には馬が高く嘶いて居る。苦い茶を点れて、森永のドロップスなど出してくれた。余等は注文してもぎ立ての玉蜀黍を炉の火で焼いてもらう。主は岡山県人、四十余の細作りな男、余作君に過日の薬は強過ぎ云々と云つて居た。宮崎君夫婦はもともと一文無しで渡道し、関家に奉公中貯蓄した四十円を資本とし、拓き分けの約束で数年前此原野を開墾しはじめ、今は十町歩も拓いて居る。今年は豆類其他で千円も収入があらうと云う

ことであつた。細君の阿爺が遙々讃岐から遊びに来て居る。宮崎君の案内で畑を見る。裏には真桑瓜が蔓の上に沢山ころがり、段落ちの畑には土が見えぬ程玉蜀黍が茂り、大豆は畝から畝に莢をつらねて、試に其一個を剖いて見ると、豆粒の肥大実に眼を驚かすものがある。他の一二の小屋は訪わず、玉蜀黍を喰い喰い帰る。北海道の玉蜀黍は実に甘い。先年皇太子殿下（今上陛下）が釧路で玉蜀黍を召してそれから天皇陛下へおみやげに玉蜀黍を上げられたも尤である。

午後は又一君の案内で、アイヌの古城址なるチャシコツを見る。達利川に臨んだちよつとした要害の地、川の方は断崖になり、後はザツとしたものながら、壑濠をめぐらしてある。此処から見ると達利は一目だ。関翁は此坂の上に小祠を建て、斃死した牛馬の霊を祭るつもりで居る。

夕方三人で又一君宅の風呂をもらいに行く。実は過日來往返の毎に斗満橋の上から見て羨ましく思つて居たのだ。風呂は直ぐ川端で、露天に据えてある。水に強いと云う桂の径二尺余の削りぬき、鉄板を底に鋪き、其上に踏板を渡したもので、こんな簡易な贅沢な風呂には、北海道でなければ滅多に入られぬ。秋の日落ち谷蒼々と暮るゝ夕、玉の様な川水を沸した湯に頸まで浸つて、直ぐ傍を流るる川音を聴いて居ると、陶然として即身成仏の妙境に入つて了う。

夜上利別のマツチ製軸所支配人久禰田孫兵衛君に面会。もと小学教師をした淡路

の人、真面目な若者である。二里の余もある上利別から始終関翁の話しじゅうを聞きに来る
そうだ。

九月三十日。晴。雪のような朝霜。

最早斗満を去らねばならぬ日となつた。

早朝関翁以下えきてい駅通の人々に別を告げる。斗満橋を渡つて、見かえると、谷を罩こむ
る碧い朝霧の中に、関翁は此方に向い、杖つえの頭に両手を組んで其上に額ひたいを押付けて
居られた。

達別で余作君に別れ、足寄駅あしよろえきで五郎君の勤務した郵便局を教えられ、高島駅たかしまえきで又
一君に別れ、池田駅で旭川行の汽車に乗換え、帯広おびひろで貢君に別れ、余等は来た時の
同行三人となつて了つた。汽車は西へ西へと走つて、日の夕暮ゆうぐれに十勝国境の白茅はくぼう
の山を石狩いしかりの方へと上つた。此処の眺望は全国の線路に殆んど無比である。越し方かた
を顧みれば、眼下がんかに展開する十勝の太平野は、蒼茫そうぼうとして唯雲の如くまた海の如く、
却て北東の方を望めば、黛色たいしよくの連山波濤の如く起伏して居る。彼山々こそ北海道中
心の大無人境を牆壁しようへきの如く取囲む山々である。関翁の心は彼の山々の中にあるのだ。
余は窓に凭よつて久しく其方を眺めた。中に尤も東北の方に寄つて一峯特立頗いっぽうとくりつすこぶる異彩
ある山が見える。地理を案ずるに、キトウス山ではあるまいか。斗満川とまむがわの水源、志
ある人と共にうち越えて其山の月を東に眺めんと関翁が歌うたキトウス山ではある

まいか。関翁の心はとく彼山を越えて居る。然しながら翁も老齡ろうれい已に八十を越した。其身其心に随うて彼山を越ゆることが出来るや否や、疑問である。或は翁は摩西モーゼの如く、遙はるかに迦南カナンを望むことを許されて、入ることを許されずに終るかも知れぬ。然し翁の心は已にキトウス山を越えて居る。而して翁が百歳ひゃくさいの後、其精神は後の若者の体を仮かつて復活し、必彼山を越え、必彼大無人境ひらを拓くであらう。汽車はますく国境の山を上る。尾花に残る日影ひかげは消え、蒼々そうそうと暮れ行く空に山々の影も没してうた。余は猶窓なに凭よつて眺める。突然白いものが目の前に閃ひらめく。はっと思つて見れば、老木の梢こずえである。年久しく風霜ふうそうと闘かうて皮は大部分剥はげ、葉も落ちて、老骨ろうこつ稜々りょうりょうたる大蝦夷松おおえぞまつが唯一つ峰つたに突立つつて居るのであつた。

余の胸は一ぱいになつた。

君に別れ十勝の国の国境くにさかひ

今越こゆるとてふりかへり見し

かへり見れば十勝は雲になりみにけり

心に響く斗満とまの川音かはおと

雲か山か夕霧遠く隔へだてにし

翁おきなが上うへを神護かみまもりませ

斯く出たらめをはがきに書いつけ、石狩いしかりの鹿越しかへえき駅で関翁宛あてに投函とうかんした。」

武蔵野の彼等が斗満を訪うた其年の冬、関翁は最後の出京して、翌明治四十四年の四月斗満に帰った。出京中に二度粕谷かすやの茅廬ぼうろに遊びに来た。三月の末二度目に来た時は、他の来客や学生などに深呼吸の仕方などして見せ、一泊して帰った。最早今回限り東京には出て来ぬ決心という話であつた。主人あるじは甲州街道まで翁を送った。馬車を待つて乗るから構かまわず帰れと翁が云うので、翁を茶店の前に残し、少し用を達たして戻もどりかけると、馬車はすれ違ちがひに通つたが、車中に翁の影が見えない。と見ると茶店の方から古びた茶の中折帽なかおれぼうをかぶつて、例れいの癖くせで下顎したあごを少し突出し、濡ぬれ手拭を入れた護謄ごむの袋ふくろをぶら提さげながら、例れいの足駄あしだでぼツくり／＼刻足きざみあしに翁が歩いて来る。此時も明治四十一年の春初めて来た時着て居た彼無地むじの木綿羽織だつた。「乗れませんでしたか」「満員だつた」「今車呼んで来ます」「何、構わん、構わん」と翁が手を掉ふる。然し翁の足つきは両三年前よりは余程弱つて見えた。四五丁走つて、懇意こんいの車屋を頼み、翁のあとを追いかけさせた。

翁は斗満に帰つてから、実桜チエリの苗二本送つて呉れた。其夏久しく気にかけて居た余作君の結婚が済すんだ事を報じてよこした。其秋の九月二十六日は雨だつた。一周

年前彼等が斗満に着いた其翌日も雨だった。彼はこんな出たらめを翁に書き送った。
去年の今日も斯くは降りきと秋の雨

眺めて独君をしぞおもふ

程なく翁から其雑著出版の事を依頼して来た。此春翁と前後して北へ帰った雁が
また武蔵野の空に來鳴く時となった。然し春の別れの宣言の如く、翁は再び斗満を
出なかつた。秋から冬にかけて、翁は心身の病に衰弱甚しく、已に覺期をした様で
あつたが、年と共に玉の緒新に元氣つき、わずかに病床を離るゝと直ぐ例の濯水を
はじめ、例の細字の手紙、著書の巻首に入る可き「千代かけて」の歌を十三枚、著書
を配布す可き二百幾名の住所姓名を一々明細に書いて来た。翁にとりては此が形見
のつもりであつたのである。

「命の洗濯」「命の鍛錬」「旅行日記」「目ざまし草」「関牧場創業記事」「斗満漫吟」
をまとめて一冊とした「命の洗濯」は、明治四十五年の三月中旬東京警醒社書店か
ら発行された。翁は其出版を見て聊喜の言を漏らしたが、五月初旬には愈死を
決したと見えて、逗子なる老父の許と粕谷の其子の許へカタミの品々を送つて来た。
其は翁が八十の祝に出来た関牧場の画模様の服紗と、命の洗濯、旅行日記、目ざま
し草に一々歌及俳句を自署したものであつた。両家族の者残らずに宛てゝ、各別に
名前を書いてあつた。「人並の道は通らぬ梅見かな」の句が其の中にあつた。短冊に

は、

辞世 一 諸^{もろ}ともに契^{ちぎ}りし事は半^{なかば}にて

斗^{とまむ}満の露と消えしこの身は

八十三老白里

辞世 二 骨も身もくだけて後ぞ心には

永く祈らん斗^{とま}満^{にぎはひ}の賑

八十三老白里

死後希望 露の身を風にまかせてそのまゝに

落れば土と飛んでそらまで

八十三老白里

死後希望

死^し出^での山越えて後にぞ楽まん

富士の高^{たか}根^ねを目の下に見て

八十三老白里

と書いてあつた。

*

七月初旬、翁の手紙が来て、余作君は斗満を去り、以前の如く医を以て立つことに決し、自身は斗満に留ることを報じた。書末に左の三首の歌があつた。

寄川恋

我恋は斗満とまむの川の水の音

夜ひるともにやむひまぞなき

病床独吟

憂き事の年をかさねて八十三やそみとせ

尽きざる罪になほ悩なやみつゝ

死後希望

身は消えて心はうつるキトウスと

十勝石狩両たけのかひ

翁の絶筆ぜつぴつであつた。

翁が晩年の十字架は、家庭に於ける父子意見の衝突であつた。父は二宮流にのみやりゅうに与えんと欲し、子は米国風べいしやうふうに富まんことを欲した。其その為ため関家の諍あらそいは、北海道中の評判となり、色々の風説ふうせつをすら惹起ひきおこした。翁は其為そのに心身の精力を消磨しょうました。然し翁は自ら信ずること篤あつく、子を愛すること深く、神明しんめいに祈り、死を決して其子を度どす可く努めた。

最後の手紙を受取つてから四ヶ月過ぎた。武蔵野の家族が斗満とまむを訪れた其二周年が来た。雁かりは二たび武蔵野の空に來鳴きないた。此四ヶ月の間には、明治天皇の崩御ほうぎよ、乃木翁のぎおうの自刃じじん、など強い印象を人に与うる事実が相ついだ。北の病翁びようおうに如何に響ひびいたであらうか、と氣にかゝらぬではなかつたが、推移おしうつつて居る内に、突然翁の訃報ふほうが来た。

翁は十月十五日、八十三歳の生涯を斗満なる其子の家に終えたのである。翁の臨終りんじゆうには、形かたちに於て乃木翁に近く、精神に於てトルストイ翁に近く、而して何れにもない苦しみがあつた。然し今は詳つまびらかに説く可き場合でない。

翁の歌に、

遠く見て雲か山かと思ひしに

さもあらばあれ
遮莫 永としつきい年こうろだん月の行路難、
さもあらばあ郷すまひつこ
帰ればおのが住居なりけり
遮莫 末期十字架の苦くるしみ、
翁いづさいは一切を終えて故郷ふるさとに帰った
のである。

次郎桜

朝、珍らしく角田つのだの新五郎さんが来た。何事か知らぬが、もうこゝでと云うのを無理やりざしきに座敷しやうに請じた。新五郎さんは耶蘇やそ信者しんじやで、まことに善良な人であるが、至つて口くちの重い人で、疎遠そえんの挨拶あいさつにややしばし時間を移うつした。それから新五郎さんは重い口を開いて、

「実は——隣となりの勘五郎さんでございですが、其の——勘五郎さん処ところの次郎さんが亡くなられてまして——」

「エッ、次郎さんが？ 次郎さんが死んだんですか」

青山学院あおやまがくいんで最早試験前もうちうの忙せわしくして居るであらうと思つた次郎少年が死んだとは、嘘うその様な話だ。

新五郎さんは、持て来た医師の診断書を見せた。急性肺炎とある。急報に接して飛んで往つた次郎さんの阿爺おとつさんも、間まに合あわなかつたそうである。夜にかけて釣台つりだいにのせて連れて来て、組合中くみあいじゆうの都合つうごうで今日葬式きようそうしきをすると云うのである。

新五郎さんは直ぐ帰り、夫婦も直ぐあとから出かけた。

次郎さんは、千歳村ちとせむらで唯五軒の耶蘇信者の其一軒に生れて、名の如く次男であつ

た。粕谷^{かすや}の夫妻が千歳村に移住^{いじゆう}した其春、好成绩^{こうせいせき}で小学校を卒業し、阿爺^{しはん}は師範学校にでも入れようかと云つて居たのを、勧め^{すす}て青山学院に入れた。学資不足なので、彼は牛乳を配達^{はいだつ}したり、学校食堂の給仕をしたりして勉強して居た。斯^こうして約一年過ぎ、最初の学年試験も今日明日^{あす}と云う際^{きわ}になつて、突然病死したのである。彼は父の愛子であつた。

連日^{れんじつ}の雪や雨にさながら沼^{ぬま}になつた悪路に足駄^{あしだ}を踏み込みく、彼等夫妻は鉛^{なまり}の様に重い心で次郎さんの家に往^{むか}つた。

禾場^{うちば}には村の人達が寄つて、板を削り寝棺^{ねがん}を拵^{こさ}えて居る。以前^{もと}は耶穌教信者と嫌われて、次郎さんのお祖父^{じい}さんの葬式の時なぞは誰も来て手伝^{てつど}うてくれる者もなかつたそうだ。土間には大勢女^{おおぜい}の人達が立ち働いて煮焚^{にた}きをして居る。彼等夫妻は上つて勘五郎さんに苦しい挨拶した。恵比須^{えびす}さまの様な顔をしたかみさんも出て来た。勧め^{すす}て無理な勉強をさして、此様^{こん}な事になつてしまつて、まことに済^すみません、と詫^わぶる外に彼等は慰^{なぐさ}めの言を知らなかつた。

奥座敷^{おくざしき}に入ると、次郎さんは蒲団^{ふとん}の上に寝て居る。昨日雨中を昇^かいて来たまゝなので、蒲団が濡^ぬれて居る。筒袖^{つつそで}の綿入^{わたいれ}羽織を着て、次郎さんは寝入った様に死んで居る。額^{ひたい}を撫^なでると氷^{こおり}の様に冷たいが、地蔵眉の顔は如何にも柔和で清く、心の美しさも思^しばれる。次郎さんをはじめ此家の子女は、皆小柄^{こがら}の色白で、可愛^そげな、而

して品の良い顔をして居る。阿爺は、亡児の枕辺に座つて、次郎さんの幼な立の事から臨終前後の事何くれと細かに物語つた。勘五郎さんはもと氣負肌で、烈しい人、不平の人であつたが、子の次郎さんは非常に柔和な愛の塊の様な児であつた。次郎さんの小さな時、縁の上から下に居る弟を飛び越しくしては遊んで居ると、偶飛び損ねて弟を倒し、自分も倒れてしたゝか鼻血を出した。次郎さんは鼻血を滴らしつゝ、弟の泣く方へ走せ寄つて吾を忘れて介抱した。父は次郎さんを愛してよく背に負つたが、次郎さんは成丈父の背を弟に譲つて自身は歩いた。次郎さんは到處で可愛がられた。学課の出来も好かつた。両三日前の大雪に、次郎さんは外套もなく濡れて牛乳を配達したので、感冒から肺炎となつたのである。彼は氣分の悪いを我慢して、死ぬる前日迄働いた。死ぬる其朝も、ふら／＼する足を踏みしめて、苦学仲間の某の室に往つて、其日の牛乳の配達を頼んだりした。病氣は早急であつた。医師が手を尽した甲斐もなかつた。次郎さんは終に死んだ。屍を踏み越えて進む乱軍の世の中である。学校は丁度試験中で、彼の父が急報に接して駆けつけた時、死骸の側には誰も居なかつた。次郎さんは十六であつた。

やがて納棺して、葬式が始まつた。調子はずれの讚美歌があつて、牧師の祈祷説教があつた。牧羊者が羊の群を導いて川を渡るに、先ず小羊を抱いて渡ると親羊が跟着いて渡ると云う例をひいて、次郎少年の死は神が其父母生存者を導かん為の死であ

る、と牧師は云うた。

日が短い頃で、葬式が家を出たのは日のくれぐれであつた。青山街道に出て、鼻欠地蔵の道しるべから畑中を一丁ばかり入り込んで、薄暗い墓地に入った。大きな松が枝を広げて居る下に、次郎さんの祖母さんや伯母さんの墓がある。其の祖母さんの墓と向き合いに、次郎さんの棺は埋められた。

「祖母さんと話してる様だアね」

と墓掘の人が云う。

「祖母さんが可愛がつて居たからナ」

と次郎さんの阿爺が云う。

自身子が無くて他人の子ばかり殺して居る夫妻は、荒んだ心になって、黙つて夜道を帰つた。

*

一月あまり過ぎた。

梅から桜、八重桜と、園内の春は次第に深くなつた。ある朝庭を漫歩きして居た

彼は、

「呀、咲いた、咲いた」

と叫んだ。其は庭の片隅に、坊主になる程伐られた若木の塩竈桜であった。昨年次郎さんが出京入学して程なく、次郎さんの阿爺が持つて来てくれたのである。其時は満開であつた。惜しい事をしたものだ、此花ざかりを移し植えて、無事につくであらうか、枯れはしまいか、と其時は危ぶんだ。果して枯枝が大分出來たが、肝腎の命は取りとめて、剪り残されの枝にホンの十二三輪だが、美しい花をつけたのである。彼はあらためてつくぐと其花を眺めた。晩桜と云つても、普賢の豊麗でなく、墨染鬱金の奇を銜うでもなく、若々しく清々しい美しい一重の桜である。次郎さんの魂が花に咲いたら、取りも直さず此花が其れなのであらう。

清い、単純な、温かな其花を見つめて居ると、次郎さんのニコ／＼した地藏顔が花心から彼を覗いた様であつた。

(明治四十一年)

きぬや

明治四十三年十二月二十六日。

書院前の野梅に三輪の花を見つけた。年内に梅花を見るは珍らしい。霜に葉を紫に染めなされた黄寒菊と共に、折って小さな銅瓶に挿す。

例年隣家を頼んだ餅を今年は自家で春くので、懇意な車屋夫妻が臼、杵、蒸籠、釜まで荷車に積んで来て、悉皆春いてくれた。隣二軒に大威張で牡丹餅をくぼる。肥後流の丸餅を造る。碁石程のおかさねは自分で拵えて、鶴子女史大得意である。

逗子の父母から歳暮に相模の海の鯛を薄塩にして送って来た。

同便で来た手紙はがきの中に、思いがけない報知が一つあった。二十二日にとめやのきぬやが面療で死んだ、と云う知せである。

彼女は粕谷草堂夫妻の新生涯に絡んで忘れ難い恩人の一人である。

明治三十九年美的百姓が露西亞から帰って、青山高樹町に居を定むると間もなく、ある日銀杏返しに白い薔薇の花簪を插した頬と脰のぽうと紅らんだ二十前後の娘が、突然唯一人でやって来て、女中になると云う。名はとめと云って江州彦根在の者であった。兄が東京で商売をして居るので、彼女も出京してある家に奉公中、逗子

で懇意になった老人夫婦の家の女中から高樹町の家の事を聞き込み、自ら推薦して案内もなく女中に來たのであった。使つて見ると、少し愚かしい点もあるが、如何にも親切な女で、毎も莞爾々々して居る。一度泥棒が入つて後、彼女は離れて独女中部屋に寝るを恐れたが、部屋に戸締りをつけてやると、安心して寝た。その兄はシャツ、ズボン下など莫大小物の卸売をして居るので、彼女も少しミシンを稽古して置きたいと云う。承知したら、彼女は喜んで日々弁当持参で高樹町から有楽町のミシン教場へ通つたが、教場があまり騒々しくて頭がのぼせるし、加上ミシン台の数が少ないので、生徒間に競争が劇しく、ズウズウしい女達が順番になつた彼女を押のけてミシンを占領したりするので、彼様な処へは最早行くのは嫌でござりますと云つて、到頭女中専門になつた。

彼女が奉仕の天使の如く突然高樹町の家に現われてから六月目に、主人夫婦は東京を引払うて田舎に移つた。如何に貧乏な書生生活でも、東京で二十円の借家から六畳二室の田舎のあばら家への引越しは、人目には可なりの零落であつた。奉公人にはよい見切時である。然しとめやは馴染もまだそれ程深くない主人夫婦を見捨てなかつた。彼女は東京に居らねばならぬ身体であつたが、当分御手伝をすると云うて、風呂敷に包んだランプをかゝえて彼等に跟いて來た。

東京から引越当座の彼等が態は、笑止なものであつた。昨今の知り合いの石山さ

んを除く外知人（のぞ しりびと）としては素（もと）よりなく、何が何処（どこ）にあるやら、何を如何（どう）するものやら、
 何角（なにか）の様子（ようす）は一切分（わ）からず。狭（せま）いと汚穢（きたな）とは我慢（まん）するとしても、一つ（ひと）家の寒（さ）さは猛烈（もうれつ）
 に彼等（かれら）に肉迫（にくはく）した。二百万（にひゃくまん）のいきれで寄り合（よ）うて住む東京人（とうきょうじん）は、人烟（じんえん）稀薄（きはく）な武蔵野（むさしの）
 の露骨（ろこつ）な寒（さ）さを想（おも）い見（み）ることが出来（こ）ぬ。二月（にがつ）の末（すえ）、三月（さんがつ）の始（はじ）、雲雀（ひばり）は鳴（な）いて居（い）たが、
 初（は）めて田舎（いんか）のあばら家（や）住居（ぢゆう）をする彼等（かれら）は、大穴（おおあな）のあいた荒壁（あらかべ）、吹通（ふきとお）しの床下（ふかした）、建具（たてぐ）
 は不足（ふそく）し、ある建具（けんぐ）は破（やぶ）れた此（こ）の野中（のちゆう）の一つ家（いっぴょ）と云（い）つた様な小（こ）さな草葺（くさぎき）を目（め）がけて
 日暮（がた）れ方（かた）から鉄桶（てつとう）の如（ごと）く包圍（ほうい）しつゝずうと押寄（おしよ）せて来る武蔵野（むさしの）の寒（さ）を骨身（ほねみ）にしみて
 味（あじ）わつた。風吹（かぜ）き通（とお）す台所（だいどころ）に切（き）つてある小（こ）さな炬（ろう）に、木片（こつぱ）枯枝（かれえだ）何（なん）くれと燃（も）される限（かぎ）
 りをくべてあたつても、顔（かお）は火攻（ひざめ）、背（せ）は氷攻（こおりぜ）めであつた。とめやが独（ひとり）で甲斐（かい）々々（しな）し
 く駈（か）け廻（まわ）つた。煮焚（にたき）勿論（もちろん）、水（みづ）ももうてあるき、五丁（ごてい）もはなれた足場（あしば）の悪い品川堀（しながわぼり）
 まで盥（たら）をかゝえて洗濯（せんたく）に往（い）つては腰（こし）を痛（いた）くし、それでも帰途（かえり）には露（ふき）の臺（とう）なぞ見（み）つ
 て、摘（つま）んで来ることを忘（わす）れなかつた。襷（たすき）がけのまゝ人に聞（き）きゝ近在（きんざい）を買物（かひもの）に駈（か）け
 歩いて、今日（きょう）は斯（こ）様な処（ところ）を歩（あ）きました、妙（みょう）な処（ところ）に店（みせ）は出（い）してない呉服屋（こふくや）がありまし
 たと一々（いっさ）報告（ほうこく）した。彼女（かのう）は忽（きん）ち近隣（きんりん）の人々（ひと）と懇意（こんい）になつた。墓地（もど）向（む）うの家（うち）の久（ひさ）さん
 の子女（こども）が久（ひさ）さんを馬鹿（ばか）にするのを見（み）かねて、余（あ）りでございますねと訴（う）えた。唾（つ）の子
 の巳代吉（みよきち）とは殊（こと）に懇意（こんい）になつて、手真似（てまね）で始終（しじゆう）話（わ）して居（い）た。唾（つ）との交渉（かうし）はとめやに
 限（かぎ）ると主人（しゅじん）夫婦（ふうふ）は云（い）うた。馬鈴薯（じゃがいも）を買（か）うて来ることを巳代公（みよこう）に頼（たの）むと云（い）つて、とめ

やが鍬で地を掘る真似をして、指で円いものを拵えて見せて、口にあてゝ食うさまをして、東を指し北を指し、巳代公が領いたと云つて納まつて居ると、巳代公は一時間経つても二時間経つてもやつて来ぬので、往つて見ると自分の事をして居たので、始めてとめやの早合点、巳代公が分らずに居た事が分かつて、一同大笑いしたことがある。兎に角彼女の無我にして骨身を惜まぬ快活の奉仕は、主人夫婦の急激な境遇変化に伴う寂寥と不安とを如何ばかり慰めたか知れぬ。移転の騒ぎも一型ついで、日々の生活もほゞ軌道に入つたので、彼女は泣く／＼東京に歸つた。妻も後影を見送つて泣いた。

三月の末東京に歸つて、五月中また蓐など持つて訪ねて来た。翌年丁度引越しの一周年に、彼女はまた手土産を持つて訪ねてくれた。去年歸西して、昨日江州から上京したばかりだと云つた。四日程逗留して、台所をしたり、裁縫を手伝つたり、折から不元氣で居た妻を一方ならず助けて往つた。其翌年の春、彼女は同郷の者で姓も同じく商売も兄のと似寄つた男に縁づいたことを知らして来た。秋十月の末、ある日丸髷に結つた血色の好い若いおかみさんが尋ねて来た。とめやであつた。名も絹とあらためて、立派なおかみさんになつて居た。夫妻共稼ぎで中々忙しいと云つた。其れから東京では正直な人を得難いことをかこつて、誰か好い子僧はあるまいかなぞ折から居合わせた懇意の大工に聞いて居た。彼女の話の中に一つ面白い事が

あつた。ある時りようくばし両国橋の上で彼女は四十あまりの如何にも汚ない風をした立たちン坊に会あうた。つく／＼其顔を見て居た彼女は、立ン坊に向い、好い仕事があるかと聞いた。立ン坊は無いと答えた。橋の上に立つて居るよりわたしの家に来て商売の手伝てつだいをしないかと云うた。立ン坊も彼女の顔を見て居たが、手伝しましうと云うた。とめやのきぬやは早速立ン坊を連れて良人おととに引合わせ、翌日から車を挽ひかせて行商こうしょうに出したが、立ン坊君正直に働いて双方喜んで居る云々。此話は非常に旧主人夫婦を悦よろこばした。あの温順おとなしい女にも、中々濶達かつたつな所がある、所謂近江商人の血が流れて居る、とあとで彼等は語り合つた。

彼女は其時むつき已に六月の身重みおもであつた。今年の春男子を挙げたと云うたよりがあつた。今日の其計そのふは実に突然である。

彼女の臨終は如何であつたろうか。当歳の子と夫を残して逝ゆく彼女は嘸さぞ残念であつたであらう。然し彼女自身は朝あしたに生うまれて夕ゆふに死すとも憾うらみは無い善良の生涯を送つて居たので、生の目的は果した。彼女の実家は仏教の篤信者で、彼女の伯母おばなどは南無阿弥陀仏なむあみだぶつを唱となえつゝ安らかな大往生だいおうじようを遂とげた。彼女にも其血が流れて居る。

謙遜な奉仕の天使、彼等が我等と共に在るの日、高慢な我等は微笑を以て其弱点じやくてんを見つゝ十分に尊敬を払はらわず、当然の事の如く座いながらにして其心尽こころづつしの奉仕を受け易やすい。彼等が去るの日に於て、我等は今更の如く其人と其働の意味を知り得て、

あらためて感謝と慚愧ざんきを感ずるのである。

命がけ

昨夜は烈しく犬が騒いだ。

今朝起きて見ると、裏庭の梧桐の下に犬が一疋横になつて居る。寝たのかと思うと、死んで居るのであつた。以前時々内のピンに通つて来た狐見た様な小柄の犬だ。デカが噛み殺したと見える。

裏のはなれに泊つて居るA君の話によれば、昨夜ピンを張りに来た此犬を、デカがはなれの縁の下に追い込んで、足を啣えて引きずり出し、而して睾丸を啣えて体をドシ／＼と大地に投げつけた。A君が余程引きはなそうと骨折したが、デカが如何しても放さなかつたと云う事である。

此辺には牝犬が少ないので、春秋の交尾期になると、猫程しかないピンを目がけて、来るわ／＼、白君、斑君、黒君、虎君、ポインタア君、スパニール君、美君、醜君……婿八人どころの騒ぎではない。デカも昨春までは、其一人であつたが、抜群の強猛故に競走者を追払つて、押入婿になり済ましたのである。今は正規の夫婦顔して、凡そ眼の届かん限り、耳の聞かん限り、一切の雄犬を屋敷の内へは入れぬ。其目一たび雄犬の影を見ようものなら、血相変えて追払う。宛ながら足の四本に止

まるを憾むが如く、一口に他の犬を喰うてしまうことが出来ぬを悲しむ如く、醜の
 丈夫デカ君が悲鳴をあげつゝ追駈ける。其時はピンもさながらデカに義理を立てる
 かの如く、横合からワン／＼吠えて走つて行く。

最初飼つた「白」は弱虫だったので、交尾期には他の強い犬に噛まれて、毎に血
 だらけになつた。デカは強いので、滅多に敗は取らぬ。然し其悲鳴して他の雄犬を
 追かける声は、世にも情無げな、苦痛其ものゝ声である。弱い者素より苦み、強い
 者がまた苦む。生物は皆苦む。思うに惨ましく、見るに浅ましい。然し此れが自然
 の約束である。即ち命を捨てゝも命は自己を伝えずには措かぬ。

都々逸氏歌うて曰く、

色のいの字と命のいの字

そこで色事命がけ

生殖は命がけ。嫉妬は必死。遊戲で無い。

命がけで入り込んで、生殖の為に一命を果した彼無名犬の死骸を、櫂の根もとに
 葬つた。向うの方には、二本投げ出した前足に頭をのせて、頬杖つくつと云う見得で
 デカがけろりとして眺めて居た。

二時間の後、用達^{ようたし}に上高井戸に出かけた。八幡^{はちまん}の阪で、誰やら脹脛^{ふくらばき}を後から窃^そと押^おす者がある。ふっと見ると、烏山^{からすやま}の天狗犬^{てんぐいぬ}が、前足^{まえあし}を挙^あげて彼の脛^{はき}を窃^なと撫^なでて彼の注意^{ちゅうい}を牽^ひいたのである。此犬はあまり大きくもないが、金壺眼^{かなつぼまなこ}の意地悪い悪相^{あくそう}をした犬で、滅多^{めった}に恐怖^{こふ}と云うものを知らぬ鶴子^{つるこ}すら初めて見た時は魘^{おび}えて泣いた。「白^{しろ}」が居^ゐた頃、此犬は毎^{つね}に善良な「白^{しろ}」を窘^{いじ}め、「白^{しろ}」を誘惑^{さうわく}して共に隣家^{となり}の猫^{ねこ}を噛^かみ殺^{ころ}し、到頭^{とうとう}「白^{しろ}」を遠方^{えんぽう}にやるべく余儀^{あやま}なくした、云わば白^{しろ}の敵^{かたき}である。白^{しろ}の主人^{しゅじん}の彼は此犬^{こいぬ}を憎^{にく}んで、打殺^{うちころ}そうと思^{おも}った。デカが来^こぬ間^{うち}は、此犬もピンに通^{とほ}うて来た犬の一つであつた。其犬すら雌犬^{めいぬ}のピン故^{ゆゑ}に、ピンの主人^{しゅじん}の彼に斯^{かく}く媚^{めい}びるのである。甚^{いた}あわれになつた。天狗犬^{てんぐいぬ}は訴^ううる様な眼付^{めつき}をしてしばしば彼を見上げ、上高井戸^{かみかいど}に往^いつて復^{かえ}るまで、始終^{しじう}彼にくつついて歩^{ある}いた。

歸^{かへ}つて家近^{かき}くなると、天狗犬^{てんぐいぬ}はデカを恐^{おそ}れて、最早^{もとう}跟^ついて来^こなかつた。ピンの主人^{しゅじん}を見送^{みおく}つて、悄然^{しょうぜん}と櫟^{くしき}の下^{した}の徑^{みち}に立^たて居^ゐつた。

*

先日^{ゆくえ}行衛^{ぎやうゑ}不明^{ふめい}で、若^も来^したら留^{とど}めて置^おいてくれと照会^{しょうかい}があつた角谷^{すみや}の消息^{しやうそく}が分^わかつ

た。彼は十八日の夜、大森停車場附近で鉄道自殺を遂げたのである。

彼オトナしい角谷、今年十九の彼律義な若者が——然し此驚きは、我迂濶と浅薄を証拠立てるに過ぎぬ。

角谷は十三四の年地方から出京して、其主人は親類筋に当る某書店に奉公した。美的百姓が「寄生木」を出す時、角谷は其校正を持つて銀座と粕谷の間を自転車で数十回往復した。著者が校正を見る間に、彼は四歳の女兒の遊び相手になったり、根が農家の出身だけに、時には鋏取りもしてくれた。ルビ振りを手伝えと云うたら、頭を搔いて尻ごみした。眉の濃い、眼の可愛い、倔強な田舎者らしい骨格をしながら色の少し蒼い、真面目な様で頓興な此十七の青年と、著者の家族は大分懇意になった。角谷は自分の巾着から女兒に鼠の画本など買つて来た。一度日本橋で、著者の家族三人、電車満員で困つて居ると、折から自転車で来かゝつた彼が見かけて、自転車を知辺の店に預け、女兒を負つて新橋まで来てくれた。去年の夏の休には富士山頂から画はがきをよこしたりした。

来たら留めて置いてくれとのはがきに接した時、いさゝか不審に思ひは思ひながら、まさか彼が生を見捨てようとは思わなかつた。

角谷は十二日から三日間、例によつて夏休をもううた。十一日に貯金の全部百二十円を銀行から引出し、同店員で従兄に当る若者宛の遺書を認め、己がデスクの抽斗

に入れた。其の遺書には、自分は十九歳を一期として父の許へ行く——父は前年郷里で死んだ——主人には申訳が無いから君から宜しく云うてくれ、荷物は北海道に居る母の許に送ってくれ、運賃として金五円封入して置く、不足したら店員某に七十二銭の貸しがあるから、其れで払ってくれ、と書いてあつた。

十二日には、主人の出社を待つて、暇乞して店を出で、麻布の伯父の家を訪うて二階に上り、一時間半程眠つた。それから日比谷で写真を撮つて、主人、伯父、郷里の兄、北海道の母に届く可く郵税一切払つて置いた。日比谷から角谷は浅草に往つた。浅草公園の銘酒屋に遊んで、田舎出の酌婦に貯蓄債券をやるうかなど、戯談を云つた。彼は製本屋の職工から浅草、吉原の消息を聞いて居たのである。

角谷の踪跡は此処ではたと絶えた。其れから一週間彼は何処を如何迷うて歩いたか、一切分からぬ。

十八日の夜八時過ぎ、神戸発新橋行の急行列車が、角谷の主人の居に近い大森で一人の男子を轢いた。足は切れ、顔もメチャ／＼になつて居たが、濃い眉で角谷と分かつた。店を出る時白がすりを着て出たが、死骸は紺飛白を着て居た。百二十円の貯金全部を引出した角谷の墓口には、唯一錢五厘しか残つて居なかつた。死骸は護謨草履を穿いて居た。護謨草履が欲しい／＼と角谷は云つて居たのであつた。

彼は久しく死ぬ／＼と云つて居た。死ぬ／＼と云つて死ぬ者はないものだ、貯金

なぞ精出して死ぬ者があるか、と他の店員が笑うと、死ぬ前には奇麗に使って仕舞うと角谷は戯談の様に云つて居た。角谷は手が器用で、書籍の箱造り荷拵えなどがうまかつた。職人になればよかつた、と自身もしばしばこぼして居た。

角谷は十九であつた。店は耶穌教主義であるが、角谷は夜毎の家庭祈祷会などに出るのを厭がつて居た。彼の本箱には、梅曆や日本訳のマウパッサン短篇集が入つて居た。

謎は自ずから解ける。

エデキンドが「春の目ざめ」のモリツツを想わずに居られぬ。

*

夜、外の闇から火光を眼がけて猛烈にカナブンが飛んで来る。ばたんばたんと障子にぶつかる音が、礫の様だ。掴んでは入れ、掴んでは入れして、サイダアの空瓶が忽一ぱいになった。

(明治四十四年 八月二十二日)

曉斎画譜

重田^{しげた}さんが立寄^{たちよ}つた。重田^{しげた}さんは隣字^{となりあざ}の人で、気が少し変なのである。躁暴^{そうほう}狂^{きやう}でもなく、憂鬱^{ゆううつ}狂^{きやう}と云う訳でもなく、唯家業^{いけぎふ}の農^{のう}を抛擲^{ほうてき}してぶらぶら歩いて居る。美的百姓^{てきひやくしやう}が遊び人であるためか、時々音^{おと}ずれる。

今日^{きよう}も立寄^{たちよ}つた。挨拶^{あいさつ}が斯^こうだ。

「え、私は、晩寝^{おそね}郡^{ごり}、早起^{はやおき}村^{むら}、濡垂^{ぬれたら}拭兵衛^{ふくべえ}と申しますが、その、私の弟^{おとうと}が発狂^{はつきやう}致^{いた}しまして……」

くどく／＼二言三言云うかと思うと、「それじやまた」とお辞儀^{じぎ}をして往^{むか}つてしまつた。「弟^{あに}が発狂^{はつきやう}した」が彼の口癖^{くちぐせ}である。弟^{あに}とは蓋^{けだし}夫子^{ふうし}自道^{みづからい}うのであろう。

重田^{しげた}さんの影^{かげ}が消^きゆると、安達^{あだち}君^{くん}の顔^{あり}が歴々^{あるじ}と主人^{しゅじん}の頭^{あたま}に現^{あら}われた。

安達^{あだち}君^{くん}は医学^{いがく}士^しで、紀州^{きしゅう}の人^{ひと}であつた。

紀州^{きしゅう}は蜜柑^{みかん}と謀叛^{むはん}人^{にん}の本場^{ほんば}である。紀州灘^{きしゅうなだ}の荒濤^{あらなみ}が鬼^{おに}が城^{じやう}の巉巖^{さんがん}にぶつかつて微塵^{みじん}に碎^{くだ}けて散^ちる処^{ところ}、鬱々^{うつづつ}とした熊野^{くまの}の山^{やま}が胸^{むね}に一物^{いちもの}を蔵^{かく}して黙^{もく}して居^ゐる処^{ところ}、秦始皇^{しんのしやう}に体^{てい}のよい謀叛^{むはん}した徐福^{じよふく}が移住^{いじゆう}して来^きた処^{ところ}、謀叛^{むはん}僧^{もんがく}文覚^{ぶんかく}が荒行^{あらぎやう}をやつた那智^{なち}の大瀑^{おほだき}が永久^{えいきゆう}に漲^{みなぎ}り落^{おち}つ処^{ところ}、雄才^{ゆうさい}霸氣^{はき}まかり違^{ちが}えば宗家^{そうか}の天下^{てんか}を一もぎにししかねまじい南竜^{なんりゆう}公^{こう}

紀州頼宣が虫を抑えて居た処、此国には昔から一種熬々した不穩の氣が漂うて居る。明治になつても、陸奥宗光を出し、大逆事件にも此処から犠牲の一人を出した。安達君は此不穩の氣の漂う国に生れたのである。

余が始めて君を識つた時、君はまだ医科大学に居た。小説「黒潮」の巻頭辞を見て、苟くも兄たる者に対して、甚無礼と詰問の手紙をよこした。君自身兄であつた。間もなく相見た時は、君もやゝ心解けて居たが、茶色の眼鏡く眉嶮しく、熬々した其顔は、一見不安の念を余に起さした。君は医学を専門にして居たが、文芸を好み高山樗牛の崇拜者で、兄弟打連れて駿州竜華寺に樗牛の墓を弔うたりした。君の親戚が当時余の僑居と同じく原宿にあつたので、君はよく親戚に来るついでに遊びに来た。親戚の家の飼犬に噛まれて、用心の為数週間芝の血清注射に通うたなど云つて居た。君はまた余に惺々 曉斎の画譜二巻を呉れた。惺々 曉斎は平素猫の樣につゝましい風をしながら、一旦酒をあおると鬱憤ばらしに狂態百出当る可からざるものがあつた。画帖の画も、狸が亀を押しころがしてジツと前足で押さえて居たり、蛇が羽たく雀をわんぐりと啣えて居たり、大きな猫が寝そべりながら凄い眼をしてまだ眼の明かぬ子鼠の群を睨んで居たり、要するに熬々した頭の狀態が紙の一枚毎にまぎゝと出て居た。安達君の贈物だけに、一種の興味を感じた。

君は其年医学士になつて郷里紀州に帰り、妻を迎え子をもうけ、開業医の生活を

して居た。

余が千歳村に引越した其夏、遊びに來た一学生をちと没義道に追払つたら、学生は立腹して一はがき五拾銭の通信料をもらわるゝ万朝報の文界短信欄に福富源次郎は発狂したと投書した。自分は可なり正氣の積りで居たが、新聞なるものゝ平氣に譌をつく事をまだよく知らぬ人達の間には大分影響したと見え、見舞やら問合せの手紙はがきなどいくらか來て、余は自身で自身の正氣を保証す可く余儀なくされた。ある日、庭で覺束ない手つきをして小麦を扱いて居ると、入口で車を下りて洋装の紳士が入つて來た。余は眼を挙げて安達君を見た。安達君は彼万朝報の記事を見て、余を見舞にわざ／＼東京から來てくれたのであつた。君は余の不相變ほんやりして麦扱きをして居るのを見て、正氣だと鑑定をつけたと見え、來て見て安心したと云つた。而して此れから北海道の増毛病院長となつて赴任する所だと云つた。妻子は？ときいたら、はつきりした返事をしなかつた。

北海道から林檎やら歌やら送つて來た。病院長の生活は淋しいものらしかつた。家庭の模様を聞いてやつても、其れだけは何時もお茶を濁して來た。余は北の国五百重につもる白雪も

埋みは果てじ胸の焔を

訳の分からぬ歌など消息の端にかきつけた。

間もなく君はまた郷里紀州に帰った。而して相変らず医を業としつゝ、其熬々を漏す為に「浜ゆふ」なぞ云う文学雑誌を出したり、俳句に凝つたりして居た。曾て夏密柑を贈ってくれた。余は

紀の国のたより来る日や風薫る

斯様な悪句を書いて酬うた。或時君の令弟が遊びに來た。聞けば、細君は別居して、家庭はあまり面白くもなさそうだが、遠隔の地突込んで聞きもならず、其まゝに打過ぎた。

梅雨季は誰しも発狂しそうな時節だ。安達君から、

梅霖霽々、憂愁如水

などはがきに書いて來た。

翌年の春、突然他の紀州の人から安達君が発狂して自殺したと知らして來た。驚いて令弟宛に弔状を出したら、其れと行き違いに先の人から、安達君は短刀で自殺しかけたが、負傷したまゝで人に止められたと云つて、紀州の新聞を一枚送つて來た。其れには安達君の直話として、苟も書を読み理義を解する者が、此様な事を仕出來して、と恥じて話して居た。

余は慰問状を出した。其れが紀州に届いたと思う頃、令弟から安達君は到頭先度の傷の為に亡くなつた、と知らして來た。

安達君は余の発狂を見舞に来てくれたが、余は安達君の病原びょうげんに触ふるゝことが出来なかつた。

記念の暁齋ぎやうさい画譜がふは大切だいじに蔵しまつて居る。

落穂の掻き寄せ

デデン

一月一日

七時起床。きじよう戸を開けば、霜如雪。しもゆきのごとし裏の井戸側に行つて、素裸になり、釣瓶で三ば

い頭から水を浴びる。ふしやうもの不精者の癖で、毎日の冷水浴をせぬかわり、一年分を元朝に済すまそうと謂うのである。

戸、窓の限りを明け、それから鶏小屋の開闢。まど とりこや かいびやく

畑に出て紅い実付の野茨一枝を剪つて廊下の釣花瓶に活け、蕾付の白菜一株を採つ

て、旅順の記念にもらつた砲弾信管のカラを内筒にした竹の花立に挿し、食堂の六

畳に飾る。かざ旧臘珍らしく暖あたたかだったので、霜よけもせぬ白菜に蕾がついたのである。

十時過ぎ、右の食堂で家族打寄り、梅干茶一碗、枯露柿一個。今日此家で正月を迎えた者は、主人夫妻、養女、旧臘から逗留中の秋田の小娘、毎日仕事に来る片眼のかみさん。猫のトラ、犬のデカ、ピン、小犬のチョン、クマ、鶏が十五羽。

十一時雜煮。^{どうに}東京仕入の種物沢山で、^{たねもの}頗うまい。^{すこい}長者氣どりで三碗代える。^{ちやうじやき}尤も餅は唯三個。^{もち}

*

朝は晴、やがて薄曇^{うすぐも}つて寒かつたが、正午頃からまた日が出て暖^{あたたか}になった。自家^{うち}は正月元日でも、四圍^{あたり}が十二月一日なので、一向正月らしい気もちがせぬ。年賀に往く所もなく、来る者も無い。

デデンがぶらりと遊びに來た。デデンは唾^{みよきち}の巳代吉が事である。唾で口が利けぬが、挨拶^{あいさつ}をする場合には、デデンと云う声を出す。彼は姦淫^{かんいん}の子である。戸籍面^{こせきめん}の父は痴^{おろか}で、母は莫連者^{ばくれんもの}、実父は父の義弟^{ぎてい}で実は此村の櫟林^{くめぎばやし}で拾^{ひろ}われた捨子^{すてこ}である。捨てた父母は何者か知らぬが、巳代吉が唾ながら心霊手巧職人風^{しんれいしゅかう}のイナセな容子を見れば、祖父母の何者かが想像されぬでもない。巳代吉は三歳^{みつつ}までは口をきいた。ある日「おつかあ、お湯が呑みてえ」と呼んだきり唾となった。何ものが彼の舌を縛^{しば}つたか。同じ胤^{たね}と云う彼の弟も盲であるのを見れば、梅毒^{ばいどく}の遺伝もあるう。父母の心の咎^{とがめ}も与^{あずか}つて力あるかも知れぬ。兎に角彼は唾になった。

「イエス行く時、生來^{うまれつき}なる瞽^{めくら}を見しが、其弟子彼に問ふて曰ひけるは、ラビ、此人

の誓に生れしは誰の罪なるや、己に由るか、又二親に由るか。イエス答へけるは、此人の罪に非ず、亦其二親の罪にもあらず、彼に由て神の作爲わざの頭はれん爲也。此事を言ひて地に唾つばきし、唾にて土を和とき、其泥を誓者めしひの目に塗り、彼に曰ひけるは、シロアムの池に往きて洗あらへ。彼則ち往きて洗ひ、目見ることを得て歸れり。」

耶穌やそほどの靈力れいりよくがあるなら、巳代吉の唾は屹度きつとなお癒る。年来眼の前に日々此巳代吉に現あらわるゝ謎なぞを見ながら、哀かなしいかな不信輕薄ふしんけいはくの余には、其謎を解とき其舌しほりの縛しばりを解く能力が無い。彼がデデンと呼んで来れば、デデンと応ずるまでゝある。

*

淋さびしい元日であつた。

あまり淋さびしいので、夜隣家よるとなりの人々を案内にやつたら、皆浪花節ななわがしに出かけて留守留守だつた。

(明治四十四年)

芝生の上

正月に入つて、連日美晴。

庭を歩くと、吹くともない風が冷やり／＼顔を撫でる。日はほかく／＼と暖かい。杉は蔦色になり、松は微黄を帯び、裸になった楓の枝には、四十雀が五六羽、白頬の黒頭を傾げて見たり、ヒヨイ／＼と枝から枝に飛んだりして居る。地藏様の影が薄すら地に落ちて居る。

デカとピンとチョンが、白茶のフラシ天の敷物を敷きつめた様な枯れて乾いた芝生に悠々と寝そべり、満身に日を浴びながら、遊んで居る。過去は知らず、将来は知らず、現在の彼等は幸福である。幸福な彼等を眺めて楽しむ主人も、不幸な者とは云われない。

勝手の方で、飯をやる合図の口笛が鳴つたので、犬の家族は匆ね起きて先を争うて走つて往つた。主人はやおら下駄をぬいで、芝生の真中に大の字に仰臥した。而して一鳥過ぎらず片雲駐まらぬ浅碧の空を、何時までも何時までも眺めた。

小鳥

芝生を焼く。

水島生が来た。みやしませい 社会主義神髓しやかいしゆぎしんすいを返えし、大英遊記だいえいゆうきを借りて往った。林の中で拾つひろ

たと云つて、弾痕だんこんある鵜うを一羽持つぐみて来た。食う氣になれぬので、楓の下に埋葬まいそう。

銃獵じゆうりようは面白いものである。小鳥はうまいものである。此村にはあまり銃獵に来

る都人士あらしもないので、小鳥は可なり多い。ある日庭を歩いて居ると、突然東の方か

ら嵐はおとの様な羽音を立て、夥おびただしい小鳥の群むれが悲鳴ひめいをあげつゝ裏の雑木林ぞうきばやしに飛んで来

た。と思うと、やがて銃声がした。小鳥はうまいものである。銃獵は面白いもので

あろう。然しあの遽あわたたしい羽音と、小さな心臓しんぞうも破裂はれつせんばかり驚きおびえた悲鳴を

聞いては……

午後鳥打帽子とりうちぼうしをかぶつた丁稚風てつちふうの少年が、やゝ久しく門口に立つて居たが、思切つ

たと云う風で土間に入つて来た。年は十六、弟子にして呉れと云う。縁えんの方へ廻れ

と云うたら、障子をあけてずんずん入つて来たから、縁から突落して馬鹿と叱なぐつた。

もと谷中村やなかむらの者で、父は今深川ふかがわで石工いしく、自身はボール箱造つて、向う賄まかないで月六円と

るそうだ。小説家などになるものでない、と云つて聞かして、干柿ほしがきを三つくれて帰

みみずのたはこと

えす。

(明治四十二年 一月十七日)

炬燵

雪がまだ融^とけぬ。

夜、二畳の炬燵^{こたつ}に入^いつて、架上^{かじよう}の一冊^{いっさく}を抽^ぬいたら、「多情多恨^{たじようたこん}」であつた。器械^{きかい}的に頁^{ページ}を翻^{ひるがえ}して居ると、つい^{ついで}に込^こまれて読^よみ入^いつた。ふつと眼^めを上^あげると、向^{むか}うには鶴子^{やぐら}が櫓^{つうぶ}に突^つ伏^ふして好^よい氣^きもちにスヤ／＼寝^ねて居る。炬燵^{こたつ}の上^{うへ}には、猫^{ねこ}が咽^{のど}も鳴^ならさず巴形^{ともえなり}に眠^ねつて居る。九時^{きゅうじ}近い時計^{ときけい}がカチ／＼鳴^なる。台所^{だいしよ}では細君^{さいくん}が皿^{さら}の音^{おと}をさして居る。

ぼろぼろ 茫々^{ぼうぼう}たる過去^{かこ}と、漠々^{はくはく}たる未来^{みらい}の間に、斯^{この}一瞬^{いつしゆん}の現^{げん}今は楽^{らく}しい実^{じつ}在^{ざい}であらう。またさら／＼と雪^{ゆき}になつた。

余^{あな}は多情多恨^{たじようたこん}を読^よみつゞける。何^{なん}と云^いうても名筆^{めいひつ}である。柳之助^{りゆうのすけ}が亡妻^{ぼうさい}の墓^{はか}に雨^{あめ}がしよ／＼降^ふつて居^ゐたと葉山^{はやま}に語^{かた}る条^{じょう}を読^よむと、青山墓地^{あおやまぼち}にある春日燈籠^{かすがとうろう}の立^たつ紅葉山人^{こうようさんじん}の墓^{はか}が、突^つと眼^めの前^{まへ}に現^{あらわ}れた。忽^{たち}ち其墓^{そのはか}の前^{のまへ}に名刺^{めいし}を置^おいて落涙^{らくなみ}する一青年士官^{せいねんしかん}の姿^{すがた}が現^{あらわ}れる。それは寄生木^{やどりぎ}の原著者^{げんちよしや}である。あゝ其青年士官^{せいねんしかん}——彼^{かれ}自身^{みづかみ}最早^{もうちう}故山^{こさん}の墓^{はか}になつて居^ゐるのだ。皆^{みな}さつさと過^{あや}ぎて行^いく。

「御徐に！」
おしずか

斯く云いたい。

何故^{なぜ}人生は斯^こうさつさと過ぎて往^{しま}つて了^{しま}うのであろう？

（明治四十二年 一月二十二日）

蓄音器

あまり淋さびしいので、昔は嫌いなものゝ一にして居た蓄音器を買った。無喇むらつぱ吹ふの小
さなもので、肉声にくせいをよく明瞭めいりょうに伝える。呂昇ろしょう、大隈おおすみ、加賀かが、宝生ほうじょう、哥沢うたざわ、追分おいわけ、磯節いそぶし、
雑多ざつたなものが時々余等の耳に刹那せつなの妙音みょうおんを伝える。

あたりが静しずかなので、戸をしめきつても、四方に余音よいんが伝つたわる。蓄音器があると云う
事を皆知しつて了しまうた。そこで正月には村の若者四十余名を招待しょうたいして、蓄音器を興行こうぎやう
した。次ぎには平生世話になる耶蘇教やそきやう信者の家族を招待した。次ぎには畑仕事で始
終厄介やつかいになる隣字となりあざの若者等を案内した。今夜は村の婦人連まねを招いた。生憎あいにく前日来の
雨で、到底来者きてはあるまいと思つて居ると、それでも傘かさをさして夕刻ゆうこくから十数人の
来客らいきやく。

妻と鶴子と逗留中とうりゅうちゆうの娘とが席に出て取持つ。

余は母屋おもやの炉ろを擁ようして、書を見ながら時々書院のさゞめきに耳傾ける。一曲終る
毎に、入り乱れたほめ言葉が聞こえる。曲中ながら笑声が起る。二時間ばかりも過
ぎた。茶菓が運ばれた。やがて誰やらクドク言う様子であつたが、音譜おんぷの中には
聞き覚えのない肉声が高々と響き出した。

余は窃と廊下伝いに書院に往つて、障子の外に停んだ。蓄音器が歌うのではない。
 田圃向うのお琴婆婆さんが歌うのである。

田圃向うの浜田の源さんの母者は、余の字で特色ある人物の一人である。彼女は
 神道大成教の熱心な信者で、あまり大きくもない屋敷の隅には小さな祠が祭つて
 あつて、今でも水垢離とつて、天下泰平、国土安穩、五穀成就、息災延命を朝々祈
 るのである。彼女は村の生れでなく、噂によればさる士の芸妓に生ませた女らしい。
 其信心は何時から始まったか知らぬが、其夫が激烈な脚氣にかゝつて已に衝心した
 時、彼女は身命を擲つて祈つたれば、神のお告に九年余命を授けるとあつた。果然
 夫の病氣は晷の目一つずつ漸々快方に向つて、九年の後死んだ。顔の蒼白い、頬骨
 の高い、眼の凄い、義太夫語りの様な鏗声をした婆さんである。「折目高なる武家
 挨拶」と云う様な切口上で挨拶をするのが癖である。今日も朝方蓄音器招待の礼に、
 季節には珍らしい筍二本持て来てくれた。

琴婆婆さんは蓄音器の返礼にと云つて、文句は自作の寿を唄うて居る。

「福富サンが、皆を集めて遊ばせて下さるウ……（如何も声が出ないものですから、
 エヘン、エヘン——ウーイ、ウーイ、ウーイ）……御親切な福富さんの（ウーイ、
 ウーイ）ますく御繁昌で（ウーイ、ウーイ）表の方から千両箱、右の方から宝船
 （ウーイ、ウーイ）……」

障子の外に立聞く主人は、冷汗が流れた。彼は窃^{そつ}とぬき足して母屋に帰った。唄^{うた}はまだつゞいて、（ウーイ、ウーイ）が Refrain の様に響いて来る。

（明治四十五年 二月六日）

春七日

(一) 雛節句

三月三日。別に買った雛も無いから、細君が鶴子を相手に紙雛を折ったり、色紙の鶴、香箱、三方、四方を折ったり、あらん限りの可愛いものを集めて、雛壇を飾った。

草餅が出来た。蓬は昨日鶴子が夏やと田圃に往つて摘んだのである。東京の草餅は、染料を使うから、色は美しいが、肝腎の香が薄い。

今朝は非常の霜だった。午の前後はまた無闇と暖で、急に梅が咲き、雪柳が青く芽をふいた。山菜莢は黄色の花ざかり。赤い蕾の沈丁花も一つ白い口を切った。春蘭、水仙の蕾が出て来た。

雲雀が頻に鳴く。麦畑に陽炎が立つ。

咄の巳代吉が裸馬に乗つて来た。女子供がキャツ／＼騒ぎながら麦畑の向うを通る。若い者が大勢大師様の参詣に出かける。

春だ。

恋猫、恋犬、鶏は出してもく巢につき、雀は夫婦で無暗に人の家の家根に穴をつくり、木々は芽を吐き、花をさかす。犬のピンの腹ははりきれそうである。夜は松の心芽程の小さな蠟燭をともし、雛壇が美しかった。

(二) 春雨

三月六日。

尽日雨、山陽の所謂「春雨さびしく候」と云う日。

書窓から眺めると、灰色をした小雨が、噴霧器で噴く様に、弗——弗と北から中ツ原の杉の森を掠めて斜に幾しきりもしぶいて通る。

つくづく見て居る内に、英国の発狂詩人ワットソンの God comes down in the

rain 神は雨にて降り玉う、と云う句を不図憶い出した。其れは「田舎の信心」と云う短詩の一句である。全詩は忘れたが、右の句と、「此処田舎の村にては、神を信頼の一念今も尚存し」と云う句と、結句の「此れぞ田舎の信心なる、此れに越すものあらめやも」と云う句を覚えて居る。

農村に天道様の信心が無くなつたら、農村の破滅である。然るに此信心は日にく消亡して、人智人巧唯我唯利の風が日々農村人心の分解を促しつゝあるのだ。少し

でも農村の実情を見知る者は、前途を懸念せずには居られぬ。

(三) 雨後

三月七日。

近来よく降る。降らなければ曇る。所謂養花の天。

今日は日が出た。朝から暖だ。鶏の声が殊に長閑に聞こえる。昨日終日終夜の雨で、畑も土も真黒に潤うた。麦の緑が目立って濃うなつた。緑の麦は、見る眼の驕喜である。其れが嫩らかな日光に笑み、若くは面を吹いて寒からぬ程の微風にソヨグ時、或は夕雲の翳に青黒く黙す時、花何ものぞと云いたい程美しい。

隣家では最早馬鈴薯を植えた。

午後少し高井戸の方を歩く。米俵を積んだ荷馬車が来る。行きすりに不図目にとまった馬子の風流、俵に白い梅の枝が插してある。白い蝶が一つ、黒に青紋のある蝶が一つ、花にもつれて何処までもひらひら飛んで跟いて行く。馬子は知らずに好い声を張り上げて、

「飲めよ、ネエ、騒げエよ、三十がア止ウめエよ。三十過ぎればア、たゞの人ウ。コラ〜」

朝の模様で、今日は美晴と思われたが、矢張氣の定まらぬ日であつた。時々ざあしくれと時雨の様に降つては止み、東に虹にじが出たり、西に日あちが現われて遠方の屋根が白く光つたり、北風が来て田圃たんぼの小川の縁ふちとる女竹めたけの藪やぶをざわ／＼鳴らしてはきら／＼日光を跳おとらせたりした。空そらの一部は印度藍色いんどあいいろに濃く片曇りし、村と緑の麦の一部は眩まぶしい片明りして、ミレーの「春」を活かして見る様であつた。

(四) 摘草

三月八日。

今日も雲雀ひばりが頻に鳴く。

午食前ひるめしまえに、夫妻鶴子きいピンを連れて田圃に摘草つみくさに出た。田の畔くろの猫柳きぬげが絹毛かづぎの被かを

脱きいで黄きいろい花はなになつた。路傍みちばたの草木瓜くさぼけの薔つばきが朱あけにふくれた。花は兎うさぎに角わかれ、吾儕われらの

附近あたりは自然の食物には極めて貧しい処である。芹せり少々、嫁菜よめな少々、蒲公英たんぽぽ少々、野蒜のびる

少々、露ふきの臺とうが唯三つ四つ、穫物えものは此れつきりであつた。

午後本ほんを読んで居ると、空中くうちゆうに大きな物の唸り声うなが響く。縁から見上げると、夏

に見る様な白銅色けんぐんの卷雲うしろを背うしろにして、南みなの空そらに赤い大紙鳶おおだこが一つ颯あがつて居る。ブラ

下げた長い長い二本の縄なわの脚あしを軟らかに空中に波うたして、紙鳶たこは心長閑こころのどかに虚空こくうの

海に立泳ぎたちおよをして居る。ブーンと云うウナリが、武蔵野一ぱいに響き渡る。

春だ。

晩食に摘草の馳走。野蒜の酢味噌すみそは可か、ひたし物の嫁菜にがは苦かった。

(五) 彼岸入り

三月十八日。彼岸の入り。

風はまだ冷たいが、雲雀の歌にも心なしか力がついて、富士も鉛色なまりいろに淡く霞む。庭には沈丁花ちんぢようけの甘い香あまが日も夜も溢あふれる。梅は赤い萼がくになって、晚咲紅梅おそぎんぎとうばいの蕾かすがふくれた。犬が母子で芝生おやこにトチ狂しぼうう。猫が小犬の様に駈かけ廻まわる。

春だ。

彼岸入りで、団子だんごが出来た。

墓参が多い。

夕方、静しずかになった墓地に往ゆつて見る。沈丁花ちんぢようけ、赤椿あかつばきの枝が墓前ぼぜんの竹筒たけつつや土つちに挿さしてある。線香せんこうの烟けむりが徐しずかに颺あがつて居る。不図ふと見ると、地藏様ひとりの一人が紅木綿べにもめんの着物を被きて居られる。先月おき幼な娘を亡なくした松さんとこで被きせ申したのであろう。

(六) 蛇出穴

三月二十八日。

近來の美晴。朝飯後高井戸に行つて、石を買う。武蔵野に石は無い。砂利や玉石は玉川最寄から来るが、沢庵の重石以上は上流青梅方角から来る。一貫目一錢五厘の相場だ。扱んだ石を衡にかけさせて居たら、土方体の男が通りかゝつて眼を瞪り、「石を衡にかける——驚いたな」と云つた。

午後は田圃伝いに船橋の方に出かける。門を出ると、墓地で蛇を見た。田圃の小川の槓の下では、子供が鮎を釣つて居る。十丁そこら往つて見かえると、吾家も香爐の家程に小さく霞んで居る。

今日は夕日の富士が、画にかいた「理想」の様に遠くて美しかった。

(七) 仲春

四月十七日。

戸を開けて、海——かと思つた。家を繞つて鉛色の朝霞。村々の森の梢が、幽霊

の様に空に浮いて居る。雨かと舌鼓をうったたら、霞の中からぼんやりと日輪が出て来た。見る／＼日の威力は加わって、光は白く霞に咽ぶ。

庭の桜の真盛りである。落葉松、海棠は十五六の少年と十四五の少女を見る様。紫の箱根つゝじ、雪柳、紅白の椿、皆真盛り。一重山吹も咲き出した。セイゲン、ヤシオなど云う血紅色、紅褐色の春モミジはもとより、槭、楓、檜、樺、ソロなどの新芽は、とり／＼に花より美しい。

畑に出て見る。唯一叢の黄なる菜花に、白い蝶が面白そうに飛んで居る。南の方を見ると、中つ原、廻沢のあたり、桃の紅は淡く、李は白く、北を見ると仁左衛門の大櫓が春の空を摩でつゝ褐色に煙って居る。

春の日も午近くなれば、大分青んで来た芝生に新楓の影繁く、遊びくたびれて二つ巴に寝て居る小さな母子の犬の黒光りする膚の上に、桜の花片が二つ三つほろ／＼とこぼれる。風が吹く。木影が揺く。蛙が鳴く。一寸耳をびちつと動かした母犬は、またスヤ／＼と夢をつゞける。

夕方は、まんまるな紅い日が、まんじりともせず悠々と西に落ちて行く。横雲が一寸一刷毛日の真中を横に抹って、画にして見せる。最早穂を孕んだ青麦が夕風にそよぐ。

夜は蛙の声の白い月夜。

みみずのたはこと

(明治四十三年)

ある夜

梅に晩く桜に早い四月一日の事。

余は三時過ぎから、ある事の爲にある若い婦人を伴うて、粕谷から高輪に往つた。午後の六時から十一時過ぎまで、ある家の主人を訪うてある事を弁じつゞけ、要領を得ずして其家を辞した時は、最早十二時近かつた。それでも終電車に乗るを得て、婦人は三宅坂で下りて所縁の家へ、余は青山で下りて兄の家に往つた。

寝入り端と見えて、門を叩けど呼べど叫べど醒めてくれぬ。つい近所に姪の家があるが、臨月近い彼女を驚かすのも面白くない。余は青山の通を御所の方へあるいて、交番に巡査を見出し、其指図で北町裏の宿屋を一二軒敲き起した。寤めは寤たが、満員と体の好い嘘を云つて謝絶された。

電車はとくに寝に往つて了つた。夜が明けたら築地の病院に腫物を病んで入院して居る父を見舞うつもりで、其れ迄新橋停車場の待合室にでも往つて寝ようと、月明りと電燈瓦斯の光を踏んで、ぶら／＼溜池の通を歩いて新橋に往つた。往つて見ると此は不覚、扉がしまつて居る。駅夫に聞くと、睡むような声して、四時半まではあけぬと云う。まだ二時前である。

電燈ばかり明るくてポンペイの廃墟はいきよの様に寂さびしい銀座の通りを歩いて東へ折れ、歌舞伎座前を築地の方へ往った。万年橋の袂たもとに黙阿弥の芝居に出て来そうな夜啼鰻よなきうどんが居る。夜は丑満頃うしみつらで、薄寒くもあり、腹も減へった。

「おい、鰻飩を一つくれんか」

「へえ」

灯ひの蔭から六十近い爺おやじが顔を出して一寸余を見たが、直ぐ団扇うちわでばたばたやりはじめた。後の方には車が二台居る。車夫の一人は軒いびきをかいて居る。一人は蹴込けこみに腰を据すえて、膝かけを頭からかぶって黙って居る。

「へえ、出来ました」

割箸わりばしを添えて爺どんぶりが手渡す井を受取つて、一口啜ひとくちすると、腥なまぐさいダシでむかツと来たが、それでも二杯食った。

「おい、もう二つこさえて呉れ」

余は代を払い、「ドウモ御馳走様！　おい、旦那が下さるとよ」と車夫が他の一人を呼びさます声を聞きて、万年橋を渡った。つい其処の歌舞伎座の書割かきわりにある様な紅味あかみを帯びた十一日の月が電線にぶら下つて居る。

築地外科病院の鉄扉てつびは勿論しまつて居た。父のと思わるゝ二階の一室に、ひいた窓帷まどかけ越しに樺色かばいろの光がさして居る。余は耳を澄ました。人のうめき声がしたかと思

うたが、其は僻耳^{ひがみみ}であつたかも知れぬ。父は熟睡^{じゆくすい}して居るのであらう。其子の一人が今病室の光を眺^{あかり}めて、此深夜^{このよふけ}に窓の下を徘徊^{わいはい}して居るとは夢にも知らぬであらう。睡^{ねむ}くなつた。頭がしびれて来た。何処でもよい、此重い頭を横たえたくなつた。余はうつら／＼と夢心地に本願寺の近辺をぶらついた。体で余は歩かなかつた。幽霊のようにふら／＼とさまよつた。不図墓地に入つた。此処は余も知つて居る。曾^{いぢやうじよし}て一葉女史の墓を見に来た時歩き廻つた墓地である。余は月あかりに墓と墓の間を縫^ぬうて歩いた。誰やらの墓の台石^{だいしし}に腰かけて見た。然し此処は永く眠るべき場所である。一夜の死を享^うく可き場所ではない。余は墓地から追い出されて、また本願寺前の広場に出た。

不図本願寺の門があいて居るのを見つけた。門口には巡查か門番かの小屋^{こや}があつて、あかりがついて居る。然し誰咎^{とが}むる者も無いので、突々^{つつ}と入つて、本堂の縁^{えん}に上つた。大分西に傾いた月の光は地を這^はうて、本堂の縁は闇い蔭^{かげ}になつて居る。やつと安息の場所を獲^えて、広縁^{ひろえん}に風呂敷を敷き、手枕^{たまくら}をして横になつた。少しウト／＼するかと思つと、直ぐ頭の上で何やらばさ／＼と云う響がした。余は眼を開いて頭上^あの闇^{やみ}を見た。同時に闇の中に「クゝクゝ」と云う囁^{ささ}やきを聞いた。

「あ、鳩^{はと}だ」

余はまたウト／＼となつた。

月は次第に落ちて行く。

（明治四十二年 四月一日）

みみずのたはこと

与右衛門さん

村の三月節句で、皆が遊んであるく。家は潰され、法律上の妻には出て往かれ、今は実家の厄介になつて居る久さんが、何発心してか今日はまるくの青坊主に剃つて、手拭肩に独ぶらゝ歩いて居る。

甲州街道の小間物屋のおかみが荷を背負つて来た。「ドウもねえあなた、天道様に可愛がられまして、此通り真黒でございます」と頬を撫でる。気の利いた口のきゝぶり、前半生に面白い話を持て居そうな女だ。負つてあるく荷は十貫目からあると云う。細君が鬘櫛と鶴子の花簪を買うた。

小間物屋のおかみが帰ると、与右衛門さんが地所を買わぬかと云うて来た。少しばかりの地面を買つて古い家を建てたりしたので、やれ地面を買わぬかの、古い天水桶用の釜を買わぬかの、植木の売物があるのと、蟻の砂糖につく如くたかつてくる。金が無いと云つても、中々本当にしてくれぬ。与右衛門さんも其一人である。与右衛門さんは、村内切つての吾儘者剛慾者としてのけものにさるゝ男である。村内でも工面のよい方で、齢もまだ五十左右、がっしりした岩畳の体格、濃い眉の下に開いた蛇の目の様な二つの眼は鋭く見つけて容易に動かず、頭の頂辺から足の

爪先まで慾氣満々として寸分のタルミも無い。岩畳な彼を容るゝその家は、基礎を
 切石にし、柱の数を多くし、屋根をトタンで包み、縁を樺で張り、木造の鬼の窟の如
 く岩畳である。彼に属する一切のものは、其堅牢な意志の発現である。彼が家の子
 女は何処の子女よりも岩畳である。彼の家の黒猫は、小さな犬より大きく、村内の
 如何なる猫も其威に恐れぬものは無い。彼が家の麦からの束は、他家の二倍もある。
 彼が家の夜具は、宇都宮の釣天井程に重く大きなものだ。彼が家の婆さんは、七十
 過ぎて元氣おさゝ若者を凌ぐ婆さんである。婆さんの曰く、私の家は信心なんざ
 しませんや。正に其通り、与右衛門さんは神仏なんか信ずる様な事はせぬ、徹頭徹
 尾自力宗の信者である。遠い神仏を信心するでもなければ、近所隣の迷惑や評判を
 気にするでもなく、流行とか外聞とかつき合とか云うことは、一切禁物で、恃む所
 は自家の頭と腕、目ざすものは金である。与右衛門さんには道楽と云うものが無い
 が、金と酒は生命にかけて好きである。家で晩酌に飲み、村の集会で飲み、有権者
 だけに衆議院議員の選挙振舞で飲み、どうやらすると昼日中おかず媼さんの小店で
 一人で飲んで真赤な上機嫌になつて、笑つて無暗にお辞義をしたり、管を巻いたり、
 氣焰を吐いたりして居ることがある。皆が店を覗いて、与右衛門さんのお株梅ヶ谷
 の独相撲がはじまりだ、と笑う。与右衛門さんは何処までも自己中心である。人が
 与右衛門さんの地所を世話すれば、世話人は差措いて必直談に来る。自身の世話し

かけた地所を人が直談にすれば、一盃機嫌で怒鳴り込んで来る。

然し与右衛門さんは強慾であるかわり、彼は詐を云わぬ。詐は貨幣同様天下の通り物である。都でも、田舎でも、皆それ〴〵に詐をつく。多くの商売は詐に築かれた蜃気楼と云つてもよい。此辺の田舎でも、些とまとまった買物を頼めば、売主は頼まれた人に、受取は幾何金と書きましようか、ときく。コムミツシヨンの天引は殆ど不文律になつて居る。人を見て値を云う位は、世にも自然な事共である。東京から越して来た人に薪を売った者がある。他の村人が、あまり値段が高いじやないかと注意したら、売り主の曰く、そりや些ア高いかも知んねえが、何某さんは金持だもの、此様な時にでも些ア儲うけさして貰わにや、と。而して薪の売主は、衆議院議員選挙権を有つて居る、新聞位は読んで居る男である。売る葺萱の中に屑をつめ込んで束を多くする位は何でも無い。

誰も平氣に詐をつく。然し看板を出した慾張り屋の与右衛門さんは、詐を云わぬ、いかさまをせぬ。それから彼は作代に妻をもたせて一家を立てゝやつたり、義弟が脚部に負傷したりすると、荷車にのせて自身挽いて一里余の道を何十度も医者へ通つたり、よく縁者の面倒を見る。与右衛門さんに自慢話がある。東京者が杉山か何か買つて木を伐らした時、其木が倒れて誤つて隣合つて居る彼与右衛門が所有林の雑木の一本を折つた。最初無断で杉を伐りはじめたのであつた。与右衛門さんは

例の毛虫眉をぴりりとさせて苦情を持込んだ。御自分に御買いになった木を御伐りになるに申分は無いが、何故此方の山の木まで御折りになったか、金が欲しくて苦情を申すでは無い、金は入りません、折れた木を元の様にして戴きたい。思いがけない剛敵に出会して、東京者も弱った。与右衛門さんは散々並べて先方を困らせぬいた揚句、多分の賠償金と詫言をせしめて、やっと不承した。右は東京者に打勝った与右衛門さんの手柄話の一節である。与右衛門さんは、東京者に此手で行くばかりでなく、近所隣までも此の筆法で行く。そこで与右衛門さんを憚って、其の地所の隣地に一寸した事をするにも、屹度わたりをつける。

与右衛門さんは評判の長話家である。鍬を肩にして野ら仕事の出がけに鉢巻とつて「今日は」の挨拶からはじめて、三十分一時間の立話は、珍らしくもない。今日も煙管をしまつては出し、しまつては出し、到頭二時間と云うものぶつ通しに話された。与右衛門さんは中々の精力家である。「どうもダイ産としては地所程好いダイ産はありませんからナ」の百万遍を聞かされた。

「でも斯様な時代もあったですよ」
と云つて、与右衛門さんは九度目に抽き出した煙管に煙草をつめながら、斯様な話をした。

此辺はもと徳川様の天領で、納め物の米や何かは八王子の代官所まで一々持つて

往ったものだ。八王子まではざつと六里、余り面倒なので、田はうちやってしま
えと云う氣になり、粕谷では田を一切烏山からすやまにやるから貰もらつてくれぬかと相談をかけ
た。烏山では、タゞでは貰えぬ、と言う。到頭馬式駄さかだるに酒樽をつけて、やっと厄介
な田を譲った。

「嘘うその様な話でさ。惜しい事さね、今ならば……」

と云つて、与右衛門さんは煙管きせるの雁管がんくびをポンと火鉢にはたいて、今にも水が垂たりそ
うな口もとをした。

（明治四十四年 四月三日）

五月五日

五月五日。日曜。節句。余等が結婚十九年の記念日。例によつて赤の飯、若芽の味噌汁。
みそしる
味噌汁。

朝飯すまして一家買物に東京行。東京には招魂祭、府中には大國魂神社の祭礼がある。甲州街道も東へ往つたり西へ来たり人通りが賑やかだ。新宿、九段、上野、青山と廻つて、帰途に就いたのが、午後四時過ぎ。東京は賑やかで面白い。賑やかで面白い東京から帰つて来ると、田舎も中々悪くない。西日に光る若葉の村々には、赭い鯉が緑の中からふわりと浮いて居る。麦の穂は一面白金色に光り、蛙鳴く田は紫雲英の紅を敷き、短冊形の苗代には最早嫩緑の針がぼつ／＼芽ぐんで居る。夕雲雀が鳴く。日の入る甲州の山の方から塵のまじらぬ風がソヨ／＼顔を吹く。府中の方から大國魂神社の大太鼓がドン／＼と遙に響いて来る。

帰宅したのが六時過ぎ。正面に見て眩しくない大きな黄銅色の日輪が、今しも橋場杉木立に沈みかけた所である。

本当に日が永い。

留守に隣から今年も餠餅をもらった。

留守に今一つの出来事があつた。橋本のいさちゃん、浜田の婆さんに連れられ、
 たかしまだ 高島田、紋付、真白に塗つて、婚礼の挨拶に来たそうだ。美しゆうござんした、と
 おんな 婢が云う。

いさちゃんはこの辺でのハイカラ娘である。東京のさる身分ある人の女で、里子に
 来て、貰われて橋本の女になつた。橋本の嗣子が亡くなつたので、実弟の谷さんを
 じゅんよし 順養子にして、いさちゃんを妻したのである。余等が千歳村に越して程なく、時々
 遊びに来る村の娘の中に、垢ぬけした娘が居た。それがいさちゃんであつた。彼女
 は高等小学を卒え、裁縫の稽古に通つた。正月なんか、庇髪に結つてリボンをかけ
 て着物を更えた所は、争われぬ都の娘であつたが、それでも平生は平氣に村の娘同
 様の仕事をして、路の悪い時は肥車の後押しもし、目籠背負つて茄子隠元の收穫に
 も往つた。実家の母やマアガレットに結つて居る姉妹等が遊びに来て、いさちゃ
 んはさして恥じらう風情も無かつた。

田舎は淋しい。人が殖え家が殖えるのは、田舎の歡喜である。人が喰合う都会で
 は、人口の増加は苦痛の問題だが、自然を相手に人間の戦う田舎の村では、味方の
 人数が多い事は何よりも力で強味である。小人数の家は、田舎では惨なものだ。何
 の家でも、五人六人子供の無い家は無い。この部落でも、鳴田や寺本の様に屈強な
 男子の五人三人持て居る家は、家も栄るし、何かにつけて威勢がよい。養蚕が重な

副業ふくぎようの此地方では、女の子も大切にされる。貧しい家が扶持ふちとりに里子をとるばかりでなく、有福ゆふくな家でも里子をとる、それなりに貰もらつてしまうのが少なくない。其まゝに大きくして、内の媳よめにするのが多い。所謂「蕾つぼみからとる花嫁御」である。一家総労働の農家では、主僕の間隔へだてがない様に、実の娘と養女の間に格別かくべつの差等さとうはない。養われた子女が大きくなつても、別に東京恋しとも思わず、東京に往つても直ぐ田舎に歸つて来る。

都会に近い田舎の事で、何の家も多少の親類を東京に有つて居る。村の祭には東京からも遊びに来る。農閑のうかんの季節には、田舎からも東京に遊びに行く。辰爺たうじいさんは浅草に親類がある。時々遊びに行くが、帰ると溜息ためいきついて曰く、全く田舎が好ええナ、浅草なンか裏が狭くて、雪隠せつおんに往つても鼻はなア突つつ、田舎に帰ると爽せいせい々するだ、親類のやつが百姓は一日いちにちにいくら儲もうかるつてきくから、こちとらは帳面なンかつけやしねえ、年の暮になりや足りた時は足りた、剩あまらねえ時は剩あまらねえンだ、つて左様云つてやりましたよ、と。

東京に往けば、人間に負まけます、と皆が云う。麦むぎの穂程人間の顔がある東京では、人間の顔見るばかりでも田舎者はくたびれて了しまう。其処そこに電話の鈴が鳴る。電車が通とおる。自動車自動車が走る。号外ごうがいが飛ぶ。何かは知らず滅多無性に忙せわしそうだ。斯こん様な渦うずの中に捲まき込こまれると、李兵衛もくべえ太五作たごさくも足の下が妙にこそばゆくなくて、宛無あてなしの

電話でもかけ、要もないに電車で飛び乗りでもせねば済まぬ気になる。ゆつくりした田舎の時間空間の中に住み慣れては、東京好しいえど、久恋の住家では無い。だから皆帰りに欣々として帰ってくる。

田舎では、豊かな生計の家でも、女を東京に奉公に出す。女の奉公と、男の兵役とは、村の両遊学である。勿論弊害もあるが、軍隊に出た男は概して話せる男になつて帰ってくる。いさちゃんのお婿さんなども、日露戦争にも出て、何処やら垢ぬけのした郷軍人である。奉公に出た女にも、東京に嫁入る者もあるが、田舎に帰つて嫁ぐ者が多い。何を云うても田舎は豊かである。田舎に生れた者が田舎を恋うばかりでなく、都に生れた者でも田舎に育てば矢張田舎が恋しくなる。いさちゃんも好い生涯を与えられた。

(明治四十五年)

紫雲英

午後の散歩に一家打連れて八幡山、北沢間の田圃に往つた。紫雲英の花盛りである。

此処は西鬱々とした杉山と、東若々とした雑木山の緑に囲まれた田圃で、遙北手に甲州街道が見えるが、豆人寸馬遠く人生行路の図を見る様で、却てあたりの静けさを添える。主人と妻と女兒と、田の畔の鬼芝に腰を下ろして、持参の林檎を嚼つた。背後には生温い田川の水がちよろ／＼流れて居る。前は畝から畝へ花毛氈を敷いた紫雲英の上に、春もやゝ暮近い五月の午後の日がゆたかに匂うて居る。ソヨ／＼と西から風が来る。見るかぎり桃色の漣が立つ。白い蝶が二つもつれ合うてヒラ／＼と舞うて居る。跟いて来た大きな犬のデカと小さなピンが、蛙を追ったり、何かフツ／＼嗅いだりして、面白そうに花の海を踏み分けて、淡紅の中に凹い緑の線をつける。熟々と見て居ると、紅の歓楽の世に独聖者の寂しげな白い紫雲英が、彼所に一本、此処に一株、眼に立って見える。主人はやおら立って、野に置くべきを我庭に移さんと白きを掘る。白い胸掛をした鶴子は、寧其美しきを撰んで摘み且摘み、小さな手に持ち切れぬ程になったのを母の手に預けて、また盛に摘んで居る。

主人は田川の生なまぬる温い水で泥手どろてを洗つて、鬼芝の畔に腰かけつゝ、紫雲英を摘む女児を眺めて居る。ぽか／＼した暮春ぼしゆんの日光ひざしと、目に映る紫雲英の温あたかい色は、何時しか彼をうっとりとして三十余年の昔に連れ帰るのであった。

時は明治十年である。彼は十歳の子供である。彼の郷里は西郷戦争の中心になつた。父は祖父を護ごして遠方ひなんに避難し、兄は京都の英学校に居り、家族の中で唯一ただひとりの男の彼は、母と三人の姉と熊本を東南に距さる四里の山中の伯父おじの家に避難した。山桜やまざくらも散つて筍たけのこが出る四月の末、熊本城の圉かこみが解とけたので、避難の一家は急いで帰途に就いた。伯父の家から川に添そうて一里下れば木山町、二里下ると沼山津村。今夜は沼山津泊とまりの予定であつた。皆徒歩かちだつた。木山まで下ると、山から野に出る。彼等は川堤かわつつみを水と共に下つて往つた。堤の北は藻隠もかくれに鮎ふなの住む川で、堤の南は一面の田、紫雲英が花毛氈はなもちせんを敷き、其の絶間たえまたえま々々には水鏝みずさびが茜色あかねいろの水蓋みずぶたをして居た。行く程に馬上の士官が来た。母が日傘ひがさを横にして会釈えしやくし、最早熊本に帰つても宜しうございましょうかと云うた。宜よいとも／＼、皆みんなひどい目に会つた喃な。と士官が馬上あゐさつから挨拶あいさつした。其処そこに土俵どひようで築きずいた台場——堡壘ほろいがあつた。木山の本營ほんえいを引揚ひきあげる前、薩軍さつぐんが拠よつて官軍を拒ふせいだ処である。今は附つけ剣の兵士が番して居た。会釈して一同其処を通りかゝると、蛇が一足のとくつて居る。蛇嫌へびきらいの彼は、色を変えて立どまつた。兵士が笑つて、銃剣じゆうけんの先で蛇をつつかけて、堤外ていがいに抛ほうり出した。無

事に此この関所せきじょも越して、彼は母と姉きと嬉々ききとして堤を歩んだ。春の日はほかりく春の水はのたりく、堤外は一面の紫雲英で、空には雲雀ひばり、田には蛙かわずが鳴いて居る。明日家あすうちに帰る前に今夜泊る沼山津とまの村は、一里向うに霞んで居る。……

「阿父おとうさん、ほら此様こんなに摘んでよ」

吾わに復かえつた彼の眼の前に、両手りょうてにつまんで立つた鶴子の白胸掛しろむねかけから、花の臙脂えんじがこぼれそうになつて居る。

(明治四十四年 五月八日)

印度洋

夜、新聞で見ると、長谷川二葉亭氏が肺病で露西亞から帰国の船中、コロムボと新嘉坡の間で死んだとある。去十日の事。

馬琴物から雪中梅型のガラクタ小説に耽溺して居た余に、「浮雲」は何たる驚駭であつたろう。余ははじめて人間の解剖室に引ずり込まれたかの如く、メスの様な其筆尖が唯恐ろしかった。それからツルゲーネフの翻訳「あひゞき」を国民の友で、「めぐりあひ」を都の花で見た時、余は世にも斯様な美しい世界があるかと嘆息した。繰り返えし読んで足らず、手ずから写したものだ。其後「血笑記」を除く外、翻訳物は大抵見た。「其面影」はあまり面白いとも思わなかつた。「平凡」は新聞で半分から先きを見た。浮雲の筆は枯れきつて、ぱつちり眼を開いた五十男の皮肉と鋭利と、醒めきつた人のさびしさが犇々と胸に迫るものがあつた。朝日から露西亞へ派遣された時、余は其通信の一行も見落さなかつた。通信の筆は数回ではたと絶えた。而して帰朝中途の死！

印度洋はよく人の死ぬ所である。昔から船艦の中で死んで印度洋の水底に葬られた人は数知れぬ。印度洋で死んだ日本人も一人や二人では無い。知人柳房生の親戚

某神学士も、病を得て英国から帰途印度洋で死んで、新嘉坡に葬られた。二葉亭氏

も印度洋で死んで新嘉坡で火葬され、骨になつて日本に帰るのである。

高山の麓の谷は深い。世界第一の高峻雪山を有つ印度の洋は、幾千の人の死体

を埋めても埋めても埋めきれぬ。其陸の菩提樹の蔭に「死の宗教」の花が咲いた印

度の洋は、餌を求めて饜くことを知らぬ死の海である。烈しい暑さのせいもあるう

が、印度洋は人の氣を變にする。日本郵船のある水夫は、コロムボで氣が變になり、

春画など水夫部屋に飾つて拝んだりして居たが、到頭印度洋の波を分けて水底深く沈

んで了うた、と其船の人が余に語り聞かせた。印度洋の彼不可思議な色をして千劫

万劫已む時もなくゆらめく謎の様な水面を熟々と見て居れば、引き入れられる様で、

吾れ知らず飛び込みたくなる。

三年前余は印度洋を東から西へと渡つた。日々海を眺めて暮らした。海の魔力が

次第に及ぶを感じた。三等船客の中に、眼が悪いので歐洲廻りで渡米する一青年が

あつて「思出の記」を持て居た。ペナンからコロムボの中間で、余は其思出の記を

甲板から印度洋へ抛り込んだ。思出の記は一瞬の水煙を立て、印度洋の底深く沈ん

で往つたようであつたが、彼小人菊池慎太郎が果して往生したや否は疑問である。

印度洋は妙に人を死に誘う処だ。

みみずのたはこと

(明治四十二年 五月十二日)

自動車

九十一歳の父と、八十四歳の母と逗留^{とうりゅう}に來ると云う。青山から人力車では、一時間半はかゝる。去年までは車にしたが、今年^{ことし}は今少し楽^{らく}なものをと考へて、到頭以前睥睨^{へいげい}して居た自動車をとることにした。実は自身乗つて見たかつたのである。

自動車は余の嫌いなものゝ一^{ひとつ}である。曾て溜池^{ためいけ}の演伎座^{えんぎざ}前で、微速^{びそく}力で駈^かけて來た自動車を避^さけおくれて、田舎者の婆^{こうもり}さんが洋傘^{ようさん}を引かけられて転^{ころ}んだ。幸に大した怪我^{けが}はなかつたが、其時自動車の内から若い西洋人がやおら立上り、小雨^{こさめ}を厭^{いと}うて悠々^{ゆうゆう}と洋傘^{ようさん}をひらいて下り立つた容子のあまりに落つき払つたのを、眼前に見た余は、其西洋人を合せて自動車に対する憎惡^{そうお}を抑^{おさ}えかねた。自動車は其後余の嫌いなものゝ一^{ひとつ}であつた。

然るに自身乗つて見れば、案外乗心地が好い。青山から余の村まで三十分で來た。父が「一家鶏犬一車上、器械妙用瞬間行」など惡詩^{あくし}を作つた。工合^{ぐあい}が好いので、歸りも自動車にした。今度のは些^{ちと}大きく、宅^{そば}の傍までは來ぬと云う。五丁程歩んで、乗つた。栗梅色^{くりうめいろ}に塗^ぬつた真新しい箱馬車^{はこばしやしき}式の立派なものだ。米國から一昨日着いたばかり、全速^{ぜんそく}五十哩^{まいる}、六千円出たそうだ。父、母、姉、妻、女は硝子戸^{がらすど}の内に、余

は運転手と並んで運転手台に腰かけた。

運転手の手にハンドルが一寸握られると、物珍らしさにたかる村の子供の群を離れて、自動車はふわりと滑り出した。村路を出ぬけて青山街道に出る。識る顔の右から左から見る中を、余は少しは得意に、多くは羞明しように、眼を開けたりつぶつたりして馳せて行く。坂を下つて、田圃を通つて、坂を上つて、車は次第に速力を出した。荷車が驚いて道側の草中に避ける。鶏が刮々叫んで忙て、遁げる。小児の肩を捉え、女が眼を円くして見送る。囂々、機関が鳴る。弗々々、屁の如く放り散らすガソリンの余煙。後には塵も雲と立とうが、車上の者には何でもない。あたり構わず突進する現代精神を具象した車である。但人通りが少ないので、此街道は自動車には理想的な道路と云つてよい。

豪徳寺附近に來ると、自動車はかく入れた馬の如く、決勝点を眼の前に見る走者の如く、宛ながら眼を睜り、呷と口を結んで、疾風の如く駛せ出した。余は帽子に手を添えた。麦畑や、地蔵や、眼と口を一緒にあげた女の顔や、人の声や、眼まぐろしく駈けて來ては後へ飛ぶ。機関の響は心臓の乱拍子、車は一の砲弾の如く飄、倏と唸つて飛ぶ。

「今三十五哩の速力です」と運転手が云う。

エクスタシー

余は痛快であつた。自動車の意志は、さながら余に乗り移つて、臆病者も一種の恍惚に入つた。余は次第に大胆になつた。自動車が余を載せて駈けるではなく、余自身が自動車を駆つて斯く駛せて居るのだ。余は興に乗じた。運転手台に前途を睥睨して傲然として腰かけた。道があらうと、無からうと、斯速力で世界の果まで驀地に駈けて見たくなつた。山となく、野となく、人でも獣でもあらゆるものを乗り越え踏みつけ、唯真直に一文字に存分に駈けて駈けて駈けぬいて見たくなつた。硝子戸の内を見かえれば、母は眼を閉じ、父は口を開き、姉と妻兒は愉快そうに笑つて話して居る。

「何の位でとめられるですかね」またそろ／＼臆病風が吹いて来た余は、右手にかけて居る運転手に問うた。

「三間前ならトメます。運転手は中々頭がなければ出来ません」

「随分神経を使うですね」

「エ、然し愉快です——力ですから」

忽世田ヶ谷村役場の十字路に来了。南に折れて、狭い路を田圃に下り、坂を上つて世田ヶ谷街道に出るまで、荷車が来はせぬか、荷馬車が来はせぬか、と余はびく／＼ものであつた。

世田ヶ谷に出て、三軒茶屋以往は、最早東京の場末である。電車、人力車、荷車、

荷馬車、馬、さまざまの人間の間を、伶俐りこうな自動車は巧に縫うて、家を出て三十分、まさに青山に着いた。

余は老人子供を扶たすけ下ろして、ホット一息ついた。

（明治四十五年 五月十八日）

デカの死

昨日隣字に知辺の結婚があつた。余は「みゝずのたはこと」の校正を差措いて、鶴子を連れて其席に連なり、日暮れて帰ると、提灯ともして迎えに来た女中は、デカが先刻甲州街道で自動車に轢かれたことを告げた。今朝も奥の雨戸を開けると、芝生に腹這いながら、主人の顔を見て尻尾振りくした。書院の雨戸を開けると、起きて来て縁に両手をつき、主人に頭撫でられて嬉しうに尾を振つて居た。正午の頃までは、裏の櫟林で吠えたりして居た。何時の間に甲州街道に遊びに往つて無惨の最後を遂げたのか。

尤も彼は此頃ひどく弱つて居た。彼は年来ピンの押入婿であつたが、昨秋新に村人の家に飼われた勇猛の白犬の為に一度噛み伏せられてピンをとられて以来、俄に弱つて著しく老衰して見えた。彼は其の腹慰せであるかの如く、何処からかまだ子供々々した牝犬を主人の家に連れ込んだ。如何に犬好きの家でも、牝犬二匹は厄介である。主人は度々牝犬を捨てたが、直ぐ舞戻つて来た。到頭近所の人を頼み、わざゝ汽車で八王子まで連れて往つて捨てゝもうた。二週間前の事である。其後デカが夜毎に帰つては来たが、昼は其牝犬を探がしあるいて居るらしかった。探が

し探がして探がし得ず、がっかりした容子は、主人の眼にも笑止に見えた。其様な事で弱つて居る矢先、自動車に轢かるゝ様なことになったのだらう。春秋の筆法を以てすれば、取りも直さず牝犬を捨てた主人の余の手にかゝつて死んだのである。

彼は幡ヶ谷の阪川牛乳店に生れて、其処此処に飼われた。名もポチと云い、マルと云い、色々の名をもつて居た。ある大家では、籍まで入れて飼つて居たが、交尾期にあまり家をあけるので、到頭離籍してううた。其様な事で彼は甲州街道の浮浪犬になり、可愛がられもし窘められもした。最後に主従の縁を結んだのが、粕谷の犬好きの家だった。デカは粕谷の犬になつて二年経た。渡り者のくせで、子飼から育てたピンの如くはあり得なかつた。主人に跟いて出ても、中途から氣が變つて道草を喰つたりしては、水臭いやつたと主人に怒られた。雄犬の癖でもあるが、よく家をあげた。先の主、先々の主、其外一飯の恩ある家をも必訪ねた。悪戯でもして叱られると、直ぐ甲州街道に逃げて往つた。然し彼はよく主人をはじめ一家の者にならずいて、仮令余が彼を撲ちたゝくことがあつても、彼は手足をちぢめて横になり、神妙に頭をのべて鞭を受けた。其為め余が鞭の手は自然に鈍るのであつた。彼は長い間浮浪犬として飢しい目をした故である、食物を見ると意地汚なく涎を流した。文豪ジョンソンが若い時非常の貧苦を経た結果、位置が出来ても、物を食えば額にふと筋現われ、汗を流し、犬の如くむしゃく喰うた、と云う逸話を思い浮べて、

甚可哀想かあいそうになった。其れから彼は餅もちでもやると容易よういに食くわず、熟じつと主人の顔を見て、其れ切りですか、まだありますかと云う貌かおをした。三つも投なげて、両手ひらを開いて見せると、彼は納得なつとくして、三個ながら口に啣くわえて、芝生に行つてゆる／＼食うのが癖であつた。彼は浮浪の癖が中々脱ぬけなかつた。先の白も彼に色々の厄介をかけたが、デカも近所の鶏とりを捕つたりして一再いつさいならず迷惑をかけた。去年の秋の頃は、あまりに家をあけるので、煩惱ぼんのうも消え失せ、既に離籍りせきしようかとした程であつた。其れがまた以前の如く居付く様になり、到頭余が家のデカで死んだ。

今朝懇意こんいの車屋がデカの死骸しがいを連れて来た。死骸は冷たくなつて、少し眼をあいて居たが、一点の血痕けつこんもなく、唯鼻先に土がついて居た。其死を目撃もくげきした人の話に、デカは昨日甲州街道の給田きゆうでんに遊びに往つて、夕方玉川から歸る自動車目がけて吠ほえ付いた。と思うたら、自動車のタイヤに鼻づらを衝つかれたのであろう、ひよろ／＼と二度ばかり顛ころんだ。自動車は見かえりもせず東京の方に奔つて了うた。其容子を見て居た人は、デカを可愛がる人であつたので、デカを連れ込んで、水天宮の御符おふだなど飲のみましたが、駄目であつた。

余は鶏柵けいさく内のミズクサの木の根を深く掘つて、薦こもに包つつんだまゝ眠つた様なデカの死骸ほうむを葬むつた。

みみずのたはこと

(大正二年 二月十七日)

ハムレット

帝国劇場で文芸協会のハムレットがある。芝居と云うものを久しく見ず、評判の帝国座もまだ覗いたことが無いので、見物に出かける。

劇場の外観は白っぽく冷たく、あまり好い感じがせぬ。内は流石に綺羅びやかなものであった。二階の正面に陣取つて、舞台や天井、土間、貴頭のボックスと、ずっと見渡した時、吾着物の中で土臭い体が萎縮するように感じた。

幕が上った。十五六世紀の西洋の甲冑着けた士卒が出て、鎌倉武士の白を使う。ぼろい亡霊の出になる。やがて丁抹王城の場になる。道具立は淋しいが、国王は眼がぎろりとして、如何にも悪党らしい。ガアツルード妃は血色が好過ぎ若過ぎ強過ぎた。緑の上衣の若者を一寸ハムレットかと思うたら、そうではなくて、少し傍見をして居た内に、黒い喪服のハムレットが出て来て、低い腰掛にかけて居た。余は熟々とハムレットの顔を見た。成程違わぬ。舞台のハムレットには、幼な顔の土肥君が残つて居る。

土肥君は余の同郷、小学校の同窓である。色の浅黒い、顎の四角な、鼠の様な可愛い、黒い眼をした温厚な子供であった。阿父が書家樵石先生だけに、土肥君も子供

の時から手跡見事に、よく学校の先生に褒められるのと、阿父が使いふるしの払子の毛先を剪み切った様な大文字筆を持つて居たのを、余は内々ひどく羨んだものだ。其れは西郷戦争前であつた。余等の仲間では、仲の好い同志遊びに往つたり来たり泊つたりしたものだ。ある時余は学校の帰りに土肥君と他の二三人を「遊びに来らし」と引張つて、学校から小一里もある余の家に伴のうた。遊んで居る内日が暮れたので、皆泊ることにした。土肥君は彼鼠の様な眼を見据えて、やゝ不安な寂しそうな面地をして居たが、皆に説破されて到頭泊つた。枕を並べて一寝入りしたと思ふと、余等は起された。土肥君の宅から迎えの使者が来たと云うのである。土肥君はいそゝ起きて一人帰つて往つた。為めに余等は甚興を失つたが、子供の事だ、其まゝ寝ついた。翌日はみやげにすると云うて父が秘蔵のシャボテンの芽をかいで、一同土肥君の宅に押しかける途中、小川で水泳して、枯れてはいけぬと云うて砂の中にシャボテンの芽を仮植えしたりしたことがある。其頃の土肥君は、色は黒いが少々の様なつゝましい子であつた。余は西郷戦争の翌年京都に往つた。其れからかけ違つて君に逢わざること三十三年。三十四年目に帝国座の舞台で丁抹の王子として君を見るのである。

興味は一幕毎に加わつて行く。オフィリヤは可憐であつた。劇中劇の幕の終、ハムレットの狂喜が殊に好かつた。諫言の場もハムレットの出来は好かつた。矢張王妃

が強過ぎた。ポロニアスは手に入つたもの。ホラシオは間がぬけた。オフィリヤの狂態きやうたいになつての出は凄く好かつた。墓場はかばで墓掘の歌う声が実に好く、仕ぐさも輕妙であつた。

要するに帝国劇場は莊麗なもの、沙翁劇さおうげきは真面目まじめで案外面白いものであつた。

大詰おおづめの幕がひかれたのが、九時過ぎ。新宿から車で帰る。提灯ちやうちんの火が映る程、街道かいどうは水が溜たまつて居る。

「降つたね」

「えゝゝ。ひどい降りでした。上かみでは雹ひようが降つたてます」

余等が帝劇のハムレットに喜憂きゆうを注いで居る間に、北多摩きたたまでは地が真白になる程雹が降つた。余が畑こむぎの小麦も大分こぼれた。隣字となりあざでは、麦は種たねがなくなり、桑くわも蔬菜そさいも青い物全滅ぜんめつの慘状さんじように會うた。

(明治四十四年 五月二十四日)

春の暮

にわせししょう

庭石菖、またの名は草あやめの真盛りである。茜あかねがかつた紫と白と、一本二本はさしてめでたい花でもないが、午ごの日を受けて何万となく庭一面に咲く時は、緑の地に紫と白の浮き模様もよう、花毛氈はなもちせんを敷いた様に美しい。見てくれる人がないから、日傭ひようのおかみを引張つて来て見せる。

草あやめの外には、芍薬しやくやく、紫と白と黄の溪蓀あやめ、薔薇ばら、石竹せきちく、瞿麦とこなつ、虞美人草ぐびじんそう、花芥子はなげし、紅白除虫菊こうはくじゆちうきく、皆存分に咲いて、庭も園も色々に明るくなつた。

畑では麦が日にく照つて、周囲あたりの黯い緑に競うきそ。春蟬はるせみが鳴く。剖葦よしきりが鳴く。蛙かわずが鳴く。青い風が吹く。夕方は月見草つきみそうが庭一ぱいに咲いて香るかお。

今日は雨が欲しく、風が恋しくこい、蔭かげがなつかしい五月下旬の日であつた。蟬せみの音ね、色づいた麦、耳にも眼にもじりくと暑くあつ、光る緑に眼は痛い様であつた。果然かせん寒暖計かんだんけいは途方もない八十度を指したさ。

落葉木らくようぼくが悉皆すつかり若葉から青葉になつた処で、檉かし、松まつ、杉すぎ、樅もみ、椎等しいの常緑樹とぎわぎや竹の類るいが、日にく古葉ふるはを落しては若々しい若葉をつけ出した。此頃は毎日掃はいても檉かしの古葉が落ちる。

気^き軽^{がる}な落葉木の若葉も美しいが、重々しい常緑樹の柄^{がら}にない嫩^{やわら}かな若葉をつけた処も中々好い。ゆさ／＼と嫩^{やわ}らかな食^くえそうな若葉をかぶった白樫^{しらかし}の瑞枝^{みずえ}、杉^{かいいりよく}は灰緑の海藻^{かいそう}めいた新芽^{しんめ}を簇^{むらだ}立て、赤松^{あかまつ}は赭^{あか}く黒松^{くろまつ}は白っぽい小蠟燭^{しょうろうそく}の様な心芽^{しんめ}をつい／＼と枝^{うし}の梢^{しん}毎^{ごと}に立て、竹はまた「暮春には春服已に成る」と云った様に譬^{たと}え様もない鮮^{あざ}やかな明るい緑^{みどり}の簑^{みの}をふっさりとかぶって、何れを見ても眼^{まなこ}の喜^{よろこび}である。

今夜はじめて蚊^かが一つぶウンと唸^{うな}った。

「蚊一つに寝^ねられぬ宵^{よひ}や春の暮^{くれ}」

春^もは最早^も暮^もるゝのである。

(明治四十五年 五月二十六日)

首夏

先日七の家から茄子苗を買ったら、今朝七の母者がわざ／＼茄子の安否を見に来た。

此頃の馳走は豌豆めしだ。だが、豌豆にたかる黒虫、青虫の数は、実に際限がない。今日も夫婦で二時間ばかり虫征伐をやった。虫と食を争い、蠅と住居を争い、人の子もこゝさん／＼の体たらくだ。

午後筍買いに隣村まで出かける。筍も末だ。其筈である、新竹伸びて親竹より早一丈も高くなつて居る。往復に田圃を通つた。萌黄に萌え出した苗代が、最早悉皆緑になつた。南風がソヨ／＼吹く。苗代の水に映る青空に漣が立ち、二寸ばかりの緑秧が一本一本涼しく靡いて居る。

両三日来夜になると雷様が太鼓をたゞき、夕雲の間から稲妻がパツと射したりして居たが、五時過ぎに到頭大雷雨になり、一時間ばかりして霽れた。

袷では少し冷つくので、羅紗の道行を引かけて、出て見る。門外の路には水溜りが出来、熟れた麦は俯き、櫟や櫓はまだ緑の雫を滴らして居る。西は明るい、東京の空は紺色に曇つて、まだごろ／＼遠雷が鳴つて居る。武太さんと伊太さんが、

胡瓜きゅうりの苗を入れた大きな塵取ごみとりをかゝえて、跣足はだしでやつて来る。
最早夏に移るのだ。

(明治四十四年 五月二十七日)

憎むと枯れる

戸を開けると、露つゆ一白いっぽく。芝生しばふには吉野紙よしのがみを広げた様な蜘蛛網くものあみが張つて居る。小さな露の玉を瓔珞ようらくと貫いた蜘蛛の糸が、枝から枝にだらりと下つて居る。

門の入口に甘い香がすると思うたら、籬根かきねにすいかずらの花が何時の間に咲いて居る。

生々又生々。營々且營々。何処を向いても凄じい自然の活気に威圧される。田圃たんぼには泥声だみこえあげて蛙が「生めよ殖えん」とわめく。雀や燕は出産を気がまえて、新巢しんすの経営に忙しく、昨日も今日も書院の戸袋に巣をつくるとて、チュツ／＼チュツ／＼喧しく囀りながら、さまざまの芥をくわえ込む。蠅がうるさい。蚊がうるさい。薔薇ばらにも豌豆にも数限りもなく虫が涌く。地は限りなく草を生やす。四圀あたりの自然に攻め立てられて、万物の靈殿れいどのも小さくなつて了いそうだ。

隣の金さんが苗をくれた南瓜とうなすの成長を見に来たついでに、斯様な話をした。金さんの家に、もと非常によく実る葡萄があつた。一年家の新ちゃんあるとしが葡萄をちぎると棚たなから落ち、大分の怪我をした。それからと云うものは、家の者一同深く其葡萄の木を憎んだ。すると、葡萄は何時となく枯れて了うた。憎むと枯れる。面白い話。

新約聖書に、耶蘇^{やそ}が実^{みの}らぬ無花果^{いちじく}を通りかゝりに咥^{のろ}うたら、夕方帰る時最早枯れて居たと云う記事がある。耶蘇程の心力の強い人には出来そうな事だ。

夕方真紅^{まつか}な提灯^{ちようちん}の様な月が上った。雨になるかと思うたら、水の様な月夜になった。此の頃は宵毎^{よいごと}に月が好い。夜もすがら蛙^かが鳴く。剖葦^{よじきり}が鳴く。月に浸^{ひた}されて生活^{われら}する我儕^{われら}も、さながら深い静かな水の底^{そこ}に住んで居る心地がする。

(明治四十五年 六月一日)

麦愁

机に向うて、終日兀座。こつぎ

外は今にも降りそうな空の下に、一村総出の麦收納。むぎしゆうのう 此方では鎌の音簾々。さくさく 彼方では昨日蒔つたのを山の様に荷車に積んで行く。時々賑やかな笑声が響く。ひび 皆欣々として居る。労働の報酬が今来るのだ。嬉しい筈。

例年麦秋になると、美的百姓先生の煩悶がはじまる。余は之を自家の麦愁と名づける。先生の家にも、大麦小麦を合わせて一反そこらの麦の收納をするが、其れは人を傭うたりして直ぐ片づいてしまふ。慰みにくるり棒を取った処で、大した事も無い。買った米を食う先生には、大麦の二俵三俵取れたところで、何でも無いのだ。単純な充実した生活をする農家が今勝誇る麦秋の賑合の中に、氣の多い美的百姓は肩身狭く、憊れた心と焦々した氣分で自ら己を咀うて居る。さっぱりと身を捨て、真実の農にはなれず。さりとて思う様に書けもせず。彼方を羨んで見たり、自ら憐んで見たり。中途半端な吾儘生活をする罰だ。ばち 致方は無い。もとより見物人も役者の一人ではある。然し離れて独り見物は矢張寂しい。さび

終日懊惱。おうれう 夕方庭をぶら／＼歩いた後、今にも降り出しそうな空の下に縁台に腰

かけて、庭一ぱいに寂寥^{さびしさ}を咲く月見草の冷たい黄色の花をやゝ久しく見入った。

（明治四十五年 六月五日）

堀川

一

新聞を見たら、今夜本郷中央会堂で呂昇の堀川がある。蓄音器では、耳にタコの出来る程鳥辺山トリベやまも聞いて居る。生の声しょうで呂昇の堀川は未だ聞かぬ。咽喉のどが悪いとて療治をして居ると云うが如何だろう、と好奇心も手伝うて、午後独歩荻窪停車場さして出かける。

デカが跟こうむいて来る。ピンは一昨夜子を生んだので、隣家となりの前まで見送つて、御免を蒙こうむつた。朝来の雨は止んで、日が出たが、田圃はまだ路が悪い。田植時たうえどきも近いので、何どの田も生温なまぬるい水満々と湛たたえ、短冊形たんせんがたの苗代は緑の嫩葉わかばの勢揃せいぞろい美しく、一寸其上うへにころげて見たい様だ。泥どろの楽人蛙がくじんの歌が両耳に溢あふれる。甲州街道を北へ突切つつきて行く。大麦は茹ふとられ、小麦は少し色づき、馬鈴薯や甘藷さつまいも、草箒くさほうきなどが黒い土を彩いろどつて居る。其間を太ふといはりがねを背負さかつて二本ずつ並んで西から北東へ無作法ぶさほうに走いつて居るのが、東京電燈の電柱である。一部を赤く塗ぬつて、大きな黒文字で危険と書き、注意と書いてある。其様そのような危険なものなら、百姓の頭の上を引張ひっぱらずと、地下

でも通したらよさそうなものだ。

よく身投みなげがあるので其袂たもとに供養くようの卒塔婆そとばが立つて居る玉川上水の橋を渡つて、田圃ほばしらに下り、また坂を上つて松友の杉林の間を行く。此処の杉林は見ものである。橋、電柱、五月鯉さつきのこいの棹さおなどになるのが、奇麗に下枝を下ろされ、殆んど本末の太さの差もなく、轟々すくすくと天を刺して居る。電燈会社は、此杉林を横断おうだんして更に電線を引きたがつて居るが、松友の財産家が一万円出すと云う会社の提議ていぎを刎はねつけて応ぜぬので、手古摺てこずつて居るそうである。

雨がはら／＼と来た。ステッキ一本の余は、降つたり止んだりする危あぶなげな空を眺め／＼行く。田無街道を突切つて、荻窪停車場に來た。

中野まで汽車。中野から電車。お茶の水で下りて、本郷中央会堂に往つた。

二

何の為の慈善演芸会か知らぬが、中央会堂はほゞ一ぱいになつて居た。演壇では、筒袖つつそでの少年が薩摩琵琶さつまびわを弾ひいて居た。凜々りんりんしくて好い。次ぎは呂昇の弟子の朝顔ぎげん日記浜松小屋。まだ根から子供だ。其れから三曲合奏さんきよくがっそうの熊野くまの。椅子にかけての琴、三絃さんせんは、見るにあぶなく、弾きに／＼はあるまいかと思われた。三曲済ききうけいんで休憩

になつた。

九時二十分頃、呂昇が出て来て金屏風の前の見台に低頭した。連れ弾は弟子の昇華。二人共時候にふさわしい白地に太い黒横縞段だら肩衣を着て居る。有楽座で初めて中将姫を聞いた時より若く今宵は見えた。場内は一ぱいになつた。頭の禿げた相場師らしいのや、瀟洒とした服装の若い紳士や、涼しく装うた底髪、皆呂昇の聴者である。場所柄に頓着なく、しつかり頼みますぞ、など声をかける者がある。それを笑う声も起つた。

呂昇は無頓着に三絃取つて斜に構え、さつさと語り出した。咽喉をいたため療治中だと云うに、相変らず美しい声である。少しは加減して居る様だが、調子に乗ると吾を忘れて声帯が震うらしい。語り出しは、今少しだ。鳥辺山は矢張好かつた。灯影明るい祇園町の夜、線香の煙絶々の鳥辺山、二十一と十七、黒と紫とに包まれた美しい若い男女が、美しい呂昇の声に乗つてさながら眼の前に踊つた。お俊のさわりはますく好い。呂昇が堀川のお俊や、酒屋のお園や、壺坂のお里を語るは、自己を其人に托するのだ。同じ様な上方女、同じ様な氣質の女、芸と人とかピッタリ合うて居るのだ。悪かろう筈がない。呂昇が彼美しい声で語り出す美しい女性の魂は、舞台のノラを見たり机の上の青鞥を読んだりする娘達に、如何様な印象を与うるであらうか。余は見廻わした。直ぐ隣の腰かけに、水際立つてすすきりとした装

をした十八九の庇髪ひさしがみが三人並んで居る。二人は心を空そらにして呂昇の方を見入って居る。一人の金縁眼鏡には露が光って居る。日の若い単純たんじゆんな代よも、複雑な今日も、根本こんぽんの人情に差違はない。唯真故新ただしんゆえにしん、古い芸術も新しい耳によく解せられるのである。

猿廻しさるまわに來た。此は呂昇の柄がらにも無いし、連れ弾もまづいし、大隈を聞いた耳には、無論物足らぬ。と思いつゝ、十数年前の歌舞伎座かぶきざが不図眼の前に浮んだ。ぽつと髪かつらをかぶった故人菊五郎の与次郎が、本物の猿を廻まわしあぐんで、長い杖つえで、それ立たつのだ、それ辞義じぎだと、己わが物好きから舞台面の大切たいせつな情味を散々に打壊ぶちこわして居る。今の梅幸の栄三郎のお俊が、美しい顔に涙はなくて今にも吹き出しそうにして居る。故人片市の婆さんばあと、故人菊之助の伝兵衛ひとりしんみょうが独神妙ひとりしんみょうにお婆さんになり伝兵衛になつて舞台を締しめて居る。余は菊之助が好きだった。彼が真面目まじめな努力の芸術は、若いながらも立派なものであつた。彼は自身がする程の役には、何様どんな役でも身を入れて勤めた。養父ようふも義弟も菊五郎や栄三郎寧寺島父子になつて了しまうた堀川の芝居の此猿廻きりわしの切きりにも、菊之助のみは立派りっぱな伝兵衛であつた。最早彼は此世に居ない。片市も、菊五郎も居ない。

夥おびただしい拍手が起つた。吾わに復かえると呂昇と昇華が演壇の上に平伏ひれふして居た。

堀川は十時十五分に終った。外に出ると、雨がぼと／＼落ちて居る。雨傘と、懷中電燈の電池でんちを買つて、電車で新宿に往つた。追分おひわけで下りて、停車場前の陸橋を渡ると、一台居合わせた車に乗つた。若い車夫はさつさと挽ひき出す。新町を出はなれると、甲州街道は真暗で、四辺あたりはひっそりして居た。余程降つたと見えて、道が大分悪い。

「旦那は重うございますね。二十貫かんから御ありでしょう」

「なまけるからね」

「エ、如何どうしても体を烈はげしく使つかうと、ふとりませんな。私ですか、私は十四貫しかありません」

車夫は市川の者、両親は果て、郷里の家は兄がもち、自身は今十二社じゅうにぞうに住んで、十三の男児むすこを頭に子供が四人、六疊と二疊を三円五十錢で借り、かみさんは麻あさつなぎの内職をして居る。

「だから中々遊んで居られませんや」

鳥山からすやまの口で下りて、代を払い、南へ切れ込んだ。

雨は止んで居る。懷中電燈の光を便たよりに、真黒い藪蔭やぶかげの路を通つて、田圃たんぼに下りた。夜目にも白い田の水。蛙かわずの声が雨の様だ。不図東そらの空を見ると、大火事の様に

空が焼けて居る。空に映る東京の火光である。見る／＼すうと縮み、またふつと伸びる。二百万の生霊が吐く息ひく息が焰になるのかと物凄い。田圃の行き止まりに小さな流れがある。其処に一つ碧い光が居る。はっと思うと、ついと流れた。螢であつた。田圃を上りきると、今度は南の空の根方が赤く焼けて居る。東京程にもないが、此は横浜の火光であろう。村々は死んだ様に真黒に寝て居る。都は魘われた様に深夜に火の息を吐いて居る。

(明治四十五年 六月十日)

ムロのおかみ

目籠めかごを背負せおつて、ムロのおかみが自然薯じねんじょを売りに来た。一本三錢宛で六本買う。十五錢に負まけろと云うたら、それではこれが飲のめぬと、左の手で猪口ちよこをこさえ、口にあてがつて見せた。

ムロのおかみは酒が好きである。

ムロのおかみは近村きんそんの者である。夫婦はもと兄の家のムロに住んで居たので、今も「ムロ」さんくと呼ばれて居る。夫婦して一つコップから好きな酒を飲み合い、暫時しばしも離れぬので、一名鴛鴦おしの称がある。夫婦は農家の出だが、別に耕たがやす可き田畑も有たぬ。自然薯じねんでも、田螺たにしでも、鱒どじょうでも、終始ひと他人の山林田畑からとつて来ては金に換かえ、飯めしに換え、酒に換える。門松すら剪きつて売ると云う評判がある。村に行わるゝ自然しぜんの不文律ふぶんりつで、相应くらな家計を立てゝ居る者が他人の櫟くぬぎの枝一つ折つても由々ゆゆ敷咎しとがになるが、貧しい者は些ちつとやそとのものをとつても、大目に見られる。ムロの鴛鴦夫婦は、此寛典このかんてんの中に其理想的享樂生活きやうらくせいかつを楽しんで居るのである。

午後到頭雨になった。蛙かわずの声が劣おとらじと雨に競きうてわめく。

夜皆寝て了うたあとで、母屋おもやの段落だんごで二葉亭ふたはてい訳「うき草」を読よんだ。此処ここは引越

した年の秋、無理に北側^{きたがわ}につき足した長五畳の板張^{いたばり}で、一尺程段落になつて居る。勾配^{こうばい}がつかぬので、屋根は海鼠板^{なまこいた}のトタンにし、爪立^{つまだ}てば頭^{つか}が悶^{もん}える天井^{てんじやう}を張つた。先には食堂にして居たので、此狭い船房^{カビン}の様な棺の中の様な室^{しつ}で、色々の人が余等と食を共にした。今は世に亡^なき人々の記憶^{きおく}が、少なからず此処^{ここ}に籠^{こも}つて居る。夜は更^ふけた。余は「うき草」の巻を開^あけたまゝ、読むともなく、想うともなく、テエブルに凭^{もた}れて居る。雨がぼと／＼頭上^{ずじやう}のトタンをた／＼く。ランプが蟋々ともえる。

うき草の訳者二葉亭は印度洋で死んだ。原著者のツルゲーネフは夙^{とう}に死んだ。然しルヂンは生きて居る。ナタリーも生きて居る。アレキサンドラも、ビカソーフも、バンタレフスキーもワルインツォフも生きて居る。

人生短、芸術千古。

(明治四十二年 六月十五日)

田圃の簑笠

朝から驟雨性の雨がざあと降つて来たり、織い雨が煙つたり、蛞蝓が縁に上り、井戸縁に黄な菌が生えて、畳の上に居ても腹の底まで滲み通りそんな湿っぽい日。今日も庭の百日紅の梢に蛇が居る。何処かの杉の森で梟がごろ／＼咽を鳴らして居る。麦が収められて、緑暗い村々に、微しの明るさを見せるのは卵色の栗の花である。

蛙の声の間々に、たぶ／＼、じゃぶ／＼田圃に響がする。見れば簑笠がいくつも田に働いて居る。遠く見れば水戸様の饌にのりそうな農人形が、膝まで泥に踏み込んで、柄の長い馬鍬を泥に打込んで曳やつと捏ね、また打込んで曳やつとひく。他所では馬に引かす犁を重そうに人間が引張つて、牛か馬の様に泥水の中を踏み込み／＼ひいて行く。勞力其ものゝ画姿を見る様で、氣の毒すぎて馬鹿／＼しく、腹が立つ。労働は好いが、何故牛馬の働までせねばならぬ乎。

然し千歳村は約千町歩の面積の内、田はやつと六十町歩に過ぎぬ。田の勞は多くない。馬を使う程でもない、と皆が云う。此れでも昔は馬も居たそうだが、今は馬を飼うも不経済で、馬を使うより人力がまだ／＼ましと皆が云う。共同して馬を飼

うたらと云ったこともあるが共同が中々行われぬ。

馬も一利一害である。余の字には、二三年来二十七戸の内で馬を飼う家が三軒出来た。内二軒は男の子が不足なので、東京からの下肥しめいえひきに馬を飼う事を思い立つたのである。然し石山の馬は、口綱をとって行く主人と調子が合わなかった為、一寸した阪路を下る車に主人は脾腹ひばらと太腿ふとももをうたせ、二月も寝る程の怪我をした。寺本の馬は、新宿で電車に驚いて、盲目の按摩あんまを二人轢ひき倒し、大分の面倒を惹起ひきおこした。其隣の馬は、節句の遊びに乗った親類の村蔵と云う男を刎はね落して、肩骨かたほねを挫くじき、接骨医せつこついに二月も通わねばならぬ様の怪我をさせ、其為一家の予算に狂いが来て、予定の結婚が半歳も延ばされた。

だから馬も考えものだ、と皆が言う。

(明治四十五年 六月十七日)

つゆ霽れ

梅雨中とは云いながら、此十日余思わしい日の目も見ず、たたみ畳を拭くと新しい雑巾ぞうきんが黴かびで真黒になった。今日はからりと霽よろこれて、歎なげばしい日光の代よになった。待ちかねた様に蝉せみが高音たかねをあげる。ほやり／＼水蒸気立つ土には樹影黒々と落ち、処女おとめの袖そでの様に青々と晴れた空には、夏雲が白く光る。戸、障子、窓の限りを開放あけはなして存分に日光と風とを容いれる。

今日の晴を待ちつけた農家は、小踊こおどりして、麦うちをはじめた。東でもばたく、西でもばったばた。東の辰さんの家では、形なりは小さいが気前の好い男振りの好い岩公が音頭とりで、「人里ひとしはなれた三軒屋でも、ソレ、住めば都の風が吹ふウくウ、ドッコイ」歌声賑うらややかにはばったばた。北の金かねさん宅とこは口の重い人達ばかり、家族中で歌の一つも歌おうと云う稻公いねこうは砲兵に、春っ子は小学校に往つて居るので、爺おやじ、長男長女、三男の四人、歌は歌わぬかわり長男の音公が時々「ヨウ」と懸声いきおいに勢をつけて、規則正しくばったばた。西も東も南も北も勇ましい歓喜かちどきの勝鬨かちどき。聞くからに心むねが躍おどる。

つゆ霽れやたう／＼と麦むぎを撲うつ

みみずのたはこと

(明治四十三年 六月二十九日)

有たぬ者

新宿八王子間の電車線路工事が始まつて、大勢の土方が入り込み、村は連日戒嚴令の下にでも住む様に競々として居る。

天下無敵の強者と云えば、土方人足は其一であろう。彼等は頂天立地何の恐るゝ処もない赤裸の英雄である、原人である。彼等は元来裸である。何ももの有たない。有たないから失うことが出来ない。失うものがないから、彼等は恐るゝことを知らぬ。生存競争の戦闘に於て、彼等は常に寄手である。唯進んで撃ち而して取ればよいのである。守ると云うは、有つ者の事である。守ると云うは、已に其第一歩に於て敗北である。

世には有たぬ程強い事はない。有たぬ者は、すべてのものを有つのである。彼等には明日は無い。昨日も無い。唯今日がある、刹那がある。彼等は神を恐れない。王者を恐れない。名聞を思わない。彼等は失うべき富もない。愛む可き家族も無い。彼等は其れより以下に落つ可き何等の位置も有たない。国家か、何ものぞ。法律か、何の関係ぞ。習慣、何の束縛ぞ。彼等は胃の命令と、腸の法律と、皮膚の要求と、舌頭の指揮と、生殖器の催促の外、何の縛らるゝ処がない。彼等は自然力其ものである。

る。一触してタイタニツクを沈めた氷山である。華麗な羅馬の文明を鉄蹄に蹂躪した北狄蛮人である。一切の作爲文明は、彼等の前に灰の如く消えて了う。

土を穿ち、土を移し、土を平らし、土を積む。彼等は工兵の蟻である。同じ土に仕事する者でも、農は蚯蚓である。蚯蚓は蟻を恐れる。

有つ者にとつては、有たぬ者程恐ろしい者は無い。土方人足の村で恐れられるも尤である。然しながら何ものも有たぬ彼等も、まだ生命と云うものを有つて居る。彼等は生命を惜む。此れが彼等の弱点である。有たずに強い彼等も、有てば弱くなる虞がある。世にも恐ろしい者は、其生命さえも惜まぬのみか、如何なる条件をもつて往つても妥協の望がない人々である。彼等は何ものを有つても満足せぬ。彼等は全宇宙を吾有にしなければ満足せぬ。寧吾を全宇宙に与えなければ満足せぬ。其一切を獲ん為には、有てる一切を捨て、了う位は何でもない。耶穌も仏陀も斯恐ろしい人達である。

(明治四十五年 七月十三日)

食われるもの

奥の座敷で日課を書いて居ると、縁に蹲うすくまつて居た猫のトラがひらりと地に飛び下りた。またひらり縁に飛び上ったのを見ると、蜥蜴とかげを啣くわえて居る。窃そと下ろした。蜥蜴は死んだのか、気絶したのか、少しも動かぬ。トラはわんぐりと喰くいはじめた。まだ生きて居ると見えて、蜥蜴の尾おが右左に揺うごいた。トラは遽あわてず、眼を閉とじ、頭を傾かしげて、悠々ゆうゆうと味わい／＼食くつて居る。小さな豹ひようか虎かを見て居る様で、凄すしい。蜥蜴の体は最早トラの胃の中にあるに、切れて落ちた鋼鉄色の尾の一片は、小さな一足の虫かなんぞの様にぐるつと巻まいたりほどけたりして居る。トラめは其れも鵜呑うのみにしてうた。蜥蜴のカタミは何も無い。日は相変らず昭々しょうしょうと照らして居る。地球は平氣はしで駛はつて居る。木の葉一つソヨがぬ。トラは蜥蜴を食くつてしまつて、世にも無邪氣むじやきな顔をして、眼を閉じて眠なつてうた。

昨日は庭で青白い蜈蚣あおむし蛉からいろを褐色のフウ虫二足で螫さし殺して吸すうて居るのを見た。

一昨日は畑を歩いて、苦しい蛙かわずの鳴き声を聞いた。ドウしても蛇へびにかゝつた蛙の鳴き声と思つて見まわすと、果然二尺ばかりの山かゞしが小さな蛙の足を啣くわえて居る。余は土塊つちくれを投げつけた。山かゞしは蛇の中でも精悍せいかんなやつである。蛙の腿ももを啣

えながら鎌首^{かまくび}をたてゝ逃げて行く。竹ぎれを取つて戻ると、玉蜀黍^{とうもろこし}の畑に見えなくなつた了うた。

優勝劣敗^{ゆうしょうれつぱい}は天理である。弱肉強食は自然である。宇宙は生命^{いのち}のとりやりである。

然し強いものゝ上に尚強いものがあり、弱いものゝ下に尚弱いものがある。而して一番弱いものが一番強いものに勝つ場合もある。顕微鏡^{けんびきょう}下に辛うじて見得る一細菌^{さいきん}が、神の子だイヤ神だと傲^{おご}る人間を容易に殺して了うではないか。畢竟^{ひつぎよう}宇宙は大円^{だいえん}。生命は共通。強い者も弱い。弱い者も強い。死ぬるものが生き、生きるものが死に、勝つ者が負け、負ける者が勝ち、食う者が食われ、食われるものも却て食う。般若心經^{はんにやしんきやう}に所謂、不増不減不生不滅不垢不淨、宇宙の本体は正に此である。

然し我等は人間である。差別界^{しゃべつかい}に住んで居る。煩惱^{ぼんのう}もある。愚痴^{ぐち}もある。我等は精神的に生きんと欲する如く、肉体の命も惜しい。吾情を以て他を推す時、犠牲^{ぎせい}の叫び^{さけ}は聞きづらい。

ダアキンの兄弟分ワレース博士は、蛇にのまるゝ蛙^{かわず}は苦しい処ではない、一種の温味^{おんみ}にうっとりとなつて快感^{かいかん}を以て蛇の喉^{のど}を下るのだ、と云うた。大役小志^{たいえきしょうし}の志賀氏は、旅順戦役^かを描いて、決死の兵士は精神^{せいしん}的高調^{こうちょう}に入つて、所謂苦痛なるものを大して感じない、と云つて居る。如何にも道理で、また事実さもあるうと思わるゝ。

然し我々は人間である。犠牲の声は聞きづらい。

（明治四十五年 七月二十日）

蛸

今年の自家の麦は、大麦も小麦も言語道断の不作だ。仔細は斯様である。昨秋の麦蒔に馬糞を基肥に使った。其れが世田ヶ谷騎兵聯隊から持つて来た新しい馬糞で、官馬の事だから馬が食つてまだよく消化しない燕麦が多量に雑つて居た。総じて新しい肥料はよくないものだが、自家には堆肥の用意がない為に、坵所なく新しい馬糞に過燐酸を混じて使つた。麦が生えると同時に、馬糞の中の燕麦が生えた。麦が伸びると、燕麦も伸びた。燕麦は麦より強い。麦に追肥をやると、燕麦が勝手に吸つてしまつてドン／＼生長する。麦畑が一面燕麦の畑の様になつた。非常な手数をかけて一々燕麦をぬいたが、最早肝腎の麦は燕麦に負けて其穂は痩せこけたものになつて居た。肥料が肥料を食つてしまつたのである。世には斯様な事が沢山ある。トルストイの遺著の中、英訳になつた劇「生ける屍」を読む。トルストイ化した「イナツク、ア、デン」と云う様なものだ。「暗黒の力」程の力は無いが、捨てられぬ作である。

縁の籐椅子に腰かけて右のドラマを読んで居ると、トルストイ翁の顔やら家族の人々の顔やらが眼の前に浮ぶ。今日は七月一日、丁度六年前ヤスナヤ、ポリヤナに

居た頃である。曇^{くも}ったり晴^はれたりする空^{そら}、上^{のぼ}ったり下^{くだ}ったりする丘^{おか}、緑が茂^もつて、小麦^{こむぎ}が熟^うれて、余^あの今の周囲^{しゅうい}も其^{その}時に似^にて居^ゐる。

最早^{さいぜん}はつきりとは文字^{もじ}の見^みえぬ本^{ほん}を膝^{ひざ}にのせて、先刻^{さつぎ}から音^{おと}もなく降^ふつて居^ゐた織^{ほそ}い雨^{あめ}の其^{その}まゝ融^とけた蒼^{あお}い夕靄^{ゆうもや}を眺^{なが}めて居^ゐると、忽^{たち}ち向^{むか}うの蒼^{あお}い杉^{すぎ}の森^{もり}から、

「リン、——リン、リン」

白銀^{はくぎん}の鈴^{りん}を振^ふる様^{よう}な鋭^{ひびく}い蛸^{せう}の音^{おと}が響^{ひび}いた。

(明治四十五年 七月一日)

夏の一日

眼をさますと、真裸まっぱだかで寝て居る。外では最早むくろし蝸が鳴いて居る。蚊帳かやそと外の暗い隅では、蚊が呿々うんうな唸つて居る。匆はね起きて時計を見れば、五時に十分前。戸をくると、櫟林くぬぎばやしから朝日の金光線が射さして居る。

顔を洗うと、真裸で芝生に飛び下り、磨とぎ立ての鎌かまで芝を苳かりはじめる。雨の様な露くさかりだ。草苳くさかりは露の間の事ま。ざくり、ざくり、ザク、ザク。面白い様に苳かれる。

足を洗あらつて、体からだを拭いて、上ると八時。近來朝飯ぬきで、十時に牛乳ちち一合。

今日は少し日課を書いた。

朝食あさめしの午餐は赤の飯だ。今日は細君たんじようびの誕生日である。昨日何か手に隠して持つて来たのを、開けて見たら白髪しらがが三本だった。彼女にも白髪はが生えたのだ。余は十四五から五本や十本の白髪はあつた。兎に角部分的には最早もともしらが偕白髪と云う域いきに達した訳である。

主婦しゆふの誕生日だが、赤の飯に豆腐汁で、鰯いわしの一尾も無い。午前かじゆえんに果樹園を歩いて居たら、水蜜みづみの早生わせが五つばかり熟じゆくして居るのを見つけた。取りあえず午餐の食卓のほに上す。時にとつての好いお祝。

今日は夏になつて以来の暑い日だ。午後は到頭室内九十度に上つた。千歳村の生活をはじめて六年、九十度は今日が初である。戸と云う戸、障子と云う障子、窓と云う窓を残らず開放し、母屋は仕切の唐紙障子を一切取払うて、六畳二室板の間ぶつ通しの一間にした。飲むと汗になると知りつゝ、たまりかねて冷たい麦湯を飲む、サイダアを飲む。飲む片端からぼろ／＼汗になつて流れる。犬のデカもピンも、猫のトラも、檜の木蔭にぐったり寝て居た。

あまり暑いから髪でも苡ろうかと、座敷の縁に胡踞かく。バリカンが駄目なので、剪で細君が三分に苡つてくれた。今朝苡つた芝が、最早枯れて白く乾いて居る。北海道の牧場の様ですね、と細君が曰う。主人は芝を苡り、妻は主人の髪を苡る。芝の心は知らぬが主人は好い心地になつた。

建具取払つて食堂が潤くなつた上に、風が立つたので、晚餐の卓は涼しかった。飯を食いながら、唯見ると、夕日の残る葎簀の二枚屏風に南天の黒い影が躍つて居る。而して其葎簀を透かして大きな芭蕉の緑の葉がはた／＼揺いて居る。

自動車の響が青山街道にしたかと思うと、東京のN君外三名が甲斐の山の写真を撮りに来たのだ。時刻が晩くて駄目だったが、無理に二枚程撮つて歸つた。

日が傾くとソヨ吹きそめた南風が、夜に入ると共に水の流るゝ如く吹き入るので、ランプをつけて置くのが骨だった。母屋の縁に胡座かいて、身も魂も空虚にして涼風

に浸る。^{ひた}ランプの光射^{あかりさ}す程は、檉^{かし}、ふさもじ、小さな孟宗竹^{もうそうちく}の葉が、一々緑玉に光つて、ヒラ／＼キラ／＼躍^{はね}つて居る。光の及ばぬあたりは、墨画^{すみえ}にかいた様な黒い葉が、千も万も躍^{はね}つて居る。木立^{こだち}の間には白けた夏の夜の空^{そら}が流れ、其処^{そこ}にはまた数限も無い星がチラ／＼瞬^{またた}いて居る。庭の暗の方から、甘い香^{あま}や強い刺戟^{しげきせい}性の香^{ふつふつ}が弗々と流れて来る。山梔子^{くちなし}、山百合の香である。「夏の夜や蚊を疵^{きず}にして五百両」これで蚊さえ居なかつたら。

今日誤^{まちが}つてもいだ烏瓜^{からすうり}を剝^くつて細君^{きよ}が鶴子の為に瓜燈籠^{うりどうろう}をつくり、帆かけ舟^ほを彫^ほつて縁^すにつり下げ、しば／＼風に吹き消^けされながら、小さな蠟燭^{ろうそく}をともした。緑色に透^{とお}き徹^{とお}つた小天地、白い帆かけ舟が一つ中にともした生命^{いのち}の火のつゞく限りいつまでもと其表^{おもて}を駛^{はし}つて居る。

(明治四十五年 七月十八日)

明治天皇崩御の前後

一

明治四十五年七月二十一日。

日曜だが、起きぬけに二時間の芝刈。しばかり

天皇陛下御不例ごふれいの発表があつた。わざわざ発表がある程だ。御重態ごじゅうたいの程も察せられる。

真黒い雲が今我等の頭上ずじょうを覆おほうて居る。

*

午後二時過ぎ、雷鳴、電光、沛然はいぜんと降雨があつた。少し雹ひようが雑まじつて居た。

月番かいしようから回章で、二十七日から二十九日まで、「総郷上あがり正月」のふれが来た。中日が総出で道路の草刈りだ。回章の月番の名に、見馴みなれた寺本の七蔵の名はなくて、息子むすこの喜三郎の名が見える。七蔵さんは此六日に亡なくなったのである。変った月番

の名を見て、一寸哀愁を覚えた。
ちよつとあいしゆう

二

七月二十二日。

土用三郎と云うに、昨日の夕立以来、今日も曇つて涼しいことである。
くも

白桔梗、桔梗の花が五つ六つ。白つぼけた撫子なでしこの花が二つ三つ。芝生しばふの何処かで、

蟋じじと虫が鳴いて居る。

寂しい。
さび

見る／＼小さな雨がほと／＼落ちて来た。

寂しい。

夏さびし桔梗きりかづの花五つ六つ小雨こさめまじりに虫の声して

三

七月三十日。

例れいによつて芝苺り。終つて、桃の木の下で水蜜桃すいみつとうの立喰たちくい。

大きなブリマウス種の雄鶏おんどりが、鶏舎の外で死んで居た。羽毛が其処そこ此処ここにちらかつて居る。昨夜鶏舎の戸をしめる時誤あやまつて雄鶏をしめ出したので、夜中いたち鼯おそに襲おそわれたのである。随分死の苦しみをしたであろうに、家の者はぐっすり寝ね込んで些ちつとも知らなかつた。昨秋以来鼯なんの難にかゝることこゝに五たびだ。前度こに懲こりて、鶏舎の締しまりを嚴重にしたが、外にしめ出しては詮しかた方が無い。梨なしの木の下に埋葬ほうぎよ。午後東京から来た学生せいせいの一人が、天皇陛下こんぎやう今晚一時四十三分崩御ほうぎよあらせられたと云う事を告げた。

陛下崩御——其れは御重態べいじゆうたいの報伝ほうでんわつて以来万更思まんざんい掛けぬ事ではなかつたが。園内えんないを歩いて陛下の御一生を思ふた。

東の方を見ると、空も喪装もそうをしたのかと思われて、墨色すみいろの雲が東京の空をうち覆おほうて居る。暮れ方になつて降り出した。

四

七月三十一日。

鬱陶うつとうしく、物悲しい日。

新聞は皆黒縁くろぐらだ。不図新聞の一面に「睦仁むつひと」の二字を見つけた。下に「先帝御手

跡」とある。孝明天皇の御筆かと思うたのは一瞬時、陛下は已に先帝とならせられたのであった。新帝陛下の御踐祚があった。明治と云う年号は、昨日限り「大正」と改められる、と云う事である。

陛下が崩御になれば年号も更る。其れを知らぬではないが、余は明治と云う年号は永久につゞくものであるかの様に感じて居た。余は明治元年十月の生れである。即ち明治天皇陛下が即位式を挙げ玉うた年、初めて京都から東京に行幸あつた其月東京を西南に距る三百里、薩摩に近い肥後葦北の水俣と云う村に生れたのである。余は明治の齡を吾齡と思ひ馴れ、明治と同年だと誇りもし、恥じもして居た。

陛下の崩御は明治史の巻を閉じた。明治が大正となつて、余は吾生涯が中断されたかの様に感じた。明治天皇が余の半生を持つて往つておしまひになつたかの様に感じた。

物哀しい日。田圃向うに飴屋が吹く笛の一声長く響いて、腸にしみ入る様だ。

五

八月一日。

月の朔で、八幡様に神官が来て、お神酒が上る。諒闇中の御遠慮で、今日は太鼓

も鳴らなかつた。

今日から五日間お経をたてる、と云う言いつぎが来た。先帝の御冥福の為。
鶏小屋に大きな青大將が入つて、模型卵をのんだ、と日傭のおかみが知らして来た。
た。往つて見ると、五尺もある青大將が喉元を膨らして、そこらをのたうち廻つて
居る。卵の積りで陶物の模型卵を呑んで、苦しがつて居るのだ。折から来合わして
居たT君が、尻尾をつまんで鶏小屋から引ずり出すと、余が竹竿でたゝき殺した。
竹で死体を扱いたら、ペロリと血だらけの模型卵を吐いた。此頃一向卵が出来ぬと
思つたら、此先生が毎日召上つてお出でたのだ。青大將の死骸は芥溜に捨てた。少
し経つて見たら、如何したのか見えなかつた。復活して逃げたのかも知れぬ。

六

八月二日。

紅蜀葵の花が咲いた。

甲州玉蜀黍をもぎ、煮たり焼いたりして食う。世の中に斯様なうまいものがある
かと思う。田園生活も此では中々やめられぬ。

今日は土用中ながら薄寒い日であつた。朝は六十二三度しかなかった。尽日北の

風が吹いて、時々冷たい織い雨がほとと落ちて、見ゆる限りの青葉が白い裏をかえして南に靡き、寂しいうら哀しい日であつた。

今日は鶏小屋にほと鼯と見まごうばかりの大鼠が居た。

七

八月八日。

八月に入つて四五日、フランネルを着る様な日が続いた。小雨が降る。雲がかぶさる。北から冷たい風が吹く。例年九月に鳴く百舌鳥が無暗に鳴いたりした。薄い搔卷一つでは足らず、毛布を出す夜もあつた。

今日は久し振りに晴れた。空には一片の雲なく、日は晶々として美しく照りながら、寒暖計は八十二三度を越えず、涼しい南風が朝から晩まで水の流るゝ様に小止なく吹いた。颯々と鳴る庭の松。かさゝと鳴る畑の玉蜀黍。ざわゝと鳴る田川の畔の青萱。見れば、眼に入る緑は皆動いて居る。庭の桔梗の紫揺き、雁来紅の葉の紅戦ぎ、撫子の淡紅靡き、向日葵の黄頷き、夏萩の臙脂乱れ、蟬の声、虫の音も風につれて震えた。夕日傾く頃となれば、風はますます涼しく、樹影は黒く芝生に跳つた。

「秋来ぬと眼にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」。風の音に驚くばかりかは、さやかに眼に見えて立つ秋の姿である。

昨夜は雁^{がんせい}声を聞いた。

今朝向うの杉の森に「ツクツクウシ、ツクツクウシ」と云うほのかな秋蟬の声を聞いた。

暦^{こよみ}を見たら、今日が立秋である。

八

八月十五日。

此頃のくせで、起き出る頃は、毎^{いつ}も満^{まん}目の霧^{きり}。雨だなど思うと、朝飯食つてしま
う頃からからりと霽^はれて、申分なき秋暑^{しゅうしょ}になる。

隣の大^{むら}豆畑に群^{むら}がったカナブンの大軍が、大豆の葉をば食い^{つく}尽^{いちじ}して、今度は自家^{うち}の
畑^{しんにゆう}に侵入した。起きぬけに、夫婦して薙^{むしろ}を畑にひろげ、枝豆や苺^{いちじ}や果樹に群がるカナ
ブンを其上^{ふる}に振り落^おして、石油の空罐^{あきかん}にぶちあけ、五時から八時過ぎまでかゝって、
カナブンの約五升^{とりこ}を擒^とにし、熱湯を浴^{あび}せて殺した。でもまだ十分の一もとれない。
あまり美事^{みごと}の出来だからと云うて、廻^{めぐり}沢から大^{すい}きな水^か瓜^{きり}唯一個かついで売りに来

た。緑地に黒縞くろしまのある洋種の丸水瓜まるすいかである。重量三貫五百目、三十五銭は高くない。井戸に冷ひやして、午後切つて食う。味も好かつた。

一月おくれの盆で、墓かぶ地が賑にぎやかである。細君が鶴子の為に母屋の小さな床おともやに茄子馬なすうまをかざり、黒い喪章もしやうをつけたおもちやの国旗をかざり、ほおずきやら烏瓜からすうりやら小さな栗ふりやら色々供物くもつをならべて、于蘭盆うらぼんの遊びをさせた。

風鈴ふうりんの短冊たんざくが先日の風に飛ばされたので、先帝の「星のとぶ影のみ見えて夏の夜も更け行く空はさびしかりけり」の歌を書いて下げた。西行さいぎやうでも詠よみそうな歌だ。

九

八月十六日。

隣の家鴨あひるが二羽迷い込んだ。雌めすは捕とえて渡したが、雄ゆうが床ゆかの下深く逃げ込んで、ドウしてもつかまらない。隣の息子むすこが雌めすを連れて来て、刮々くわくくわく云わしたら、雄はひとりでに床の下から出て来て、難つかなく捉とまった。今更の様だが女の力。

夕方縁えんの籐椅子とういすに腰かけて、静に夕景色を味う。荳かりあと青い芝生も、庭中の花と云う花も蔭かげに入り、月下香の香が高く一庭に薰くんずる。金の鎌の様な月が、時々雲に入ったり出たり。南方あわに淡い銀河が流れる。星もちらほら出て居る。村々は最早もう黒

う暮れて、時々眩^{まぶ}しい火光^{あかり}がぱつと射す。船橋の方には、先帝^{せんてい}の御為に上げるのか、
哀々^{あいあい}とした念仏の音が長く曳^ひいて聞こえる。庭ではスイツチヨが鳴く。蟋蟀^{きりぎりす}が鳴く。
夜と云うに、蟬の一種が鳴く。隣の林にはガチャ／＼が鳴く。
寂^{さび}しい涼しい初秋の夜。

御大葬の夜

明治天皇大葬たいそうの夜である。

七時五十分、母屋おもやの六畳を掃はいて、清きよい白布をかけた長方形の大きな低い卓子つくえを東向きに直した。上には、秋草の花を清いけた小花瓶を右左に置き、正面には橢円形だえんけいの小さな鏡を立て、其前に火を入れた青磁せいじの香炉、紫の香包そぼを傍に置いた。いさゝかランプの心を捻ねじると、卓子の上の物皆明るく、心も自おのずからあらたまる。家族一同手を膝ひざに、息をのんで控ひかえた。

柱時計の短針たんしんが八時を指さすか指さぬに、

ドオ…………ン！

待ち設もつけても今更人の心魂こころたまを駭おどろかす大砲の音が、家をも我等の全身をも揺ゆり撼うごかして響ひびいた。

今靈輜宮城れいしじゆを出でさせられるのだ。

あるじ主人は東に向い一拝して香を焚たき、再拝して退さがつた。妻がつゞいて再拝して香を焚たき、三拝して退いた。七歳ななつの鶴子しやうこうも焼香した。最後に婢おんなも香を焚たいて、東を拝たした。

余が家の奉送は終った。

*

余は提灯ちようちんともして、妻と唯二人門を出た。
曇った暗い夜である。

八幡下の田圃まで往つて東を見る。田圃向うの黒い村を鮮やかに劃つて、東の空は月の出の様に明るい。何千何万の電燈でんとう、瓦斯がす、松明たいまつが、彼夜の中の昼を作して居るのであらう。見て居ると、其夥しい明光あかりが、さす息引く息であるかの様に伸びたり縮んだりする。其明りの中から時々電いなすまの様な光がぴかりと騰る。

「何の光だろう？」

「写真とを撮るマグネシウムの光でしょうか」

「否いや、弔砲ひかりの閃光かも知れん」

先程から引つゞいて、大きな心臓しんぞうの鼓動の如く、正しい時を隔て、弔砲ひびが響いて居る。——あゝ鐘が鳴って居る。南のは東覚院とうかくいん、宝性寺ほうしょうじ、安穩寺あんおんじ、北のは——寺、——寺、東にも、西にも、おのがじし然も申合わせた様に、我君眠りませ、永久とこしえに眠りませ、と哀音長く鳴り連れて居る。二つの響はあたかも余等の胸むねの響に通うた、

砲声の雄叫び、鐘声の悲泣。

都も鄙も押並べて黒きを被る斯大なる哀の夜に、余等は茫然と東の方を眺めて立つた。生温かい夜風がそよぐ。稲の香がする。

「行きなさるかね」半丁ばかり北の方で突然人声がした。

「エ、些ンベ行つて見べいと思つて」

田圃道を東の方へ人の足音がした。やがてパチ／＼と拍手の音が闇に響く。

轎車は今何の辺を過ぎさせられるのであろう？

（大正元年 九月十三日）

東の京西の京

(明治天皇の御始終)

西なる京に君は生れましき。

西なる京に生れ玉へる君はしも、東に覇府ありてより幾百年、唯東へ東へと代々の帝父祖の帝の念じ玉ひし東征の矢竹心を心として、白羽二重に緋の袴、五歳六歳の御遊にも、侍女を馬にして、東下りと宣らしつゝ、御所の廊下を駆り玉ひき。

御父祖の夢は、君が代に現となりつ。君は維新のおん帝、御十七の若帝、御束帶に御冠、御板輿に打乗らせ、天下取つたる公卿将卒に前後左右を護らして、錦の御旗を五十三駅の雄風に翻へし、東下りを果し玉ひぬ。

西の京より移り来て、東の京に君はしも四十五年住み玉ひぬ。東の京に住む君は、西なる京なつかしと思さぬにてはあらざりき。父の帝の眠ります西の京、其処に生れまし十六まで育ち玉ひし西の京、君に忘れぬ西の京。せめて暑中は西の京へでも、侍臣斯く申せば、御気色かはり、宣ひけらく「朕西京を嫌ふと思ふか。否、朕は西の京が大好きなり。さりながら、朕、東の京を去らば、誰か日本の政を見むものぞ？」

おほよつしんと

大政しげくして、西なる京へ君はしも、御夢ならでは御幸なく、比叡の朝は霞む

共、鴨の夕風涼しくも、禁苑の月冴ゆとても、鞍馬の山に雪降るも、御所の猿辻猿

の頬に朝日は照れど、鳥啼く棕の梢に日は入れど、君は来まさず。君が御名得し祐

の井の、井のほとりの常磐木や、落葉木の若葉して、青葉となりて、落葉して、年

また年と空宮に年は遷りぬ四十五。

四十五年の御代長く、事稠き代の御安息無く、六十路あまり一年の御顔に寄する

年の波、御魂は慕ふ西の京、吾事終へつと嘘きて、君逝きましぬ東京に。

東下り、京上り、往来に果つるおん旅や、御跡印す駅路の繰りひろげたる絵巻物、

今巻きかへす時は来ぬ。時こそ来つれ、生涯の御戦闘終へて凱旋の。時こそ来つれ、

生涯の御勤勞果て、御安息の。

曩昔の東下りの御板輿を白き柅車に乗り換へて、今こそ君は浄土の西の京へと還

り玉はめ。

(大正元年 九月十三日)

乃木大将夫妻自刃

九月十五日、御大葬ごたいそうの記事を見るべく新聞を披ひらくと、忽たちまち初号活字が眼を射た。

乃木大将夫妻の自殺

余は息いきを飲んで、眼を数行の記事に走らした。

「尤だ、無理は無い、尤だ」

斯く呟つぶやきつゝ、余は新聞を顔に打掩うちおほうた。

*

日清戦争中、山地中將ぶんどりが分捕の高価の毛皮の外套を乃木少将に贈つたら、少将は、
傷病兵しょうびやうへいにやつてしまった。此事を新聞で読んだのが、乃木希典のぎまれすけに余のインテレスト
を持つ様になつた最初であつた。其れから明治廿九年乃木中將が台湾總督たいわんそうとくとなる時、
母堂が渡台の御暇さんだい乞に参内して、皇后陛下の御問に對し、姥ばばは台湾の土にならん為、
悴せがれの先途せんどを見届みとどけん為に台湾に参まいります、と御答こたえ申上げた云う記事は、また深
く余の心に滲しみた。余は此母子が好すきになつた。明治三十四年中、ゴルドン將軍伝

を書く時、余はゴルドンを描く其原稿紙上に乃木將軍の面影がちり／＼と狙つたり徠たりするを禁じ得なかつた。

縁は異なるもので、ゴルドン伝を書いた翌々年「寄生木」の主人公から突然「寄生木」著作の事を委托された。恩人たる乃木將軍の爲めにと云う彼の辞であつた。余は例に無く乗地になつて引受けた。結果が小説寄生木である。

小説寄生木は、該書の巻頭にも断つて置いた通り、主人公にして原著者なる「篠原良平」の小笠原善平が「寄生木」で、厳密なる意味に於て余の「寄生木」では無い。寄生木の大本將軍夫妻は、篠原良平の大本將軍夫妻で、余の乃木大將夫妻では無い。余は嚴に原文に拠つて、如何なる場合にも寸毫も余の粉飾塗抹を加えなかつた。そこで、寄生木は、南部の山中から駈け出した十六歳の少年が仙台で將軍の応接間の椅子に先ず腰かけて「馬鹿ッ！」と大喝されてから、二十八歳の休職士官が失意失恋故山に悶死するまで、其單純な眼に映じた第一印象の実録である。固より將軍夫妻は良平の恩人である爲に、温かい感謝の膜を隔てゝ見たところもある。然し彼は徹頭徹尾單純にして偽ることを得爲ぬ男で、且如何なる場合にも見且感ずるを得る自然の芸術家であつたことを忘れてはならぬ。余は寄生木によつて、乃木大將夫妻をヨリ近く識り得た。

篠原良平は「寄生木」の原稿を余に托し置いて、明治四十一年の秋悶死した。而

して、恩人乃木將軍が其名を書いてくれた墓^ぼ碣^{かく}が故山に建てられた明治四十二年十二月小説寄生木が世に出た。即ち將軍は幕下^{ばくか}の彼が為め死後の名を石に書き、彼は恩人の為^{ため}に生前^{せいぜん}の断片的記伝を紙の上に立てた訳^{わけ}である。

余は寄生木を乃木大將に贈呈^{そうてい}しなかつた。然し伝聞する処によれば、將軍夫妻は讀んだそうだ。將軍は巻中にある某の学資金^{がくしきん}は某大佐に渡したかと夫人に問い、夫人が渡しましたと答えた事、夫人は通讀し終つて、著者は一度も材料の為に訪われもしなかつたに、よくも斯く精確^{せいかく}に書かれた、と云われた事、を聞いた。精確^{せいかく}な答^{はす}だ、記憶の好い本人良平が命^{いのち}がけで書いたのである。余は將軍夫妻の感想を聞く機会を有^もたなかつた。然しながら寄生木を讀んだ將軍夫妻は、生前^{せいぜん}顔を合わすれば棒立^{ぼうだち}に立つてよくは口もきけず、幼年学校でも士官学校でも学科はなまけ、病氣ばかりして、晩年には殊に謀叛氣^{むほんぎ}を見せて、恩義を弁^わえたらしくもなかつた篠原良平が、案外深い感謝あり、理解あり、同情あり、而して個性あり、痛切な苦悶あり、要するに一個真面目の靈魂^{れいこん}であつたことを今更の様に発見したのであらう。兎に角篠原良平の死と「寄生木」とが、寂しい將軍の晩年に於てまた一の慰藉^{いしや}となつたことは、察するに難からぬ。篠原良平が「寄生木」を遺^{のこ}した目的の一は達せられたのである。

余は篠原良平の晩年に於て、劍を抛^{なげ}つ可く彼に勧告し、彼を乃木將軍から奪^{うば}う可く多少の努力をして、彼が悶死の一因を作つたのと、学習院に於て余の為^{ため}可^{すべ}かりし

演説が某の注意に因り院長たる將軍の言によつて差止められたことを聞いた外、乃木將軍とは一回の対面もせず、一通の書信の往復も為なかつた。茫々たる宇宙に於て、大將夫妻と余をいさゝか繋ぐものがあるならば、其は「寄生木」である。

然しながら寄生木は、篠原良平の寄生木で、余の寄生木では無い。唯將軍と余の間に一の縁を作つたに過ぎぬ。乃木將軍夫妻程死花が咲いた人々は近來絶無と云つてよい。大將夫妻は實に日本全國民の崇拜愛慕の的となつた。乃木文学は一時に山をなして出た。斯上蛇足を加うる要はないかも知れぬ。然し寄生木によりて一種の縁を將軍夫妻に作つた余には、また余相應の義務が感ぜられる。此義務は余にとつて不快な義務では無い。余は如何なる形に於てかこの義務を果したいと思つて居る。

コスモス

今日は夏を憶い出す様な日だった。午後寒暖計が六十八度に上った。白い蝶が出て舞う。蠅が活動する。蟬さえ一しきり鳴いた。

今はコスモスの真盛である。濃紅、紅、淡紅、白、庭にも、園にも、畑にも、掃溜の傍にも、惜気もなく心を見せて思いのまゝに咲き盛って居る。誰か見に来ればよいと思うが、終日誰も来ぬ。唯主人のみ黄金の雨と降る暖かい秋の日を浴びて、存分に色彩の饗応に預かる。

たま／＼屋敷下を荷車挽いて通りかゝった辰爺さんが、
「花車の様だね」

とほめて通った。

庭内も、芙蓉、萩、蓮華つゝじは下葉から色づき、梅桜は大抵落葉し、ドウダン先ず紅に照り初め、落霜紅は赤く、木瓜の実は黄に、松はますます緑に、山茶花は香を、コスモスは色を庭に満たして、実に何とも云えぬ好い時候だ。

夕方屋敷の南端にある櫟の切株に上つて眺める。日は何時しか甲州の山に落ちて、山は紫に匂うて居る。白茶色になって来た田圃にも、白くなつた小川の堤の尾花に

も夕日が光って、眼には見る南村北落の夕けぶり。烏啼き、小鳥鳴き、秋静あきしずかに今日も過ぎて行く。東京の方を見ると、臙脂色えんじいろの空に煙が幾条いくすじも真直に上つて居る。一番南のが、一昨日火薬が爆発ばくはつして二十余名を殺傷さつしょうした目黒の火薬庫の煙だ。

(明治四十四年 十月二十三日)

秋さびし

きよう
今日はさびしい日である。

ダリヤの園を通ると、二尺あまりの茶色ちやいろの紐ひもが動いて居る、と見たは蛇だった。
とかけ
蜥蜴とかけの様な細い頭ほそをあげて、黒い針はりの様な舌したをペラ／＼さして居る。殺そうか殺すまいかと躊躇ちゆうちょして見て居る内に、彼は直ぐ其処そこにある徑けい一寸ばかりの穴あなに這入はいりか
けた。見る中に吸わるゝ様にズル／＼と這り込んで了うた。

園内を歩くと、蟬せみのヌケ殻がらが幾個いくつも落ちて居る。昨夜は室内で、小さなものゝ臨終りんじゆうの呻吟うめきの様なかすかな鳴声なきこえを聞いたが、今朝見ればオルガンの上に弱よわりはてたスイツチヨが居た。彼は未だ死に得ない。而して死に得る迄までは鳴かねばならぬのである。

自然は老いて行く。座敷ざしきの前まへを蜂はちが一足歩いて行く。両羽りようはねをつまんでも、螫さそうともせぬ。何に弱つてか、彼は飛ぶ力ともためぬのである。そつと地に下ろしたら、また芝生の方へそろ／＼歩いて行く。

今日はさびしい日である。

午後くもは曇くもつて泣き出しそうな日であつた。

午後になつて、いやに蒸暑むしあつい空気が湛たたえた。懶ものうい自然の氣を感じて、眼ざとい鶴

子が昼寝した。掃き溜には、犬のデカがぐたりと寝て居る。芝生には、猫のトラが眠って居る。

南から風が吹く。暖かい事は六月の風の様で、目を瞑って聞くと、冬も深い風の響がする。

今日はさびしい日である。

今は午後四時である。雲を漏れて、西日の光がぱつと射して来た。散りかゝった満庭のコスモスや、咲きかゝった菊や、残る紅の葉鶏頭や、蜂虻の群がる金剛纂の白い大きな花や、ぼうつと黄を含んだ芝生や、下葉の褐色に凋れて乾いた萩や白樺や落葉松や、皆斯夕日に寂しく栄えて居る。鮮やかであるが、泣いて居る。美わしいが、寂しい。

今日はさびしい日である。

(大正元年 十月二十八日)

展望台に上りて

上

余の書窓から西に眺むる甲斐の山脈を破して緑色濃き近村の松の梢に、何時の程からか紅白染分の旗が翻った。機動演習の目標かと思うたら、其れは京王電鉄が沿線繁栄策の一として、ゆく／＼東京市の寺院墓地を移す為めに買収しはじめた敷地二十万坪を劃る目標の一つであつた。

京王電鉄調布上高井戸間の線路工事はじまつて、土方人夫が大勢入り込み、鏡花君の風流線にある様な騒ぎが起つたのは、夏もまだ浅い程の事だつた。娘が二人辱しめられ、村中の若い女は震え上り、年頃の娘をもつ親は急いで東京に奉公に出すやら、無銭飲食を恐れて急に酒樽を隠すやら、土方が真昼中甲州街道をまだ禁菓を喰わぬアダム同様無禪の真裸で横行濶歩、夜は何の様な家へでも入込むので、未だ曾て戸じまりをしたことがない片眼婆さんのあばら家まで、邊て、かけ金よ釘よと騒いだりした。其れも工程の抄取ると共に、何時しか他所に流れて往つて了うた。やがて起つたのが、東京の寺院墓地移転用敷地廿万坪買収の一件である。

京王電鉄も金が無い。東京の寺や墓地でも引張ひっぱつて来て少しは電鉄沿線の景氣を
つけると共に、買った敷地を売りつけて一儲ひととせけする、此は京王の考としてさもあり
そんな話である。田舎はもとより金が無い。比較的小作料の低廉な此辺の大地主は、
地所を荷厄にやつかい介にして居る。また大きな地主で些派手ちとはでにやつて居る者に借金が無い者
は殆ほとんどない。二十万坪買収は、金に渴かわき切った其或人々にとつて、旱田ひでりたに夕立ゆうだちの
福音ふくいんであつた。財政整理の必要に迫られて居ると知られた某々の有力者は、電鉄の
先棒となつて、盛さかんに仲間を造りはじめた。金は無論欲ほしい。脅嚇おどかしも勿論利きく。二十
万坪の内八万坪、五十三名の地主の内十九名は、売渡承諾うりわたししょうだくの契約書に調印してし
まった。蹣蹣ちんちんする者もあつた。余はある人に斯こう云うた、不用の地所があるなら兎
も角、恰好かつこうの代地があつたら格別、でなければ農が土を手放てはなすは魚の水に離はなれるよ
うなものだ、金なんか直ぐ泡あわの様に消えて了う、今更農をやめて転業するなぞは十
が十墮落だらくの原もとだ。

売らぬと云う側がわは、人数にんずで関係地主の総数そうすう五十三人中の三十名、坪数で二十万坪
の十二万坪を占めて居る。彼等の云い分はざつと斯様こうだ。東京が段々西へ寄よつて来
て、豊多摩荏原とよたまえはらの諸郡は追々市外宅地や工場等の場所になり、以前専ら穀作こくさくと養蚕ようさん
でやつて居た北多摩郡が豊多摩荏原に代かわつて蔬菜そさいや園芸品えんげいひんを作る様になり、土地の
価あたいは年々上つて来て居る。然るに北多摩郡でも最も東京に近い千歳村の僅か五百五

十町歩の畑地はたちの中、地味ちみも便利も屈指くっしの六十余町歩、即ち畑地の一割強を不毛ふもうの寺院墓地にしてうのは、惜しいものだ。殊に寺院墓地の如き陰気なものに來られては、陽気な人間は來なくなり、多くなるものは農作物の大敵たる鳥雀の類ばかりだ。廿万坪の内には宅地もある。貧乏びんぼうくじ鬩ひきあを引当てた者は、祖先伝來の家屋敷や畑をすてゝ、代地だいぢと云えば近くて十丁以内にはなく、他郷に出るか、地所が不足では農をよして他に転業しなければならぬ者もある。千歳村五百五十戸の中、小作が六割にも上つて居る。大面積だいてんせきの寺院墓地が出來て耕地減少の結果、小作料は自然騰貴とうきする。小作料の騰貴はまだ可よいが、中には小作地が不足して住み馴なれた村にも住めなくなり、東京に流れ込んだり、悪くすると法律の罪人ざいにんが出來たりする。それから寺院墓地は免租地めんそちだから、結局村税の負担が増加する。何も千歳村の活氣ある耕地を潰つぶさず共、電車で五分間乃至十分も西に走れば、適當の山林地などが沢山あつて、其辺そのへんの者は墓地を歓迎して居る。其方そちへ行けばよいじゃないか。反対の理由は、ざつと右の通りだ。尤も中に多少の魂胆こんたんもあるが、大部分は本当に土に生き土に死ぬ自作農の土に対する愛着からである。變化を喜び刺戟しげきに生きる都會人には、土に対する本當の農の執着の意味は中々解げせない。眞しんの農にとつて、土はたゞの財産ではない、生命いのち其のものである。祖先伝來一切の生命の蓄積して居る土は、其一塊いっかいも肉の一片血ちの一滴いつてきである。農から土を奪うばうは、靈魂から肉体を奪うのである。換言すれば死ねと

云うのである。農を斯土このちから彼土かのちに移すのは、靈魂たまごえの宿換やどがえを命ずるのである。其多くは死ぬるのである。農も死ななければならぬ場合はある。然し其は輕々それかるがるしく斷ずべき事ではない。一は田中正造翁ゆんしきに面識めんしきなく谷中村やなかむらを見ないからでもあるが、余は從來谷中村民のあまり執念深いのを寧ろ氣障きざに思うて居た。六年の田舎住居、多少は百姓の真似まねもして見て、土に対する農の心理の幾分を解げしはじめて見ると、余は否いやでも曩昔むかしの非ひを認めずには居られぬ。即ち千歳村の墓地問題の如きも、京王電鉄会社や大地主等にとっては利益問題だが、純農者にとつては取りも直さぬ死活問題であるのだ。

然るに京王電鉄は、一方先棒さきぼうの村内有力者某々等をして頗る猛烈に運動せしむると共に、一方田夫野人何事をか仕出来しでかさんと高たかを括くくつて高压的手段こうあつてきしゅだんに出た。即ち關係地主の過半数は反対であるにも関せず、会社は村長の奥印おくいんをもつて東京府庁に宛て、墓地新設予定地御臨檢願を出してう。靈場敷地展望台を畑の真中まんなかに持て来て建てる。果ては、云う事を聴かねば土地収用法を適用するまでの事だ、電鉄の手で買えば一反五百七十円から五百五十円まで買かうが、土地収用法がものを云えば一反三百円か高くても三百五十円は越こさない、其それでも好よいか、好ければ今に見ろ。斯こん様な調子でのしかゝつて来た。

売る者は売れ、俺等おいちは売らぬ、と澄すまして居た反対側の人達も、流石さすがに怒おこり出し

た。腰弁当、提灯持参、草鞋わらじがけの運動がはじまった。村会に向つて、墓地排斥ぼちはいせきの決議を促す申請書を出す。村会に於てはまた、大多数を以て墓地排斥の建議案を通過するぞと意気込む。それから連判れんぱんの陳情書を東京府庁へ出すとて余にも村民の人として賛成を求めて来た。昨朝の事である。

下

今日余は女兒と三足の犬とを連れて、柿を給田きゆうでんに買うべく出かけた。薄曇りした晩秋の寂しい午後である。

品川堀に沿うて北へ歩む。昨日連判状を持つて来た仲間なかまの一人が、かみさんと甘藷さつまを掘つて居る。

「此処ここらも予定地よていちの内ですか」

「え、彼道路あのからずっとなんですよ。彼処あそこに旗が立つてますだ」

成程余が書窓しよでうから此頃常に見る旗と同じ紅白染分の旗が、路傍の松しょうすえの梢にヒラヒラして居る。東北の方にも見える。彼旗あのが敗北の白旗に変わらなかつたなら、此夫婦は来年此処で甘藷を掘ることは出来ぬのである。

余は麦畑に踏込む犬を叱り、道草摘む女兒うながを促し、品川堀に沿うて北へ行く。路傍みちばた

の尾花は霜枯れて、かきく鳴つて居る。丁度七年前の此月である。余は妻と此世の住家を探がして、東京から歩いて千歳村に來た。而して丁度其日の夕方に、疲れた足を曳きずつて、正に此路を通つて甲州街道に出たのであつた。夕日の残る枯尾花、何処やらに鳴く夕鴉の声も、いとどさすらえ人の感を深くし、余も妻も唯黙つて歩いた。我儕の行衛は何処に落ちつくのであらう？ 余等は各自に斯く案じた。余は一個の浮浪書生、筆一本あれば、住居は天幕でも済む自由の身である。それでさえ塹はなれた小鳥の悲哀は、其時ヒシと身に浸みた。土から生れて土を食ひ土を耕して終に土になる土の獸の農が、土を奪われ土から追われた時の心は如何であらう！ 品川堀が西へ曲る点に來た。丸太を組んだ高櫓が畑中に突立つて居る。上には紅白の幕を張つて、回向院の太鼓櫓を見るようだ。北表面へ廻ると、墨黒々と筆太に

靈場敷地展望台

と洋紙に書いて張つたのが、少し破れて風にばたくして居る。品川堀を渡つて、展望台の方へ行くと、下の畑で鉢巻をした禿頭の爺さんが堆肥の桶を担いで、媳か娘か一人の女と若い男と三人して麦蒔をして居る。爺さんは桶を下ろし、鉢巻をとつて、目礼した。此は昨夕村会議員の一人と訪ねて來た爺さんである。其宅地も畑も所有地全部買取地の真中に取こめられ、仮令収用法の適用が出来ぬとしても、もし唯一人売らぬとなれば袋の鼠の如く出口をふさがれるし、売るとなれば一寸の土も

残らず渡して去らねばならぬので、最初から非常に憂^{ゆう}懼^ぐし、殆^{ほとん}ど仕事も手につかず、昨日訪^たずねて来た時もオド／＼した斯老人の容子は余の心を傷ましめた。今其畑に來て見れば、直ぐ隣の畑には爺さんを追ひ払う云わば敵の展望台があたりを睥睨^{へいげい}して立つて居る。爺さんは昼は其望台の蔭で畑打ち、夜は望台の夢に魘^{おそ}わるゝことであらう。爺さんの寿命を日々夜々に縮めつゝあるものは、斯展望台である。余は爺さんに目礼して、展望台の立つ隣の畑に往つた。茶と桑と二方を劃^{しき}つた畑の一部を無遠慮に踏み固めて、棕櫚繩素繩^{しゅうろなわすなわ}で丸太をからげ組み立てた十数間の高檣^{たかやぐら}に人は居なかつた。余は上ろうか上るまいかと踟躕^{ちうちゆう}したが、終に女兒^{ついで}と犬を下に残して片手欄^{てすり}を握りつゝ酒樽^{しゆう}の薦^{こも}を敷いた楷梯^{はしこ}を上つた。北へ、折れて西へ、折れて南へ、三重^{じゆう}の楷梯を上つて漸く頂上に達した。中々高い。頂^{いた}は八分板を並べ、丈夫に床^{ゆか}をかいてある。

余は思わず嗟嘆^{さたん}して見廻^{みま}わした。好い見晴らしだ。武蔵野の此辺では、中々斯程の展望所は無い。望台を中心としてほゞ大円形をなした畑地は、一寸程になつた麦^{みどり}の緑縞^{さつ}、甘藷^{かんしょ}を掘つたあとの紫がかつた黒土、べつたり緑青^{ろくしょう}をなすつた大根畑、明るい緑色の白菜畑^{はくさいばたけ}、白つぽい黄色の晚陸稻^{おくおかほ}、入乱れて八方に展開し、其周圍には霜^{しも}に染^そみた雑木林、人家を包む檜木立^{かしこだち}、丈高い宮の赤松などが遠くなり近くなりくるり取巻^{とりま}いて居る。北を見ると、最早鉄軌^{もうれえ}を敷いた電鉄の線路が、烏山の木立の間に

見え隠れ、此方のまだ枕木も敷かぬ部分には工夫が五六人鶴嘴を振り上げて居る。西を見れば、茶褐色に焦れた雑木山の向うに、濃い黛色の低い山が横長く出沒して居る。多摩川の西岸を縁どる所謂多摩の横山で、川は見えぬが流れの筋は分明に指さされる。少し西北には、青梅から多摩川上流の山々が淡く見える。西南の方は、富士山も大山も曇った空に潜んで見えない。唯藍色の雲の間から、弱い弱い日脚が唯一筋斜に落ちて居る。

やゝ久しく吾を忘れて眺め入った余は、今京王電鉄が建てた墓地敷地展望台の上に立つて居ることに気がついた。余は更に目をあげてあたりを見廻わした。此望台を中心として、二十万坪六十余町歩の耕地宅地を包围して、南に東に北に西に規則正しく間隔を置いて高く樹梢に翻つて居る十数流の紅白旗は、戦わずして已に勝を宣する占領旗かと疑われ、中央に突立つてあたり見下ろす展望台は、蠢爾としてこゝに耕す人と其住家とを呑んでかゝつて威嚇して居る様で、余は此展望台に立つのが恥かしくなつた。

雪空の様に曇りつゝ日は早や暮るに間もなくなつた。何処かに鴉が鳴く。余はさながら不測の運命に麗われて悄然として農夫の顔其まゝに言わぬ哀愁に満ちた自然の面影にやるせなき哀感を誘われて、独望台にさまぐの事を想うた。都会と田舎の此争は、如何に解決せらるゝであろう乎。京王は終に勝つであろうか。村は負け

るであろうか。資本の吾儘わがままが通るであろう乎。勞力の嘆なげきが聴かるゝであろう乎。
 一年兩度縁みどりになり黄きになり命いのちを与うる斯二十万坪の活いきた土は、終古死しゅうこの国となら
 ねばならぬのであろうか。今憂うれの重荷おもを負うて直下すくしたに働いて居る彼爺さん達、彼処あち
 此処こちに鳶色こがに焦れた櫺けやきの下檜かしの木蔭に平和を夢みて居る幾個いくつの茅舎ぼうしや、其等それらは所謂文
 明の手に蠅はえの如く簣虫みのむしの宿やどの如く払いのけられねばならぬのであろうか。数で云う
 たら唯ただ二十万坪の土地、喜憂きゆうを繋かくる人と戸数と、都の場末の一町内にも足らぬが、
 大なる人情の眼は唯統計とうけいを見るであらうか。東京は帝都ていと、寸土寸金すんどすんきん、生が盛さかれば死
 は退のかねばならぬ。寺も移らねばなるまい。墓地も移らずばなるまい。然しながら
 死にたる骨ほねは、死にたる地ちに安やすんずべきではあるまい乎。寺と墓地とは縁もゆかり
 もない千歳村の此耕さるべき部分の外に行き得る場所はないのであろう乎。都会が
 頭なら、田舎は臟腑ぞうふではあるまい乎。頭が臟腑を食つたなら、終ついには頭の最後では
 あるまい乎。田舎はもとより都会の恩おんを被きる。然しながら都会を養い、都会のあら
 ゆる不浄はじを運び去り、新しい生命いのちと元氣を都会に注そそぐ大自然の役目を勤むる田舎は、
 都会に貢献する所がないであらう乎。都会が田舎の意志と感情を無視して吾儘わがままを通
 すなら、其れこそ本當の無理である。無理は分離である。分離は死である。都会と
 田舎は一体いったいである。農が濫みだりに土を離るゝの日は農の死である。都みやこが田舎を潰つぶす日は、
 都自身の滅亡めつぼうである。

彼旗を撤^てし、此望台を毀^こち、今自然も愁^{うれ}うる秋暮の物悲しきが上に憂愁不安の氣
雲の如く覆^{おお}うて居る斯千歳村に、雲霽れてうらくと日の光射^{ひかり}す復活の春を齎^{もた}らす
を得ば、其時こそ京王の電鉄も都と田舎を繋^{つな}ぐ愛の連鎖、温^{あた}かい血の通^{かよ}う脈管とな
るを得るであらう。

(大正元年 十一月八日)

暮秋の日

竜田姫のうつとりと眼を細くし、またばつと目を瞪らしく様な、曇りつ照りつ寂し

い暮秋の日。

暦の冬は五六日前に立つた。霜はまだ二朝三朝、しかも軽いのしか降らない。但

先月の嵐が累をなしたのか、庭園の百日紅、桜、梅、沙羅双樹、桃、李、白樺、櫻、

厚朴、木蓮の類の落葉樹は、大抵葉を振うて裸になり、柿やトキワカエデの木の下

には、美しい潤い落葉が落葉の上に重なって厚い茵を敷いて居る。菊はまだ褪わず

して狂うものは狂いそめ、小菊、紺菊の類は、園の此処彼処にさまぐな色を見せ、

紅白の茶山花は枝上地上に咲きこぼれて居る。ドウダン、ヤマモミジ、一行寺、大

盃、イタヤ、ハツシモ、など云う類の楓や銀杏は、深く浅く鮮やかにまた渋く、紅、

黄、褐、茜、紫さまぐの色に出で、氣の重い常緑木や氣軽な裸木の間を彩どる。常

緑木の中でも、松や杉は青々とした葉の下に黄ばんだ古葉を簇々と垂れて、自ら新

にす可く一吹の風を待つて居る。菊、茶山花の香を含んで酒の様に濃い空氣を吸い

つゝ、余はさながら虻の様に、庭から園、園から畑と徘徊する。庭を歩く時、足下

に落葉がかさと鳴る。梅の小枝に妙な物がと目をとめて見ると、蛙の干物が突刺し

である。此はイタズラ小僧の百舌鳥めが食料に干して置いて其まゝ置き忘れたのである。園を歩く時、大半は種になったコスモスの梢に咲き残った紅白の花が三つ四つ淋しく迎える。畑には最早大麦小麦が寸余に生えて居る。大根漬菜が青々とまだ盛んな生氣を見せて居る。籬の外の畑では、まだ晩時の麦を蒔いて居る。向うの田圃では、ザクリ／＼鎌の音をさして晩稲を刈って居る。

今は午後の四時である。先程からぱつと射して色と云う色を榮えさして居た日は、雲の陰の下に隠れて、眼に見る限りの物は沈鬱な相をとった。松の下の大分黄ばんだ芝生に立って、墓地の銀杏を見る。さまで大きくもあらぬ徑六寸程の比較的若木であるが、魚の背骨の一方を削った様に枝は皆北方へ出て、南へは唯一本しか出て居ない。南の枝にも梢にも、残る葉はなくて、黄葉は唯北方に密集して居る。其裸になった梢に、嘴の大きな瘦鴉が一羽とまて居る。永く永くとまて居たが、尾羽で一つ梢をうって啞々と鳴きさまに飛び立った。黄いろい蝶の舞う様に銀杏の葉がはら／＼と飄る。

廻沢の杉森のあなたを、葬式が通ると見えて、「南無阿弥陀ア仏、南無阿弥陀ア仏」単調な念仏が泣く様に響いて来る。

二つの幻影

北風が寒く、冬らしい日。

然し東京附近で冬を云々するのは烏滯がましい。如何に寒いと云つても、大地が始終真白まっしろになつて居るではなし、少し日あたりのよい風よけのある所では、寒中にも小松菜こまつなが青々あおあおして、崖がけの蔭では堇すみれや蒲公英たんぽぽが二月に咲いたりするのを見るのは、珍らしくない。

北へ行かねば、冬の心地は分からぬ。せめて奥州、北海道、樺太かばふと、乃至大陸ないしの露西亞ろしあとか西比利亜とかでなければ、本当の冬の趣味は分からぬ。秋日ひび々に老いて近づく冬の氣息が一刻々々に身に響く頃の一種の恐怖おそれ、死に先だつ深い絶望と悲哀は、東京附近の浅薄な冬の真似では到底分からぬ。東京附近の冬は、せいゝ半死半生である。冬が本当の死である国土でなければ、秋の暮の淋し味も、また春の復活の喜も十分には分からぬ。

「おゝ神よ、吾をしてこの春に会うを得せしめ給うを感謝す」と畑で祈ると云う露西亜の老農の心もちには、中々東京附近の百姓はなれぬ。

否いやでも応おうでも境遇に我等は支配される。我々の邦くにでは一切の事が兎角徹底せぬわ

けである。

*

午後散歩、田圃^{たんぼ}では皆欣々喜々として晩稲^{おくて}を刈^かつて居る。

甲斐^{かい}の山を見る可^かく、青山街道から十四五歩、船橋^{ふなばし}の方へ上^あつて居ると、東京の方から街道を二台の車が来る。護謨^{ごも}輪^わの奇麗な車である。道の左右の百姓達が鎌の手をとめて見て居る。予は持て居た双眼鏡^{そうがんきょう}を翳^かした。前なる透^すかし幌^{ほろ}の内は、丸髷^{まうしろ}に結^{むす}つて真白^{まっしろ}に塗^ぬつた美しい若い婦人である。後の車には、乳母^{うば}らしいのが友禪^{ゆうぜん}の美しい着物に包^くまれた女の児を抱^だいて居る。玩具など幌^ほの扇骨^{せんね}に結^{むす}いつけてある。今日は十一月の十五日、七五三の宮詣^{みやもと}でに東京に往^いつた帰りと見える。二台の護謨^{ごも}輪^わが威勢^{いせい}の好^こい白法被^{しろはつび}の車夫^{しやふ}に挽^ひかれて音もなくだら／＼坂を上^あつて往^いつて了^{しま}うと、余はものゝ影^{かげ}が余の立つ方に近^きづきつゝあるに氣^きづいた。骸骨^{がいこつ}が来るのかと思^{おも}うた。其^そは一人の婆^{ばば}であつた。両^{りやう}の眼^{がん}の下瞼^{したまぶた}が悉^{しつ}く朱^{あけ}に反^そりかえつて、椎^{しい}の実程^{じつぢやう}の小さな鼻^{はな}が右^{みぎ}へ歪^{ゆが}みなりにく^くつついて居る。小さな風呂敷包^{ふろしき}を頸^{くび}にかけて、草履^{ぞうり}の様^{よう}になつた下駄^{げた}を突^つかけて居る。余は恐^{おそ}ろしくなつて、片寄^{かたよ}つて婆^{ばあ}さんを通^{とほ}した。今にも婆^{ばあ}さんが口^{くち}をきゝはせぬかと恐^{おそ}れた。然^{しか}し婆^{ばあ}さんは、下瞼^{あか}の朱^{あか}く反^そりかえつた眼^{がん}でじ

ろり余を見たまゝ、余の傍^{わき}を通り過ぎて了うた。程なく雑木山に見えなくなった。
余は今しがた眼の前を過ぎた二つの幻^{まぼろし}の意味を思いつゝ、山を見ることを忘れて
田圃の方へ下りて往った。

(大正元年 十一月十五日)

入営

辰爺さん宅の岩公が麻布聯隊に入営する。

寸志の一包と、吾れながら見事に出来た聖護院大根を三本提げて、挨拶に行く。禾場には祝入営の旗が五本も威勢よく立つて、広くもあらぬ家には人影と人声がしばいに溢れて居る。土間の入口で、阿爺の辰さんがせつせと饅頭粉を捏ねて居る。是非上れと云うのを、後刻とふりきつて、大根を土間に置いて帰る。

午後万歳の声を聞いて、遽て八幡に往つて見る。最早樂隊を先頭に行列が出かける処だ。岩公は黒紋付の羽織、袴、靴、茶の中折帽と云う装で、神酒の所為もあらう桜色になつて居る。岩公の阿爺は体格は小さい人の好い爺さんだが、昔は可なり遊んだ男で、小供まで何処かイナセなところがある。

余も行列に加わつて、高井戸まで送る。真先きに、紫地に白く「千歳村粕谷少年音楽隊」とぬいた横旗を立て、村の少年が銀笛、太鼓、手風琴などピークドン／＼賑やかに囃し立て、行く。入営者の弟の沢ちゃんも、銀笛を吹く仲間である。次ぎに送入営の幟が五本行く。入営者の附添人としては、岩公の兄貴の村さんが弟と並んで歩いて居る。若い時は、亭主が夜遊びするのではば／＼淋しい留守をして、

宵夜よいよなか中小使こづかい錢貸せの破落戸ならずもの漢に踏み込まれたり、苦勞とじに齡としよりも老けた岩公おふくろの阿母が、孫の赤坊を負つて、草履すいへいふくをはいて小走りに送つて来る。四五日前に除隊になつた寺本の喜三さんも居る。水兵服すいへいふくの丈高たけたかい男を誰かと思うたら、休暇で横須賀から歸つて来た萩原の忠さんであつた。一昨日母者の葬式ははじやそうしきをして沈んだ顔の仁左衛門さんも来て居る。余は高井戸の通りで失敬して、徑路こみちから歸つた。ふりかえつて見ると、甲州街道の木立に見え隠れして、旗影と少年音楽隊きやうおんがくたいの曲が次第に東へ進んで行く。

今日けふは何処どこも入營者の出發で、船橋の方でも、万歳の声が夕日の空に颯あがつて居た。

(明治四十四年 十一月三十日)

*

辰爺さんが酔ようて昨日の札に饅頭まんどうを持て来た。うっかりして居たが、吾家うちは組内だから昨日も何角なにかの手伝てつだいに行かねばならなかつたのであつた。

爺おやさんは泣声なきこゑして、

「岩もね、二週間すると来ますだよ」と云う。「兵隊に出すのが嫌だなンか云うこ

とア出来ねえだ。何でも大きくなる時節で、天子様も国を広くなさるだから」と云う。

誰が教えたのかしら。

(同 十二月一日)

生死

霜無く、風無く、雲無く、静かな寂かな小春の日。

昨夜、台所の竈台へつだいの下からかこの空籠の中で、犬のピンがうめいたり叫んだりして居たが、到頭四足子を生んだ。茶色が二疋、黒が二疋、あの小さな母胎ぼたいからよく四足も生れたものだ。つい今しがた母胎を出たばかりなのに、小猫こねこの様な啼声なきしえを出して、勢いきおい猛に母の乳にむしゃぶりつく。

子犬の生れた騒ぎに、猫のミイやが居ないことを午過ぎまで気付かなかった。「おや、ミイは？」と細君さいくんが不安な顔をして見廻みまわした時は、午後の一時近かった。総そうがかりで家中探がす。居ない。屋敷中探がす。居ない。舌したが痛くなる程呼んでも、答が無い。民やをやつて、近所を遍あまねく探がさしたが、何処にも居ず、誰も知らぬ、と云う。まだ遠出とおでをする猫ではなし、何時いつ居なくなつたらうと評議する。細君が暫らく考えて「朝は居ましたよ、葱ねぎとりに往く時私に跟ついて畑なぞ歩いて居ました」と云う。如何どうなつたのだらう？ 烏山てんぐいぬの天狗犬に噛かまれたのかも知れぬ。三毛みけは美しい小猫だったから、或は人に抱だいて往かれたかも知れぬ。可愛い、剽軽ひょうきんな、伶俐りこうな小猫だったに、行方不明とは残念な事をしてうた。ひよつとしたら、仲好なかよくし

て居たピンに子犬が生れたから、ミイが嫉妬して身を隠したのではあるまいか、などあられない事まで思う。

夕食の席で、民やが斯様な話をした。今日午後猫を捜して居ると、八幡下で鳴田の婆さんと辰さん家の婆さんと話して居た。先刻田圃向うの雑木山の中で、印半纏を着た廿歳許の男と、小ざっぱりした服装をした二十前後の女が居た。男はせつせと手で土を掘つて居た。女は世にも蒼ざめた顔をして居た。自然薯でも掘るのですかい、と通りかゝりの婆さんがきいたら、何とも返事しなかつた。程経てまた通ると、先の男女はまだ其処に居た。其前八幡山の畑の辺をまごゝして居たそうである。多分闇から闇にと墮りた胎児を埋めたのであろう。鳴田の婆さんは、自家の山に其様な事でもしられちゃ大変だ、と云うて畑の草の中なぞ杖のさきでせゝつて居たそうだ。

其若い男女が、ひよつとしたらまた其処へ来て居るかも知れぬ。あるいは無分別をせぬとも限らぬ。

箸を措くと、外套引かけて出た。体も魂も倔強な民が、私お供致しましょう、と提灯ともして先きに立つ。

八幡下の田圃を突切つて、雑木林の西側を這う徑に入つた。立どまつて良久しく耳を澄ました。人らしいものゝ氣もない。

「何処どこに居るかね、不了簡ふりようけんをしちやいかんぞ。俺わしに相談さうだんをして呉くれんか」
 声をかけて置いて、熟じつと聞き耳きみみを立てたが、吾声わがこえの攪乱かきみだした雑木山の静寂せいじやくはもと
 に復かえつて、落葉おちば一つがさとも云わぬ。霜しもを含んだ夜気やきは池の水の様に凝こつて、上
 半部かみを蝕くいた欠かいた様な片破かたわれ月つきが、裸はだかになつた雑木の梢こずえに蒼白く光つて居る。
 立とまつては耳みみを傾かたむけ、答こたえなき声を空林くうりんにかけたたりして、到頭甲州街道に出た。
 一廻りして、今度は雑木山の東側の径こみちを取つて返した。提灯は径を歩かして、余は
 月の光あかりを便りに今一度疑問の林に分け入った。株立になつた雑木は皆落葉おちばして、林
 の中は月明つきあかりでほの白い。櫟くぬぎから檜ひのきと眼くぼみをつけ、がさ／＼と吾わがが踏み分くる足下の落
 葉あしもとにも氣をつけ、木を掘つたあとの窪くぼみを注視し、時々立止つて耳を澄すました。
 居いない。終に何者も居ない。土の下も黙だまつて居る。

(明治四十二年 十二月二日)

天理教の祭

おかず嫗ばあさんが、天理教会秋祭あきまつりの案内に來た。

紙の上の天理教てんりしやうは見て居るが、教会のぞを覗いた事は未だ無い。好い機おりだ。往つて見る。

下足札げそくふだを出して、百疊敷一ぱいの人である。正面には御簾みすを捲いて、鏡が飾つてある。太鼓たいこ、笙しょう、箏ひちりき、琴こと、琵琶びわなんぞを擁したり、あるいは何もものをも持たぬ手を膝ひざに組んだ白衣びやくいの男女が、両辺に居流れて居る。其白衣の女の中には、おかず嫗ばあさんも見えた。米俵ひようが十数俵も神前に積つまれて、奉納者ほうのうしやの名を書いた奉書紙ほうしよがみが下げである。

やがて鳴物なりものが鳴り出した。

太鼓の白衣氏が撥ばちを握にぎつて单调な拍子ひょうしをとりつゝ

「ちよつとはなし、神の云うこと聞いてくれ」

と唱となえ出した。琴が鳴る。箏ひちりきが叫ぶ。琵琶びわが和わする。

黒紋付木綿の綿入はかまに袴はを穿いた倔強くつきような若い男が六人、歌につれて神前に踊りはじめた。一進一退、裏うらむき表おもてむき、立ったり蹲しゃがんだり、黒紋付の袖からぬつと出た足たく

ましい両の手を合掌がつしやうしたりほどいたり、真面目に踊ぶつて居る。無骨ぶこつで中々愛嬌あいきやうがある。「畚もっこかついでひのきしん」と云う歌のところでは、六人ながら新しい畚にを担になつて踊ぶつた。

鳴物は単調に鳴る。歌は単調につゞく。踊は相も変らぬ手振がつゞく。余は多少あき気味であたりを眺ながめる。皆近辺の人達で、多少の識しつた顔もある。皆嬉き々として眺めて聴いて居る。

*

天理教祖は実に偉い婆さんであつた。其広大な慈悲心は生きて働き、死んでもすく／＼働き、老骨地ろうこつちに入つてこゝに数十年、其流れを汲くむ人の数は実に夥おびただしい数えられる。仮令たとい大和の本教会ほんきやうかいは立派な建築を興し、中学などを建て、小むずかしい天理教聖書を作り、已に組織病しかに罹かつたとしても、婆さんから流れ出た活ける力はまだ／＼盛に本当の信徒の間に働いて居る。信ずる者は幸福である。仮令たとい其信仰の為に財産をなくして人の物笑ものわらいとなり、政府の心配となるとも、信ずる者は幸福である。彼等の多くは無学である。彼等に教理を問うても、彼等は唯にこゝと笑うて、立派な言葉で明かに答える事は出来ぬ。然し信仰を説く者必しも信仰を有もつ

者でない。信ずる彼等は確に其信仰に生きて居るのである。

信仰と生活の一致は、容易で無い。何れの信仰でも雑多な信者はある。世界の信者が其信仰を遺憾なく実現したら、世界は夙に無事に苦んで居る筈だ。天理教徒にも色々ある。財産を天理様に捧げてしまつて、嬉々として労役者の生活をして居る者もある。天理教で財産を耗つて、其報償を手あたり次第に徴集し、助けなき婆さんを窘めて店賃をはたる者もある。病氣の為に信心して幸に痊ゆれば平気で暴利を貪つて居る者もある。信徒の労力を吸つて肥えて居る教師もある。然し斯せち鹹い世の中に、人知れず美しい心の花を咲かす者も随処にある。此春妻が三軒茶屋から歸るとて、車はなしひよろ／＼する程荷物も提げて歩いて居ると、畑に働いて居た娘が、今しも小学校の卒業式から優等の褒美をもらうて歸る少年を追かけて呼びとめてくれたので、其少年に荷物を分けて持つてもらうて歸つて来た。親切な人々と思つて聞いて見れば、それは天理教信者であつた。

人が平氣に踏みしだく道辺の無名草の其小さな花にも、自然の大活力は現われる。天理教祖は日本の思いがけない水村山郭の此処其処に人知れず生れて居るのである。

斯様な事を思つて居る内に、御神樂歌一卷を唱え囃し踊る神前の活動はやんで、やがて一脚の椅子テーブルが正面に据えられ、洋服を着た若い紳士が着席し、木下藤吉郎秀吉が信長の草履取となつて草履を懷に入れて温めた事をきいゝ声で演説した。其れが果てると、余は折詰一個をもらひ、正宗一合瓶は辞して、参拾銭寄進して歸つた。

耶蘇教は我強く、仏教は陰氣くさく、神道に湿りが無い。彼大なる母教祖の胎内から生れ出た、陽気で簡明切実な平和の天理教が、土の人なる農家に多くの信徒を有つは尤である。

(明治四十二年 十二月四日)

渦巻

小春日がつづく。

十二月は余の大好きな月である。絢爛けんらんの秋が過ぎて、落つるものは落ち尽し、枯るゝものは枯れ尽し、見るもの皆乾々かんかんじょうじょう 淨々じょうじょう として、寂しいにも寂しいが、寂しい中にも何とも云えぬ味がある。秋に別れて冬になろうと云う此隙に、自然が一寸静座みやうきようの妙境に入る其幽玄の趣は言葉に尽くせぬ。

隣字となりあざの仙左衛門が、根こぎの山豆柿一本と自然薯やまめがきを持て来てくれた。一を庭に、一を鶏にわとりの柵さくに植える。今年は吾家の聖護院大根が上出来だ。種をくれと云うから、二本やる。少し話して行けと云うたら、また近所に鮭さけが出来たからと云うて、急いで帰った。鮭とは、ぶら下がるの謎で、首縊りがあつたと云うのである。

橋本の敬さんが、実弟の世良田某せらだぼうを連れて来た。五歳の年四谷よつやに養子に往つて、十年前渡米し、今はロスアンゼルスに砂糖大根八十町、セロリー四十町作つて居るそうだ。妻つまを持ちに帰つて来たのである。カンタループ、草花の種子をもらう。

此村から外国出稼がいくでかせぎに往つた者はあまり無い。朝鮮、北海道の移住者も殆んど無い。余等が村住居の数年間に、隣字の者で下総しもうさの高原に移住し、可なり成功した者が一度

帰つて来たことがある。何の家にも、子女の五六七八人居ない家はないが、それで一向新しい竈の殖える様子もない。如何なるかと云えば、女は無論嫁ぐが、息子の或者は養子に行く、ある者は東京に出て職を覚える、店を出す。何しろ直ぐ近所に東京と云う大渦が巻いて居るので、村を出ると直ぐ東京に吸われてしもうて、移住出稼などに向く者は先ず無いと云うてよい。世良田君などは稀有の例である。東京に出て相応に暮らして行く者もあるが、春秋の彼岸や盆に墓参に来る人の数は少なく、余の直ぐ隣の墓地でも最早無縁になつた墓が少からずあるのを見ると、故郷はなれた彼等の運命が思いやられぬでもない。「家鴨馴知灘勢急、相喚相呼不離湾」何処ぞへ往つてしまいたいと口癖の様に云う二番目息子の稻公を、阿母が懸念するのも無理は無い。

(明治四十四年 十二月五日)

透視

非常の霜、地皮が全く霜やけて了うた。

午の前後はまた無闇と暖だ。風も黙り、時雨も眠り、乾いて反りかえった落葉は、木の下に夢みて居る。鳥が啼いたあとに、隣の鶏が鳴き、雀が去ったあとの楓の枝に、鶺鴒がとまる。静かにさす午後の日に白く光って小虫が飛ぶ。蜘蛛の断片が日光の道を見せて閃めく。甲州の山は小春の空にうつとりと霞んで居る。

落ちついて、はつきりして、寂しい中に暖か味があつて、温かい中に寂し味があつて、十二月は本当に好い月である。

日曜だが、来客もなくして静なことだ。主と妻と女兒と、日あたりの好い母屋の南縁で、日なたぼっこをして遊ぶ。白茶天鵲絨の様に光る芝生では、犬のデカとピンと其子のタロウ、カメが遊んで居る。大きなデカ爺が、自分の頭程もない先月生れの小犬の蚤を噛んでやつたり、小犬が母の頸輪を啣えて引張つたり、犬と猫と仲悪の譬にもするにデカと猫のトラと鼻突合わして互に疑いもせず、皆悠々と小春の恩光の下に遊んで居る。「小春」とか「和楽」とかの画になりそう。

細君が指輪をなくしたので、此頃勝手元の手伝いに来る隣字のお鈴に頼み、吉さんに見てもらったら、母家の乾の方角高い処にのつて居る、三日稻荷様を信心すると出て来る、と云うた。

吉さんは隣字の人で、日蓮宗の篤信者、病気が信心で癒った以来千里眼を得たと人が云う。吉凶其他分からぬ事があれば、界限の者はよく吉さんに往つて聞く。造作なく見てくれる。馬鹿にして居る者もあるが、信ずる者が多い。信ずる者は、吉さんの言で病氣も癒り、なくなつたものも見出す。此辺での長尾郁子、御船千鶴子である。

裏の物置に大きな青大將が居る。吉さんは、其れを先々代の家主のかみさんの霊だと云う。兎に角、聞く処によれば、これまで吉さんの言が的中した例は少くない。吉さんは人の見えないものを見る。汽車の轢死人があつた処を吉さんが通ると、青い顔の男女がふら／＼跟いて来て仕方がないそうだ。

余の家にも他の若い者並に仕事に来ることがある。五十そこらの、瘠せて力があまりなさそうな無口な人である。

我等は信が無い為に、統一が出来ない為に、おのずから明瞭なものも見えず聞こ

えずして了うのである。信ずる者には、奇蹟は別に不思議でも何でもない筈だ。

然しながら我等凡夫は必しも人々尽く千里眼たることは出来ぬ。また必ずしも悉く千里眼たるを要せぬ。長尾郁子や千鶴子も評判が立つと間もなく死んで了うた。不信が信を殺したとも云える。また一方から云えば、幽明、物心、死生、神人の間を隔つる神秘の一幕は、容易に掲げぬ所に生活の面白味も自由もあつて、濫りに之を掲ぐるの報は速やかなる死或は盲目である場合があるのであるまいか。命を賭しても此帷幕の隙見をす可く努力せずに居られぬ人を晒うは吾儕が鈍な高慢であらうが、同じ生類の進むにも、鳥の道、魚の道、虫の道、また獣の道もあることを忘れてはならぬ。

吾儕は奇蹟を驚異し、透視の人を尊敬し、而して自身は平坦な道にあるいて、道の導く所に行きたいものである。

*

夜、鶴子が炬燵に入りながら、昨日東京客からみやげにもらった鉛筆で雑記帳にアイウエオの手習をしたあとで、雑記帳の表紙に「トクトミツルコノデス」と書き、それから

コイヌガウマレマシテ、カワイコトデアリマス

と書いた。これは鶴子女史が生れてはじめての作文だ。細君が其下に記憶の為「ゴ
ネットムツキ」と年齢としをかゝせた。

(明治四十四年 十二月十日)

雪

暮の廿八日は、午食前ひるめしまえから雨になり、降りながら夜に入つた。

夜の二時頃、枕辺まくらべ近くどす撞と云つた物音に、余は岸破がぼと刎ねは起きた。身繕みづくろいしてやゝしばし寢床ねどこに突立つたつて居ると、忍び込んだと思つた人の容子ようすは無くて、戸の外そとにサラ／＼忍びやかな音がする。

「雪だ！」

先刻さつきの物音は、櫓かしの枝を滑り落ちた雪の響おとだつたのだ。余は含笑ほほえみつゝまた眠つた。

六時、起きて雨戸をあけると、白い光ひかりがぱつと眼を射いた。縁先えんさきまで真白だ。最早もう五寸から積つて居るが、まだ盛さかんに降つて居る。

去年は暖かで、ついぞ雪らしい雪を見なかつた。年の内に五寸からの雪を見ることは、余等が千歳村の民になつてからはじめてゝある。

余は奥書院おくしょいんの戸をあけた。西南を一目に見晴みはらす此処ここの座敷は、今雪の田園でんえんを額縁がくぶちなしの画えにして見せて居る。庭の内に高低参差こうていしんしとした十数本の松は、何れも忍び得るしの限り雪に撓たわんで、最早はら払おうか今払おうかと思ひ貌がに枝を揺々ゆらゆらして居る。素裸すはだか

になつてた落葉木は、従順に雪の積るに任せて居る。枯萩の一叢が、ぴつたりと弓形に地に平伏して居る。余は思わず声を立てゝ笑つた。背向きの石地藏が、看護婦の冠る様な白い帽子を被せられ、両肩には白い雪のエパウレットをかついで澄まして立つてござるのだ。

余は障子をしめて内に入り、仕事にかゝる前に二通の手紙を書いた。筑波山下の医師なる人に一通。東京銀座の書店主人に一通。水国の雪景色と、歳晩の雪の都会の浮世絵が幻の如く眼の前に浮ぶ。手紙を書き終えて、余は書き物をはじめた。障子が段々眩しくなつて、時々吃驚する様な大きな響をさしてドサリ撞と雪が落ちる。机の傍では真鍮の葉鏝がチン／＼云つて居る。

午餐の案内に鶴子が来た。室を出て見ると、雪はぽつり／＼まだ降つて居るが、四辺は雪ならぬ光を含んで明るく、母屋前の芝生は樫の雫で已に斑に消えて居る。

「何だ、此れつ切りか。春の雪の様だね」

斯く罵りつゝ、食卓に就く。黒塗膳に白いものが三つ載せてある。南天の紅い実を眼球にした兎と、竜髭の碧い実が眼球の鶉や、眉を竜髭の葉にし眼を其実にした小さな雪達磨とが、一盤の上に同居して居る。鶴子の為に妻が作つたのである。

「此達磨さん西洋人よ、だつて眼が碧いんですもの」と鶴子が曰う。

雪で、今日は新聞が来ぬ。朝は乳屋、午後は七十近い郵便配達爺さんが来たば

かり。明日の餅搗きを頼んだので、隣の主人が糯米を取りに来た。其ついでに、蒸かし立ての甘藷を二本鶴子に呉れた。

余は奥座敷で朝来の仕事をつづける。寒いので、しばしば火鉢の炭をつぐ。障子がやゝ翳つて、丁度好い程の明になった。颯と云う音がする。轟と云う響がする。風が出たらしい。四時やゝ廻ると、妻が茶を点れ、鶴子が焼栗を持って入つて来た。「雪水を沸かしたのですよ」

と妻が曰う。ペンを擱いて、取あえず一碗を傾ける。銀瓶と云う処だが、やはり例の鉄瓶だ。其れでも何となく茶味が軟かい。手々に焼栗を剥きつゝ、障子をあけてやゝしばし外を眺める。北から風が吹いて居る。田圃向うの杉の森を掠めて、白い風が弗、弗と幾陣か斜に吹き通る。庭の内では、蛾の如く花の様な大小の雪片が、飛んだり、刎ねたり、狂うたり、筋斗翻をしたり、ダンスをする様にくるりと廻ったり、面白そうにふざけ散らして、身軽に気軽に舞うて居る。消えかけて居た雪の帽が、また地蔵の頭上に高くなつた。庭の主貌した赤松の枝から、時々サツと雪の滝が落ちる。

「今夜も降りますよ」

斯く云いすてゝ妻は鶴子と立つて往つた。

余は風雪の音を聞きゝ仕事をつづける。一枚も書くと、最早書く文字がおぼろ

になつた。余はペンを拭いて、立つて障子をあけた。

蒼白い雪の黄昏である。眼の届く限り、耳の届く限り、人通りもない、物音もしない。唯雪が霏々また霏々と限りもなく降つて居る。良久しく眺める。不図縁先を黒い物が通ると思うたら、其は先月来余の家に入込んで居る風来犬であつた。まだ小供々とした耳の大きな牝犬で、何処から如何して来たか知らぬが、勝手にありついで、追えども逐えども去ろうともせぬ。余の家には雌雄二匹の犬が居るので、此上牝犬を飼うも厄介である。わざ／＼人を頼んで、玉川向うへ捨てさせた。すると翌日ひよつくり帰つて来た。汽車に乗せたらと謂つて、荻窪から汽車で吉祥寺に送つて、林の中に繋いで置いたら、頸に縄きれをぶらさげながら、一週間ぶりに舞い戻つた。隣字の人に頼んで、二子在の犬好きの家へ世話してもらうつもりで、一先ず其家に繋いで置いてもらうと、長い鎖を引きずりながら帰つて来た。詮方なくて今はそのまゝにしてある。余が口笛を吹いたら、彼女はふつと見上げたが、やがて尾を垂れて、小さな足跡を深く雪に残しつゝ、裏の方へ往つて了うた。

雪はまだしきりに降つて居る。

余は思うともなく今年一年の出来事をさまざまと思ひ浮べた。身の上、家の上、村の上、自国の上、外国の上、さまざまと事多い一年であつた。種々の形で世界の各所に現わるゝ、人心の昂奮、人間の動揺が、眼まぐるしくあらためて余の心の眼

に映^{うつ}った。

何^{どこ}処に落着く世の中であらう？

余は久しく久しく何を見るときもなく雪の中を見つめる。

大正元年暮の二十九日は蒼白^{あおしろ}う暮れて行く。

おのがじし舞ひ狂ひつるあともなし

世^{ひと}は一色の雪の夕暮

（大正元年 十二月二十九日）

読者に

(一)

読者諸君。

「みみずのたはこと」の出版は、大正二年の三月でした。それから今大正十二年十二月まで何時しか十年余の月日が立ちました。此十年余の限らない波瀾にも、最近の大震災にも幸に恙なく、ここに「みみずのたはこと」の巻末に於て、粕谷の書齋から遙に諸君と相見るを得るは、感謝の至です。

まことに大正の御代になつての斯十余年は、私共に、諸君に、日本に、はた世界にとつて、極めて多事多難な十余年でありました。

大正元年暮の二十九日、雪の黄昏を眺めた私の心のやるせない淋しさ——それは世界を掩うて近寄り来る死の蔭の冷やりとした歩みをわれ知らず感じたのでした。大正二年「みみずのたはこと」の出版をしながらのきつかけに、日一日、歩一歩、私は死に近づいて来ました。死にたくない。追^のりたい、私は随分もがきました。一家

を挙げて秋の三月みつきを九州から南満洲、朝鮮、山陰けいしん、京畿きんぎとぶらついた旅行は、近く運命を躲かわそうとてののたうち廻りでした。然し盃さかずきは否応なしに飲まされます。私は阿容おめおめとまた粕谷ふるすの旧巢に帰つて来しました。

大正三年が来しました。「死」の年です。五月に私の父が九十三歳で死にました。私は父を捨て、「みみずのたはこと」の看板娘であつた鶴子を其父母に返えし、門を閉じ、人を謝して、生きながら墓の中に入りました。八月に独逸を相手の世界戦が始まります。世界は死の蔭に入りました。

其十二月に私は自伝小説「黒い眼と茶色の目」を出しました。私にとって自殺の第一刀です。同時に「生」への安全弁でもありました。然し要するに自他を傷つくる爆弾であつた事も諍あらそえません。早速妻が瀕死の大病に罹かかり、四ヶ月を病院に送りました。生命を取りとめたが不思議です。

世界が血みどろになつて戦う大正四年、大正五年、大正六年、私は閉門生活をつづけて居ました。懊惱おのうのうは氣も狂うばかりです。傍かたわらに妻あり踏むに土あつて、私は狂わず死なざるを得ました。私は真面目に畑仕事をしました。然し文筆の人に歟のみでは足りません。大正六年の三月「死の蔭に」を出しました。大正二年の秋の逃避旅行の極めて皮相な叙述です。

すべてには限きりがあります。「死の蔭に」が出で、父の三年の喪もが果てる頃から、私

はそろ／＼死の蔭を出しました。大正七年は私共夫妻の銀婚です。其四月、母の九十の誕辰に私は「新春」を出しました。生の福音、復活の凱歌です。春に「新春」が出て、秋の十一月十一日に、さしも五年に渉^{わた}って世界を荒らした大戦がばったり止んだのであります。

世界が死の蔭を出て、大戦後始末の会議がエルサイユに開かれた大正八年一月私共夫妻は粕谷を出でて世界一周の旅に上りました。旅費の前半は「新春」の読者、後半は後^{あと}で出た「日本から日本へ」の読者から出たのであります。新嘉坡^{シンガポール}まで往つた時、私の母が東京で九十一歳で死にました。父を捨てた子は、母の死に目にも会いません。私共は尚^{なほ}西へ西へと旅をつづけ、何時しか世界を一周して、大正九年の三月日本に帰つて来ました。

母なしとなどは嘆くわれを生みし

国土日本とこしへの母^{こくとにつぼん}

日本近くなった太平洋船中での私の感懐であります。

帰つて丁度一年目の大正十年三月、私共は夫妻共著の「日本から日本へ」を出しました。

中一年置いて、今大正十二年四月に私は「竹崎順子」を出しました。日露戦争中肥後の熊本で八十一で亡くなった私の伯母——母の姉の実伝で、十八年前の遺囑^{いしよぐ}を

果したのであります。

それから九月一日の大震にもお蔭で恙なく、五十六歳と五十歳のアダム、イヴは、今年七月秋田から呼んだ、デダツ（モンペの方言）を穿いて「奥様、あれ持つて来てやるか」と云う口をきく、アイウエオが十分には読めぬ「今」という十四の女中と、Bと名づくる牝猫一疋、淋しい忙しい生活をつづけて居ります。

*

世界一周から帰村した三日目の夜、私共は近所の人人を呼んでおみやげ話をしました。ざっと行程を話したあとで、私は曰いました。

世界を一周して見て、日本程好い処はありません。日本では粕谷程好い処はありません。

諸君が手を拍たたいて喝采かつさいしました。

お世辞ではありません。全然まったくです。

私は九州肥後の葦北郡水俣あしきたという海村に生れ、熊本で成長し、伊予の今治、京都と転々てんてんして、二十二歳で東京に出で、妻は同じ肥後の菊池郡限府わいふという山の町に生れ、熊本に移り、東京に出で、私が二十七妻が二十一の春東京で一緒いっしょになり、東京

から逗子、また東京、それから結婚十四年目の明治四十年に初めて一反五畝の土と
 一棟のあばら家を買って夫妻此粕谷に引越して来ました。戸籍まで引いたは、永住
 の心算でした。然し落ち着きは中々出来ないものです。村居七年目に出した「みみ
 ずのたはこと」は、開卷第一に臆面もなく心のぐらつきを告白して居ます。永住方
 針で居たが、果して村に踏みとどまるか、東京に帰るか、もっと山へ入るか、分か
 らぬと言うて居ます。其挙句が前述の通り十年のドウ／＼廻りです。私は自分の幼
 稚な吾儘と頑固な気まぐれから、思うようにならぬと謂うては第一自分自身がいいや
 になり、周囲がいいやになり、日本がいいやになり、世界がいいやになり、到頭生きる事
 がいやになり、自己を脱けたい、何処ぞへ移りたい、面倒臭い、いっそ死んでのけ
 たいとまで思いつめ、落ちつく故郷を安住の地をひたもの探がし廻つたのでした。
 然し駄目でした。一足飛びに自分が聖人にもなれません。一から十まで氣に入るよ
 うな人間にも会えません。またしつくりと身に合うような出来合いの理想郷は此世
 にありません。然らば如何する？ だらしく無為に朽ちるか。太く短く反逆の芝
 居を打って一思いに花やかな死を遂げるか。さもなくば自己に帰って、客観的には
 謙つてすべてに頭わるる神を見、主観的には自己を核にして内にも外にも好きな世
 界を創造すべく努めるか。私は其一を撰ばねばならなくなりました。而して到頭自
 己に帰りました。「盍反其本」で、畢竟其本に、自己に、わが衷に在す神、や

がてすべてに在す神——に帰ったのであります。帰れば其処が故郷でした。安住の地でした。私の母の歌に

西、東、北の果までたづねても

みなみ（南、——皆身）にかへる地獄極楽

というのがありますが、正にそれです。皆身にかえる外はありません。私も五十年来さま／＼の旅をしつくし、駄目を押し、終に世界を一周して来て見て、いよく自己に、而して自己の住む此処日本粕谷にしっかりと腰を据えたのであります。

十七年前、村入当時私は東隣の墓地の株に加入を勧められました。私は生返事して十数年を過ごしました。今年ある村の寄合の場で、私は斯く言いました。

「私共もいよく粕谷の土になる事にきめました。何分よろしく」

「世界で日本、日本で粕谷」に拍手喝采した諸君は、此時破顔一笑、会心のさざめきを以て酬うてくれました。

いよく私共も粕谷の土になるにきめました。東隣の墓地は狭いが、四千坪近い所有地は何処にやすらうも自由です。墓地をきめると云う事は、旅行しない意味では無論ありません。何処で死ぬか、私共は知りません。唯何処で死んでもいずれ粕谷の土です。

泊がきまると、行手を急ぐ要はありません。のろ／＼歩きましょう。一步は一步

の樂たのしみです。父は九十三、母は九十一、何卒私共どうかもあやかりたい。先頃の大地震に、私はある人に言いました。「借金もちは、天道様てんとうさまが中々殺さぬよ」。私も夥おびただしい借金もちです。五十年來幾度となく死地を脱して斯く生かされて居るのも、あの因業爺いんこうおやじが「分厘までも」払わずには置かぬ心底がまざ／＼と読まれます。私も昔は借金とも思わず無暗むやみに重ねた時代がありました。借金と気がついて急に悄氣しやげた時期もあります。わが借金は棚たなにあげ、他の少々の貸金をはたつて歩いた時もあります。山なす借金、所詮しよせん払えそうもないので、ドウセ毒皿だ、クソ、ドシドシ使い込んでやれ、踏倒して逃げてやれ、と悪度胸わるどきようを据すえた時もあります。然しもう潔いさぎよく観念しました。返えします。奇麗に返えします。成る事なら利子をつけて返えします。返えさずに居れなくなりました。返えすが樂にさえ悦喜にさえなつて来しました。目下整理中です。総そうじて義務が道樂にならねば味がない。借金返えしも渋面じゆうめんつくつて、さつさと返えしては曲きよくが無い。『人生は嚴肅也、芸術は快活也。』真面目まじめに計算しましょう。笑顔えがおで払いましょう。其為にこそ私共は生れて来、生きて来たのです。

(二)

私共が粕谷に越して来ての十七年は、やはり長い年月でした。村も大分変りまし

た。東京が文化が大膽に歩いて来ました。「みみずのたはこと」が出た時、まだ線路工事をやって居た京王電鉄が新宿から府中まで開通して、朝夕の電車が二里三里四里の遠方から東京へ通う男女学生で一ぱいになったり、私共の村から夏の夕食後に一寸九段下あたりまで縁日を冷やかしに往って帰る位何の造作もなくなったのは、もう余程以前の事です。私共の外遊中に、名物巢鴨の精神病院がつい近くの松沢に越して来ました。嬉しいような、また恐いような気がします。隣字の烏山には文化住宅が出来ました。別荘式住宅も追々建ちます。思いがけなく藪陰から提琴の好い音が響いたり、氣どつたトレモロが聞こえたりします。燈台下暗かった粕谷にも、昨秋から兎に角電燈がつけました。私共が村入当時二十七戸の粕谷が、新家が出来たり、村入があつたり、今は三十三戸です。このあたりもう全くの蔬菜村です。東京が寄つて来た事が知れます。現に大東京の計画中には、北多摩郡でも一番東部の千歳村、砧村の二村が包含される事になって居ます。此処までお出と私共が十七年前逃げ出した東京を手招きした訳でもないが、東京の方から追いかけて来るのを見れば、切つても切れぬ情縁がやはりあるものと見えます。もう私共は今の粕谷が東京の中心になつても、動きません。村が蔬菜村になつて、水瓜などは殆んど番がいらぬまで普通になりました。水瓜好きの私共には特別の恩恵です。農家も追々豊になり、此頃では荷車挽きに牛を飼わぬ家は稀です。本文の「不浄」にも書いた通り、荷

出しや下肥引きに村の人人が汗みずくになつて、眼を悪くして重い車を引くのを氣にして居た私共に、牛車は何と云ううれしい変化でしょう。牛の牟々程農村を長閑にするものはありません。道路も追々よくなります。村役場も改築移転し、烏山にも小学が出来、もとの塚戸小学校も新築されて私共に近くなりました。運動時間などはわアわアと子供の声が潮の如く私の書齋に響いて来ては、子無しの私共に力をつけます。

台湾を取り、樺太の半を収め、朝鮮を併せ、南満洲に手を出し、布哇を越えて米国まで押寄する日本膨脹の雛型でもあるように、明治四十年の二月に一反五畝の地面と一棟のあばら家から創めた私共の住居も、追々買い広げて、今は山林宅地畑地を合わせて四千坪に近く、古家ながら茅葺の四棟もあつて、廊下、雪隠、物置、下屋一切を入れて建坪が百坪にも上ります。村の人となつて程なく、二尺余の杉苗を買つて私は母屋の南面に風よけの杉籬を結いました。西の端に唯一本木鋏を免れた其杉苗が、今は高さ二丈五尺、幹の太さは目通り一尺五寸六分になりました。十七年の杉の成長としては思わしくありませんが、二尺の苗の昔を思えば隔世の感があります。私共の村住居の年標として、私は毎々お客に此杉の木を指します。年標の杉が太り、屋敷も太りました。巻頭の写真にも其面影は覗われます。一町二反余の地主で、文筆による所得税を納めるので、私も今は衆議院議員選挙権の所有者です。

已に一回投票というものをして見ました。それは兎に角私も粕谷の住人としてもう新参ではありません。住居の雅名が欲しくなったので、私の「新春」が出た大正七年に恒春園と命名しました。台湾の南端に恒春と云う地名があります。其恒春に私共の農園があるという評判がある時立つて其処に人を使うてくれぬかとある人から頼まれた事があります。思もかけない事でしたが、縁喜が好いので、一つは「永久に若い」意味をこめて、台湾ならぬ粕谷の私共の住居を恒春園と名づけたのであります。恒春園は荒れました。四千坪の大部分は樹木と萱、雑草で、畑は一反足らずです。外遊中は人氣がないので野兎が安心して園に巢をつくりました。此頃ではペン多忙で、滅多に鋤は取りません。少しばかりの野菜は、懇意な農家に頼んで居ます。金になると云う上からは、恒春園は零です。毎年堆肥温床用の落葉を四円に売ります。四千坪の年収が金四円です。庭園は荒れに荒れ、家も大分ふるびて、雨漏りがします。明治四十二年の春に買った一棟なぞは、萱沢山の厚さ二尺程にも屋根を葺いて、一生大丈夫の気で居ましたら、何時しか木蔭から腐つて、骨が出ました。家屋でも、身体でも、修繕なしにやって往けよう筈はありません。四十と三十四で東京から越して来た私共夫妻が、五十六と五十になって、眼が薄くなったり、物忘れをしたり、五体の何処かが絶えず修補を促します。私共も肝油を飲んだり、齒科眼科に通ったり、腸胃の為に弦斎さんのタラコン散を常薬にして居ます。身体 of 修

繕斯通りで、家屋のそれも決して忘れた訳ではありません。全く住宅と衣服は出来合いで済まされません。洋服の利は分かつて居ます。私共も外遊以来一切和服の新調をやめ——以前から碌ろくに和服という和服もなかったのですが——内にも外にも簡易な洋服生活です。住居はこれからです。古家ばかり買い込んで、小人数には広過ぎ、手長足長、血のめぐりの悪い此住居を取毀し、しつくりとした洋式住宅を建てよう心算は夙とくに出来て居ますが、実現がまだ出来ません。畳の上に椅子テーブル、障子を硝子にしたり、井を米国式軽快なポンプにしたり、書齋に独逸暖炉を据えたり、室内電話を使ったり、心ばかりの進出をして居ます。先頃の地震でいっそ一思いに潰つぶれるか、焼けるかしたら、借金してもバラック位新築せねばならなかったでしょうが、無理さすまいとてか、地震は御愛想に私共の壁を崩し戸障子の建てつきを悪くしただけで往つてしまったので、当分現状維持です。然し新造が見えすいて居る住居に、大工左官を入れるも馬鹿らしいので、地震後一月あまり私は毎日鎚と鋸と釘拔と釘とを持って、壁の大崩れに板や古障子を打ちつけ、妻や女中が古新聞で張つて、兎や角凌いで居ます。書齋も母屋おもやも壁の亀裂ひわれもまだ其ままで、母屋に雨のしと降る夜はバケツをたたく雨漏りの音に東京のバラックを偲しのんで居ます。

九月一日の地震に、千歳村は幸に大した損害はありませんでした。甲州街道筋に
 は潰れ半潰れの家も出来、松沢病院では死人もありましたが、粕谷は八幡様の鳥居
 が落ちたり、墓石が転んだ位の事で、私の宅なぞが損害のひどかった方でした。村
 の青年達が八幡様の鳥居を直した帰途に立寄って、廊下の壁の大破を片づけたり、
 地蔵様を抱き起したりしてくれました。後は前述の如く素人大工で済ませて置きま
 す。九月一日の午餐と夕食は、母屋の庭の株立ちの山楓の蔭でしたためました。今
 夜十二時前後に大地震が来るかも知れぬ、世田ヶ谷の砲兵聯隊で二発大砲が鳴ったら、
 飛び出してくれ、という不思議な言いつぎが来て、三日の夜の十一時半から二時頃
 まで、庭の櫛の木に提灯つるして天の河の下で物語りなどして過ごした外は、唯一
 夜も家の外には寝ませんでした。四日にはもう京王電車が一部分通います。五日に
 は電燈がつかます。十日目には東京の新聞がぼつぼつ来ました。十一日目には郵便
 が来ました。村の復旧は早い。済まぬ事です、震災の百ヶ日も過ぎて私共は未だ
 東京を見ません。然し程度の差こそあれ、私共も罹災者です。九月一日、二日、三
 日と三宵に涉り、庭の大椎を黒く染めぬいて、東に東京、南に横浜、真赤に天を焦
 す猛火の焰は私共の心魂を悸かせました。頻繁な余震も頭を狂わせます。来る人、
 来る人の伝うる東京横浜の惨状も、累進的に私共の心を傷めます。関心する人人の

安否を確^{たしか}むるまでは、何日も何日も待たねばなりませんでした。大抵は無事でした。然し思^{おも}いかけない折に、新聞が相識^ふる人の訃^ふを伝えたのも二三に止まりません。すべてが戦時気分でした。然^{そう}です。世界戦に日本は手^たずさわるとは云^いう条^{じょう}、本舞台には出^でませんでした。戦争過ぎて五年目に、日本は独舞台で歐洲中原の五年にわたる苦^く難^{げん}を唯一日の間に嘗^かめました。あの大戦に白耳義以外何^ど処^この国が日本のようにぐいと思^{おも}うさま国都を衝^つかれたものがありましよう？ 歐羅巴に火と血を降^おらせたのは人間わざでしたが、日本の受けた鞭^{むち}は大地震です。日本は人間の手で打たれず、自然の手でたたかれました。「誰か父の懲^こらしめざる子あらんや」と云^いう筆法^{ひつぽう}から云^いえば、災^{さい}禍^かの受^うけ様^{よう}にも日本は天の愛子であります。ところで此愛子の若いことがまた夥^{おびただ}しい。強^{つよ}そうな事を言^いうて居^ゐて、まさかの時は腰^{こし}がぬけます。真闇^{まくら}に逆上^{ぎやくじよう}します。鮮人騒^{さわ}ぎは如何^{いか}でした？ 私共の村でもやはり騒^{さわ}ぎました。けたたましく警鐘^{けいしゆ}が鳴^{なり}り、「来たぞう」と壮丁の呼^よぶ声も胸を轟^{とどろ}かします。隣字の烏山では到頭労働^{とうとうろうどん}に行く途中の鮮人を三名殺^{ころ}してしまいました。済^はまぬ事^{こと}羞^はかしい事です。

斯^こ様^んな中にもうれしい事はやはりありました。粕谷の人々が相談^{さうだん}して、九月の六日に水瓜^{とうもろこし}、玉蜀黍^{なす}、茄子^{なす}、夏大根^{なす}、馬鈴薯^{じゃがいも}などを牛車十一台に満載^{まんざい}して、東京へお見舞^{みづか}ひをしました。村の青年達^{せいねんたち}がきりつとした装^{なり}をして左腕^{ひだりうで}に赤い布^{あかいぬ}を巻^まき、牛車毎^{ごうしゃまい}に「千歳村青年会粕谷支部」と書いた紙札^{ししち}を押立^{おしだて}て、世話方数名^{せわほう数名}附添^{つきぞ}うて、朝早

く粕谷から練り出した時、私は思わず青年会の万歳を三唱しました。慰問隊は専ら麴町区に活動して、先方の青年団の協力の下に、水瓜を截り、馬鈴薯をつかみ、手ずから罹災の人々に頒ち、玄米と味噌で五日過した人々を「生き返える」と悦ばしたそうです。其報告が私共を喜ばせました。斯くてこそ田舎、十七年前都落ちした私共も都に会わす顔があります。

中一日置いて、九月の八日には千歳村全体から牛車六十台の見舞車が、水気沢山の畑のものをまだ余燼の熱い渴き切った東京に持つて行きました。私も村人甲斐に馬鈴薯百貫を出しました。私の直接労働の果ではありません。金にして式拾円です。

東京の焼け出されが、続々都落ちして来ます。甲州街道は大部分繃帯した都落ちの人々でさながら縁日のようにでした。途中で根竭きて首を縊ったり、倒れて死んだ者もあります。寿永の昔の平家都落ち、近くは維新当時の江戸幕府の末路を偲ぶ光景です。村の何の家にも避難者の五人三人収容しました。私共の家にも其母者が粕谷出身の縁故から娘の一人を預かりました。田舎が勝ち誇る時が来ました。何と云うても人間は食うて生きる動物です。生きものに食物程大切なものはありません。食物をつくる人は、まさかの時にびくともしない強味があります。東京のあるお邸の旦那は、平生権高で、出入りの百姓などに滅多に顔見せたこともありませんでした。今度の震災で、家は焼け残ったが、早速食う物がありません。見舞に来た百姓

に旦那がお辞義の百遍もして、何でもよいから食う物を、と拝むように頼んだものです。ある避難の家族は、麦がまずいと云うて、「贅沢な」と百姓から、頭ごなしに叱りつけられました。去五月の末まで私共の家に働いて居た隣字のS女やといめの家の傭女が水瓜畑に働いて居ると、裏街道を都落ちの人と見えて母子づれが通りかゝり、水瓜を一つ無心しました。傭人の遠慮して小さなのを一つもいでやると、悦んでそれを持つて木蔭に去りました。やがてS女が来たので、傭女は其話をして、あの水瓜は未熟だったかも知れぬと言います。S女は直ぐ大きなよく出来たのをもいで、後追いかけてきました。都落ちの母子は木蔭で未熟の水瓜を白い皮まで喰い尽して居た所でした。「斯様にうまい水瓜をはじめて食べました」とS女に悦びをのべたのでした。こんな時にこそ都会住者も自然の懐のうれし味をしみじみ思い知ります。田舎の懐を都に開かせ、都の頭を自然に下げさせる——震災の働きの一つはこれでした。

それは東京に住む東京人に限りません。十七年来村住居の私共だつて、米麦つくらぬ美的百姓は同様です。「或る百姓の家」を出した江渡幸三郎君のような徹底した百姓と、私共のように米麦を買うて暮らす村落住者の相違は、斯様な時に顕われまあはす。私共では年来取りつけの東京四谷の米屋の米を食います。震災で直ぐ食料の心配が来ました。不時の避難客で、早速村の糧食不足となります。東京には玄米の配給があつても、田舎は駄目です。当時私共の家族は、夫妻に、朝鮮から遊びに来て

居た二十歳はたちになる妻の姪めい、七月に秋田から呼んだ十四の女中、それから焼け出されの十七娘、外に猫一足でした。丁度收穫を終えたばかりの馬鈴薯と畑に甘藷があるの、差迫つての餓死は兎に角、粒食りゆうしょくは直ぐ危くなりました。私共夫妻は朝夕パンで、米飯は午食だけです。パンが切れる。ふかしパンをつくる。メリケン粉は二升以上売つてはくれず、それも直ぐ尽きました。砂糖も同様です。ついでに蠟燭も同断です。朝は粥にして、玉蜀黍とうもろこしで補い、米を食い尽し、少々の糯米もちこめをふかし、真黒い饅頭粉うどんこや素麺そうめんや、畑の野菜や食えるものは片端かたっぱしから食うて、粒食の終はもう眼の前に来ました。いよゝ馬鈴薯、甘藷に落ちつく外ありません。其処そこに前頭ぜんけんのS女が見舞に来ました。彼女は本文「次郎桜」の主人公には季の妹で、私共の外遊帰来三年間恒春園に薪水の勞を助けた娘です。其長姉Y女も、私共の外遊前二年足らず私共の為に働いてくれたのです。S女に相談すると、翌日の夕、彼女の長兄のI君が一担いったんの食糧を運んでくれました。I君は「次郎桜」の兄者で、十七年前私共が千歳村へ引越す時、荷車引いて東京まで加勢に来てくれた村の耶穌信者四人の其一人、本文に「角田勘五郎の息子むすこ」とあるのがそれです。其頃は十六七のにこにこした可愛い息子でした。それが適齡になつて兵役に出で、満洲守備に行き、帰つて結婚してもう四人の子女の父、郷党きやうとうのちやきちやきです。I君が担になうて来てくれたは、白米一斗、それは自家の飯米はんまいを分けてくれたのです。それから水瓜きゃべツ、甘藍たまねぎ、球葱、

球葱は此辺ではよく出来ませんが、青物市場であまり廉やすかったからI君が買つて来たその裾分けすそわけという事でした。玄米でも饅頭粉でもよかった、「働く人の食料を分けてもらうのは気の毒」と私が申すと、「働くから上げられるのです」とI君が昂然こうぜんと応こたえました。これは確に一本参りました。全くです。働くから自ら養い他を養う事が出来るのです。私共は唯二つ残つて居た懷中汁粉かいちゆうじふをI君に馳走して、色々話しました。千歳村移転当時の話からI君は其時私が諸君に向い、「東京も人間が多過ぎる、あまり頭に血が寄ると日本も脳充血になる、だから私は都を出でて田舎に移る」と申した事を私に想い出さしてくれました。兎に角私共はよくぞ其時都落ちをしました。でなければ私はもうとくに青山あたりの土になつて居たかも知れません。十七年を過して、此処ここに斯く在ある事は、本当に感謝です。I君の贈物は肝腎かんじんな時に来て、大切なツナギになりました。その一斗の米が終る頃は、四谷の米屋みちやの途も開けました。

私は最初「みみずのたはこと」の広告に、斯様な告白をしました。

『著者は田舎を愛すれども、都会を捨つる能わず、心窃ひそかに都会と田舎の間に架する橋梁きょうりょうの其板の一枚たらん事を期す。』

不徹底な言い分なのですが、それが私の実情でした。今とても同然です。私は土を愛し、田舎を愛し、土の人なる農を愛しますが、私の愛は都市にも海にもあら

ゆる人間と其営^{いとな}みとを忘るゝ事は出来ません。私は慾張りです。私は一切を愛します。総^{そう}じて血のめぐりの好^せい生^{せい}体は健全です。病は偏^{へん}です。不仁が病です。脳貧血のわるいは、脳充血のわるいに劣りません。私共の農村移住は随分吾儘な不徹底なものでしたが、それですら都鄙の間に通う血の一縷^{いちる}となつたと思えば、自ら慰むるところがあります。「みみずのたはこと」は自嘲氣分を帯びた未熟な産物ですが、大正二年以来十年間に版を改むる百〇七、拾余万部を売り尽し、私共の耳目に触るゝ反響から見ても、農村を自愛させ、すべてに農村を愛さす上に幾分の効があつたと知る事は、私共にとつて大なる悦喜であります。

私も以前は農村に住んで農になり切れず、周圍に同化しきれぬきまり悪さを「美的百姓」などと自から茶かして居ました。然し其懊惱^{おうれう}はもう脱^ぬけました。私共は粕谷に腰を据えました。私共は農村に骨を埋^{うず}めます。然し私共は所謂農ではありません、私共の鋤はペンです。土は米麦も、草木もそだてます。畑の真中にだつて、坊主にされながら赤松が立つて居たり、碌に実が生^ならぬ柿の木さえ秋は美しく紅葉し、裸になつては平氣に鳥をとまらして居るではありませんか。私共は九州の土に生れて、彼方此方と移植され、到頭此粕谷へ来た雌雄相生の樹です。随分長い間ぐらつて居ましたが、到頭根づきました。もうちつとやそつとの風雨が来ても、びくともする事ではありません。あたりの邪魔にならぬ限り伐^きつて薪^{まき}にもされず成長をつ

づける事が出来ようと思います。

(四)

村の寄合などに稀^{たま}に出て、私は諸君の頭の白くなつたに毎々驚^{まい}かされます。驚く私自身が諸君に驚かるゝ程^{とし}齡をとりました。全く十七年は短い月日でありません。私共が引越当年生れた赤ン坊が、もう十七になるのです。赤ン坊が青春男女になり、青年が一人前になり、男女ざかりが初老になり、老人が順繰^{じゅんぐ}り土の中に入るも自然の推移^{うつり}です。「みみずのたはこと」が出てから十年間に、あの書に顔を出して居る人も、大分^{だいぶん}故人になりました。

今年の六月には、村の牧師下曾根^{しもぞねのぶちり}信守君を葬りました。六十九歳でした。下曾根さんは旧幕名家の出、伊豆^{いず}韮山^{にいな}の江川太郎左衛門と相並んで高島秋帆門下の砲術の名人であつた下曾根金之丞は父でした。砲術家の三男に生れた下曾根さんは、夙^{つと}に耶蘇教信者となり、父とは違つた意味の軍人―耶蘇教伝道師になりました。先にも数年間調布町に住んで伝道し、会堂が建つばかりになって、会津へ転任して行きました。其後調布の耶蘇教が衰微^{すいび}し、会堂は千歳村の信者が引取り、粕谷に持つて来しました。本文の初に、私共が初めて千歳村に来て見た会堂がそれです。随分見すばらし

い会堂でした。村住居はしても、会堂の牧師になる事を私が御免蒙ったので、信者の人々は昔馴染の下曾根さんをあらためて招聘したのでした。下曾根さんは其時も五十を過ぎ、耳が遠く、招かれても働きは思うように出来ぬと断ったそうですが、養老の意味で、たつて来てもらったとの事です。私共が村入りの二月目に下曾根さんは来て、信者仲間の歓迎会には私共も共々お客として招かれたのでありました。私共に代つて貧乏籤をひいてくれた下曾根さんは、十七年間会堂裏に自炊生活をつづけました。下曾根さんは独身で、身よりも少なく、淋しい人でした。寄る年と共にますます耳は遠くなり、貧乏教会の牧師で自身の貯金も使い果した後は、随分惨な生活でした。私は個人的に少許の出金を気まぐれに続けたばかりで、会堂には一切手も足も出しませんでした。下曾根さんは貧しい羊の群を忠実に牧して、よく職務を尽しました。砲術家の出だけに明晰な頭脳の持主でしたが、趣味があつて、書道を嗜み、俳句を作り、水彩画をかいいたり、園芸を楽しんだり、色々に趣味をもつて自ら慰めて居りました。乏しい中から村の出金、教会としての中央への義務寄金も心ばかりはしました。亡くなる前には、自身の履歴、形見分けの目録、後の処分のある程の貯蓄をして置いた事が後で分かりました。信仰ある、而して流石に武士の子らしい嗜です。下曾根さんは私共の東隣の墓地に葬られました。其葬式には最初

私共に千歳村を教えた「先輩の牧師」も東京から来て、「下會根信守之墓」「我父の家には住家多し」と云う墓標の文字も其人の筆で書かれました。

其葬式には、塚戸小学校の前校長H君も来て居ました。Hさんは越後の人、上野の音楽学校の出で、漢文が得意です。明治二十九年に千歳村に来て小学校長となり、在職二十五年の長きに及びました。村人として私共より十二年も前です。私共夫妻が最初千歳村に来て、ある小川の流れに菜を洗う女の人に道問うた其れはH夫人であつたそうです。私共が外遊から歸つて来ると、H君は二十五年の小学校奉仕を罷めて、六十近く新に進出の路を求めねばならぬ苦境に居ました。其後帝大に仕事を見出し、日々村から通うて居ましたが、このたび都合により吉祥寺の長男の家と一つになると謂うて告別に來たのは、つい此新嘗祭の当日でした。地下に他郷に古い顔馴染が追々遠くなるのは淋しいものです。

村の名物が段々無くなります。本文の「葬式」に出た粕谷で唯一人の丁髷の佐平爺さんも亡くなり、好人の幸さんも亡くなりました。文ちゃんの爺さんも亡くなりました。文ちゃんは稼ぎ人で、苦しい中から追々工面をよくし、古家ながら大きな家を建て、其家から阿爺の葬式も出しました。「斯様な家から葬式を出してもらうなんて、殿様だつて出来ねえ事だ」と皆が文ちゃんの孝行をほめました。「腫物」に出た石山の婆さんも本家で亡くなりました。それは大正七年でしたが、其前年の暮

に「腫物」の女主人公、莫連^{ばくれん}お広^{ひろ}も亡くなりました。お広さんは石山新家を綺麗に潰^{つぶ}してうた後、馴染^{なじみ}の親分と東京に往つて居ました。「草とりしても、東京ではおやつに餅菓子が出るよ」なんか村の者に自慢して居ました。其内親分がある寡家^{ごけ}に入り浸^{びた}りになつて、お広さんが其処に泣きわめきの幕を出したり、かかり子の亥之吉が盲啞学校を卒業して一本立になつても母親を構^{かま}いつけなかったり、お広さんの末路は大分困難になつて来ました。金に窮すると、石山家に来ては、石山さんの所謂『四両五両といったぶつて』行きました。到頭腎臓^{じんぞう}が悪くなり、水腫^{みずはれ}が出て、調布在の実家で死にました。死ぬまで大きな声で話したりして、見舞に往つた天理教信者のおかず媼^{ばあ}さんを驚かしたものです。離縁になつてなかったたので、お広さんの体は矢張石山さんが引取つて、こつそり隣の墓地に葬りました。葬式の翌日往つて見ると、新しい土饅頭^{どまんじゅう}の前に剥げ膳^はが据^すえられ、茶碗の水には落葉が二枚浮いて居ました。白木の位配に「新円寂慈眼院恵光大姉^{しんえんじやくじげんいんえこうだいし}」と書いてあります。慈眼院恵光大姉——其処に現われた有無の皮肉に、私は微笑を禁じ得ませんでした。而して寂^{さび}しい初冬の日ざしの中に立つて、莫連お広の生涯を思い、もつと良い婦人^{おんな}になるべき素質をもちながら、と私は残念に思うのでありました。お広さんが死んで、法律上にもいよいよ鰥^{やもお}になつた厚い唇^{ひさ}の久さんは真白い頭をして、本家で働いて居ます。啞の巳代吉は貧しい牧師の金を盗んだり、五宿の女郎を買つたりして居ましたが、今

は村に居ません。盲の亥之吉も、季すえの弟も居ません。一人女のお銀は、立派に莫連ひとりむすめの後を嗣いで、今は何処ぞに活躍して居ます。

お広さんを愛したり捨てたりした親分七右衛門爺じいさんは、今年亡くなり、而してやはり隣の墓地に葬られました。大きな男でしたが、火葬されたので、送葬そうそうの輿こしは軽く、あまりに軽く、一盃機嫌かで昇あぐ人、送る者、笑い、ざわめき、陽気な葬式が皮肉でした。可惜あたらおとし男をと私はまた残念に思うたのであります。

「村入」の条に書いた私共の五人組の組頭浜田くみがしらの爺さんも、今年の正月八十で亡くなりました。律義な爺さんの一代にしつかり身上しんしょうを持ち上げ、偕白髪ともしらの老夫婦、子孫、曾孫の繁昌を見とどけてのめでたい往生でした。いつも莞爾にこにこ々々して、亡くなる前日まで縄なわを綱なうたりせつせと働いて居ました。入棺前、別れに往つて見ると、死顔しがおもにこやかに、生涯労働した手は節ふしくれ立つて土まみれのまま合掌して居ました。これは代田だいた街道側かいどうわきの墓地に葬られました。

それから与右衛門さんとお婆さん、「信心なんかしませんや」と言うて居たお婆さんも亡くなりました。根氣のよいお婆さんで、私も妻も毎々まいまい話しこまれて弱つたものです。居なくなつて、淋しくなりました。「否いなと云へど強しふるしひのがしひがたり、ちかごろ聞かずてわれ恋こひにけり」と万葉の歌人が曰いうた通りです。私共が外遊から帰ると、お婆さんは「四国西国しこくさいこくしなすつたつてねえ」と感にたえたよう

に妻に云うて居ましたが、今は彼女自身遠く旅立つてしまいました。彼女は文ちゃんぶんちゃんの爺さんが葬られて居る北の小さな墓地に葬られました。其処にはお婆さんには孫、与右衛門さんには嗣子あとごであつたきつい氣の忠さんちゆうさん、海軍の機関兵にとられ、肺病になつて死んだ忠さんも葬られて居ます。

草履作りが名人の莞爾にこにこ々々した橋本のお爺さん、お婆さん、其隣の大尽の杉林のお婆さん、亡くなつた人人も二三に止まりません。年寄りが逝くのは順ですが、老少不定の世の中、若い者、子供、赤ん坊の亡くなつたのも一人や二人ではありません。前に言つた忠さん、それから千歳村墓地敷地買収問題の時、反対側がわの頭目とうもくとなつて草鞋わらじがけになつて真先に働いたしつかり者の作さんも亡くなりました。半歳立たぬに、作さんの十六になる一人女も亡くなりました。私共が粕谷おぐへ引越しの前日、東京からバケツと草箒くさほうき持参で掃除に來た時、村の四辻よつ辻で女の子を負つた色の黒い矮いちいさ六十爺さんに道を教えてもらいました。お爺さんは「村入」で「わしとおまえは六合の米よ、早く一しよになればよい」と中音ちゆうおんに歌うた寺本の勘さん、即ち作さんの阿爺おとっさんで、背の女兒は十六で亡くなつた其孫女でした。

まだ氣の毒な亡者もじやも、より氣の毒な生き残りも二三あります。

それ等を外にしては、石山さん、勘爺さん、其弟の辰爺さん、仁左衛門さん、与右衛門さん、武太さん、田圃向うの信心家のお琴婆さん、天理教のおかず婆さん、其他

の諸君も皆無事です。土の下、土の上、私共の扱んだ故郷粕谷は上にも下にも追々と榮えて行きます。都落ちして其粕谷にすでに十七年を過ごして、私が五十六、妻が五十、頭は追々白くなつて、気は恒春園の恒に若く、荒れた園圃と朽ち行く家の中にやがて一陽来復の時を待ちつゝ日一日と徐に私共の仕事をすすめて居ます。

書きたい事に切りがありませんが、其は他日の機会に譲つて、読者諸君の健康を祝しつつここに一先^{ひとま}ず此手紙の筆を擱^{さしお}きます。

大正十二年十二月三十日

東京府 北多摩郡

千歳村 粕谷

恒春園に於て

徳富健次郎

ひとりごと

蝶の語れる

吾、毛虫けむしたりし時、醜みにくかりき。吾、蝶てふとなりて舞まへば人美ひとうつくしと讃ほむ。人の美しと云ふ吾は、曩昔そのかみの醜みにくかりし毛虫けむしぞや。

吾、醜みにくかりし時、人吾ひとわれを疎うとみ、忌いみ、嫌きらひて避け、見る毎ごとに吾を殺さんとしぬ。吾、美しと云はるゝに到れば、人争ひとあつてうて吾を招く。吾れの変かれる乎。人の眼まなこなき乎。

吾、醜みにくしと見られし時、吾胸わがむねのいたみて、さびしく泣きたることいかばかりぞや。其時君独そのときひとりごとり吾を憐あはみぬ。

君、吾が毛虫けむしたりし時、吾を憐あはみて捨てざりき。故に蝶となれる吾は、今翼つばさある花となりて、願はくは君が為に君の花園に舞はん。

旅の日記から

熊の足跡

勿来

連日の風雨でとまった東北線が開通したと聞いて、明治四十三年九月七日の朝、上野から海岸線の汽車に乗った。三時過ぎ関本駅で下り、車で平潟へ。

平潟は名だたる漁場である。湾の南方を、町から当面の出島をかけて、蝦蛄の這う様にずらり足杭を見せた棧橋が見ものだ。雨あがりの漁場、唯もう腥い、腥い。静海亭に荷物を下ろすと、宿の下駄傘を借り、車で勿来関址見物に出かける。

町はずれの隧道を、常陸から入って磐城に出た。大波小波鞭々と打寄する淋しい浜街道を少し往って、唯有る茶店で車を下りた。奈古曾の石碑の刷物、松や貝の化石、画はがきなど売って居る。車夫に鶴子を負ってもらい、余等は滑る足元に氣をつけ、鉄道線路を踏切って、山田の畔を関跡の方へと上る。道も狭に散るの歌に因んで、芳野桜を沢山植えてある。若木ばかりだ。路、山に入って、萩、女郎花、

われもこう 地榆、桔梗、苧萱、今を盛りの満山の秋を踏み分けて上る。車夫が折ってくれた色濃い桔梗の一枝を鶴子は握つて負られて行く。

浜街道の茶店から十丁程上ると、関の址に來た。馬の脊の様な狭い山の上のやゝ平凹になつた鞍部、八幡太郎弓かけの松、鞍かけの松、など云う老大な赤松黒松が十四五本、太平洋の風に吹かれて、翠の梢に颯々の音を立てゝ居る。五六百年の物では無い。松の外に格別古い物はない。石碑は嘉永のものである。茶屋がけがしてあるが、夏過ぎた今日、もとより遊人の影も無く、茶博士も居ない。弓弭の清水を掬んで、弓かけ松の下に立つて眺める。西は重畳たる磐城の山に雲霧白く渦まいて流れ居る。東は太平洋、雲間漏る夕日の鈍い光を浮べて唯とろりとして居る。鰐舟の櫓拍子が仄かに聞こえる。昔奥州へ通う浜街道は、此山の上を通つたのか。八幡太郎も花吹雪の中を馬で此処を通つたのか。歌は残つて、関の址と云う程の址はなく、松風ばかり颯々と吟じて居る。人の世の千年は実に造作もなく過ぎて了う。茫然と立つて居ると、苧草を背一ぱいにゆりかけた馬を追うて、若い百姓が二人峠の方から下りて来て、余等の前を通つて、また向の峰へ上つて往つた。

日の暮に平潟の宿に歸つた。湯はぬるく、便所はむさく、魚は鮮しいが料理がまずくて腥く、水を飲もうとすれば濁臭く、加之夥しい蚊が真黒にたかる。早々蚊帳に逃げ込むと、夜半に雨が降り出して、頭の上に漏つて来るので、遽て、床を移す

など、わびしい旅の第一夜であつた。

浅虫

九月九日から十二日まで、奥州浅虫温泉滞留。

背後を青森行の汽車が通る。枕の下で、陸奥湾の緑玉潮がびた／＼言う。西に

は青森の人煙指す可く、其背に津軽富士の岩木山が小さく見えて居る。

青森から芸妓連の遊客が歌うて曰く、一夜添うてもチマはチマ。

五歳の鶴子初めて鵜を見て曰く、阿母、白い鳥が飛んで居るわねえ。

旅泊のつれ／＼に、浜から拾うて来た小石で、子供一人成人二人でおはじきをす

る。余が十歳の夏、父母に伴われて舟で薩摩境の祖父を見舞に往った時、唯二十五

里の海上を、風が悪くて天草の島に彼此十日も舟がかりした。昔話も聞き尽し、永

い日を暮らしかねて、六十近い父と、五十近い母と、十歳の自分で、小石を拾うて

おはじきをした。今日不器用な手に小石を数えつゝ、不図其事を思い出した。

海岸を歩けば、帆立貝の殻が山の如く積んである。浅虫で食ったものゝ中で、帆

立貝の柱の天麩羅はうまいものであった。海浜随処に玫瑰の花が紫に咲き乱れて汐

風に香る。

野糞放る外が浜辺や玫瑰花

大沼

(一)

津軽海峡を四時間に駛せて、余等を青森から函館へ運んでくれた梅ヶ香丸は、新造の美しい船であつたが、船に弱い妻は到頭酔うて了うた。一夜函館埠頭の朴旅館に休息しても、まだ頭が痛いと言ふ。午後の汽車で、直ぐ大沼へ行く。

函館停車場は極粗朴な停車場である。待合室では、真赤に喰ひ酔うた金欄の袈裟の坊さんが、仏蘭西人らしい髻の長い宣教師を捉えて、色々管を捲いて居る。宣教師は笑いながら好い加減にあしらつて居る。

札幌行の列車は、函館の雑沓をあとにして、桔梗、七飯と次第に上つて行く。皮をめくる様に頭が軽くなる。臥牛山を心にした巴形の函館が、鳥瞰図を展べた様眼下に開ける。「眼に立つや海青々と北の秋」左の窓から見ると、津軽海峡の青々とした一帯の秋潮を隔て、遙に津軽の地方が水平線上に浮いて居る。本郷へ来ると、彼醉僧は汽車を下りて、富士形の黒帽子を冠り、小形の緑絨氈のカバンを提げて、蹣跚と改札口を出て行くのが見えた。江刺へ十五里、と停車場の案内札に書い

である。函館から一時間余にして、汽車は山を上り終え、大沼駅を過ぎて大沼公園に來た。遊客の為に設けた形ばかりの停車場である。こゝで下車。宿引が二人待つて居る。余等は導かれて紅葉館の旗を艦に立てた小舟に乗った。宿引は一礼して去り、船頭は軋と櫓声を立て、漕ぎ出す。

黄金色に藻の花の咲く入江を出ると、広々とした沼の面、絶えて久しい赤禿の駒が岳が忽眼前に躍り出た。東の肩からあるか無いかの煙が立上つて居る。余が明治三十六年の夏來た頃は、汽車はまだ森までしかかゝつて居なかつた。大沼公園にも粗末な料理屋が二三軒水際に立つて居た。駒が岳の噴火も其後の事である。然し汽車は釧路まで通うても、駒が岳は噴火しても、大沼其ものは旧に仍つて晴々した而して寂かな眺である。時は九月の十四日、然し沼のあたりのイタヤ楓はそろ／＼染めかけて居る。処々櫓や白樺にからんだ山葡萄の葉が、火の様に燃えて居る。空氣は澄み切つて、水は鏡の様だ。夫婦島の方に帆船が一つ駛つて居る。櫓声静に我舟の行くまゝに、鴨が飛び、千鳥が飛ぶ。やがて舟は一の入江に入つて、紅葉館の下に着いた。女中が出迎える。夥しくイタヤ楓の若木を植えた傾斜を上つて、水に向う奥の一間に案内された。

都の紅葉館は知らぬが、此紅葉館は大沼に臨み、駒が岳に面し、名の如く無数の紅葉樹に囲まれて、瀟洒とした紅葉館である。殊に夏の季節も過ぎて、今は宿もひつ

そりして居る。薪まきを使った鉢泉に入つて、古めかしいランプの下、物静かな女中の給仕で沼こいの鯉ふな、鮎ふなの料理を食べて、物音一つせぬ山の上、水きわの際の静かな夜の眠ねむりに入つた。

真夜中まよなかにごろ／＼と雷が鳴つた。雨戸すきの隙から雷が光つた。而して颯さあと雨の音がした。起きて雨戸を一枚繰くつて見たら、最早もとう月が出て、沼の水に螢ほたるの様に星が浮いて居た。

(二)

明方あけがたにはまたぼつ／＼降つて居たが、朝食あさめしを食うと止んだ。小舟で釣つりに出かける。汽車の通うセバツトの鉄橋の辺あたりに來ると、また一しきりざあと雨が來た。鉄橋の蔭かげに舟を寄せて雨宿りあまどりする間もなく、雨は最早過ぎて了うた。此辺は沼の中でもやゝ深い。小沼の水が大沼に流れ入るので、水は川のように動いて居る。いくら釣つても、目めぎす鮎ふなはかゝらず、ゴタルと云う鮎はせの様な小魚ばかり釣れる。舟を水草の岸に着つけさして、イタヤの薄紅葉うすもみじの中を彼方あちこち此方こちと歩いて見る。下生したばえを奇麗に払つた自然の築山つきやま、砂地の踏心地ふみごちもよく、公園の名はあつても、あまり人巧じんこうの入つて居ないのすいさいしやせいがありがたい。駒が岳のよく見える処で、三脚を据すえて、十八九の青年が水彩写生

をして居た。駒が岳に雲が去来して、沼の水も林も倏忽の中に翳つたり、照つたり、見るに面白く、写生に困難らしく思われた。時が移るので、釣を断念し、また舟に上つて島めぐりをする。大沼の周囲八里、小沼を合せて十三里、昔は島の数が大小百四十余もあつたと云う。中禅寺の幽凄でもなく、霞が浦の淡蕩でもなく、大沼は要するに水を淡水にし松を榎白樺其他の雑木にした松島である。沼尻は瀑になつて居る。沼には鯉、鮒、鱒ほか産しない。今年銅像を建てたと云う大山島、東郷島がある。昔此辺の領主であつたと云う武家の古い墓が幾基も立つて居る島もあつた。夏は好い遊び場であらう。今は寂しいことである。それでも、学生の漕いで行く小さなボートの影や、若い夫婦の遊山舟も一つ二つ見えた。舟を唯有る岸に寄せて、殊に美しい山葡萄の紅葉を摘んで宿に帰つた。

午後は画はがきなど書いて、館の表門から陸路停車場に投函に往つた。軟らかな砂地に下駄を踏み込んで、葦やさまぐの水草の茂つた入江の仮橋を渡つて行く。やゝ色づいた樺、榎、イタヤ、などの梢から尖つた頭の赭い駒が岳が時々顔を出す。寂しい景色である。北海道の気が総身にしみて感ぜられる。

夕方館の庭から沼に突き出た岬の嶂で、細君が石に腰かけて記念に駒が岳の写生をはじめた。余は鶴子と手帖の上を見たり、附近の林で草花を折つたり。秋の入り日の瞬く間に落ちて、山影水光見るが中に変つて行く。夕日の名残をとめて赭く

輝やいた駒が岳の第一峰が灰がかった色に褪めると、つい前の小島も紫から紺青に
変つて、大沼の日は暮れて了うた。細君はまだスケッチの筆を動かして居る。黯青
に光る空。白く光る水。時々ポチャンと音して、魚がはねる。水際みぎわの林では、宿鳥
が物に驚いてがさがさ飛び出す。ブヨだか蚊だか小さな声で唸うなつて居る。

「到頭出来なかった」

ばたんと画具箱えのぐばこの蓋ふたをして、細君は立ち上った。鶴子を負おう可く、蹲しゃがんで後うしろにま
わす手先に、ものが冷ひやりとする。最早露が下りて居るのだ。

札幌へ

九月十六日。大沼を立つ。駒が岳を半周して、森に下つて、噴火湾の晴潮を飽かず汽車の窓から眺める。室蘭通いの小さな汽船が波にゆられて居る。汽車は駒が岳を背にして、ずうと噴火湾に沿うて走る。長万部近くなると、湾を隔て、白銅色の雲の様なものをむら／＼と立てゝ居る山がある。有珠山です、と同室の紳士は教えた。

湾をはなれて山路にかゝり、黒松内で停車蕎麦を食う。蕎麦の風味が好い。蝦夷富士と心かけた蝦夷富士を、蘭越駅で仰ぐを得た。形容端正、絶頂まで樹木を纏うて、秀潤の黛色滴るばかり。頻に登つて見たくなつた。車中知人O君の札幌農科大学に帰るに会つた。夏期休暇に朝鮮漫遊して、今其帰途である。余市に来て、日本海の片影を見た。余市は北海道林檎の名産地。折からの夕日に、林檎畑は花の様な色彩を見せた。あまり美しいので、売子が持て来た網囊入のを二囊買った。

O君は小樽で下り、余等は八時札幌に着いて、山形屋に泊つた。

中秋

十八日。朝、旭川あさひがわへ向けて札幌を立つ。

石狩平原いしかりは、水田已に黄きばんで居る。其間に、九月中旬まだ小麦の収穫をして居るのを見ると、また北海道の気もちに復かえつた。

十時、汽車は隧道とんねるを出て、川を見下ろす高い崖上がいじようの停車場にとまった。神居古潭かむいこたんである。急に思立つて、手荷物諸共遽もろともあわて、汽車を下りた。

改築中で割栗石狼藉わりくりいしろうぜきとした停車場を出て、茶店さてんで人を雇うて、鶴子と手荷物を負おわせ、急勾配きゆうこうばいの崖を川へ下りた。暗緑色あんりよくしよくの石狩川が汪々と流れて居る。兩岸から鉄線はりがねで吊つつたあぶなげな仮橋が川を跨またげて居る。橋の口に立札がある。文言もんごんを読めば、曰く、五人以上同時に渡わたる可からず。

恐おそずく橋板を踏むと、足の底がふわりとして、一足毎に橋は左右に前後に上下ひとあしごとに揺ゆれる。飛驒山ひだ中、四国の祖谷山いゝや中などの藤蔓ふじづるの橋の渡り心地がまさに斯様こんなである。形ばかりの鉄線はりがねの欄てすりはあるが、つかまつてゆるく渡る気にもなれぬ。下の流れを見ぬ様にして一息に渡わたつた。橋の長さ二十四間。渡り終つて一息ついて居るすみだわらと、炭俵すすだわらを負うた若い女が山から下りて来たが、佇たたずむ余等に横目をくれて、飛ぶが

如く彼吊橋を渡つて往つた。

つりばし
やましたみち

さかのぼ

山下道を川に沿うて溯ること四五丁余、細い煙突から白い煙を立てゝ居る木羽葺

へりなしだたみ

のきたない家に來た。神居古潭の鉾泉宿である。取りあえず裏二階の無縁畳の一室

に導かれた。やがて碁をうつて居た旭川の客が歸つて往つたので、表二階の方に移つ

た。硫黄の臭がする鉾泉に入つて、二階にくつろぐ。麦稈帽の書生三人、底髪ひさしの女

学生二人、隣室となりまに遊びに來たが、次ぎの汽車で直ぐ歸つて往つた。石狩川の音が颯々

と響く。川向うの山腹の停車場で、鉦音高く石を割つて居る。囂うごと云う響をこだま

にかえして、稀まれに汽車が向山を通つて行く。寂しい。昼飯に川魚をと注文したら、

石狩川を前に置いて、罐詰たけのこの筍の卵など食わした。

はんご

飯後神居古潭を見に出かける。少し上流の方には夫婦岩と云う此辺の名勝がある

と云う。其方へは行かず、先刻渡つた吊橋の方に往つて見る。橋の上手には、櫓ならの大

木が五六本川面へ差かゝつて居る。其蔭かげに小さな小屋がけして、杣そまが三人停車場改

築工事の木材を挽ひいて居る。橋の下手には、青石峨々ががたる岬角さかづが、橋の袂から斜はすに

川の方へ十五六間突出つきでて居る。余は一人尖とがつた巖角がんかくを踏み、荊棘けいきよくを分け、岬みさきの尖端

に往つた。岩間には其処そこ此処ここ水溜みずたまりがあり、紅葉した蔓草が岩に搦からんで居る。出鼻に

立つて眺める。川向う一帯、直立三四百尺もあろうかと思わるゝ雑木山が、水際か

ら屏風びょうぶを立てた様に聳そびえて居る。其中腹を少しばかり切り拓ひらいて、こゝに停車場が

取りついて居る。檣ぼしじうの様な支柱を水際の崖がけから隙間すきまもなく並べ立て、其上に停車場は片側乗かたかわつて居るのである。停車場の右も左も隧道とんねるになつて居る。汽車が百足の様に隧道を這はい出して来て、此停車場に一息ひといきつくかと思うと、またぞろぞろ這い出して、今度は反対の方に黒く見えて居る隧道の孔あなに吸すわるゝ様に入つて行く。向う一帯の雑木山は、秋まだ浅くして、見る可き色もない。眼は終に川に落ちる。丁余ちようよの上流では白波しろなみの瀬をなして騒いだ石狩川も、こゝでは深い青黝あおくろい色をなして、其処そこ此処に小さな渦うずを巻きゝ彼吊橋の下を音もなく流れて来て、一部は橋の袂たもとから突出いっせた巖いわに礙さまたげられてこゝに淵ふちを湛たたえ、余の水は其まゝ押流して、余が立つて居る岬角がけうえを摩すつて、また下手対岸の蒼黒い巖壁がんぺきにぶつかると、全川の水は振ねじ曲まげられた様に左に折れて、また滔々とうくと流ゆして行く。去年の出水には、石狩川が崖上がけうえの道路を越して鉾泉宿まで来たそうだ。此窄このせまい山の峽かいを深さ二丈も其上もある泥水が怒号どごうして押下つた当時の凄じすささが思われる。今は其れ程の水勢は無いが、水を見つめて居ると流石さすがに凄すしい。橋下の水深は、平常二十余尋ふだん ひろ。以前は二間もある海の鯨さめがこゝまで上つて来たと云う。自然児しぜんじのアイヌがさゝげた神居古潭かむいこたんの名も似つかわしく思われる。

夕飯後ゆうめしご、ランプがついて戸がしまると、深い深い地の底そこにでも落ちた様で、川音がますます耳について寂しい。宿から萩はぎの餅もちを一盂ひとわくれた。今宵は中秋十五夜で

あつた。北海道の神居古潭で中秋に逢うも、他日の思出の一であろう。雨戸を少しあけて見たら、月は生憎雲をかぶつて、朦朧とした谷底を石狩川が唯颯、颯と鳴つて居る。

名寄

九月十九日。朝神居古潭かむいこたんの停車場から乗車。金欄きんらんの袈裟けさ、紫衣しえ、旭川へ行く日蓮宗の人達で車室は一ぱいである。旭川で乗換えのりか、名寄なよろに向う。旭川からは生路である。

永山ながやま、比布びつぷ、蘭留らんると、眺望ながめは次第に淋しくなる。紫蘇しそともつかず、麻でも無いものを茹ほつて畑に乾してあるのを、車中の甲乙たれかれが評議して居たが、薄荷はっかだと丙が説明した。

やがて天塩てしおに入る。和寒わつさむ、劍淵けんぶち、士別しべつあたり、牧場かと思わるゝ広漠こうばくたる草地一面霜しもが枯れて、六尺もある虎杖いたどりが黄葉美しく此処其処に立つて居る。所謂泥炭地でいたんちである。車内の客は何れも惜しいものだと言したつづみ鼓つづみうつ。

余放吟して曰く、

泥炭地耕すべくもあらぬとふさはれ美し虎杖いたどりの秋

士別では、共楽座きらくざなど看板を上げた木葉茸こつばぶきの劇場が見えた。

午後三時過ぎ、現在の終点駅名寄着。丸石旅館に手荷物を下ろし、茶一ぱい飲んで、直ぐ例の見物に出かける。

旭川平原をずっと縮めた様な天塩川の盆地に、一握りの人家を落した新開町。停車場前から、大通りを鍵の手に折れて、木羽葺が何百か並んで居る。多いものは小間物屋、可なり大きな真宗の寺、天理教会、清素な耶穌教会堂も見えた。店頭で見つけた真桑瓜を買って、天塩川に往つて見る。可なりの大川、深くもなさそうだが、川幅一ぱい茶色の水が颯々と北へ流れて居る。鉄線を引張った渡舟がある。余等も渡つて、少し歩いて見る。多いものはブヨばかり。倒れ木に腰かけて、路をさし覆う七つ葉の蔭で、真桑瓜を剥いた。甘味の少ないは、争われぬ北である。最早日が入りかけて、薄ら寒く、秋の夕の淋しさが人少なの新開町を押かぶせる様に四方から包んで来る。二たび川を渡つて、早々宿に帰る。町の真中を乗馬の男が野の方から駈を追うて帰つて来る。馬蹄の音が名寄中に響き渡る。

宿の主人は讃岐の人で、晩食の給仕に出た女中は愛知の者であつた。隣室には、先刻馬を頼んで居た北見の農場に帰る男が、客と暮をうって居る。按摩の笛が大道を流して通る。

春光台

明治三十六年の夏、余は旭川まで一夜泊の飛脚旅行に來た。其時の旭川は、今の名寄よりも淋しい位の町であつた。降りしきる雨の中を車で近文に往つて、土産話にアイヌの老酋の家を訪うて、イタヤのマキリなど買つて歸つた。余は今車の上から見廻して、当年のわびしい記憶を喚起そうとしたが、明治四十三年の旭川から七年前の旭川を見出すことは成功しなかつた。

余等は市街を出ぬけ、石狩川を渡り、近文のアイヌ部落を遠目に見て、第七師団の練兵場を横ぎり、車を下りて春光台に上つた。春光台は江戸川を除いた旭川の鴻の台である。上川原野を一目に見て、旭川の北方に連壘の如く蟠居して居る。丘上は一面水晶末の様な輝々する白砂、そろ／＼青葉の縁を樺に染めかけた大きな榊樹の間を縫うて、幾条の路がうねつて居る。直ぐ眼下は第七師団である。黒んだ大きな木造の建物、細長い建物、一尺の馬が走つたり、二寸の兵が歩いたり、赤い旗が立つたり、喇叭が鳴つたりして居る。日露戦争凱旋當時、此丘上に盛大な師団招魂祭があつて、芝居、相撲、割れる様な賑合の中に、前夜恋人の父から絶縁の一書を送られて血を吐く思の胸を抱いて師団の中尉寄生木の篠原良平が見物に立まじつたも此

春光台であつた。

余は見廻わした。丘の上には余等の外に人影も無く、秋風がばさり／＼櫛の葉を揺かして居る。

春光台 腸断ちし若人を

偲びて立てば秋の風吹く

余等は春光台を下りて、一兵卒に問うて良平が親友小田中尉の女気無しの官舎を訪い、暫らく良平を語った。それから良平が陸軍大学の予備試験に及第しながら都合上後廻わしにされたを憤つて、硝子窓を打破つたと云う、最後に住んだ官舎の前を通つた。其は他の下級将校官舎の如く、板塀に囲われた見すばらしい板葺の家で、垣の内には柳が一本長々と枝を垂れて居た。失恋の彼が苦しまぎれに渦巻の如く無暗に歩き廻つた練兵場は、曩日の雨で諸処水溜りが出来て、紅と白の苜蓿の花が其処此処に叢をなして咲いて居た。

釧路

(一)

旭川に二夜^{ふたよ}寝て、九月二十三日の朝釧路^{くしろ}へ向う。釧路の方へは全くの生路である。昨日石狩岳^{いしかりだけ}に雪を見た。汽車の内も中々寒い。上川原野^{かみかわ}を南方へ下って行く。水田が黄ばんで居る。田や畑の其処^{そこ}此処^{ここ}に焼け残りの黒い木の株^{かぶ}が立って居るのを見ると、開け行く北海道にまだ死に切れぬアイヌの悲哀^{かなしみ}が身にしみる様だ。下富良野^{しもふらの}で青い十勝岳^{とからだけ}を仰ぐ。汽車はいよゝ夕張と背合わせの山路^{やまじ}に入って、空知川の上流^そを水に添うて溯る^{さかのぼ}。砂白く、水は玉よりも緑である。此辺は秋已に深く、万樹霜^{ばんじゆしも}を閲^{けみ}し、狐色になった樹々の間に、イタヤ楓^{かえで}は火の如く、北海道の銀杏なる桂は黄^{ほのお}の焰^{ほのお}を上げて居る。旭川から五時間余走って、汽車は狩勝駅^{かりかつ}に來た。石狩十勝^{いしかりとから}の境^{さかい}である。余は窓から首を出して左の立札^{たてふだ}を見た。

狩勝停車場

海拔一千七百五十六呎^{フイート}、一一一

狩勝トンネル

延長參千九呎フイート インチ六吋

釧路百十九哩まいる八分

旭川七十二哩三分

札幌百五十八哩六分

函館三百三十七哩五分

室蘭二百二十哩

三千呎フイート とんねるの隧道を、汽車は石狩から入つて十勝へ出た。此れからは千何百呎の下りである。最初蝦夷松、樅松の翠みどりに秀ひいであるいは白く立枯る、峰を過ぎて、障るものなき辺あたりへ来ると、軸物の大俯瞰図のするくくと解けて落ちる様に、眼は今汽車の下りつゝある霜枯しもがれの萱山かやまから、青々とした裾野につゞく十勝の大平野を何処までもずうと走つて、地そちと空と融とけ合あう辺にとまつた。其処そこに北太平洋が潜ひそんで居るのである。多くの頭が窓から出て眺める。汽車は尾花おばなの白く光る山腹を、波状を描かいて蛇の様にのたくる。北東の方には、石狩、十勝、釧路、北見の境上きようじやうに蟠れんれいる連嶺が青く見え、て来た。南の方には、日高境の青い高山こうざんが見える。汽車は此等の山を右の窓から左の窓へと幾回か轉換して、到頭平野に下りて了うた。

当分は櫛かしわの林が迎えて送る。追々大豆畑が現われる。十勝は豆の国である。旭川平原や札幌深川間の汽車の窓から見る様な水田は、まだ十勝に少ない。帯広おびひろは十勝の

頭腦ずのう、河西支庁かさいしちやうの処しよざい在地、大きな野の中の町である。利別としべつから芸者げいしや雛妓おしやくが八人乗った。今日網走線あほしりせんの鉄道が逕別りくんべつまで開通した其開通式に赴くのである。池田駅は網走線の分岐点ぶんぎてん、球燈、国旗、満頭飾まんとうしよくをした機関車なども見えて、真黒な人ばかりだ。汽車はこゝで乗客の大部分を下ろし、汪々おうおうたる十勝川の流れに暫くは添しばらうて東へ走った。時間が晩おくれれて、浦幌うらほろで太平洋の波の音を聞いた時は、最早車室しやしつの電燈がついた。此処から線路は直角をなして北上し、一路断続海だんぞくの音を聞きつゝ、九時近くくたびれ切つて釧路に着いた。車に揺られて、十九日の欠月を横目に見ながら、夕汐ゆうしお白く漫々まんまんたる釧路川に架した長い長い幣舞橋ぬさまいばしを渡り、輪島屋わじまやと云う宿に往つた。

(二)

あくる日飯ゆめを食うと見物に出た。釧路町は釧路川口の兩岸またがに跨つて居る。停車場所在かわの側は平民町で、官庁、銀行、重なる商店、旅館等は、大抵橋を渡つた東岸にある。東岸一帯は小高い丘おかをなして自おのずから海風かいふうをよけ、幾多の人家は水の畔はたから上段かけて其蔭かげに群むらがり、幾多の舟船は其蔭に息はきうて居る。余等は弁天社から燈台の方はさに上つた。釧路川と太平洋に挟まれた半島の岬端さきで、東面すれば太平洋、西面すれば釧路湾、釧路川、釧路町を眼下に見て、当面とうめんには海と平行して長く延ひいた丘おかの

上、水色に冴えた秋の朝空に間隔あわいへだて、二つ列なぞろんだ雄阿寒おあかん、雌阿寒めあかんの秀色を眺める。湾には煙立つ汽船、漁舟が浮いて居る。幣舞橋には蟻ありの様に人が渡つて居る。北海道第一部の港だけあって、氣象頗雄大である。今日人きょうを尋たずぬ可く午前中に釧路を去らねばならぬので、見物は匆々そそくにして宿に帰る。

茶路

北太平洋の波の音の淋しい釧路の白糠駅しらぬかで下りて、宿の亭主を頼み村役場に往つて茶路ちやろに住むと云うM氏の在否ざいひを調べて貰うと、先には居たが、今は居ない、行方は一切分からぬと云う。兎も角も茶路に往つて尋ねる外はない。妻児さいじを宿に残して、案内者を頼み、ゲートル、運動靴、洋傘かさ一柄、身軽みけいに出かける。時は最早午後もこうの二時過ぎ。茶路までは三里。帰りはドウセ夜に入ると云うので、余はポツケツトに懷中電燈かいちゆうでんとうを入れ、案内者は夜食の握飯にぎりめしと提灯ちようちんを提げて居る。

海の音を背に、鉄道線路を踏切ふみきつて、西へ檜やの柄えの様に真直まつすくにつけられた大路を行く。左右は一面じめじめした泥炭地でいたんちで、反魂香はんこんかうの黄さわや沢桔梗ぎきようの紫や其他名を知らぬ草花くすぶが霜枯しもがれかゝった草を彩どつて居る。煙草たばこの火でも落すと一月も二月もぷすく燻くすぶつて居ます、と案内者が云う。路の一方にはトロツコのレールが敷かれてある。其処そこ此処ここで人夫じんぷがレールや枕木まくらぎを取りはずして居る。

「如何どうするのかね」

「何や、安田やすだの炭鉾たんこうへかゝつてたんですがね。エ、二里ばかり、あ、あの山の陰かげになつてます。エ、最早廃ふしちゃったんです」

案内者は斯云つて、仲に立った者が此レールを請負つて、一間ばかりの橋一つにも五十円の、枕木一本が幾円のと、不当な儲をした事を話す。枕木は重にドス槽で、北海道に栗は少なく、釧路などには栗が三本と無いが、ドス槽は堅硬にして容易に朽ちず栗にも劣らぬそうである。

案内者は水戸の者であつた。五十そこらの気軽そうな男。早くから北海道に渡つて、近年白糠に来て、小料理屋をやつて居る。

「随分色々な者が入り込んで居るだろうね」

「エ、其りや色々な手合が来てまさア」

「随分破落戸も居るだろうね」

「エ、何、其様でもありませんが。——一人困つた奴が居ましてな。よく強淫をやリアがるんです。成る可く身分の好い人のかみさんだの娘だのをいくんです。身分の好い人だと、成丈外聞のない様にしますからな。何時ぞやも、農家の娘でね、十五六のが草薙りに往つてたのを、奴が捉えましてな。丁度其処に木を伐りに来た男が見つけて、大騒ぎになりました。——其奴ですか。到頭村から追い出されて、今では大津に往つて、漁場を稼いで居るつてことです」

山が三方から近く寄つて来た。唯有る人家に立寄つて、井戸の水をもらつて飲む。桔槔の釣瓶はバケツで、井戸側は径三尺もある桂の丸木の中をくりぬいたのである。

一丈余もある水際^{みぎぎわ}までぶつ通しらしい。而して水はさながら水晶^{すいしょう}である。まだ此辺までは耕地^{こうち}は無い。海上のガス即ち霧が襲うて来るので、根菜類^{こんさいるい}は出来るが、地上^{そだ}に育つものは穀物蔬菜何も出来ず、どうしても三里内地に入らねば麦も何も出来ないのである。

鹿の角を沢山^せ背負うて来る男に会った。茶路川^{ちやろかわ}の水涸^かれた川床が左に見えて来た。二里も来たかと思う頃、路は殆^{ほと}んど直角に右に折れて居る。最早^{もう}茶路の入口だ。路傍に大きな草葺の家がある。

「一寸休んで往きましようかな」と云つて、案内者が先に立つて入る。

大きな炉^ろをきつて、自在^{じざい}に大薬罐の湯がたぎつて居る。煤けた屋根裏からつりさげた薬苞^{わらふと}に、焼いた小魚の串^{くし}がさしてある。柱には大きなぼん^かが掛つて居る。広くとつた土間の片隅は棚になつて、茶碗^{ちやわん}、皿^{さら}、小鉢^{こはち}の類^{るい}が多く^{おほく}のせてある。

額の少し禿げた天神髻^{てんじんのかげ}の五十位の男が出て来た。案内者と二三の会話がある。

「茶路は誰^{おたす}を御訪ねなさるンですかね」

余はMの名を云つた。

「あ、Mさんですか。Mさんなれば最早茶路には居ません。昨年越しました。今は釧路に居ます。釧路の西幣舞町^{にしぬさまいまち}です。葬儀屋^{そうぎや}をやつてます。エ、エ、俺^{わたくし}とは極懇意^{ごくこんい}で、つい先月も遊びに往つて来ました」

と云つて、主は戸棚とだなから一括いつかつした手紙はがきを取り出し、一枚ずつめくつて、一枚のはがきを取り出して見せた。まさしく其人の名がある。

「かみさんも一緒いっしょですかね？」

実は彼は内地の郷里に妻子を置いて、渡道とどうしたきり、音信不通いんしんふつうだが、風のたよりに彼地で妻を迎えて居ると云うことが伝えられて居るのであつた。

「エ、かみさんも一緒に居ます。子供ですか、子供は居ません。たしか大きいのが満洲まんしゅうに居るとか云うことでしたつけ」

案外早く埒らちが明あいたので、余は礼を云つて、直ぐ白糠しらぬかへ引かえした。

「分かつてようございました。エ、彼人あのひとですか、たしか淡路あわじの人だと云います。飯屋めしやをして、大分儲けると云うことです」と案内者は云うた。

白糠の宿に帰ると、秋の日が暮れて、ランプの蔭かげに妻児さいじが淋しく待つて居た。夕飯を食つて、八時過ぎの終列車で釧路に引返えす。

北海道の京都

釧路で尋ねるM氏に会つて所要を果し、翌日池田を経てりくべつ湊別に往つて此行第一の目的なる関寛翁訪問を果し、滞留六日、旭川一泊、小樽一泊して、十月二日二たび札幌に入った。

往きに一昼二夜、復えりに一昼夜、皮相を瞥見した札幌は、七年前に見た札幌とさして相違を見出す事が出来なかつた。耶蘇教信者が八万の都府に八百からあると云う。唯一台来た自動車ただを市の共議で排斥したと云う。二日の夜は独立教会でT牧師の説教を聞いて山形屋に眠り、翌日はT君、O君等と農科大学を見に往つた。博物館で見た熊の胃から出たアルコール漬の父親の手子供の手は、余の頭を痛くした。明治十四五年まで此札幌の附近にまだ熊が出没したと思えば、北海道も開けたものである。宮部博士みやべの説明で二三植物標本を見た。樺太の日露国境の辺で採取して新に命名された紫のサカイツ、ジ、其名は久しく聞いて居た冬虫夏草とうちゅうかそう、木の髓を腐らす猿の腰かけ等。それから某君によりて昆虫の標本を示され、美しい蝶、命短い蜉蝣ふゆうの生活等につき面白い話を聞いた。榆の蔭にれうつ大学の芝生、アカシヤの茂る大道の並木、北海道の京都札幌は好い都府である。

余等は其日の夜汽車で札幌を立ち、あくる一日を二たび大沼公園の小雨に遊び暮らし、其夜函館に往つて、また梅が香丸で北海道に惜しい別れを告げた。

津軽

青森に一夜明あかして、十月六日の朝ひろき弘前に往むかつた。

津軽つがるは今林檎りんご王国の栄華時代である。弘前の城下町を通ると、ケラを被きて目かこ背負つがるめうた津軽女も、草履はいて炭馬をひいた津軽男も、林檎喰くいゝ歩あいて居る。代官町だいかんまちの大一と云う店で、東京に二箱仕出す。奥深い店おくふかは、林檎と、箱と、巨鋸屑おがくずと、荷造りする男女で一ぱいであつた。

古い土族町、新しい商業町、場末ばすえのボロ町を通つて、岩木川いわきがわを渡り、城北三里板柳村の方へ向うた。まだ雪を見ぬ岩木山は、十月の朝日に桔梗ききやうの花の色をして居る。山を繞めぐつて秋の田が一面に色づいて居る。街道は断続まるめろ榎えの黄な村、林檎の紅い畑を過ぎて行く。二時間ばかりにして、岩木川の長橋を渡り、田舎町やなみには家並やなみの揃そろうて豊らしい板柳村に入つた。

板柳村のY君は、林檎園の監督をする傍、新派の歌をよみ文芸を好む人である。一二度粕谷の茅廬にも音ずれた。余等はY君の家に一夜厄介やつかいになつた。文展ぶんてんで評判の好かつた不折ふせつの「陶器つくり」の油絵、三千里の行脚あんぎやして此処たいりゆうにも滞留した碧梧桐「花林檎」の額、子規、碧、虚の短冊、与謝野夫妻、竹柏園社中の短冊など見た。十

五町歩の林檎園に、撰屑よりくずの林檎の可惜あたらこころ転がるのを見た。種々の林檎を味わうた。夜はY君の友にして村の重立たる人々にも会うた。余はタアナア水彩画帖をY君に贈り、其フライリーフに左の出たらめを書きつけた。

林檎朱あけに楹まるめろ檮あけ黄なる秋の日を

岩木山下いわきさんかに君とかたらふ

あくる朝は早く板柳村を辞した。岩木川の橋を渡つて、昨夜会面した諸君に告別し、Y君の案内により大急ぎで舞鶴城へかけ上り、津軽家祖先の甲冑かっちゆうの銅像の辺から岩木山を今一度眺め、大急ぎで写真を取り、大急ぎで停車場にかけつけた。Y君も大鰐おおわにまで送つて来て、こゝに袂たもとを分わかつた。余等はこれから秋田、米沢、福島を経へて帰村す可く汽車の旅をつゞけた。

紅葉狩

紅葉

嫁といで京都に往つて居る季すえの女むすめの家を訪うべく幾年か心がけて居た母と、折よく南部なんぶから出て来た寄生木やどりぎのお新お糸の姉妹を連れて、余の家族を合せて同勢どうぜい六人京都に往つた。松茸まつだけに晩おそく、紅葉には盛りにちと早いと云う明治四十三年の十一月中旬。

京都に着いて三日目に、高尾たかお横尾よこお梶尾かじおから嵐山あらしやまの秋色を愛ずべく、一同車つらを連ねて上京の姉の家を出た。堀川ほりかわ西陣にしじんをぬけて、坦々たんたんたる白土の道を西へ走る。丹波から吹いて来る風が寒い。行手には唐人とうじんの冠かむりを見る様に一寸青黒い頭あたまの上の頭をかぶつた愛宕山あたごやまが、此辺一帯の帝王貌がうして見下ろして居る。御室おむろでしばらく車を下りる。株立ひくちの矮い桜は落葉し尽して、からんとした中に、山門さんもんの黄が勝つた丹塗と、八分の紅を染めた楓もみじとが、何とも云えぬ趣おもむきをなして居る。余は御室おむろが大好きである。直ぐ向うのならびが岡の兼好けんこうが書いた遊びずきの法師達が、児こを連れて落葉うすに埋めて置いた弁当を探して居やしないか、と見廻みまわわしたが、人の影はなくて、唯小鳥の

さえず
囀る声ばかりした。

車は走せて梅が畑へ来た。柴車しばぐるまを挽ひいて来るおばさんも、苺田かりたをかえして居る娘も、木綿着ながらキッチンとした身装みなりをして、手甲てっこうかけて、足袋はいて、髪は奇麗きれいに撫なでつけて居る。労働が余所目よそめに美しく見られる。日あたり風あたりが暴あちく、水も荒く、軽い土が耳の中鼻の中まで舞まい込む余の住む武蔵野の百姓女なぞは中々、斯う美しくはして居られぬ。八年前余は独歩嵐山から高尾に来た時、時雨しぐれに降られて、梅が畑の唯と有る百姓家に跑かけ込んで簀みを借かりた。山吹の花さし出す娘はなくて、婆さんが簀を出して呉れたが、「おべゝがだいなしになるやろ」と云うので、余は羽織はおりを裏返えしに着て、其上に簀を被はり、帽子を傾けて高尾に急いだ。瓢箪ひょうたんなど肩にして芸子と番傘の相合傘あひあがさで帰つて来る若い男等が、「ヨウ、勘平猪打ししうちの段か」など、囃はやした。

いよく高尾に来た。車を下りて、車夫くるまやに母を負うてもらい、白雲橋を渡つて、神護寺内じんごじないの見晴らしに上つた。紅葉はまだ五六分と云う処である。かけ茶屋の一に上あつて、姉が心尽しの弁当たのを楽しく開いた。余等はまた土皿かわらけな投げを試みた。手をはなれた土皿は、ヒラ／＼と宙返りして手もとに舞い込む様に此方こなたの崖に落ち、中々谷底たにそこへは届かぬ。色々の色に焦れて居る山と山との間の深い谷底を清滝川きよたきがわが流れて居る。川下が堰せきとめられて緑鑿色りよくばんいろの水が湛え、褐色の落葉が点々として浮い

て居る。

「水を堰せいて如何どうするのかな」

「水力電気たら云うてな、あんたはん」と茶を持て来たお婆このかみさんが云う。

余は舌鼓したつづみをうつた。

余等は高尾を出て、清滝川に沿うて遡さかのぼり、榎の尾を経て、梶の尾に往った。

梶とがの尾は高尾に比して瀟洒しょうしやとして居る。高尾から唯少し上流さかのぼにあるが、此

処もみじの楓は高尾よりも染そめて居る。寺畔の茶屋から見ると、向う山の緑青ろくしょうで画かいた様

な杉の幾本いくもとに映うつつて楓の紅が目ざましく美しい。斯梶の尾の寺に、今は昔先輩の某

が避暑ひしょして居たので、余は同窓どうそうの友と二三日泊りがけに遊びに来たものだ。其は余

が十二の夏であつた。余等は毎日寺の下かわぶらの川淵およに泳ぎ、三度々どうなす南瓜で飯を食わさ

れた。村から水瓜すいかを買かうて来て、川に浸ひたして置いて食つたりした。余は今記念の為

に、川に下りて川水の中から赤い石と白い石とを拾ひろつた。清滝川は余にとりて思出おもいで

多い川である。梶尾に居た年から八年程後、斯少し下流愛宕あたごの麓ふもと清滝の里に、余は

脚氣かつけを口実に、実は学課をなまけて、秋の一月を遊び暮らし、ミゼラブルばかり読

んで居たことがある。

みみずのたはこと

梶の尾から余等は広沢ひろさわの池を経て嵐山に往った。広沢の池の水が乾ほされて、鮒ふなや、鰯とじょうが泥の中にばくくして居た。

嵐山の楓は高尾よりもまだ早かった。嵐山其ものと桂川とは旧に仍つて美しいものであつたが、川の此岸には風流に屋根は萩で葺いてあつたが自働電話所が出来た、電車が通い、汽車が通い、要するに殺風景なものになり果てた。最早三船の才人もなければ、小督や祇王祇女仏御前もなく、お半長右衛門すらあり得ない。

「暮れて帰れば春の月」と蕪村の時代は詩趣満々であつた太秦を通過して帰る車の上に、余は満腔の不平を吐く所なきに悶々した。

斯く云う自分も其仲間だが、何故我日本国民は斯く一途になるであらう乎。彼は中々感服家で、理想実行家である。趣味の民かと思つたら、中々以て実利実功の民である。東叡山を削平して、不忍の池を埋めると意気込み、西洋人の忠告によつて思いとまつた日本人は、其功利の理想を盛に上方に実行して居る。億万円にも代えられぬ東山の胸をくりぬいて琵琶湖の水を引張つて見たり、鴨東一帯を煙と響と臭に汚してしまつたり、狭い町内に殺人電車をがたつかせたり、嵐山へ殺風景を持たんだら、高尾の山の中まで水力電気でかき廻わしたり、努力、実益、富国、なんかの名の下に、物質的偏狂人の所為を平氣にして居る。心ある西洋人は何と見るだらう乎。

京都、奈良、伊勢、出来ることなら須磨明石舞子をかけて、永久日本の美的博物館たらしむ可きで、其処に煙突の一本も能う可くば設けたくないものである。再び得

難い天然を破壊し、失い易き歴史の跡を一扫して、其結果に得る所は何であろう乎。
殺風景なる境と人と、荒寥たる趣味の燃え屑を残すに過ぎないのではあるまい乎。

日本国は譬^{たと}えば主人が無くて雇人が乱暴する家の様だ。邦家千年の為にはかる主
脳と云うものがあるならば、斯^こ様な馬鹿げた仕打はせまい。余は日本を愛するが故
に、日本が無趣味の邦^{くに}となり果つるを好まぬ。余は京畿^{けいき}を愛する故に、所謂文明に
乱暴されつゝある京畿を見るのが苦痛である。

義仲寺

三井寺で弁慶の力餅を食つて、湖上の風光を眺める。何と云つても琵琶湖は好い。「彼が叡山あわれ えいざんです。彼が比良あすこです。彼処に斯う少し湖水に出つぱった所に青黒いものが見えましよう——彼が唐崎からさきの松です」

余は腰こしかけを離れて同行の姉妹しまいに指した。時計を見れば、最早二時過ぎて居る。唐崎の松を遠見で済すまして、三井寺を下り、埠頭はとばから石山行の小蒸汽に乗った。

丁度八年前の此月である。今朝鮮に居る義兄と、余は同車して唐崎の松に往った。彼は夫婦仲好まじないの呪と云つて誰でも探すと笑いつゝ、松に攀よじ上り、松葉の二対つゝ四本一頭に括くくり合わされたのを探し出してくれた。それから車で大津に帰り、小蒸汽で石山に往つて、水際みぎわの宿で鯉ひがひと蜩しじみの馳走になり、相乗車で義仲寺ぎちゆうじに立寄つて宿に帰った。秋雨の降つたり止んだり淋しい日であつた。

斯様こゝな事を彼が妹なる妻に話す間に、小蒸汽は汽笛を鳴らしつゝ湖水を滑べつて、何時見ても好い水から湧いて出た様な膳所ぜぜの城を掠かすめ、川となるべく流れ出した湖の水と共に鉄橋をくゞり、瀬田せたの長橋を潜くぐり、石山の埠頭はとばに着いた。

手荷物すいばんを水畔の宿に預けて、石山の石に靴や下駄の音をさせつゝ、余等は石を拾ひろひ

い、紅葉を拾いつゝ、石山寺に詣つた。うど闇い内陣の宝物も見た。源氏之間は嘘でも本当にして置きたい様な処であつた。余等は更に観月堂に上つた。川を隔て、薄桃色に禿げた雞冠山を眺め、湖水の括れて川となるあたりに三上山の蜈蚣が這い渡る様な瀬田の橋を眺め、月の時を思つて良久しく立去りかねた。

秋の日は用捨なく傾いた。今夜は宇治ときめたので、余等は山を下ると、川畔の宿にも憩わず、車を雇うた。二人乗が二台。最早上方でなければ滅多に二人乗は見られぬ。姉妹は生れてはじめてである。

姉妹を乗せた車は先きに、余等三人を乗せた車は之につゞいて、瀬田川の岸に沿いつゝ平な道を馬場の方へ走る。日は入りかけて、樺色に曠じた雲が一つ湖天に浮いて居る。湖畔の村々には夕けぶりが立ち出した。鴉が鳴く。粟津に來た時は、並樹の松に碧い霏がかゝつた。

「此れがねえ、木曾義仲が討死した粟津が原です」

と余は大きな声して先きの車を呼んだ。ふりかえつた姉妹の顔も、唯ぼんやりと白かつた。

車は一走りして、燈火明るい町の唯有る家の前に梶棒を下ろした。

「何だ」

「義仲寺どす」

余は呆氣あつけにとられた。八年前秋雨あきぐめの寂しい日に来て見た義仲寺は、古風ちまたな巷はさに嵌はさまつて、小さな趣ある庵いおりだった。

余は舌鼓したつづみうつて、門をたゝいて、強しいて開けてもらつて内に入つた。内は真闇まつくらである。車夫ちやうちんに提灯ていとうを持て来させて、妻や姉妹に木曾殿きそどのとばせをの墓しやうかいを紹介した。外には汽関車の響や人声が囂々うわうわと騒いで居る。

宇治の朝

宇治に着いたのが夜の九時。万碧楼菊屋に往つて、川沿いの座敷に導かれた。近水楼台先得月、と中井桜洲山人の額がかゝつて居る。

此処は余にも縁浅からぬ座敷である。余の伯父はすぐれた大食家で、維新の初年こゝに泊つて鰻の蒲焼を散々に食うた為、勘定に財布の底をはたき、淀川の三十石に乗る錢もないので、頬冠して川堤を大阪までくゞ歩いたものだ。伯父の血をひいた余とても御多分に洩れぬ。八年前の秋、此万碧楼に泊つた余は、霜枯時の客で過分の扱いを受け、紫縮緬の夜具など出された。御馳走も伯父の甥たるに恥じざる程食うた。食うてしまったあとで、墓口を覗いて見た余は非常に不安を感じた。そこで翌朝宿の者には遊んで来ると云い置いて、汽車で京都に帰った。少し都合もあつて其日は行かれず、電報、手紙も臆劫だし、黙つて打置き、あくる日になつて宇治に往つた。万碧楼では喰逃げが帰つて来たと云う顔をして、茶代も少し奮発したに聞せず、紫縮緬の夜具は雲がくれて、あまり新しくもない木綿の夜具に寝かされた。主の方では無論覚えて居る由もない。余は独笑坪に入つた。

腰硝子の障子を立てたきり、此座敷に雨戸はなかった。二つとした燭台の百目

蠟燭の火は瞬かぬが、白い障子越しに颯々と云う川瀬の響が寒い。障子をあけると、宇治の早瀬に九日位の月がきら／＼碎けて居る。ピツ／＼ピツ／＼千鳥が鳴いて居る。

*

朝起きて顔を洗うと、余は宿の襦袍を引かけ、一同は旅の着物になつて、茶のま
ず見物に出かけた。宇治橋は雪の様な霜だ。ザクリ／＼下駄の二の字のあとをつけ
て渡る。昔太閤様は此処から茶の水を汲ませたものだ、と案内者の口まねをしつゝ、
彼出張つた橋の欄間によりかゝつて見下ろす。矢を射る如き川面からは、真白に水
蒸気が立つて居る。今も変らぬ柴舟が、見る／＼橋の下を伏見の方へ下つて行く。
朝日山から朝日が出かゝつた。橋を渡つてまだ戸を開けたばかりの通円茶屋の横手
から東へ切れ込み、興聖寺の方に歩む。美しい黄の色が眼を射ると思えば、小さな
店に柚子が小山と積んである。何と云う種類か知らぬが、朱欒程もある大きなもの
だ。旅先ながら看過し難くて、二錢五厘宛で五個買い、万碧楼に届けてもらう。

興聖寺の石門は南面して正に宇治の急流に対して居る。岩を截り開いた琴阪とか
云う嶺道を上つて行く。左右の崖から紅に黄に染みた槭が枝をさしのべ落葉を散ら

して、頭上は錦、足も錦を踏んで行く。一丁も上つて唐風の小門に來た。此処から來路を見かえると、額縁めいた洞門に劃られた宇治川の流れの断片が見える。金剛不動の梵山に跌座して、下界流転の消息は唯一片、洞門を閃めき過ぐる川水の影に見ると云う趣。心憎い結構の寺である。

橐駝師が剪裁の手を尽した小庭を通つて、庫裡に行く。誰も居ない。尾の少し欠けた年古りた木魚と小槌が掛けてある。二つ三つたゞいたが、一向出て來ぬ。四つ五つ破れよと敲く。無作法の響がや々と奥に通じて、雛僧が一人出て來た。別に宝物を見るでもなく、記念に画はがきなど買つて出る。

雲上から下界に降る心地して、惜しい嶮道を到頭下り尽した。石門を出ると、川辺に幾艘の小舟が繋いである。小旗など立てた舟もある。船頭が上つて來て乗れとすゝめる。

「如何だ、舟で渡つて見ようか」

「えゝ、渡りましょう」

一同舟に乗つた。

川上を見ると、獅子飛び、米漉など云う難所に窘められて來た宇治川は、今山開け障るものなき所に流れ出て、弩をはなれた箭の勢を以て、川幅一ぱいの勾配ある水を傾けて流して來る。紅に黄に染めた上流兩岸の山は、碧い朝靄を被て、山蔭の

水も千反せんたんの花色はないろ綸子りんすをはえたらん様に、一たび山蔭やまかげを出て朝日あさひが射さすあたりに来ると、水も目がさめた様に麗々れいれいと光り渡とつて、滔々とうとうと推し流して来る。瀬の音がごくく、ざあくざあと川面かわつら一面に響く。

「好いなア」思わず声をあげる。

船頭ぎいぎいは軋々おとと櫓の響おとをさせて、ほゞ山形やまなりに宇治川を渡す。

「何て奇麗な水でしょう」妻は舷側ふなばたの水を両手に掬すくい上げて川を讃める。鶴子が真似まねる。

平等院びやうどういんの岸近く細長い島がある。浮島と云うそうだ。島を蔽おほう枯葭かれよしの中から十三層せきりんとうの石輪塔が見える。

「あの塔は何かね、先には見かけなかった様だが」

「近頃掘り出したンどす。宝塔ほうとうたら云うてナ、あんたはん」

と船頭が説明する。水は早し、川幅かわはは一丁には越えぬ。惜しと思うまに渡してしまつて、舟は平等院上手かみての岸についた。

舟賃ふなちんを払うて、其処そこに三つ四つ設けられた茶店の前を過ぎて、美しい紅葉もみぢを拾ひろいつゝ余等は平等院に入つた。

嫩草山の夕

奈良は奠都千百年祭で、町は球燈、見せ物、人の顔と声とで一ぱいであつた。往年泊つた猿沢池の三景楼に往つたら、主が變つて、名も新猫館と妙なものに化けて居る。うんざりしたが、思い直して、こゝに車を下りた。

茶一碗、直ぐ見物に出かける。

上方客、東京つ子、芸者、学生の団体、西洋人、生きた現代は歴史も懷古も詩も歌も蹂躪して、鹿も驚いた顔をして居る。其雑沓の中を縫うて、先ず春日祠に詣でた。田舎みやげの話し草に、若宮前で御神樂をあげて、ねじり廊の横手を通ると、種々の木の一になつて育つて居る木がある。寄木、と札を立てゝある。大阪あたりの娘らしいのが、「良平さんよ」と云う。お新さんがお糸さんと顔見合せて莞爾した。お新さんは窃と其内の椿の葉を記念の為にちぎつた。

嫩草山の麓の茶屋に來た頃は、秋の日が入りかけた。草履をはいた娘子供が五六人、たら／＼と滑る様に山から下りて來た。

「如何だ、上つて見ようか」

「え、上りましょう」

足の悪いお新さんと鶴子を茶店に残して、余は靴のまゝ、二人の女は貸草履に穿き更えて上りはじめた。

名を聞いてだに優にやさしい嫩草山は、見て美しく思うてなつかしい山である。八年前の十一月初めて奈良に來た夕、三景楼の二階から紺青にけぶる春日山に隣りして、貂の皮もて包んだ様な暖かい色の円満とした嫩草山の美しい姿を見た時、余の心は如何様に躍つたであらう。丁度詠えたように十五夜のまん丸な月が其上に出て居た。然し其時は遽たゞしい旅、山に上るも果さなかつた。今はじめて其懷を辿るのである。

霜枯れそめた矮い薄や荇萱や他の枯草の中を、人が踏みならした路が幾条か麓から頂へと通うて居る。余等は其一を伝うて上つた。打見たよりも山は高く、思うたよりも路は急に、靴の足は滑りがちで、約十五分を費やして上り果てた時は、額も背も汗ばんで居た。頂はやゝ平坦になつて、麓からは見えなかつた絶頂が、まだ二重になつて背に控えて居る。唯一つある茶店は最早店をしまいかけて、頂には遊客の一人もなかつた。

余等は額の汗を拭うて、嫩草山の頂から大和の国の国見をすべく眼を放つた。夕である。

日はすでに河内の金剛山と思うあたりに沈んで、一抹殷紅色の残照が西南の空を

染めて居る。西生駒^{いごま}、信貴^{しぎ}、金剛山、南吉野から東多武峰^{とうのみね}初瀬^{はつせ}の山々は、大和平原をぐるりと囲^{かこ}んで、蒼々^{そうそう}と暮れつゝある。此暮山^{ぼさん}の屏風^{びょうぶ}に包まれた大和の国原^{くにはら}には、夕けぶり立つ紫の村、黄ばんだ田、明るい川の流れ、神武陵、法隆寺、千年二千年の昔ありしもの、今生けるものゝ総^{すべ}てが、夜の安息に入る前に、日に名残を惜んで居る。

余等は麓^{ふもと}の方に向うて、「おゝい」と声をかけた。一つの影が縁台^{えんだい}をはなれて、山をのぼりはじめた。それは鶴子を負^おうた車夫であつた。やがて上りついて、鶴子は下り立つた。

余等は更に眺^{なが}めた。最早麓に一人残つたお新さんの影もよくは見えない。直ぐ後の方でがさ／＼と草が鳴つたと思うたら、夕空^{ゆうぞら}に映^{うつ}つて大きな黒い影が二つぬうと立つて居る。其れは鹿であつた。

足の下で、奈良^{なら}の町の火が美しくつき出した。蜂^{はち}の群^むれの唸^{つぶや}吟^きの様な人声物音が響^{ひび}く。

ほうん！

麓^{ふもと}の方で晚鐘^{いりあい}が鳴り出した。其鐘^{かね}の音^{うな}に促^{うな}がさるゝかの如く、鴉^{からす}が啞^あ々^あと鳴いて、山の暮から野の黄昏^{たそがれ}へと飛んで行く。

余等は今一度眼を平原に放つた。最早日の名残も消えて、眼に入る一切のものは

蒼い靄あおもやに包まれた。
大和は今暮るゝのである。

後註

- 一 201ページ、地藏尊の写真
- 二 ここで上巻終わり

みみずのたはこと

底本：「みみずのたはこと（上）」岩波文庫、岩波書店

1938（昭和 13）年 4 月 15 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 12 月 10 日第 30 刷（入力）

2001（平成 13）年 11 月 7 日第 32 刷（校正）

「みみずのたはこと（下）」岩波文庫、岩波書店

1938（昭和 13）年 6 月 1 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 12 月 10 日第 25 刷（入力）

2001（平成 13）年 11 月 7 日第 27 刷（入力、校正）

底本の親本：「みみずのたはこと」岩波書店

1933（昭和 8）年刊

入力：奥村正明、小林繁雄

校正：小林繁雄

2002 年 9 月 27 日作成

2003 年 5 月 25 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)
で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。